静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第67集

御殿川流域遺跡群III

平成６年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鶴喰前田遺跡

1995

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第67集

御殿川流域遺跡群III

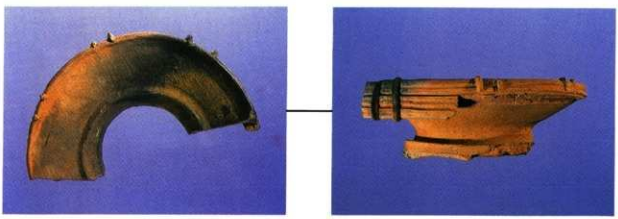
平成６年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鶴喰前田遺跡

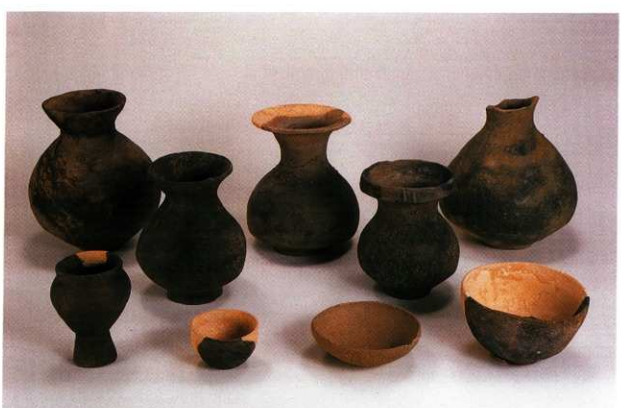
1995

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

細頸壺（弥生時代中期）



赤色塗彩の壺（パレス壺）



出土土器

唐傘の柄

神楽面

出土木製品

序

三島市は、伊豆半島の玄関口に位置している。古代より伊豆地方の中心地であり、奈良時代には国府所在地として、中世には伊豆国一宮三嶋大明神の門前町として、近世には東海道の難所箱根山を控えた宿場町として栄えてきた。このような歴史的背景から、市内各所には国・県・市の貴重な指定文化財が保存されている。

このたび発掘調査を行った鶴喰前田遺跡は、三島市の南部、田方平野の北部にあり、黄瀬川の堆積作用により開析した黄瀬川扇状地の上に位置している。本遺跡の成立に係わる御殿川は、地形界にあたる地表近くの三島溶岩の割れ目から湧出する孤池・小浜池を源泉とする流程約6kmの河川である。御殿川の御殿の名称は、流路脇に江戸時代の将軍の宿泊・休憩のための施設である御殿があったことに由来する。この御殿川は、顕著な蛇行が特徴的で、大雨による洪水等で度々周辺地域に被害をもたらし、また、流路も幾度となく変更された。御殿川河川改修工事が進められているが、工事に先立つ発掘調査を、平成2・3年度に引き続き実施することになった。

発掘調査の結果、多量の杭が比較的狭い範囲より列状にかつ方向性を伴って検出された。これは、河川の水流を制御するための「杭出し」の一部であることが解明できた。次に弥生土器をはじめとして木製品まで多種多量の遺物が出土したことがあげられる。弥生時代中期から近世に至るこれらの遺物を通して、この地域での古代人の文化を明らかにすることは極めて大切である。特筆すべき遺物として、かつて「パレススタイル」ともいわれた赤色塗彩の壺と弥生時代中期の細頸壺がある。赤色塗彩の壺は伊勢湾沿岸地方で多く作られ検出されていることから、その地域との交流関係を知る上で大きな手掛かりとなるだろう。また、細頸壺は関東地方の須和田式土器とも関連があることから、関東地方との交流関係を知る上で貴重な資料となるだろう。

最後ではありますが、発掘調査及び事後の諸整理にあたっては、静岡県沼津土木事務所・静岡県教育委員会・三島市教育委員会の各位に、深い理解と協力をいただいた。また、寒風吹きすさぶ中、湧き出る水を水中ポンプで排水しながら発掘作業に当たられた皆様、資料整理に従事した方々の御労苦に衷心より感謝するものであります。

1995年10月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長　斎藤　忠

例　言

1．本書は、三島市鶴喰地先に所在する御殿川流域遺跡群の発掘調査報告書である。平成２・３年度の調査より御殿川流域に於ける発掘調査遺跡箇所が広範囲になるので、これらを総称して、ここでは御殿川流域遺跡群として扱ってきた。今回も御殿川流域遺跡群のうちの一つとして扱うこととした。

2．調査は、平成６年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県沼津土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

3．調査の体制は次の通りである。

平成６年度

所長　斎藤　忠、常務理事　鈴木　勲、調査研究部長　小崎章男、調査研究四課長　橋本敬之、主任調査研究員　杉浦幸男、技術職員　水上綾子

平成７年度

所長　斎藤　忠、副所長　池谷和三、常務理事　三村田昌昭、調査研究部長　小崎章男、調査研究四課長　橋本敬之、主任調査研究員　杉浦幸男

4．資料整理及び報告書作成作業は、平成７年４月から開始し、平成７年９月まで実施した。

5．本書の執筆は、杉浦幸男が当たった。

6．本書の遺物写真撮影は、湊　嘉秀が、遺構写真撮影は、杉浦幸男が行った。

7．発掘調査資料は、すべて財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

8．本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が当たった。

9．発掘調査及び報告書の作成に当たっては、次の方々から御教示や御協力を賜った。特に、三島市教育委員会、愛知埋蔵文化財センターの方々にはお世話になりました。また、動物遺存体の同定を早稲田大学教育学部講師金子浩昌氏に依頼し、その玉稿を第Ⅵ章として掲載した。さらに、木製品の年代測定・材同定を（株）パリノ・サーヴェイに依頼し、その報告も併せて掲載した。厚くお礼申しあげる次第である。（順不同・敬称略）

金子浩昌　赤塚次郎　原田　幹

凡　　例

本書の記述については、以下の基準に従い、統一をはかった。

1．調査区は、国土方眼にあわせて遺跡群全体にわたる10×10mグリッドを設けた。北西優位で、各グリッドは調査区の西からA・B・C・・・、北から1・2・3・・・というようにアルファベットと数字を組み合わせて表記した。基点となるA－1グリッドはX＝－99,650.00、Y＝＋39,280.00である。

2．出土遺物は、10m方眼のグリッド毎に種類別の通し番号を付して取り上げた。

3．それぞれの出土遺物一覧表での遺物番号欄の標記は次の通りである。

例）B－4 …… グリッド名

75 …… 遺物番号　　＊遺物番号欄の前の№は、実測図の番号と同じである。

4．遺構・遺物の標記は次の通りである。

遺　構（S）	遺　物（R）	
A　柵	W　木製品	J　漆器
B　竪穴式住居	P　土製品	NB　動物遺存体
D　溝	S　石製品	
F　土坑	M　金属器	
H　掘立柱建物	B　玉類	
P　小穴	E　その他	
R　旧河道		
X　その他		

5．全体図・遺物分布図の縮尺はそれぞれの図に明記した。遺物の実測図は土器・石器・陶磁器が縮尺1/3、漆器・下駄等木製品が縮尺1/3を基本とした。ただし、土製品・銅釧・古銭が縮尺1/1、金属器が2/3、櫛が縮尺1/2とした。また、写真図版の縮尺率はすべて任意である。

6．スクリーントーン及びマークの指示

(1) 土層図においては、II層・III層をスクリーントーンで使い分けた。

II層　砂層　　・細砂層　　、III層　砂礫層

(2) トレースに使用したスクリーン

漆等の塗り　　、欠損　　、焼痕　　、桜皮

(3) 遺物マーク（遺構・遺物の出土状況図で使用）

土器 ●　、石器 △　、骨 □　、下駄 ◆　、漆器 ○

7．漆器の文様彩色は下記の通りである。

・黒漆 …… 黒く塗りつぶし

・赤漆 …… ふち取りのみ

目　次

カラー図版
序
例言
凡例

第Ⅰ章　発掘調査の経緯……1

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……2
第1節　遺跡の立地……2
第2節　歴史的環境……4

第Ⅲ章　発掘調査の概要……9
第1節　発掘調査の経過……9
第2節　遺跡の層序……12

第Ⅳ章　遺構と遺物……16
第1節　遺　構……16
第2節　出土遺物……30

第Ⅴ章　あとがき……163

第Ⅵ章　自然科学による分析……164
第1節　三島市御殿川流域遺跡群出土の動物遺体……164
第2節　木製品年代測定・材同定……171

挿図目次

第1図　遺跡の立地と周辺の地形…… 3
第2図　遺跡の位置と周辺の遺跡…… 5
第3図　発掘調査区全体図…… 11
第4図　標準土層断面図…… 12
第5図　土層断面図…… 13
第6図　標準横断面模式図…… 15
第7図　暗渠図…… 18
第8図　近世の護岸杭列と中世～近世の杭出し… 21
第9図　中世以前の杭出し…… 23
第10図　出し（萱羽と粗朶羽）…… 26
第11図　川除杭…… 27
第12図　枠類・牛類…… 28
第13図　大井川の大聖牛…… 28
第14図　蛇行河川の堆積モデル…… 29
第15図　蛇行切断…… 29
第16図　土器・石器・動物遺体分布図…… 31
第17図　土器実測図1…… 32
土器実測図2…… 33
土器実測図3…… 34
土器実測図4…… 35
土器実測図5…… 37
土器実測図6…… 38
土器実測図7…… 39
土器実測図8…… 40
第18図　土器集中地点分布図…… 42
第19図　土器集中地点1分布図…… 43
第20図　土器集中地点2分布図…… 45
第21図　土器集中地点3分布図…… 47
第22図　石器実測図1　打製石斧…… 55
石器実測図2　打製石斧・磨製石斧…… 56
石器実測図3　磨製石斧・石皿…… 57
石器実測図4　敲石…… 58
石器実測図5　敲石…… 59
石器実測図6　敲石…… 60
石器実測図7　敲石…… 61
石器実測図8　敲石…… 62
石器実測図9　敲石・凹石…… 63
石器実測図10　砥石・石錘…… 64
第23図　土製品・石製品・銅銭・古銭実測図 66
第24図　金属器実測図…… 67
第25図　陶磁器実測図1…… 72
陶磁器実測図2…… 73
陶磁器実測図3…… 74
第26図　漆器・下駄分布図…… 78
第27図　漆器集中分布図…… 79
第28図　漆器実測図1…… 80
漆器実測図2…… 81
漆器実測図3…… 82
漆器実測図4…… 83
漆器実測図5…… 84
漆器実測図6…… 85
漆器実測図7…… 86
漆器実測図8…… 87
漆器実測図9…… 88
漆器実測図10…… 89
漆器実測図11…… 90
漆器実測図12…… 91
漆器実測図13…… 92
第29図　櫛実測図…… 100
第30図　下駄集中分布図…… 102
第31図　下駄実測図1…… 103
下駄実測図2…… 104
下駄実測図3…… 105
下駄実測図4…… 106
下駄実測図5…… 107
下駄実測図6…… 108
下駄実測図7…… 109
下駄実測図8…… 110
下駄実測図9…… 111
下駄実測図10…… 112
下駄実測図11…… 113
下駄実測図12…… 114
下駄実測図13…… 115
下駄実測図14…… 116
下駄実測図15…… 117
下駄実測図16…… 118

下駄実測図17…… 119
下駄実測図18…… 120
第32図 下駄計測部位名称…… 103
第33図 農具実測図1…… 124
農具実測図2…… 125
第34図 容器実測図1 挽物…… 126
容器実測図2 挽物…… 127
容器実測図3 刳物・柄杓…… 128
容器実測図4 柄杓…… 129
容器実測図5 曲物…… 130
容器実測図6 円板…… 131
容器実測図7 円板…… 132
容器実測図8 円板…… 133
容器実測図9 長方形曲物…… 134
容器実測図10 蓋・底板…… 135
容器実測図11 蓋・底板…… 136
容器実測図12 蓋・底板…… 137
容器実測図13 蓋・底板・栓…… 138
第35図 食事具実測図1…… 144
食事具・工具実測図2…… 145
第36図 遊戯具・祭祀具実測図…… 147
第37図 雑具実測図…… 148
第38図 木製品用途不明品実測図1…… 151
木製品用途不明品実測図2…… 152
木製品用途不明品実測図3…… 153
木製品用途不明品実測図4…… 154
木製品用途不明品実測図5…… 155
第39図 杭実測図1…… 157
杭実測図2…… 158
杭実測図3…… 159
杭実測図4…… 160
杭実測図5…… 161
第40図 動物遺体実測図1…… 169
動物遺体実測図2…… 170

挿表目次

第1表 土器一覧表…… 49
第2表 石器計測表…… 68
第3表 陶磁器一覧表…… 75
第4表 漆器一覧表…… 93
第5表 櫛一覧表…… 100
第6表 下駄出土点数と割合…… 101
第7表 下駄一覧表…… 121
第8表 農具一覧表…… 125
第9表 容器一覧表…… 139
第10表 食事具一覧表…… 146
第11表 工具一覧表…… 149
第12表 遊戯具一覧表…… 149
第13表 祭祀具一覧表…… 149
第14表 雑具一覧表…… 149
第15表 用途不明具一覧表…… 155
第16表 杭一覧表…… 162
第17表 イルカ計測表…… 165
第18表 ウマ計測表…… 165
第19表 ニホンジカ計測表…… 166
第20表 歯出土数一覧表…… 168
第21表 樹種同定結果及び年代測定結果…… 173

図版目次

カラー図版 1．細頸壺（弥生時代中期）
2．赤色塗彩の壺(パレス壺)・出土土器
3．出土木製品
4．漆器
（本文）
図版1 調査風景…… 10
図版2 暗渠交差部（北東より）…… 17
図版3 堤防を守る「大聖牛」…… 28
図版4 土器集中地点1…… 41
図版5 木材…… 175
（写真図版）
図版1 調査区全景（北側より）・暗渠
図版2 調査前風景（北側より）・暗渠
図版3 杭列（竹）・杭列

図版４　杭出し
図版５　下駄・漆器・蓋出土状況・漆器出土状況
図版６　シガラ出土状況・No.５土層断面
図版７　籠出土状況・杓子形木器？出土状況
図版８　石器出土状況・銅鏃出土状況
　　・鹿角出土状況
図版９　土器出土状況・細類遺出土状況
図版10　第Ⅳ層（基盤層）出土状況　（１区）
　　硬質砂層（マサ土）出土状況　（１区）
図版11　第Ⅳ層（基盤層）出土状況　（２区）
　　頭蓋骨（ニホンジカ）出土状況
　　調査終了（南側より）
図版12　土器　１
図版13　土器　２
図版14　土器　３
図版15　土器　４
図版16　土器　５
図版17　土器　６
図版18　土器　７
図版19　石器　打製石斧・磨製石斧
図版20　石器　石皿・敲石１
図版21　石器　敲石２
図版22　石器　敲石３・凹石・砥石・石錘
図版23　陶磁器　１
図版24　陶磁器　２
図版25　陶磁器　３
図版26　土製品・石製模造品・金属製品・櫛
図版27　漆器　１
図版28　漆器　２
図版29　漆器　３
図版30　漆器　４
図版31　漆器　５
図版32　下駄　１
図版33　下駄　２
図版34　下駄　３
図版35　下駄　４
図版36　下駄　５
図版37　下駄　６
図版38　下駄　７
図版39　下駄　８
図版40　下駄　９
図版41　下駄　10
図版42　下駄　11
図版43　下駄　12
図版44　下駄　13
図版45　下駄　14
図版46　下駄　15
図版47　農具
図版48　容器　挽物・栓
図版49　容器　曲物・刳物
図版50　容器　円板１
図版51　容器　円板２・蓋・底板
図版52　食事具・工具
図版53　遊戯具・祭祀具・雑具
図版54　用途不明具
図版55　杭　１
図版56　杭　２
図版57　杭　３
図版58　杭　４
図版59　杭　５
図版60　動物遺体　１（ウマ・ウシ）
図版61　動物遺体　２（ニホンジカ）
図版62　動物遺体　３（ニホンジカ）
図版63　動物遺体　４（ヒト・イルカ・イヌ・ウマの歯）

補正挿図

補－１　第25図　陶磁器実測図１
補－２　第25図　陶磁器実測図２
補－３　第34図　容器実測図７　円板

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

昔から、「水の都三島」とうたわれている三島市は、平成７年３月に国土庁より地域活性化推進事業の一つとして「水の郷」の認定証を受けた。県下で唯一、全国34地区の中に選ばれた主な理由は、①源兵衛川や竹倉地区に川の炊事場「カワバタ」などの文化が保存されている、②楽寿園や白滝公園、源兵衛川など富士山からの豊富な地下水、湧水を活かした公園整備がされている、③水を活かしたまちづくりへの取り組みを評価されたからである。

さて、本遺跡の成立に大きく係わる御殿川は、源兵衛川と同様に地形界にあたる地表近くの三島溶岩の裾れ目から湧出する弧池・水泉園（白滝公園）・浅間神社境内・小浜池を源泉とし、三島で最も低い中央町の住宅街を貫き市街地南部を流下、大場川に注ぐ流程約６km（流路延長9.5km）の河川である。御殿川の河床勾配はほぼ安定しているものの、近年の市街化の進展に伴い急激な出水が著しく、また屈曲が甚だしい地形に加え、排水能力も不足している。このため降雨があっても、常時狩野川及び大場川の背水影響を受けてしまい、洪水をはじめ浸水被害を受けることがたびたびあった。このため、河川改修工事が昭和45年より開始された。改修計画区間は下流より鶴喰橋までの約1.7kmで、昭和45年度から昭和55年度までの改修済延長は、下流より約１kmとなっていた。ところが、改修区間の中には三島市で作成した「三島市遺跡地図」の埋蔵文化財包蔵地に該当する地点があり、遺跡踏査の結果、４地点が調査の対象にあたった。以来、事前調査にもとづいて調査の完了した地点より改修工事が実施されてきた。

昭和56年に遺跡調査が実施された中島下舞台遺跡、昭和61年の中島上舞台遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての平野部での生活を知る上で、大変貴重な資料を提供している。そして、平成２年９月から平成４年３月までの１年６カ月間、当研究所による大規模な御殿川流域遺跡群（中島西原田遺跡、八反畑前田遺跡、梅名大曲田遺跡）の調査が実施された。こうして幾度かの調査を経て、今回の調査に至った。

本発掘調査開始までの経過は次のとおりである。平成６年６月、沼津土木事務所より三島市教育委員会を経て静岡県教育委員会文化課へ八反畑橋より鶴喰橋までの河川改修工事のため文化財所在の照会文書が提出され、同時に調査依頼があった。それを受けて、文化課では、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所へ調査を依頼してきた。そこで、７月７日、沼津土木事務所・静岡県教育委員会文化課・当研究所の三者によって遺跡の取り扱いについて協議が行われた。まず、遺跡所在の有無については、鶴喰橋下流付近は遺跡地図との照合によりNo409鶴喰遺跡に一部該当する可能性がたかいことが確認された。また、調査は鶴喰橋より八反畑橋付近（八反畑橋上流約50mは調査・工事等完了）まで行うが、一部御殿川左岸側等未買収地点もあるため、とりあえず買収済みの地点より事前調査を行うことになった。調査期間は約３年間で、工事着工前に記録保存を前提とした発掘調査を実施することで基本的合意に達した。そして、平成６年度の調査地点は、まず鶴喰橋下流の右岸側で８月に試掘調査を実施し、その結果を踏まえて10月より翌３月まで本調査を実施することが決定した。

８月４日、試掘調査を実施した。調査方法は、調査区に２本のトレンチを設定し重機による表土剥ぎを行った後、８月８日より12日まで５日間精査を実施した。その結果、第Ⅰ層（黒色粘質土）から第Ⅱ層（黒色砂悩）にかけて、箸状木製品を含む木製品が検出されたため遺物包含層であることが判明した。遺跡の範囲が明確になったため、小字名をとって鶴喰前田遺跡と呼称し、前同同様大きく調査範囲をまとめて御殿川流域遺跡群の一つとした。平成６年９月16日、委託契約書並びに協定書を締結した。静岡県教育委員会文化課よりの発掘調査の指示をまって、発掘調査の諸般の準備を行い、発掘調査を開始したのは平成６年10月１日のことである。

第II章　遺跡の立地と環境

第1節　遺跡の立地

鶴喰前田遺跡は、伊豆地方最大の平野である田方平野の北側にあたり、三島市域の南部に位置している。国道1号三島バイパスより南方へ約1km、遺跡の西側0.5kmには国道136号下田バイパスが国道1号を起点として南下している。本遺跡のある三島市は、静岡県の東部、伊豆半島の付け根付近に位置し、東は海抜850mの箱根山、北西に富士山・愛鷹山、南には天城連山を望み、西には駿河湾が開けるなど自然環境に恵まれている。政治・経済面においては、かつては伊豆国の国府の所在地であり、古代から交通の要衝として栄え、中世には三嶋大社の門前町、近世には東海道53次の宿場町の一つとなり、代官所も置かれた歴史をもつ。近代以降も北伊豆の中心地として繁栄し、「田方平野」を後背地として今日の三島市の基礎が築かれた。現代において三島市は、「東海道メガロポリス」の一画をなし、東京大都市圏への交通利便さにも恵まれて都市としての発展を続けている。東京から約120kmの地理的距離は、東海道新幹線の三島駅の開業に伴って新たな飛躍への道を歩み、新幹線通勤・通学（東京～三島間ひかり号で約47分）の増大、地下高騰を背景とした東京圏からの転入者増加の動向がみられるようになり、今や実質的には東京圏に入ったといえる。（注1）

三島市の地勢は、その有する地形と地質的な特質によって箱根山西麓地域、市域の北側に広がる溶岩台地、市街地の南域に広がる本遺跡の位置する沖積平野の3地域に大きく区分することができる。

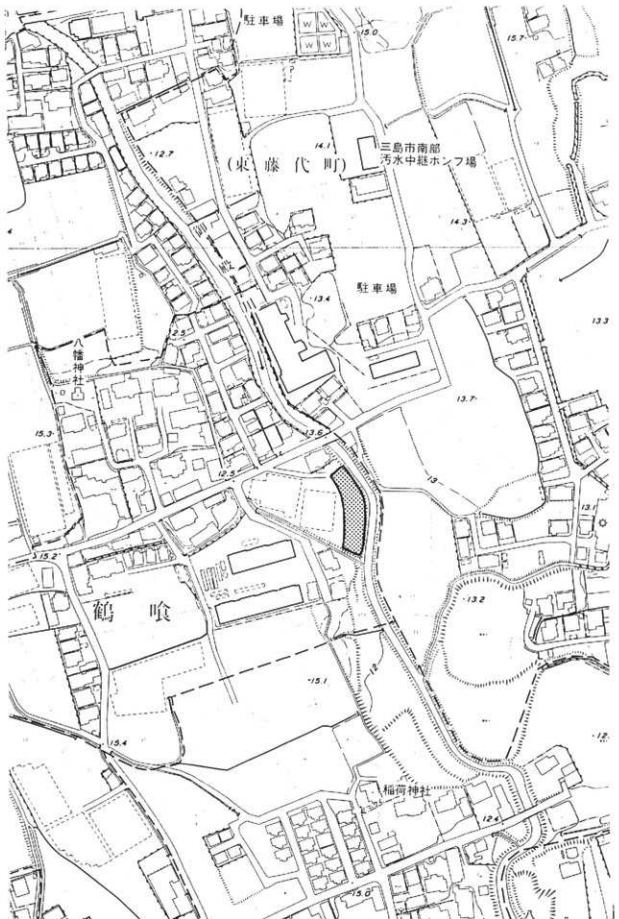
この沖積平野は俗に黄瀬川扇状地（三島扇状地、三島・沼津平野）と呼ばれており、砂礫層の堆積物によって形成されている。その形成の歴史は大変古く、幾度かの自然環境の変化の後、約8,000年前頃、所謂、縄文海進によって海水準の上昇がもたらされ、高頂期には駿河湾が前進、狩野川流域に広大な浅海性内湾「古狩野湾」が出現した。この入江には天城山地を源とし北流する狩野川、愛鷹山と箱根山の裾合谷を流下する黄瀬川・大場川によって、降下火山灰・砂礫・スコリア等が供給され堆積し、その後の造盆地運動とあいまって黄瀬川扇状地が成立、三島・沼津平野の現地形が形成された。さらに陸化した扇状地面は溶岩台地末端部よりの湧水を源とする御殿川、源平川、境川、柿田川等によって開析され、至る所に河川争奪による涸れ谷や旧流路の窪地を作り出している。

御殿川の御殿の名称は、流路脇に、江戸時代の将軍宿泊・休憩のための御殿地（推定面積42,000㎡）があったことに由来する。現在の三島社会福祉会館や社会保険病院の辺りで、川はこの東側を流れ佐野美術館北側、奈良橋を経て南東へ蛇行し本遺跡を通過して、梅名方面へと注いでいる。徳川家康は上洛、駿府・江戸間の往復や遊猟のためそれらを多数建設し、二代秀忠、三代家光の代には日光社参の目的も加わった。このため、17世紀初頭から中葉にかけての江戸初期には南関東を中心に、静岡から滋賀まで、合わせて103ヶ所の施設が設置された。このうち、鷹狩りなどの遊猟に使用されたのは約50ヶ所にのぼる。ところが、これらは主な街道沿いに設けられたためにほとんどが開発によって消滅し、残されているものはほとんどない。

本遺跡はこの扇状地のほぼ末端部にあたり、蛇行する御殿川の右岸に位置する。調査区の一部分は御殿川旧河道にあたる。

注

1　加藤雅功　1987　「自然環境、位置」　『三島市誌増補本文編』三島市
　〃　1992　「三島の自然、地理的位置」　『三島市誌増補資料編II』三島市



第1図　遺跡の立地と周辺の地形（1／2,500）

第2節　歴史的環境

三島市は「歴史の宝庫」ともいわれるように、現在472ヶ所もの遺跡が分布している。主に、先土器時代から縄文時代までの遺跡は箱根山西麓に、三島市街を含む平野部では弥生時代以降の遺跡が分布している。青森県の三内丸山遺跡の発掘によって多少時代的認識が変わってきてはいるものの、これは、採集狩猟経済と水稲農耕経済という生産基盤の相違に基づくものと考えられる。

平野部の遺跡については、西から境川流域、御殿川流域、大場川流域、箱根山西麓末端の低丘陵上の4地域に分布している。それぞれの流域には、低湿地や後背湿地が広がっておりこれらの遺跡を含む生活基盤となっていたことが伺われる。

ここでは、本遺跡に関係の深い弥生時代から平安時代の遺跡の中で、内容が明らかにされているものについて概観することにしたい。（第9図参照）

1　鶴喰遺跡

本遺跡に最も近い遺跡で、西側80mに位置する。1982年、県営住宅建設に伴う調査で弥生時代中期から古墳時代にかけての溝状遺構10条・土坑5基・掘立柱建物跡、古墳時代の住居址1軒等が検出されている。弥生時代中期後半の遺跡が調査され、集落跡の存在が確認されたことはこの地域の弥生時代を考える上で大きな意味を持つ。溝内より出土した壺・台付甕・坏などの土器には一部鴨ヶ池遺跡出土の土器あるいは関東地方の須和田式土器に対比し得るものがあり、本遺跡との有機的なつながりが考えられる。また、石包丁・磨石等の石器は重要な資料となるものである。（注1）

2．金沢遺跡

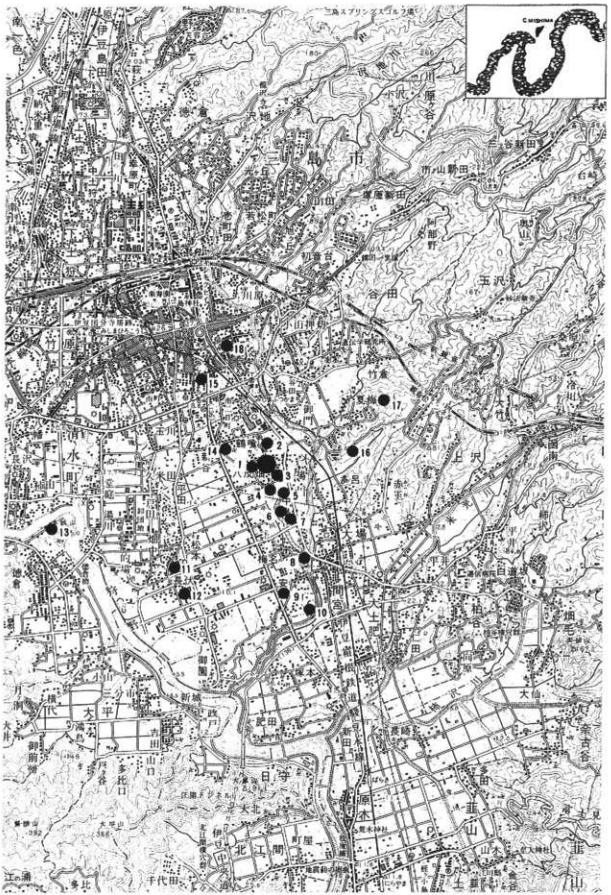
本遺跡の北側100mにあり、御殿川左岸の微高地上に位置する。1991年、マンション建設に伴う調査で古墳時代から奈良・平安時代にかけての住居址35軒、掘立柱建物跡2軒、方形周溝墓1基、溝状遺構1基、土坑2基が検出された。中でも、古墳時代後期の住居址から出土した土師器の坏・椀・高坏・甕・甑・金環・有孔円盤・石包丁・砥石等の遺物は、良好なセット関係を示す貴重な資料である。狭い調査範囲（742㎡）から沢山の住居址が検出されたが、これらのものは数百年間にわたって営まれており住みやすい土地であったことが伺われる。また、遺構が東側へ大きく広がっていることから、大集落を形成していたものと考えられる。（注2）

3．中島西原田遺跡

御殿川流域遺跡群の一つで、本遺跡の下流300mに位置し、右岸の微高地と低地部の河川敷に分かれている。1990年～1991年にかけて御殿川河川改修（一部、八反畑橋掛け替え）工事に伴って調査が行われた。遺構としては、弥生時代から近世に至る暗渠・土坑・護岸杭列・祭祀跡・旧河道が検出された。遺物としては、II層（黒色砂層）より漆器・下駄・曲物・横槌・箸状木製品・塔婆・櫛等の木製品が、III層（黒色砂礫層）より土師器・須恵器・弥生土器・かわらけ・ガラス玉・銅銭・石斧・石鏃・刀子・獣歯牙骨等が検出された。特に、八反畑橋上流の4区では、流れを受けていない完形の土器が多量に出土した。また、下流の5～7区では、墨書土器、円面硯、緑釉土器の破片等が出土した。また、斎串と考えられる箸状木製品が多量に出土しており、祭祀的性格をもつ遺物として注目されている。（注3）

4．八反畑前田遺跡

御殿川流域遺跡群の一つで、御殿川右岸側に位置する。1991年に八反畑橋仮橋工事に伴って調査が行われた。段丘部分には遺物・遺構は検出されなかったが、低地部分の砂礫層中より弥生時代～中世の遺物が一括して出土した。遺構としては護岸杭列・祭祀跡・旧河道が、遺物は舟形木製品・横槌・箸状木製品・漆器・下駄・刳物・塔婆・布目瓦・土師器・須恵器・弥生土器・石斧・磨石・敲石・卜骨等が検出された。（注4）



第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1／50,000）

5．梅名大曲田遺跡

御殿川流域遺跡群の一つで、御殿川右岸側に位置する。1991年に試掘調査の後、本調査が行われた。中島西原田遺跡低地部と同じく旧河道堆積層から弥生時代中期～中世の遺物が出土しており、遺跡の性格も西原田遺跡に似たものと考えられている。(注5)

6．中島上舞台遺跡

御殿川流域遺跡群より南へ約200m、御殿川左岸の蛇行部に位置する。1986年、河川改修工事に伴って調査され、弥生時代中期の方形周溝墓6基、後期の住居址2軒、古墳時代五領期の住居址1軒、和泉期の住居址4軒、鬼高期の住居址13軒、奈良・平安時代の住居址44軒、掘立柱建物跡7軒が検出され、当時当該地域で調査された最も大規模な遺跡である。特に、弥生中期の方形周溝墓の検出は、当該地域初例のものとなった。また、北側沖積地より木製品が検出されたため、この部分についても調査を実施し中世の柵列が検出されている。(注6)

7．中島下舞台遺跡

中島上舞台遺跡の下流500m、御殿川左岸の蛇行部に位置する。御殿川河川改修工事に伴う調査としては大場中島遺跡（大場川と御殿川の合流点）についで二例目にあたるが、御殿川単独の本格的な調査としてはこれが最初で、1981年に実施された。遺構としては、古墳時代鬼高期の住居址14軒、奈良・平安時代の住居址12軒が検出され集落が営まれていたことが判明した。遺物では鬼高期にあたる駿東型甕が検出され注目される。中島上舞台遺跡との有機的関係が考えられる。(注7)

8．大場中島遺跡

大場川と御殿川の合流点にあたる中州状の微高地に位置する。安久奥屋敷遺跡の上流500mにあたる。1975年の河川改修工事に伴って調査が行われた。遺構は検出されなかったが、一括土器の集中的な出土地点があり、弥生時代中期に位置付けられる多数の土器が検出された。偏平片刃石斧や紡錘車などは注目されている。(注8)

9．安久沓形遺跡

三島市域の南端部、箱根山を源流とする大場川によって区画された函南町との境界部分に位置し、大場川の蛇行によって形成された自然堤防上の微高地に位置している。1990年に調査され、溝状遺構9基、井戸状遺構2基、柱穴1基、古墳時代から近世にかけての遺物が多数検出された。調査区域が田方条里の条里地割内にあることから、灌漑・排水といった生産関係遺跡の遺構の可能性が強い。また、灰釉・緑釉陶器・布目瓦等平安時代前期の遺物が少数ではあるが検出されている。(注9)

10．安久遺跡

田方平野東側を南下する大場川の自然堤防上に位置し、安久奥屋敷遺跡と安久川崎原遺跡の二地区に分かれる。両地区とも、大場川の蛇行によって形成された半島上の微高地に立地している。1987年、土地区画整理事業の一環として調査され、安久奥屋敷遺跡からは掘立建物跡1軒、井戸址2基、溝2基、土坑1基が、安久川崎原遺跡からは、住居址14軒（古墳時代中期9軒・古墳時代後期4軒・平安時代1軒）・井戸などの人為的な遺構と自然流路等が検出されている。出土遺物では、弥生時代中・後期、中でも、古墳時代前期から後期（五領期・和泉期・鬼高期）の土器の出土が多く、該期の資料の少ない東駿河及び伊豆地方の古墳時代の土器研究にとって、貴重な資料となっている。また、その中には、祭祀を行ったと思われる坏・高坏・坩の一括廃棄も認められている。(注10)

11．長伏遺跡

市内で初めて水田畦畔の検出された長伏上辛田遺跡に近い遺跡で、境川左岸に位置している。二度（1966年・1971年）にわたる調査で、弥生時代中期の環濠もしくは排水路とされる溝、住居址1軒、壺棺墓と考えられる土坑が1基検出されている。溝中の一括土器を対象として編年研究がなされ、原渚式

に対応する駿豆地方の形式として長伏式が提唱されている。(注11)

12. 長伏上辛田遺跡

JR東海三島駅より南へ4.3km、境川を境界とする駿東群清水町との市町境に位置する。これまで、静岡県東部における水田畦畔は、山木遺跡や坂本遺跡など数例しか検出されておらず、三島市では一件も確認されていなかった。1991年の調査で、北伊豆で初めての弥生時代後期の水田畦畔が発見され、市内においてもこの時代に水田が行われていたことが実証できた。遺物としては、畦畔を補強する多量の杭や木製品、台付甕の上器片等が検出された。(注12)

13. 矢崎遺跡

狩野川左岸の河岸段丘上に立地し、戦前より江藤千万樹をはじめとする調査研究がなされた県東部の学史的な遺跡である。弥生時代中期の住居址7軒、銅鏃などが検出されている。

また、出土土器によって、矢崎下層式・中層式・上層式（原添式・有東式・登呂式に対比）が提唱されている。(注13)

14. 青木遺跡

東側に御殿川、西側に源平川が南流しており、この両河川に挟まれた微高地上に位置している。鶴喰前田遺跡より西側500mにあり、1971年と1986年の二度調査が実施された。遺構としては、5基の方形周溝墓（弥生時代中期1基、後期2基、古墳時代2基）と、弥生時代後期の壺棺墓1基、古墳の周溝1基が検出された。特に、畿内第V様式の甕形土器、平地における古墳の資料は注目される。また、遺跡の東側に御殿川による沖積地が広がっていることから、水田の存在も考えられる。(注14)

15. 奈良橋向遺跡

鶴喰前田遺跡より北側1km、御殿川東側に位置している。大型ショッピングセンター建設に伴う事前調査で、1992年～1993年にかけて実施された。弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡と水田跡が同一遺跡から発見されたのは、三島市では初めてで注目された。遺構としては、旧御殿川流路跡（弥生時代以前）、水田跡、竪穴住居址16軒、掘立柱建物址1軒、祭祀跡等がある。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器などの土器、木製品（田下駄・木製容器・又鍬・梯子・ねずみ返し・杓子・機織具・横槌等）祭祀関係の遺物（高坏・坩・手づくね土器・勾玉、管玉、滑石製の鏡、臼玉）等が検出された。(注15)

16. 向山古墳群

箱根山麓末端の丘陵上とその背後に続く痩せ尾根の丘陵上に位置する。1975年、1991年の二度の調査で、前方後円墳1基を含む14基の円墳が検出され北伊豆地方を治める盟主墳であった可能性が高まり、今後、史跡公園として指定し保存に向けた活動も行われている。1975年の調査では、5世紀後半～6世紀初頭の2基の古墳が検出された。主体部は木棺直葬で、副葬された鉄剣、直刀、鉾、鉄鏃等が出土した。1991年の調査は道路の拡幅工事に伴う調査であったが、前方後円墳が検出された箇所は一部修正されて削減を免れた。(注16)

17. 夏梅木遺跡群

箱根山麓末端の丘陵上に位置し、夏梅木古墳群・源平山遺跡・猪追面遺跡からなる。その中でも、最も特徴的な夏梅木古墳群は、当該地方で古くから知られた代表的な古墳群であり、1915年後藤守一、1948年樋部慧悳によって調査されている。特に、1948年の調査の折、沼津御用邸に避暑に来られていた中等科在籍の現天皇陛下が発掘調査に参加され直刀を取り上げられて知名度を高めた。その後、1990年～1991年にかけて、宅地造成に伴う事前調査が実施された。源平山遺跡では、縄文時代中期の敷石住居址1軒、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居址8軒・方形周溝墓2基の他祭祀跡1ヶ所、奈良時代から平安時代にかけての住居址1軒等の遺構が検出された。猪追面遺跡でも、縄文時代の住居址3軒・配石遺構1基・土坑1基、弥生時代の住居址2軒、弥生時代から古墳時代の方形周溝墓4基が検出されている。ま

た、両遺跡の遺物総数は約84,000点に及ぶ膨大なものであり、その中でも飾太刀や馬具・装身具等は貴重な資料となっている。(注17)

18. 上才塚遺跡

御殿川と大場川に挟まれた三島扇状地（黄瀬川扇状地）上に位置し、伊豆国府推定地の一つにあげられている。1991年の調査では、溝状遺構７本・土坑３基・柱穴、1990年の調査では、掘立柱建物跡３棟・柱穴列１基・溝状遺構21本が検出されている。遺物としては、メノウ製の腰帯飾石が貴重な資料として検出されている。(注18)

注

1．平野吾郎・山田元広	1984	『鶴喰遺跡』　三島市教育委員会
2．辻　真人　他	1993	『金沢遺跡』　三島市教育委員会
3～5．橋本敬之　他	1993	『御殿川流域遺跡群Ⅰ』　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〃	1994	『御殿川流域遺跡群Ⅱ』　〃
6．鈴木敏中　他	1987	『中島上舞台遺跡』・『三島の遺跡』　三島市教育委員会
7．鈴木敏中　他	1983	『中島下舞台遺跡』　三島市教育委員会
8．昭和49年調査未報告		
9．勝又　博　他	1991	『安久窯形遺跡』三島市教育委員会
10．鈴木敏中　他	1989	『安久遺跡』　三島市教育委員会
11．小野真一	1966	「静岡県三島市長伏遺跡」・『日本考古学年報』日本考古学協会
	1988	「三島市長伏遺跡の概要」・『加藤学園考古学研究所報11』
12．杉浦幸男・広瀬政信	1992	『長伏上塩辛田遺跡』　三島市教育委員会
13．江藤千万樹	1938	「矢崎遺跡豫察」・『上代文化第16輯』上代文化研究会
小野真一	1966	「駿河矢崎遺跡第３次調査略報」・『沼津女子高校考古館報４』
14．鈴木敏中	1987	「宮木遺跡」・『三島の遺跡』　三島市教育委員会
15．芦川忠利・杉浦幸男	1994	「奈良橋向遺跡」・『西大久保遺跡概報』　三島市教育委員会
16．山内昭二　他	1975	「三島市向山古墳調査概報」・『駿豆考古19号』　駿豆考古学会
鈴木敏中・杉浦幸男	1992	『三島市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』　三島市教育委員会
17．広瀬政信・鈴木敏中	1991	「夏梅木遺跡群」三島市教育委員会
18．静岡人類史研究所	1992	『上才塚遺跡第１地点・第２地点』　三島市教育委員会

第Ⅲ章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査の経過

鶏唄前田遺跡の発掘調査は試掘調査・本調査の二段階に分けて行われた。ここでは、試掘調査及び本調査の調査経過と概要について調査方法を交えてふれておきたい。

１．試掘調査

試掘調査は調査区が分厚い客土によって覆われており、現況では遺跡の性格やその範囲を明確にすることが不可能であったため、遺跡の内容と発掘調査の実施計画を作成することを目的として平成６年８月８日から８月12日まで実施した。

調査は調査区中央部に東西方向に５×17mのトレンチを１ヶ所設定し、重機を投入して表土（客土を含む）の除去を行った。当初は、分厚い客土といっても１m前後掘り下げれば遺物包含層に達すると考えていたが、これが予想していた以上に厚く覆われており約2.2mにも達した。客土を除去した後、作業員７人による掘り下げを行った。試掘調査の結果、黒色粘質土（Ⅰ層と呼称、以下同）から黒色砂層（Ⅱ層）上面にかけて陶磁片・丸太杭・箸状木製品・加工木製品・土器片等が出土した。これらの遺物類は、平成２年～４年にかけて実施された御堀川流域遺跡群の調査より検出された遺物とほぼ同一であることが確認された。特に、箸状木製品は、先の調査では約7,000点程出土し、祭祀との関係も考えられている。遺構は、調査範囲が狭くその性格を明確に捉えることはできなかったが、丸太杭が等間隔で数本出土し護岸に伴う杭列と思われる。本来ならば黒色砂層の下の砂礫層（Ⅲ層）や基盤層であるマサ土（Ⅳ層）まで掘り下げなければならないところであるが、Ⅱ層から出土した遺物や杭列を壊してしまう恐れがあるため調査は中止し、すぐに埋め戻しを行った。以上のことから、当該地には少なくとも中世以前の遺物が包含されていることが確認された。

２．発掘調査

発掘調査は、平成６年10月１日より平成７年２月22日まで実施した。調査範囲は約1,055m²の面積を有する。試掘調査の結果からかなりの厚さで客土が堆積していることが明らかであったため遺構確認面までの排土は、重機を投入し一気に全面排土を実施した。

10月５日、開所式を挙行し調査の成功と安全を祈願した。式後、調査員１名、作業員26名体制で発掘調査を開始した。調査は、排土処理の関係から調査区を南北二つに分け南側を１区、北側を２区として、１区の調査から着手し、調査が終了した後、排土の移動を行い、２区の調査を実施した。また、それとは別に国土方眼にあわせて10×10mグリッドを設けた。各グリッドは、北西優位で調査区の西側からA・B・C・・・、北側から１・２・３・・・というようにアルファベットと数字を組み合わせて表記した。調査方法は、検出される層ごとに遺構・遺物等を処理して進めたが、ただ単に平面的に見ただけではよく理解できないので土層を調べるためにトレンチを設定（１区でT1～T4、２区でT5～T6）した。そして、その土層をもとに掘り下げていったが、下層にいくにつれて川の水位より低くなったため水が湧き出したので、水中ポンプを設置し稼働させながら調査を行った。

まず１層を少し掘り始めたところで杭列が、続いてⅠ層からⅡ層にかけて南北に延びる暗渠が検出された。特に、杭は１区で約300本、２区では132本と多量に検出されその後の処理にかなりの時間を費やした。10月31日に暗渠の実測と写真撮影、11月４日に暗渠・杭列の全体写真撮影を実施した。その後、杭に関しては列ごとに実測→写真撮影→取り上げという方法で行ったがさらに掘り下げていくと、また、新たに別の杭が検出された。Ⅱ層の調査は12月上旬迄かかり、Ⅲ層の調査に入ったのは12月９日であった。12月24日、Ⅲ層の精査を終了しⅣ層上面を検出した状態で調査区全体の写真撮影を実施した。

出土遺物は、弥生時代から近世までの広範な時代にわたり、大別するとII層からは漆器等の木製品が、III層からは弥生土器をはじめとする土師器・須恵器等が多量に検出された。12月26日から27日にかけて埋め戻しを行い、12月28日をもって1区の調査を終了した。

2区の調査は、1月5日より開始した。重機を投入してI層の土をII層上面近くまで剝がした。1月24日迄にII層の調査を終了し、引き続いてIII層の調査を2月8日迄実施した。

遺構・遺物については1区とほぼ同じものが検出され、堆積層の中に河川によって運ばれた遺物が包含されていることが一部の土器集中域を除いて、明らかになってきた。2月9日、IV層検出面の実測と写真撮影を行った。2月13日より2区の埋め戻し、16日～20日迄全調査区の埋め戻しを実施した。その後2日間で、現場事務所・資材置場の撤収、調査器材の搬出等を行いすべての調査を終了したのは2月22日であった。

以上の発掘調査によって確認された遺構は次のとおりである。

・近世以降　　暗渠（3基）
　　護岸杭列
・弥生時代中期～近世　　護岸杭列（杭出しの一部）、旧河道

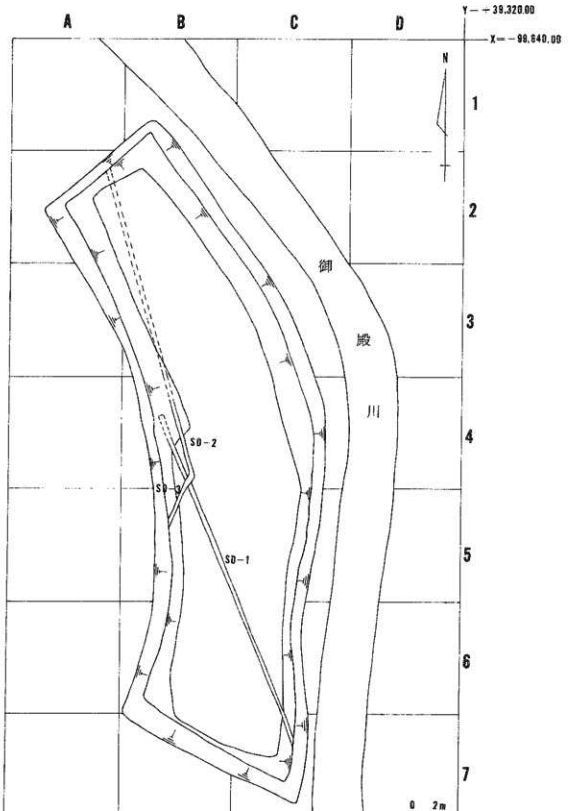
1．本調査前風景

2．調査風景

3．調査風景

4．調査完了

図版1　調査風景



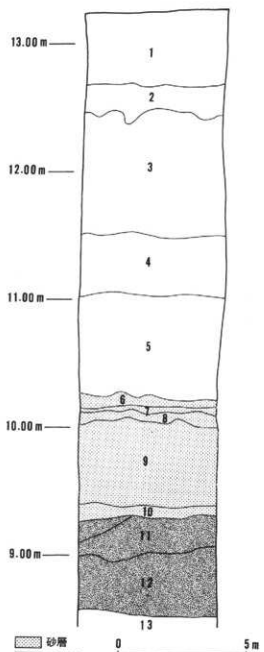
第3図　発掘調査区全体図

第2節　遺跡の層序

本遺跡における土層の堆積は、前述したとおり調査区の大部分が御殿川の旧流路にあたるため沖積作用を受け、一部複雑な状態を示してはいるが、大きく次の4層に分けることができる。

表土層の下には黒色の粘質土層（Ⅰ層）、その下には黒色砂層（Ⅱ層）が、さらにその下には黒色砂礫層（Ⅲ層）、そして最後に地元では「マサ」と呼んでいる硬質砂層（Ⅳ層）が堆積している。ここでは遺跡の基本的層序について、B－5グリッド西壁の土層断面図に従って説明することとする。

第1層　淡黄褐色土　埋めたてに伴う盛り土（客土）　粘性・締り無し。ビニールテープ等混入。
第2層　茶褐色土　埋めたてに伴う盛り土（客土）　第1層とは堆積の時期が異なる。

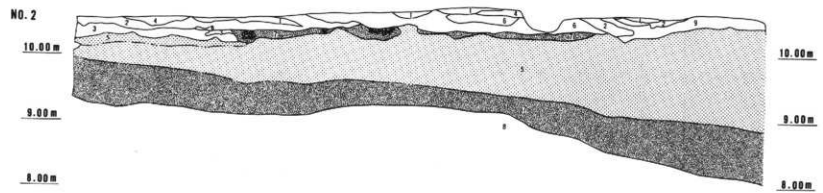


第4図　標準土層断面図

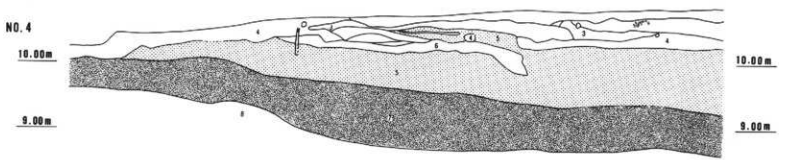
第3層　黄褐色土　埋めたてに伴う盛り土(客土)
第4層　暗茶褐色土　埋めたてに伴う盛り土(客土)　客土の中では一番時期が古い。
第5層　黒色粘質土　粘性・締り共に強く、旧水田の耕作土。暗渠排水が通っている。
第6層　黒色砂層　比較的細粒の砂層
第7層　灰黒色混土砂層　粘性・締り共に弱く、粒径2～10㎜大の小礫を含む。鉄分の付着あり。
第8層　茶褐色混土砂層　粘性・締り共に弱く、粒径10～15㎜大の小礫と土による混成層。鉄分の付着が所々見られる。
第9層　黒色砂層　粘性・締り共に大変弱く、粒径20～40㎜大の礫を含む。鉄分の付着あり。
第10層　黒色細砂層　大変密度の細かい砂層である。
第11層　混土砂礫層　粘性・締り共に弱く、粒径5～10㎜大の小礫を含む。鉄分の付着あり。
第12層　黒色砂礫層　2㎜大の砂、粒径20㎜前後の礫により構成される。湧き水をみる。
第13層　黒色硬質砂層　非常に硬く締まった砂層のかたまり。

さて以上の土層堆積は、層中に含まれる遺物によって次のようにまとめることができる。

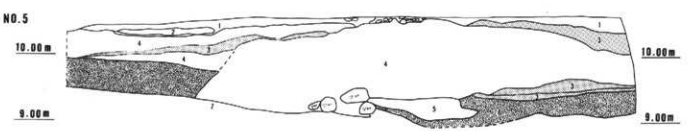
第1層から第4層までは表土（盛り土）層で、2m以上の客土によって覆われている。元の地権者の話しでは、低湿地で浸水がよくあるため昭和35年頃から埋めたてを開始した。また、それ以降も上流の開発に伴って鉄砲水がたびたび起きたため、それを防止するのが目的でさらに盛り土していったとのこ



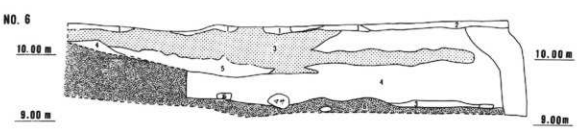
No 2
① 粘質土層　：灰黄褐色、1層の残土、所々鉄分の付着が見られる、粘性・しまりは弱い
② 灰黒色混土砂層：しまりは弱くボソボソしている、φ2～3mmの小石を含む
③ 黒色粘質土層　：粘性・しまりが強い、暗渠東側では砂を少量含む
④ 茶褐色混土砂層：SD1の埋土、少量の礫を含み粘性・しまり共なし
⑤ 黒色砂層　：やや赤味を帯びた比較的粒子の大きい砂層である、しまりがなく崩れやすい
⑥ 混土砂礫層　：φ10～50mmの比較的不揃いの礫を含んでいる、鉄分の付着が見られ粘性・しまりなし、中州の一番高い所と考えられる、台付甕の底を含む
⑦ 砂礫層　：ごく少量の砂しか含まず、φ20～30mmの礫で密度が高い
⑧ マサ土　：硬質砂層のかたまり



No 4
① 粘質土層　：灰黄褐色(茶褐色が強い)　耕作土、所々鉄分の付着が見られる、中央部より西側では、粘性・しまり共あり、東側では砂を含む
② 茶褐色混土砂層：東側でφ3～30mmの小石を少量含む
③ 灰黒色混土砂層：しまりはなく、ボソボソしている
④ 黒色粘質土層　：丸竹杭が打たれている、耕作土
⑤ 黒色砂層　：比較的粒子の大きい砂層、粘性・しまりなし、φ2～3 mmの小礫も少量含む
⑥ 黒色細砂層　：粒子の細かい砂層、粘性・しまり共あり
⑦ 砂礫層　：φ5～20mmの礫で構成され、所々黒砂を含む、ビッシリとつまってはいるが、非常に崩れやすくもろい
⑧ マサ土　：硬質砂層のかたまり、遺物なし



No 5
① 粘質土層　：粘性・しまりが強く耕作土の一部と考えられる、ほとんど黒色であるが、中央部では少し黄褐色も見られる
② 黒色砂層　：やや茶褐色を帯びた比較的粒子の大きい砂層、しまりがなく崩れやすい
③ 黒色細砂層　：粒子の細かい黒色砂層、木製品の遺物包含層
④ 混土砂礫層　：φ2～60mmの比較的不揃いの礫を含んでいる、鉄分の付着が見られ粘性・しまりなし、中洲の一番高い所と考えられる、中央部で窄く、東側・西側で大きく落ち込んでいる、木製品の遺物包含層
⑤ 黒色粘質土層　：シルト状の粘質土、粘性・しまり共あり
⑥ 砂礫層　：φ2～7 mmの小礫を含んだ砂礫層
⑦ サマ土　：硬質砂層



No 6
① 粘質土層　：耕作土、粘性・しまり共にあり、黒色
② 茶褐色砂層　：φ2～10mmの小礫を多く含み、比較的粒子の大きい砂層、鉄分を含んでおり、一部はオレンジ色に染まっている
③ 黒色砂層　：粒子の細かい黒色砂層だが、φ5 mm前後の小礫も含む、木製品の遺物包含層
④ 混土砂礫層　：鉄分の付着が見られ、粘性・しまり共になし、中洲の一番高い所と考えられる主に中央から東側に向かって大きな面積を占めている、木製品の遺物包含層
⑤ 黒色粘性土層　：シルト状の粘質土、一部細砂を含む、粘性・しまり共にあり
⑥ 砂礫層　：φ2～7 mmの小礫を多く含んだ砂礫層、投げマサも包含されている
⑦ マサ土　：硬質砂層

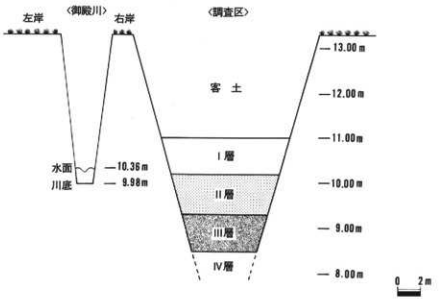
第5図　土層断面図

とであった。第５層は、水田の耕作土で昭和25年頃迄稲作を行っていた。（Ⅰ層と呼称、以下同）出土遺物は、主に第６層～第12層より検出されたが、第５層下部からも少量検出されている。

第６層～第10層は砂層（Ⅱ層）にあたり、主に中世～近世にかけての遺物包含層である。弥生時代中期から古墳時代・奈良・平安・中世にかけての主たる遺物包含層は、第11・12層の砂礫層（Ⅲ層）である。この砂礫層は、玄武岩の小礫を主体とすることから三島溶岩流を開析した御殿川の黄瀬川扇状地堆積物と思われる。同層中に含まれる土器の中には著しい磨滅が認められるものがある反面、磨耗も少なく明らかに二次的な堆積物としては考えられない多量の完形の壺形土器も検出された。このことから判断して、本遺跡の上流域が極めて近い周辺地域に古狩野湾が陸地化した後、弥生集落が成立していたと考えられる。第６層から第12層にかけては、西側より東側にいくに従って砂層と砂礫層の互層が顕著であった。これは調査区の一部が旧御殿川の流路にあたっていたことをものがたっている。また、シルト質状のブロックも含まれていた。

第13層は硬質砂層（Ⅳ層）で厚く覆われ、遺物は全く検出されなかった。固結度の高い「マサ」で、１m以上の厚さを持つ基盤層で黄瀬川扇状地堆積物と考えられる。

第６図は、鶴喰前田遺跡の調査区域内の堆積土層と現御殿川の関係を示した標準横断面図である。上流より下流をみた実測図であるが、御殿川の川底がほぼ調査区のⅡ層（砂層）上面に相当している。



第６図　標準横断面模式図

第Ⅳ章　遺構と遺物

第1節　遺　　構

今回の調査により検出された遺構は、近世以降の暗渠排水の溝（SD）3基・護岸杭列（7杭列）、弥生時代中期～近世にかけての護岸杭列（31杭列）・旧河道である。

先にも述べたように調査区の一部はかつて旧御殿川の流路であった。しかし、昭和53年の鶴喰橋架け替え工事やそれに伴う護岸工事、さらに流路が左に大きくカーブしているため浸食作用を受けやすいこと等重なって、徐々に東側に流路が移っていった。鶴喰橋のできる前の調査区は、昭和25年頃迄、水田として利用していた。しかし、低湿地で水がつかりやすく、また洪水のたびに鉄砲水による被害を受けていたため、昭和35年頃から埋めたてを行った。その後、水田は休耕田となり、調査区隣りの西側一帯は畑地としてハウス栽培（トマト・ナス・コマツナ）に機わった。

検出された暗渠排水の溝（SD）3本（第3図）は、水田耕作に関係すると思われる。元の地権者の話では、昭和10年頃、SD1を造ったのを覚えているとのことであった。しかし、SD2、SD3の時期については記憶にないとのことであったが、SD1がSD2、SD3によって切られていることからSD1より新しいと思われる。護岸杭列については、杭列の方向・杭の材質・打たれている標高等を考慮して3期に分類した。

以下各遺構の概要を説明する。

1．暗渠排水

ＳＤ１（第7図、図版2）

調査範囲北西隅のＢ－４グリッド中央部付近から調査範囲を対角線に区切るように南東方向に延びており、途中Ｂ－４グリッド下方でSD2・SD3とほぼ直交し、Ｃ－７グリッドに達している。その先は、右岸の土手法面にあたるためそれ以上の調査は不可能であったが、御殿川に水が注ぐよう構築されていると思われる。

今回の調査においては中心的な位置にある暗渠排水で、Ｂ－４グリッドでSD2・SD3によって切られていることから、3基の中では一番最初に構築されたと考えられる。

形態はほぼ直線上を呈し、検出部分の長さは約32.2m、幅は約30cm、深さは約40cmである。掘り込み部分は、Ⅰ層（黒色粘質土）下面よりⅡ層（砂層）、さらに南東方向にいくに従い鉄分を多く含む混土砂礫層に向かって掘り込まれ、周囲を篠竹・アシ・ヨシ・小枝等で覆った真竹が敷き込まれていた。真竹は4本が一組で束にして置かれ、竹と竹の間を水が流れる仕組みになっていた。真竹の長さは、一番長いもので約9.9m（最大径6.5cm、最小径2.5cm）、一番短いもので1.3m（最大径5.0cm、最小径4.0cm）、平均では約5.0mで、保存状態も大変良かった。

なお、本遺構内からは陶磁器片が若干検出されたのみであった。

ＳＤ２（第7図、図版2）

Ｂ－４グリッドのSD1より北西方向にSD1とほぼ平行しながら延び、Ａ－２グリッドに達している。調査工程の都合上検出部分の長さは約8mであったが、Ａ－２グリッド土層壁面で真竹を含む遺構が確認されたため、全体では約30m以上あると思われる。幅は約30cmであるが、SD1との合流部分は約40cmと広がりを見せる。掘り込み部分は、Ⅰ層下面よりⅡ層の混土砂礫に向かって掘り込まれている。

形態はほぼ直線上を呈するが、SD1との合流部分は逆「くJの字に延びている。真竹は3本が一組で束にして置かれていたが、その周囲は篠竹や小枝等で大変密に覆われていた。真竹の長さは、平均4.13m

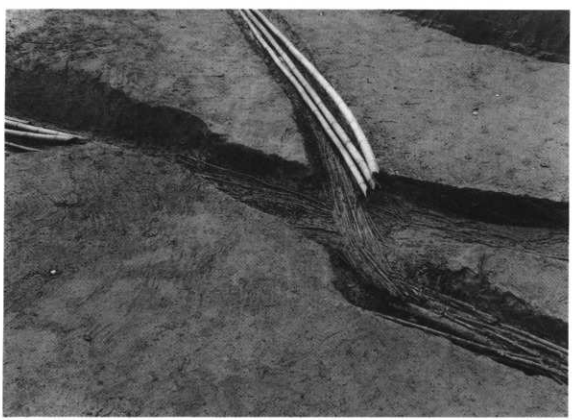
（最大径3.6cm、最小径2.3cm）で、SD1と比べると少し短めであった。北西方向（A－2グリッド）からながれてくる水をSD1へ流し込むように構築されている。

遺構内からは遺物は検出されなかった。

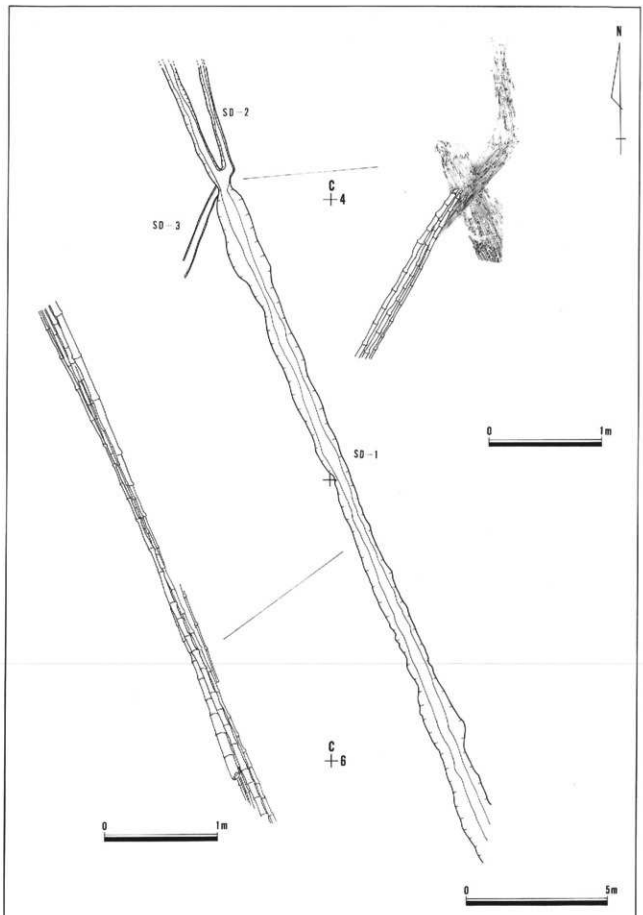
ＳＤ３（第７図、図版２）

Ｂ－４グリッドのSD1より南西方向に延び、Ａ－５グリッドを経てＡ－６グリッドに達するものと思われる。検出部分の長さは約4.4m、幅は約28cmであるが南西方向に延びるに従って少し広がりを見せる。形態は直線上を呈し、南西方向から流れてくる水をSD1へ流し込むように構築されている。真竹は３本一組で束にして置かれ、その周囲は篠竹等小竹で覆われていた。真竹の長さは平均3.8m（最大径3.6cm、最小径2.1cm）で、３基の中では一番短い。

掘り込み部分は、Ⅰ層中面よりⅡ層の混土砂層に向かって掘り込まれている。遺構内からは遺物は検出されなかった。



図版２　暗渠交差部（北東より）



第7図　暗渠図

2．護岸杭列と杭出し（第８～９図、図版３～４・６）

今回の調査で特筆すべきものの一つに多量の杭の検出があげられる。前述したように、調査区の一部がかつて御殿川の旧河川であったと聞いていただけに、護岸に伴う杭の検出は、ある程度は予想していた。案の定、Ⅰ層（黒色粘質土）を掘り始めたところで、すぐに杭の頭が現れた。何の目的で杭が打たれたのか全体像を知るためには、一本の杭だけをすぐに引き抜いて調べるわけにはいかない。そこで、検出された杭は、湿った雑巾やタオルで丁寧に巻いて保護し、調査の進捗に合わせて処理した。Ⅰ層からⅡ層（黒色砂層）へと調査が進むにつれて、次第に杭の数も増加していった。

調査は廃土処理の関係上、１区（調査区南側）と２区（調査区北側）とに分け、先に１区より実施したが、全体で432本の杭が検出された。これらの杭は、すべて同じ層から検出されたわけではない。例えば、Ⅰ層からⅡ層にかけて打たれた杭を取り上げた後、さらにその下のⅢ層を精査していたら、また新たな杭が検出されるというように、明らかに打たれた時代（時期）の違うものもみられた。

杭の集中分布地点は、ほぼ調査区中央部から南側へ、特に、Ｂ－４グリッド～Ｂ－６グリッド、Ｃ－４グリッド～Ｃ－６グリッドにかけて顕著であった。また、少し離れてはいたが、北側のＢ－２グリッド～Ａ－２グリッドにかけても集中域がみられた。杭の分布の特徴は、ただ単にアトランダムに打たれたのではなく、列状に几つ方向性を伴って打たれたものが多く、「護岸杭列」や「杭出し」と考えられる。特に、杭出しは、河川の水流を制御するための工法で、「枠」や「牛」と共に戦国時代末から江戸時代封建制度の確立とともに盛んになったようである。

次に、打たれた杭列の方向を基準に、杭の標高・材質等を考慮して、杭列を大きく三つの時代に分類した。

①近世以降の護岸杭列（第８図）

調査区の１区をほぼ南北に走る杭列で旧河道右岸の川除堤（堤防）のための杭か、あるいはそれを補強するための護岸杭列と考えられる。現在の御殿川が調査区の東側を流れているのに対して、杭列の配置からおそらく当時の御殿川は西側へ５～６ｍ寄っていたと思われる。

第１杭列（第８図のNo１杭列、以下同）は、Ｂ－７グリッド～Ｂ－６グリッドにかけて13本の広葉樹の丸太杭がほぼ等間隔（40～50cm）に打ち込まれていた。No１～No13杭の主軸方向は、Ｎ－20.5°－Ｅで、杭全体としては緩やかに弧を描きながら北東に向かっている。第２杭列（No２）は、Ｂ－６グリッド～Ｂ－５グリッドにかけて４本の丸太杭が打ち込まれていたが、No17とNo19杭間にはおそらくあと１本あったものと考えられる。最大長約１ｍ、最大幅約10cmと第１杭列と比べて大変大きい。主軸方向は、Ｎ－4.5°－Ｗで緩やかに北西方向に向かっている。第３杭列（No３）は、Ｂ－５グリッド内で打ち込まれていたが、ほぼ第２杭列の杭と方向・材質・寸法も似ており、第２杭列の延長と考えられる。No24とNo25杭間には、あと２～３本杭が打ち込まれていたものと思われる。主軸方向は、Ｎ－16°－Ｗである。第４杭列（No４）は、Ｃ－５グリッド～Ｃ－４グリッドにかけて４本の丸太杭が打ち込まれていたが、No26とNo27杭間、No29とNo30杭間にもそれぞれあと１本ずつ杭が打ち込まれていたものと思われる。主軸方向は、Ｎ－２°－Ｗである。第23杭列（No23）は、Ｃ－４グリッド～Ｃ－３グリッドにかけて６本の丸太杭が打ち込まれていたが、最大幅は今迄の杭の中では一番大きかった。調査の進行上、重機で剔いだため、杭の上端はすでに欠損しているが１ｍ以上あった。主軸方向は、Ｎ－12°－Ｗである。

これら第１～第４杭列・第23杭列の杭は、Ⅰ層から混土砂礫層・混土砂層（一部Ⅱ層）にかけて垂直に打ち込まれているものが多かった。

さらに、これら杭列の構築時期より少し古いと考えられる杭列に、第12杭列（①、②）と第５杭列（No５）がある。第12－①杭列はＢ－６グリッド、第12－②杭列はＢ－６グリッド～Ｂ－５グリッドにかけて打

ち込まれていた。ほとんどが広葉樹の丸太杭で、各杭の間隔は40cm前後と比較的密であった。当初、第1杭列と第12・①杭列は同一杭列の可能性も考えられたが、約40cm前後の標高差があるため区別した。第5杭列は、B－5グリッド～B－4グリッドにかけて40本の杭が大変密に打ち込まれていた。大部分が真竹の杭で一部広葉樹の細い丸太杭が竹杭を補助するような形で打ち込まれていた。主軸方向は、N－2－Eである。竹の杭列は、調査区全体を通して確かにこの杭列しか検出されなかったが、10～20cm間隔でⅡ層からⅡ層にかけて打ち込まれていた。最大長・最大幅はそれぞれ40cm・4cm前後の竹が多かったが、中には最大長で60cmを越すものも検出された。

昔から、水制・護岸で竹を使用した工法はよく使われたようで、『農民生活史事典』（柏書房）によると次のような一節がある。「出水時の被害を抑えるための水制や、水際が水流に浸食されるのを防ぐための護岸には、まず簡単なものとして捨石・立竹などがある。立竹には2種類あり、5～6寸廻りの唐竹を葉付のまま、1坪に34～35本、蔽のように立てる場合と、1間に1本ずつ杭を立て、葉唐竹を垣根のようにならべて、2すじほど押縁をあて、杭に結びつける方法である」。

杭列に伴う出土遺物は、陶磁器片と漆器椀・下駄等の木製品がある。陶磁器片は、18世紀後半～明治にかけてのものと思われる。

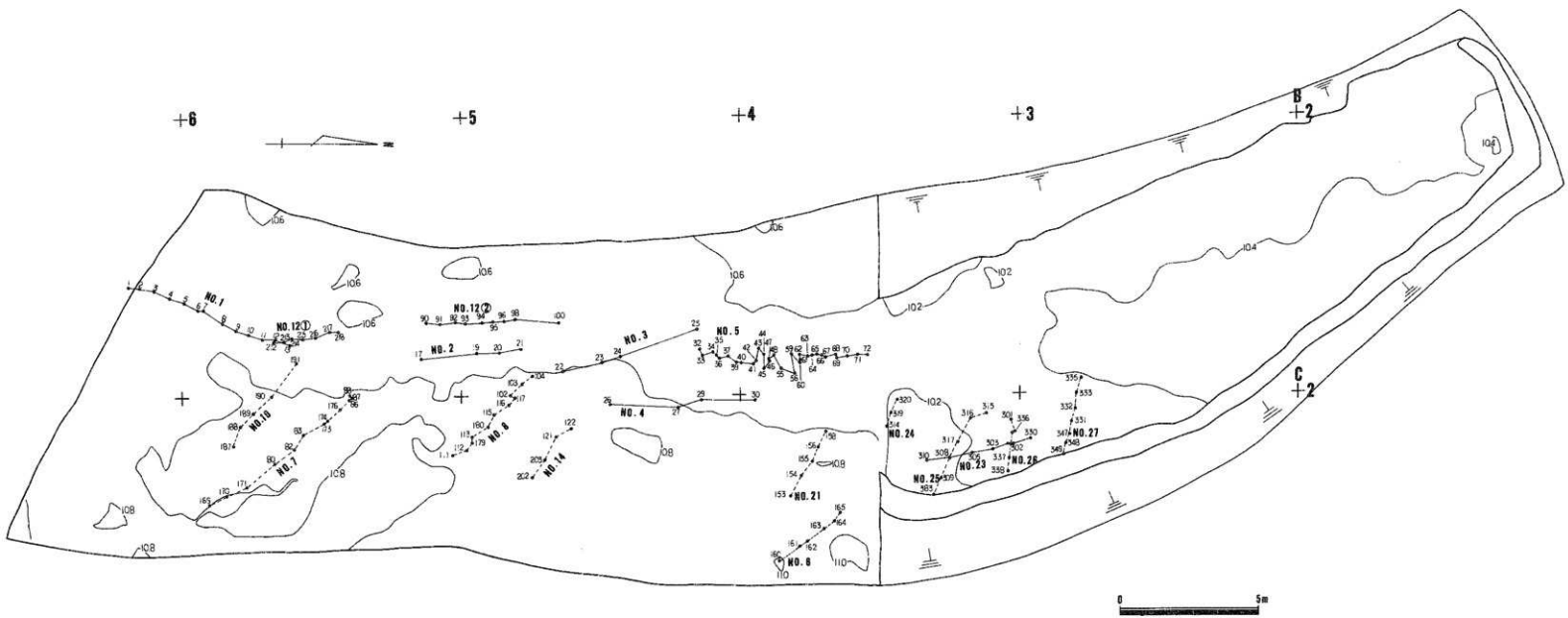
②中世～近世の杭出し（第8図）

検出されたいくつかの杭列の方向を検証していくと、河岸から河身に向けて比較的同一方向に近いかたちで杭が打たれていた。例えば、第7杭列（№7杭列、以下同）はE－6グリッド内に13本の杭が打たれており、その主軸方向はN－142°－Eである。同様に、第8杭列の主軸方向はN－136°－E、第14杭列の主軸方向はN－128°－E、第21杭列の主軸方向はN－118°－Eで、第7・8杭列の差は6°、第8・14杭列は8°である。これは御殿川の流路が左岸側に蛇行した後、その反動で流路が変わり右岸側に力のモーメントが加わることを考えると、ほぼ杭列の方向が水の流れに対して一番抵抗力が強くなると考えられる。『土木工要録・付録』（恒和出版）によると、土出しの突出しの方向は、「河身と直角或いは稍下向となし、急流河川に於いては著しく下流に傾くと共に高水時に於ても越水せしめざるを常とす。『堤防秘書』」との記述がある。また、籠出し（蛇籠）においても、「蛇籠を河身と直角の方向に積築し、数個所に帯籠を設ける」とあるように河身に対して直角の方向に構築されてきたようである。この「杭出し」は、「籠出し（蛇籠）」と並んで極めて簡単な工法で、又、その効果が著大であるために上代以来より広く各河川に施工されたようである。また、C－6グリッドでは杭列に伴うと思われる柵（シガラミ、通称シガラ）も検出された。C－4～C－3グリッドにかけて第6・24・25・26・27杭列と密に杭出しが設けられているが、これは水流の力が強かった為、より密に構築したものと考えられる。

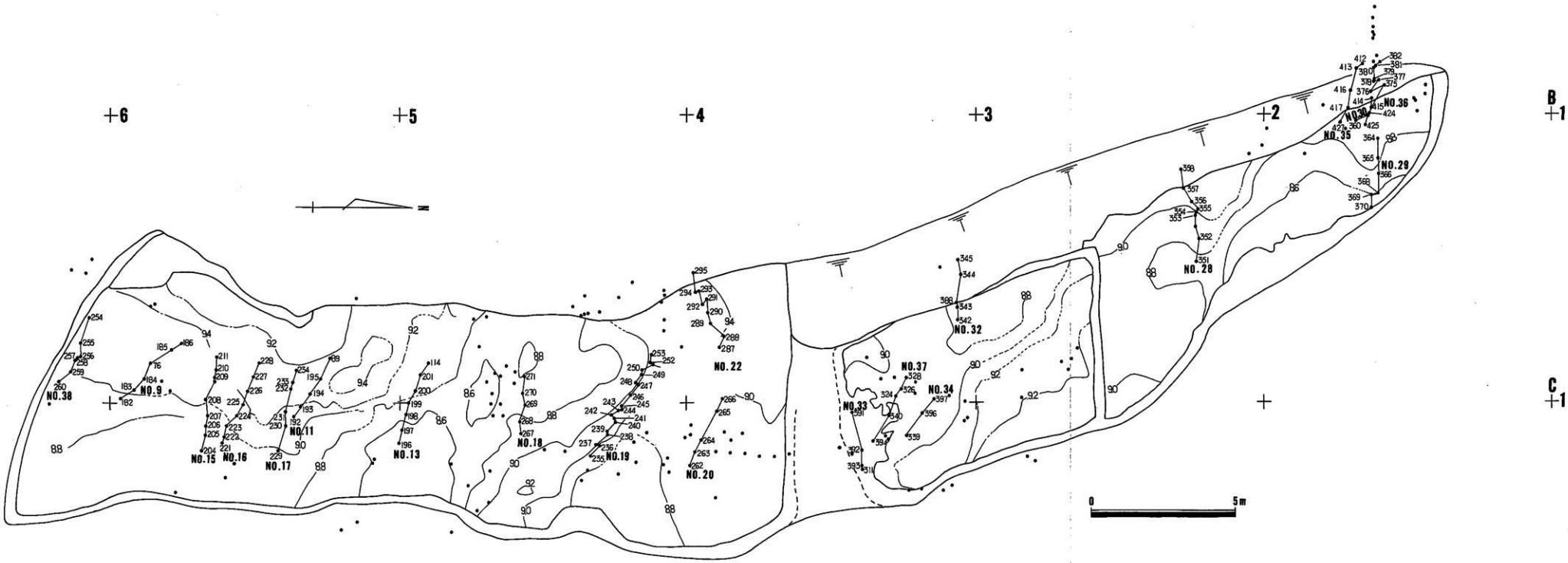
これらの杭列は、Ⅱ層～Ⅲ層、特にⅡ層上砂礫層にかけて打ち込まれているものが多かった。また、杭列周辺より出土した主な遺物は、漆器椀・下駄・曲物・鍬等の木製品や陶磁器・土師器・須恵器片等であった。これらの遺物は、当研究所が実施した下流の調査においてもほぼ同じものが検出されている。漆器椀は中世以降のものが、陶磁器類は、16世紀末から19世紀前半迄のものが多い。中でもB－5グリッドでは、16世紀末の瀬戸・美濃産の擂り鉢がある。しかし、杭の性格上（最大長が1m以上あるものもあり、杭自体が地盤変動等によって上下移動する）、年代を決定することは大変難しい。

③中世以前の杭出し（第9図）

調査区全体で検出された38杭列中、21杭列が中世以前の杭列と考えられる。いずれの杭列も水流を制御するための「杭出し」と考えられ、Ⅱ層～Ⅲ層にかけて打ち込まれているものが多かった。しかし、中には、第15杭列の№206・207・208杭、第17杭列の№229杭のように、Ⅳ層（硬質砂層）である基盤層



第８図　近世の護岸杭列と中世～近世の杭出し



第9図　中世以前の杭出し

に迄深く打ち込まれているものもみられた。これらの杭の先端は、鋭く片面ないし両面加工されていた。打たれている杭の標高（上端部）は、杭列によってもかなりの高低差があるが9.20～9.70mにかけて打ち込まれている杭が多くみられた。

杭列の方向は、各杭列の主軸方向を計測したところ同一方向のものがいくつかみられた。第16・20・38杭列は、N－115°－E、第11・19杭列はN－121°－Eとそれぞれ同値であった。また、第28杭（N－90°－E）、第32杭列（N－91°－E）、第18杭列（N－94°－E）の3杭列のようにほぼ同一方向と断定してよいものもみられた。

次に、杭列と杭列との間隔は、B（C）－6グリッド～B（C）－4グリッドにかけては、約3.5～4.0mの等間隔で打ち込まれていた。しかし、B－3グリッド～B（A）－2グリッドにかけては、第32杭列と第28杭列間が約8m、第28杭列と第29杭列間が約6.5mと広くなっていた。杭列間の数値の違いは、河川の水流の方向や強弱によるものと思われる。

今回の調査で杭列に伴う柵の検出は少なかったが、第30杭列（B－2グリッド～A－2グリッド）では、良好な状態で検出できた。1枚の柵（縦約0.3m、横約1.3m、幅約3cm）を挟んでNo.376・375杭とNo.379・381杭が前後から支え込んでいた。又、隣接する第35・36杭列では、針葉樹の角杭がII層～III層にかけて垂直に打ち込まれていた。

出土遺物は、前述したように必ずしも杭列を構築した時期と一致しないと思われるが、弥生時代中期から古墳時代にかけての土器類・石器・獣歯牙骨等、奈良時代～平安時代の土師器・須恵器等多量に検出された。

以上、護岸杭列と杭出しについて大きく三つの時代に分類し考察した。「出し類」の中の「杭出し」を文献で調べていくうち、まだその他にもいろいろな種類の「出し」があること、また、さらに大がかりなものとして「枠」・「牛」等の治水工法があることが理解できた。ここでは、その一端を紹介する。

（参考）　『近世科学思想　上　日本思想体系』（岩波書店）

「出し類」

「出し」とは、河岸から流水に向かって突き出した構造物をいうのであって、河岸に流心の寄るのを防いで、流水の衝撃による危険を防止するとともに、水を制ねて反転せしめるとか、流路を整備するために設けられるものである。

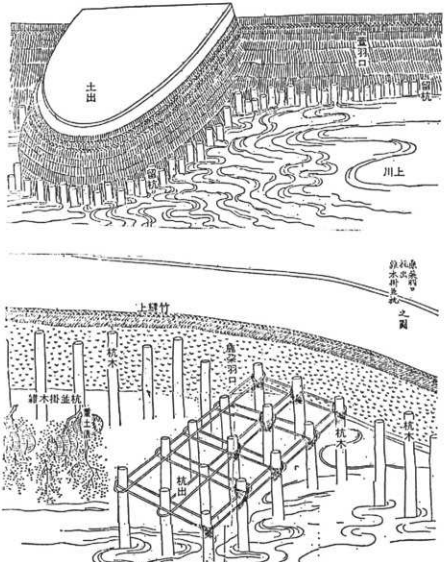
出し類を使用材料によって区分すると「土出し」・「石出し」・「籠出し」・「杭出し」・「枠出し」などに分類せられるが、これらは同じ目的に対し河状に応じて考察せられてきたものである。

土出しとは土砂でつくられたもので、普通主体のみを土砂で築立て、その先端又は全面を萱・石又は籠などで被覆するのであって、土出しの法面を萱羽口といって萱を束ねたものを法面に直角に並べてその崩れるのを防ぐものを萱出しともいい、石を張って防ぐものを石出しともいっている石出しには全部粗石で築立てたものもある。籠出しは蛇籠でつくったもので、普通蛇籠を河身に直角に積み重ね、数個所に帯籠を重ねてこれを圧えている。杭出しとは河身に向けて数列に杭を打ったものであり、枠類を水制として用いたものが枠出しである。

杭出しの起源は古く、既に『古事記』に「堰簗」として記述されている。淀川・木津川などで古くから用いられており、その後太田川・千曲川などで用いられたといわれている。杭出しには唯杭を打ったもの、「屏風出し」といって杭に柵を並き付けたもの、「鼓出し」と称して杭の間に葉付竹を立てたものとか、「流し出し」といって杭木を打込み、これに竹又は松・柳の枝を結び付けたものなどがある。又「梁掛杭出し」といって杭頭に縦横に梁木を取り付けたものがあるし、この杭木の根元に木の枝を投げ込み、土俵で圧えているようなものもあった。

要するにこれら各種の杭出しは、杭の打込み得る河川でどうしたら最も河岸に砂州が寄り付き易いかということから工夫されたもので、流勢の弱いところほど簡単な工夫をとっている。杭の打ち込みの出来ないところ、これは大体砂礫河川になるのであるが、こういうところで枠出しが考えられたのであって、これに代って牛類・枠類が用いられたのであった。

これらの出し類のなかで杭出しを除いておおむね水制本体内を水を通さずに、直接水を刎ねて流向を反転せしめようとするのであるから、これを確保するためにはいろいろな考慮が必要なのであって、享保年間に定められた幕府の仕様書の写しであるといわれる『堤堰秘書』によると、水制は河身と直角或いはやや下向きとし、急流河川であればあるほど下流に向ける必要があり、高水時にも決して溢流させてはならないということが述べられている。



第10図　出し（萱羽と粗朶羽）

川底に大石を入れて水勢を弱めることや、杭と石と組み合わせる方法は古くから使われた。

第11図　川除杭　出典「図譜　江戸時代の技術　上・下」(恒和出版)

治水工事と「枠」・「牛」　出典『図譜　江戸時代の技術　上・下』(恒和出版)

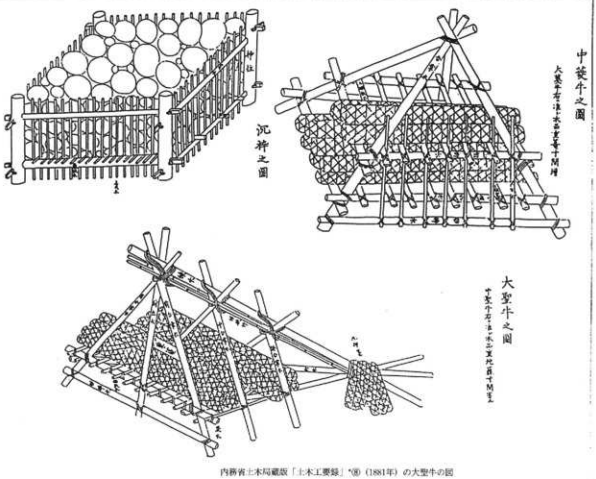
灌漑のための用水工事、洪水防止や交通運輸のための河川改修・開墾工事などは幕府や諸大名の重要な関心事であった。河川工事は狭い地域の問題ではないので、これらの工事が行われるのは、大領主の出てきた戦国時代末からで、江戸時代封建制度の確立とともに盛んになった。

甲斐武田信玄の釜無川の竜王堤（霞堤）と肥後の加藤清正の久津輪堤は有名で、これと同じ築き方がヨーロッパのライン川・ローヌ川に生まれたのは19世紀になってからだという。幕府の命で行われた木曽川の薩摩藩による宝暦治水工事のように多くの犠牲者を生んだ例も少なくない。

このような河川工事あるいは洪水などには水勢をそぐことが必要である。杭を打ち込んだり、円筒状に編んだ竹籠に石を入れた「蛇籠」が古くから使われている。

しかし、蛇籠は水を通さず水勢で底がえぐりとられる欠点があったので、「枠」つまり丸太を組んで中に石を入れたものを沈める方法が考えられた。枠は直方体のものや切り口が直角三角形・正三角形の三角柱のものなどがある。

つづいて「牛」が考えられる。これははじめ6本の丸太で正四面体をつくり、丸太を藤や縄で結んだところが牛の角のようにみえるのでそう呼ばれた。やがて底面が四角のもの（菱牛）・三角柱の形（棚牛）など、各種の牛があらわれた。牛の強大なものが「聖牛」で丸太の数も多くなり、蛇籠や石俵をのせて沈めるようになっている。この牛の類は、甲州で考案され、とくに聖牛は武田信玄がつくったと伝えられている。河川工法には、信玄に発し堅固な堤防を築きこれを牛などでまもる甲州流、関東郡代伊奈忠次を中心とした大洪水のときは越水させてしまう関東流、関東流をさらに発展させた紀州流などあり、ほぼわが国の河川工法は大成したといえよう。



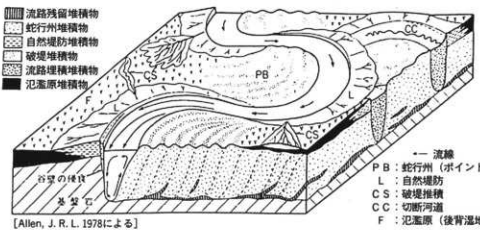
内務省土木局蔵版「土木工要録」*⑧（1881年）の大聖牛の図

第12図　枠類・牛類

伝統的な治水工法である「大聖牛」は、現在、大井川（中川根町高柳）でも構築されている。

第13図　大井川の大聖牛

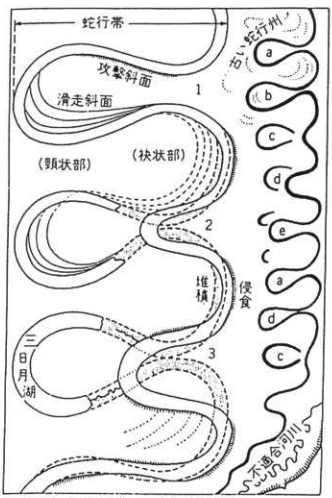
図版3　堤防を守る「大聖牛」



[Allen, J. R. L. 1978による]

第14図　蛇行河川の堆積モデル

『考古学ジャーナル』（ニュー・サイエンス社）



1：切断前，2：切断直後，3：新しい蛇行の発達

第15図　蛇行切断（Lobeck, A. K.: *Geomorphology*, 1939）

『地形学辞典』（二宮書店）

第2節　出土遺物

本遺跡からは弥生時代中期から近世にかけての多量の遺物が出土している。調査区の一部が旧御殿川の流路であったため、これらの遺物の多くはいずれも著しい磨滅が認められた。また、遺物の出土状況から、弥生時代中期から古墳時代にかけての集落が数度の水害に遭った際、土砂とともに堆積したものと推察される。しかし、一部、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての完形の壺形土器をはじめとする一括遺物の検出は、明らかに二次的な堆積物としては考えられない。これらの遺物の中には、坏・高坏・坩・管玉・勾玉（土製）等が出土するなど川岸において祭祀を行った可能性もある。本遺跡に最も近い（西側80m）鶴喰遺跡では、弥生時代中期の集落跡の存在が確認されているだけに有機的なつながりが考えられる。（第II章第2節参照）

1．土　器

①弥生時代の土器

Ⅲ層（黒色砂礫層）下部よりⅣ層（マサ土）上面にかけて多量の土器が出土している。土器は、中期中葉から後期後葉のものがあり、総計で2279点出土した。このうち器形・文様の明確なもののみ掲示した。

弥生時代中期中葉の土器（第17図1～1－②・③、図版12）

総計50点程出土し、3点を図示した。1は最下層である第Ⅳ層にへばり付くような状態で出土した壺で、胴部中央より底部を欠損しているが球形の胴部と円筒状の細長い頸部を有するものである。縄文地の上に、ヘラによる大胆なタッチの沈線模様、胴上部にはボタン状の張り付け紋がある。また、出土地点の付近からは単斜条痕を施した土器片も検出されている。遠江東部では嶺田式、駿河から伊豆にかけては鴨ケ池式（古名称）のものと考えられ、関東地方の須和田式土器につながっていると思われる。1の②・③は別個体の細頸壺の頸部片・胴上部片で沈線により区画、区画内は棒状工具による刺突が充塡されている。

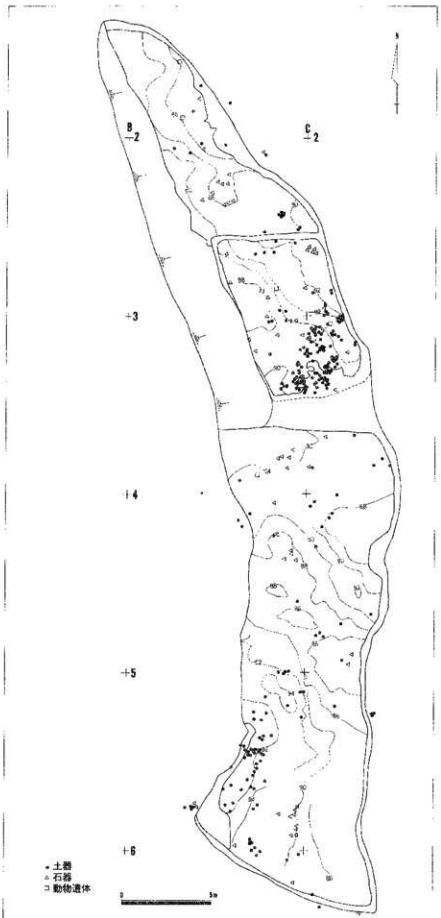
弥生時代後期中葉の土器（第17図2～6、図版13）

2は胴上半部から口縁にかけての壺で、頸部横ナデ、胴上半部は縄文を施してある。3～6はいずれも主に口縁部（一部底部も）を欠損している壺である。3は外面ハケ目の後、頸部に直線紋、板による羽状縄文が、胴上部には円形浮紋が貼付されている。4・6にも円形浮紋がみられる。5は輪積み痕、6はより糸による縄文の後、頸部に棒状隆起紋がみられる。

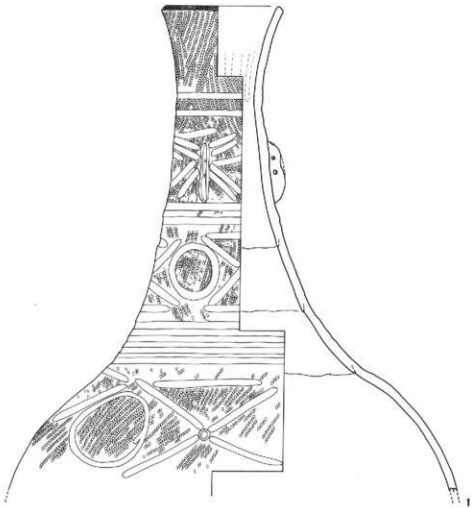
弥生時代後期後葉の土器（第17図7～25、図版13～16）

総計で約1,500点程出土し、本遺跡では古墳時代前期に次いで出土量が多い。しかし、小破片が多く、19点（壺16点、鉢2点、甕1点）を図示した。10～12・22は完形又は完形に近い壺で、いずれも磨耗が少なく口縁部もはっきりしており、二次的な堆積物とは考えられない。11は外面口縁部に2ケ組の棒状浮紋が4ケ所貼付されている。12・22は外面ハケ目の後、ミガキが施されている。22は底部がやや狭くなっており菊川系を模倣した土器と思われる。

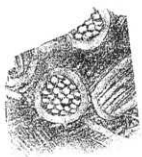
特筆すべきものの一つに20の赤色塗彩の壺がある。頸部から口縁部にかけての破片であるが、伊勢湾沿岸地方の土器を模倣（パレススタイル）しており、着色もされて華やかに飾られていることから、かって宮廷様式と呼ばれただけあって格調高い仕上がりになっている。口縁部を幅広くつくって凹線を引き、細長い粘土紐を縦に2本1組にして3ケ所付けている。口内部の羽状の列点文は施されていないが、出



第16図　土器・石器・動物遺体分布図



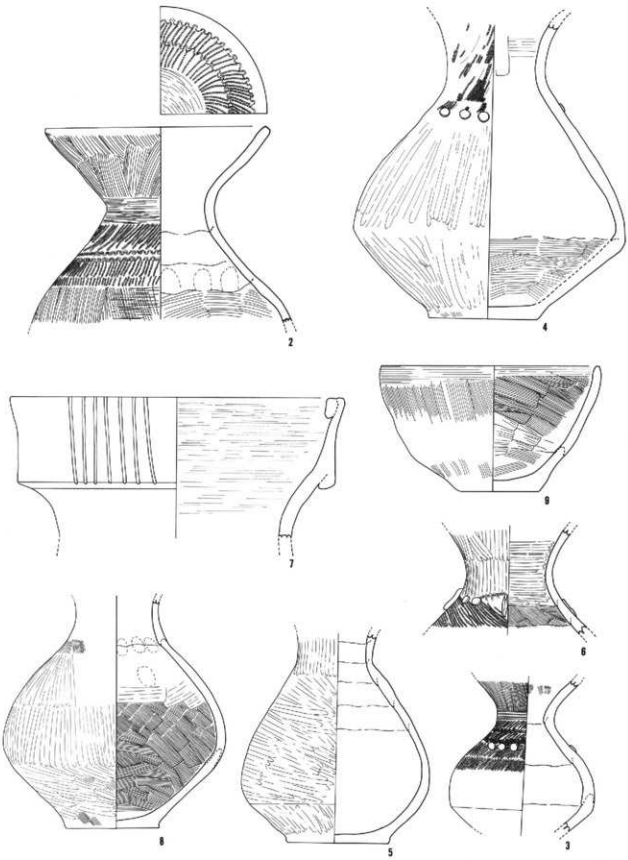
1－2



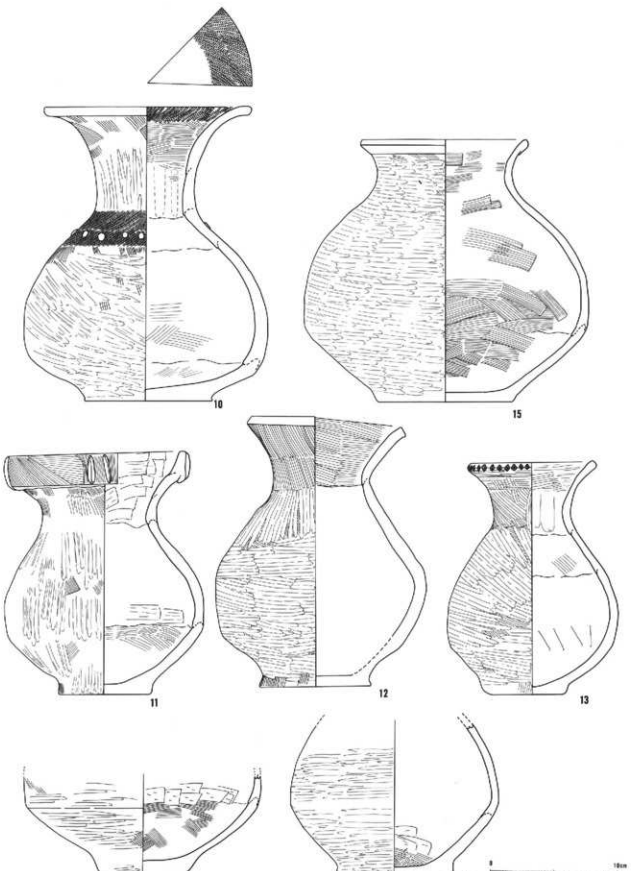
1－3

0　10cm

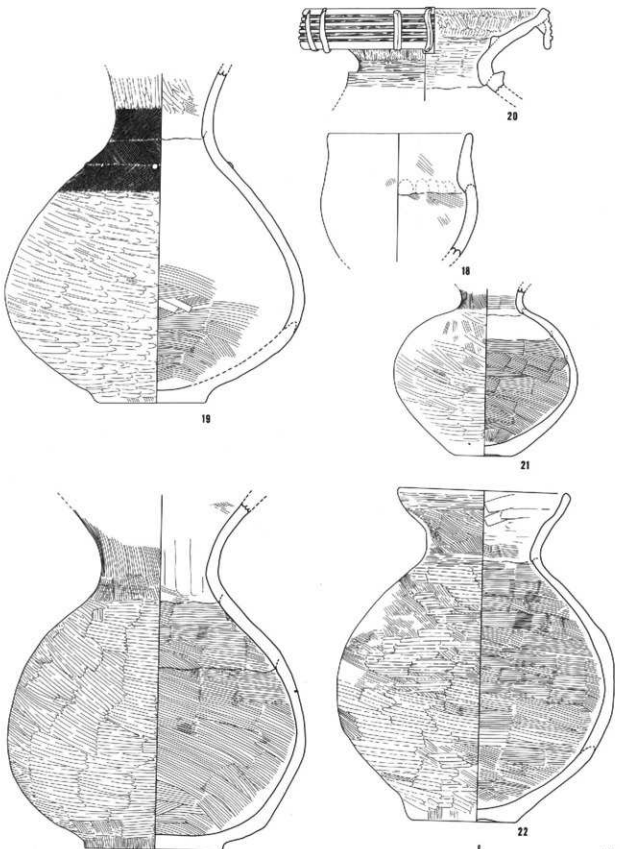
第17図　土器実測図１



第17図　土器実測図 2



第17図　土器実測図３



第17図　土器実測図4

土時は朱色が大変鮮やかで、他の土器片と明らかに一線を画していた。東海地方屈指の弥生時代の集落遺跡として著名な朝日遺跡（愛知県名古屋市）出土のパレス壺等とは多少形態・文様等異なるが、なんらかの影響を受けていたことは確かである。県内での出土は、沼津市の御幸町遺跡、浜松市西鴨江町の中平遺跡、湖西市岡崎の観音山遺跡等で、出土例は極めて少ない貴重なものである。7は口辺部に棒状工具による縦線が6ケ所、同じく24の甕にも胴工具による文様が施されている。8は内外面ハケ目の後、ヘラミガキ調整、内面には指頭圧痕が見られる。13は口唇部に刻み目が明瞭に残っている。14は壺の胴下半部から底部。15・16はハケ目の後ヘラミガキ調整され、16の底部には木葉痕が見られる。17は頸部・胴部共ハケ調整の後ミガキ、内面も丁寧なハケ調整である。9・18は鉢で、9は内外面ハケ調整の後、口辺部は横ナデ整形されている。19は口縁部のみ欠損しているが頸部に10個の円形浮紋が貼付されている。24・25は外面板ナデの後ミガキ調整されている。24は甕の胴上半部から口縁部で、ススが付着している。

②古墳時代の土器

主にII層（黒色砂層）下部よりIII層にかけて多量（約4,418点）の土器片が出土している。これらの遺物の大部分はいずれも著しい磨滅が認められ二次的な堆積物と考えられる。完形に近いものでも口縁部の破損・欠損しているものが見られた。また、頸部～口縁部にかけての土器片や底部のみのものも数多く検出され、上流から流磨を受けた可能性が非常に高い。また、小さな破片も多く、時期を明確に区別することは困難な為、弥生時代後期の遺物を含んでいる可能性もある。

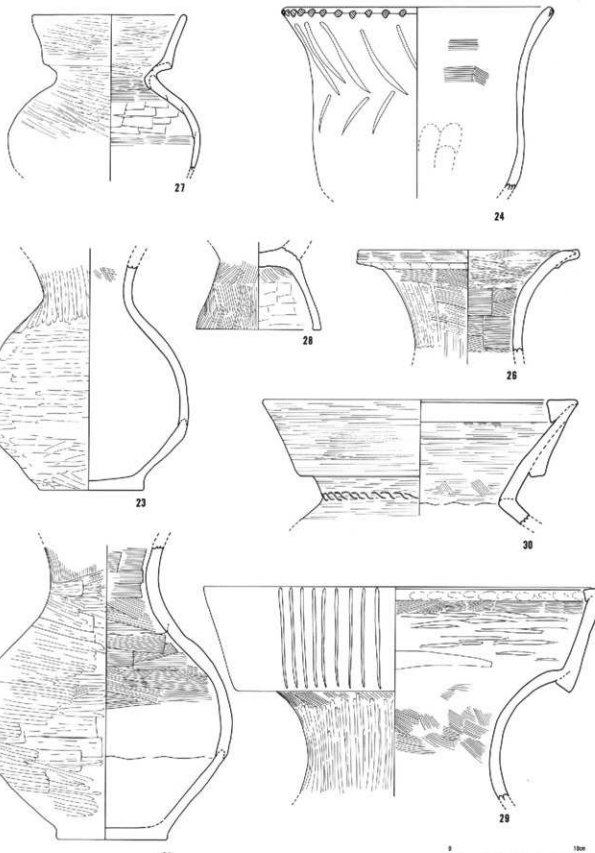
土器は、前期から後期のものがあり、中でも前期の出土量が一番多かった。

古墳時代前期の土器（第17図26～42、図版16～17）

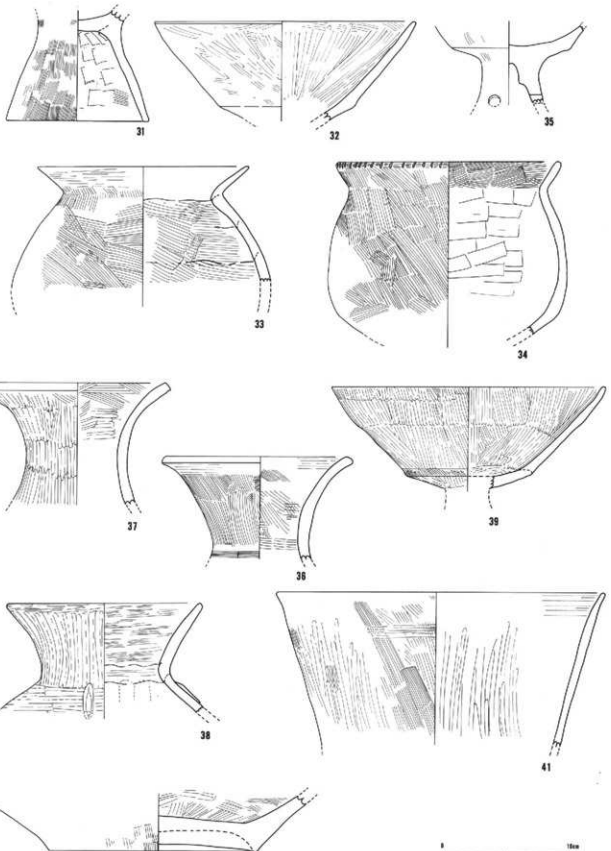
総計で約2,500点の土器片が出土し、最も出土量が多い。26・29・30は主に壺の口縁（辺）部で、26は内外面ハケ目の後ミガキで仕上げられている。29は幅広い折り返し口縁の壺で、口縁部に縦位に1ケ所9本の沈線を施文する。4ケ所あったものと思われる。30も折り返し口縁の壺で、強く外反する頸部から直立気味の口縁部を接合させている。頸部は横ナデの後、縄文を施してある。27は外面・口縁部内面を赤色顔料してある。頸部の形から山陰系の土器と思われる。28・31は台付甕の脚台部で、ハケ調整が認められる。31は大型品の脚台部である。42は口辺部（単口縁）を1/6欠損しているが、ほぼ完形の小型の台付甕である。32・39は高坏の坏部で、坏部下部に明瞭な稜を有し、口縁部は直線的に外傾する。いずれも内外面ハケ目の後ヘラミガキ調整されている。39は大型である。35は高坏であるが口縁・脚共端部を欠損するため明らかでない。脚部には3個の円孔が等間隔に開けられていたものと思われる。33・34は甕で、33の頸部は強く「く」の字に屈曲し、口縁部真っ直ぐに外傾している。調整はハケの後、丁寧な横ナデが見られる。34は口唇部に横ナデの後、刻み目が施されている。36～38はいずれも頸部～口縁部のみ残存する甕で、36は内外面ハケ目の後、口辺部は横ナデ調整されている。38の頸部には棒状浮文が1ケ所（推定2ケ所）貼付されている。40は甕底部で内面のミガキは丁寧である。41は壺の口縁部から胴上部片で内外面ハケ目の後、ヘラミガキ調整されている。

古墳時代中期の土器（第17図43～46、図版17）

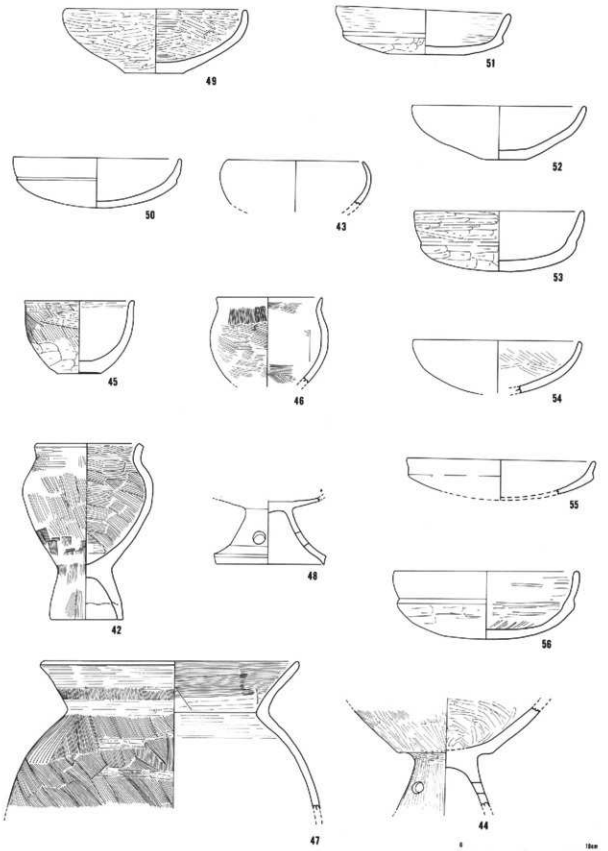
43は坏（土師器）で、底部を欠損しているが全体に半球状をなし、器肉が厚い。内外面赤彩が施されている。44は高坏で脚下半部と坏部を一部欠損している。坏部は下部に稜を持ち、口縁部がほぼ直線的に外傾する。胴部はハの字に開き3孔を穿っている。45・46は坩。45は鉢にもちかく、球形の胴で頸部の屈曲は弱く、短い口縁部が直立気味に立ち上がる。胴部はハケの後ミガキ調整され丁寧な仕上がりで



第17図　土器実測図5



第17図　土器実測図 6



第17図　土器実測図 7

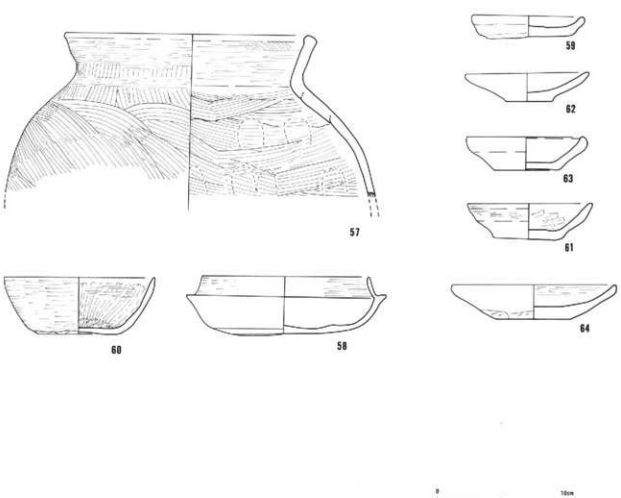
ある。46は45同様頸部の屈曲は弱く、短い口縁部がやや外反して立ち上がっている。

古墳時代後期の土器（第17図47～58、図版17～18）

47・57は甕で、57は「駿東型甕」と呼ばれるもので、胴部の形態が無花果型で頸部から口縁部にかけて「く」の字に外反している。また、口唇部を肥厚させ、ハケ調整を施してある。47は口唇部の肥厚がなく口縁部径もやや狭めであるが「駿東型甕」に近いものである。48は須恵器の器台でロクロ整形され丁寧な仕上がりである。脚部には大きめの3孔を穿つ。49～56・58は坏で、50・51・53・55・56は俗にいう須恵器模倣の坏である。51・53は体部に丸みがあり、口縁部下の稜も段状をなしている。口縁部は大きく開き、上半で内湾している。内外面黒彩である。56は51・53とほぼ似ているが、やや体部～底部にかけて深いつくりになっている。49・52・54は全体に半球状をなし、器肉が厚い。49・52の底部外面には木葉痕が観察される。49は完形で内外面ヘラミガキ調整されている。58は須恵器の坏身で丁寧なロクロ整形で仕上げられている。内傾する比較的高い立ち上がりをもち、口辺部は横ナデ調整されている。

③奈良時代以降の土器（第17図59～64、図版18）

59・61～64はかわらけで、底部は回転糸切りで切り離し、板状圧痕が見られるものもある。いずれも胎土に砂粒を多く含んでいる。61・63は器高が他と比べて少し高くなっている。63は口径9.5cmを測るもので、器壁は厚く、外面は横ナデ調整されている。60は平底から体部がやや直線的に立ち上がる坏である。



第17図　土器実測図8

以上、出土土器について弥生中期中葉より奈良時代以降迄大きく７つに区分したが、調査区全体を通して三ケ所より一括遺物が多量に出土している。以下これらの遺物の出土集中地点について簡単にまとめてみた。

集中地点１（第19図、図版４）

集中地点１は、Ｂ－６（一部Ｂ－７）グリッドを中心として11個体の土師器が出土した。遺物は第Ⅲ層下面より第Ⅳ層上面を中心として７ｍ×6.8ｍの範囲内に集中的な分布を示している。遺物は壺が10点・高坏が１点と圧倒的に壺の出土が多く、その内３点はほぼ完形品である。また、その他の壺も欠損・破損の割合が少ないことから二次的な堆積物とは考えられない。また、時期は壺の形態から弥生後期中葉～後期後葉と比較的よくまとまっている。前述したように、高坏（古墳前期）の出土等もあることから近くでなんらかの祭祀が行われていた可能性は十分考えられる。

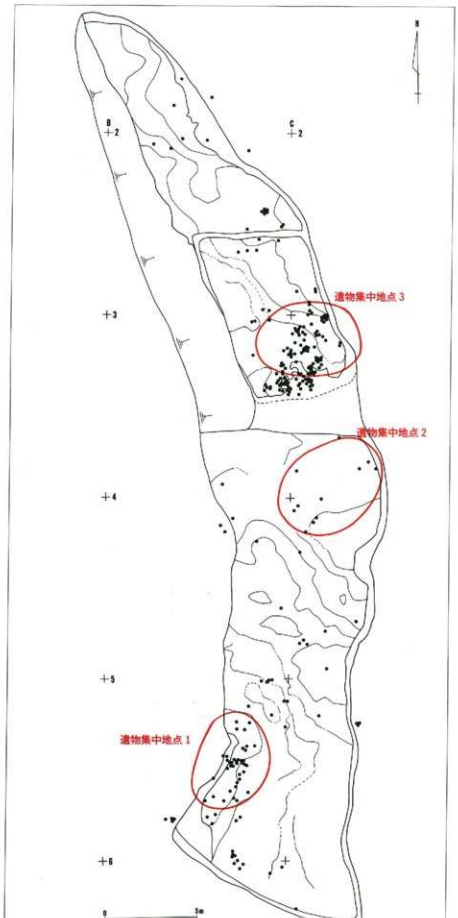
集中地点２（第20図）

集中地点２は、Ｃ－４～Ｃ－５グリッドを中心として９個体の土師器が出土した。遺物は斜面堆積に沿って、第Ⅲ層中面より第Ⅳ層上面を中心として６ｍ×５ｍの範囲に拡散的な分布を示している。遺物は壺５点・高坏１点・坏３点である。壺の中には弥生中期中葉の細頸壺、後期後葉の朱彩壺が含まれている。また、坏３点は古墳後期のものである。

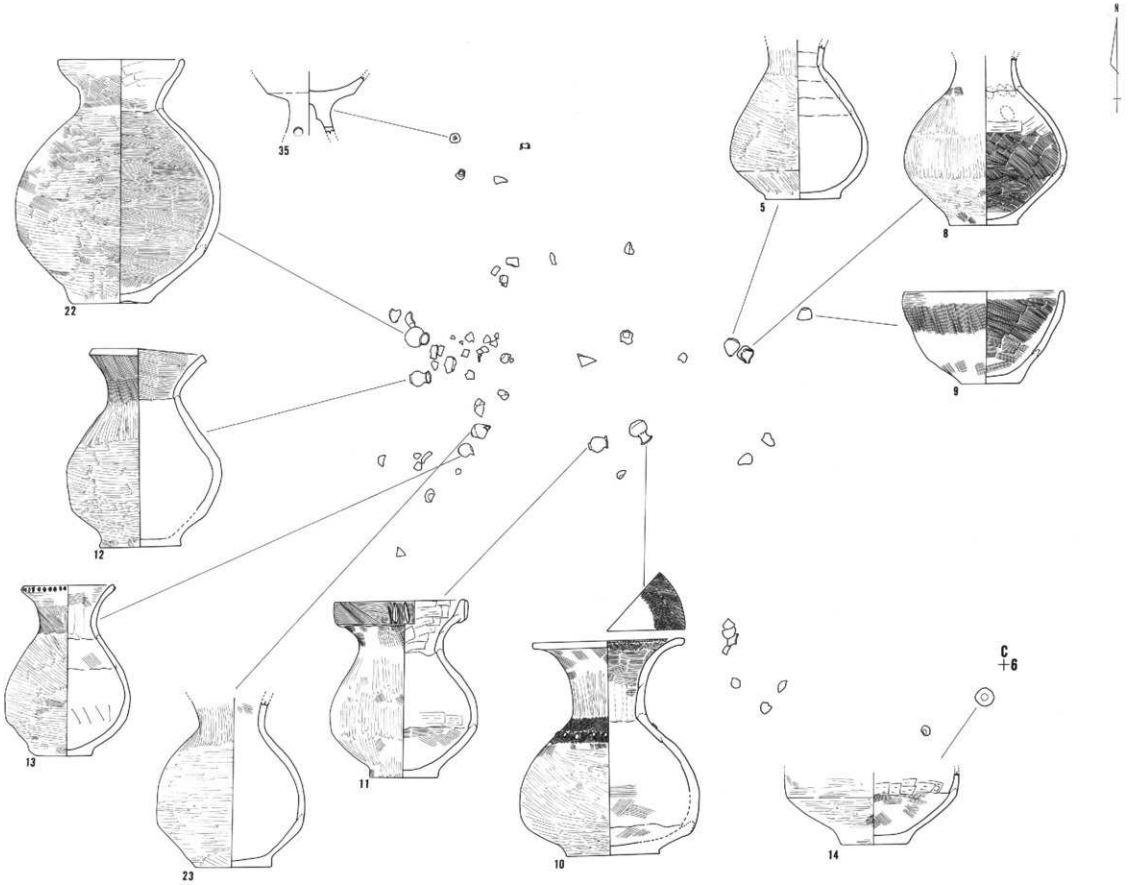
集中地点３（第21図）

集中地点３は、Ｂ－４～Ｃ－４グリッドを中心に12個体の土師器が出土した。遺物は第Ⅲ層を中心として５ｍ×4.5ｍの範囲内で集中的な分布を示している。遺物は坏４点・高坏２点・壺２点・（坩・鉢・甕・皿）各１点ずつと多種多様である。54・55の坏、43・50の坏はほぼ同一場所より出土している。

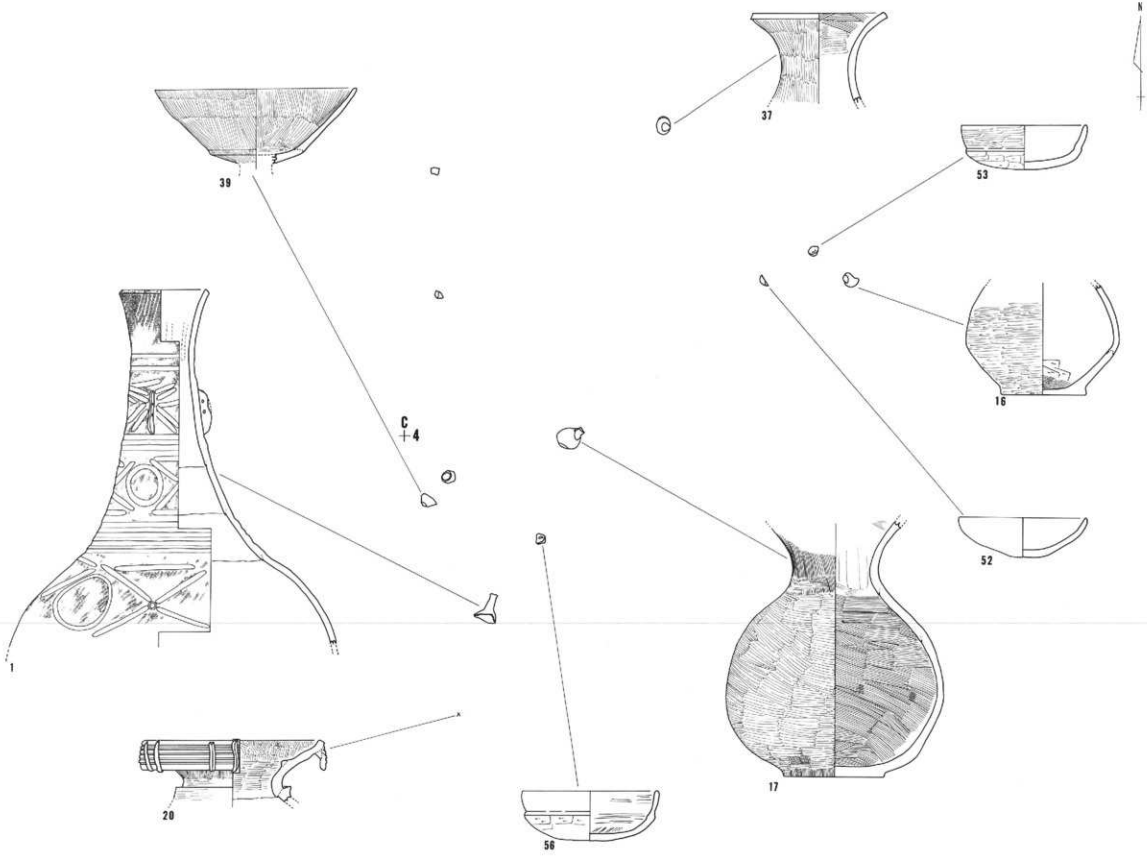
図版４　土器集中地点１



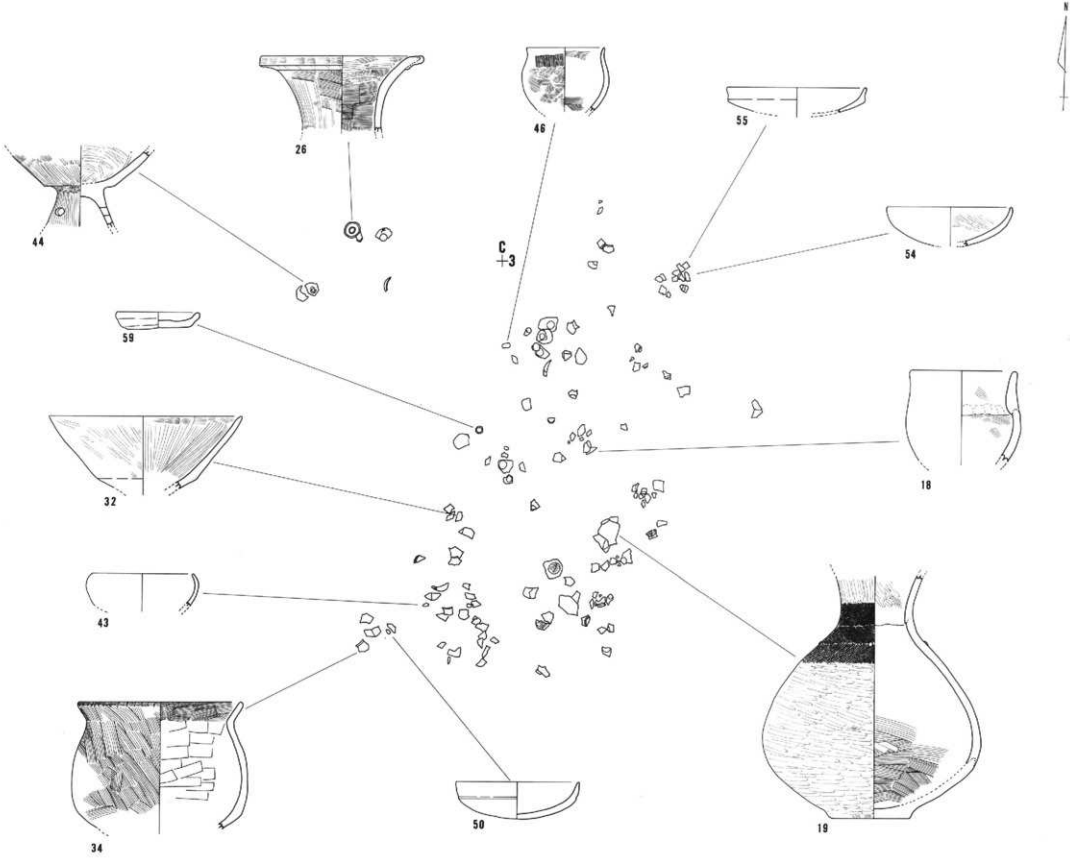
第18図　土器集中地点分布図



第19図　土器集中地点１分布図



第20図　土器集中地点２分布図



第21図　土器集中地点３分布図

第1表　土器一覧表

単位 mm　〔　〕残存値　（　）推定値

No.	遺物番号	器種	法量	手法	胎土・焼成・色調	残存
1	B-4 75	細頸壺	器高 〔380〕 口径 95	外面縄文の後、ヘラによる沈線の模様、頸部上部に縄掛け突起(2ヶ所孔あり)3ヶ所あり、胴上部にボタン状の張り付け紋あり、外面赤彩を施す。	1mm程度の石英・赤色の粒子、0.5mm程度の雲母・長石微量含む、焼成普通、褐色	口縁～胴上部残存
2	B-3 208	壺	器高 〔150〕 口径 175 頸部径 88	外面口辺部ハケ目、頸部横ナデ胴上半部縄文を施す。	0.5mm程度の長石丸く含有、焼成普通、黄褐色	上半部～口縁残存
3	B-5 11	壺	器高 〔115〕 頸部径 44.5 胴部最大 (113.5)	外面ハケ目の後頸部に直線紋、板による羽状縄文、胴上部に円形浮紋3こ組3ヶ所、内面頸部にハケ目	0.5mm 程度の石英、0.5～2mmの白色系粒子含む、焼成普通、暗褐色	口縁・底部欠損、3/5残
4	C 5 12	壺	器高 〔232〕 頸部径 75 胴部最大 212 底部径 86	頸部縄文施されているが磨滅の為判別不可、胴上部円形浮紋3こ組3ヶ所、木葉痕あり、	0.5～1mm程度の石英・長石丸く含有焼成普通、黄褐色	頸部上半～口縁部欠
5	21	壺	器高 〔163〕 頸部径 57 胴部最大 147 底部径 81	内外共に磨滅が激しく判別不可輪積み痕あり、	0.5mm以下の白色系粒子丸く密に含有、焼成良、硬質黄褐色	頸部～上縁部欠損
6	C-5	壺	器高 〔83〕 頸部径 70	外面横圧クシ目紋の後より糸による縄文、頸部に棒状突起紋が4ヶ所、挟み込むように浮紋1ヶ組1ヶ所、2ヶ組1ヶ所、3ヶ組1ヶ所施されている、頸部上部縦ミガキ、内面頸部下部ハケ目輪積み痕2ヶ所	白色系の粒子密焼成普通灰色	頸部残存
7	B-5 55	壺	器高 〔110〕 口径 (60)	外面口辺部棒状工具による縦線6ヶ所	1mm程度の長石・石英丸く含有、他1mm程度の灰系の粒子有、焼成普通外面にぶい橙色	口辺部1/4残存
8	B-6 22	壺	器高 〔177〕 頸部 (64) 胴部最大 173 底部径 73	外面ハケ目、内面ハケ目、指頭痕、板ナデあり	0.5mm程度の石英白色系粒子含有、焼成普通橙色	口縁欠頸部～胴下部1/2欠
9	B-6 23	鉢	器高 〔98〕 口径 (170) 底部径 63	外面ハケ目の後口辺部横ナデ、内面ハケ目口辺部横ナデ、底部木葉痕あり、	0.5mm程度の石英黒色系の粒子含有0.5～1mm程度のオレンジ系粒子含有	口縁～底部1/2残存
10	B-6 41	壺	器高 230 口径 162 頸部径 76 胴部最大 190 底部径 100	外面ハケ月の後ヘラミガキ、頸部に縄文、円形浮紋21個あり、内面口縁部分に縄文、ハケ目あり、頸部に指頭痕	0.5～1mm程度の石英・長石多く含む0.5mm程度の黒色系粒子含む、焼成普通、にぶい黄橙	口辺部2/3欠損
11	B 6 42	壺	器高 188 口径 139 頸部径 88.5 胴部最大 156 底部径 73	外面口縁部に2ヶ組の棒状浮紋4ヶ所、外面ハケ目の後ヘラミガキ	0.5～1mm程度の長石多含、0.5mm程度の石英含む、焼成普通、オリーブ黒	完形

No.	遺物番号	器種	法量	手法	胎土・焼成・色調	残存
12	B-6 89	壺	器高 210 口径 134 頸部径 75 胴部最大 161 底部径 85	外面ハケ目の後ヘラミガキ、内面頸部～口縁部ハケ目	0.5㎜程度の石英密、焼成良　硬質暗オリーブ	完形
13	B-6 105	壺	口径 (101) 頸部径 (60) 胴部最大 133 底部径 66	ハケ目の後ヘラミガキ、口縁部刻み目、上半部～頸部半転実測	最大1.5㎜の石英0.5㎜の白色系の粒子、黒色系の粒粒子密含有　焼成良好、黄褐色	頸部2/3欠損、胴上半部1/2欠
14	B-7 28	壺	器高 〔75〕 口径 欠 底部径 71	外面ハケ目の後ヘラミガキ 内面ハケ目	0.5～1㎜の石英、白色系粒子多含0.5～1㎜のオレンジ系粒子少量含む焼成普通、茶褐色	胴下半部～底部残存
15	B-7 排水溝	壺	器高 125 口径 (129) 頸部径 (105) 胴部最大 222 底部径 107	外面ハケ目の後ヘラミガキ、内面ハケ目	0.5～1㎜の石英、白色系粒子含む0.5㎜程度の黒色系粒子含む、焼成普通、にぶい橙	口縁部1/6残頸部～胴半部1/3欠
16	C-4 64	甕	器高 〔115〕 底部 91	外面ミガキ、底部木葉痕あり、	0.5㎜以下の白色系粒子丸く含有、焼成良好、青黒系	上半部欠損、2/3残
17	C-4 74	壺	頸部径 (93) 胴部最大 231 底部径 107	頸部ハケ目、ハケ目の後ミガキ内面も丁寧なハケ目	0.5～1㎜程度の長石、白色系の粒子丸く含有、焼成普通、明黄褐色	胴上半1/4頸部口辺1/2欠損
18	C-4 135	鉢	器高 〔 97〕 口径 (114)	外面磨滅、内面ハケ目	0.5～1.5㎜の黒色系粒子、白色系粒子含む、0.5㎜程度の石英含、焼成良好、灰オリーブ	口縁～胴部1/4残底部欠損
19	C-4 175	壺	器高 〔258〕 口径 欠損 頸部径 76 胴部最大 233	外面頸部に縄文、縄文の後ヘラミガキ、頸部に円形浮紋10個、胴部・底部に少しハケ目が見られる、ハケ目の後ヘラミガキ、底部に木葉痕、内面頸部ハケ目の後ヘラミガキ、	0.5～1㎜程度の石英、0.5㎜程度の黒色系粒子含む、焼成普通、にぶい橙	口辺部欠損
20	C-5	朱彩壺	器高 〔 62〕 口径 194 頸部径 104	5本の凹線紋口縁口唇部全面、棒状浮文（貼付文）2ヶ組8ヶ所施す、内外共に丁寧なミガキ内面に黒斑あり、伊勢湾沿岸地方の土器（パレススタイル）を模倣	径2㎜以下の褐色粒多量、径1㎜以下の白色粒子・光る透明粒子多量含む、赤色粒子少量含む、焼成良好にぶい橙	頸部～口縁部1/2残存
21	C-6 14	壺	器高 〔130〕 口径 欠損 頸部径 (47) 胴部最大 154	外面ハケ目の後ヘラミガキ内面ハケ目	0.5～1㎜石英・長石多含、0.5㎜のオレンジ系粒子含焼成普通、黒褐色	口縁～頸部にかけて欠損
22	88	壺	器高 261 口径 135 頸部径 90 胴部最大 216	ハケ目の後ミガキ、内面口辺部板ナデ、胴部～底部ハケ目、口辺部内湾、輪積み痕あり、菊川系模倣	0.5㎜程度の石英黒色系の粒子密焼成良好、黄褐色	完形

No.	遺物番号	器種	法量	手法	胎土・焼成・色調	残存
23	104	壺	器高 〔176〕 頸部径 76 胴部最大 156 底部径 83	内外面とも磨滅激しく判別不可数カ所ミガキの跡あり、	0.5～1mm程度の白色系の粒子含む、焼成普通、黄褐色	頸部～口縁部欠損
24		甕	口径 (212)	口唇部キザミ目全面に施す、胴上部棒状工具により文様を施す胴上部横ナデ、中央部縦ナデ	1mm程度の白色系粒子含有、焼成普通、暗オリーブ	胴上半～口縁1/4残
25	通し220	甕	器高 〔228〕 頸部径 84 胴部最大 198 底部径 86	外面板ナデの後ミガキ、内面ハケ目	0.5mm以下の白色系・黒色系粒子丸く含有、焼成良好黄褐色	頸部～口縁部欠損
26	B-3 199	壺	器高 〔80〕 口径 175	外面ハケ目の後ミガキ、口縁部指頭痕、内面ハケ目の後ミガキ	1mm程度の長石丸く含有、0.5mmの石英角張って含有焼成普通、灰黄褐	口辺部残存
27	B-3 205	甕	器高 〔120.5〕 口径 119 頸部径 78 胴部最大 150	外面ヘラミガキ、内面口辺部ヘラミガキ、外面口縁内面を赤色顔料してある、山陰系土器か？	1mm程度のオレンジ系粒子少量含む0.5～2mm程度の石英多く含む、焼成普通、褐色	口辺部1/4欠胴中央～底部欠損
28	B-3 206	台付甕	器高 〔67〕 底部径 97	外面ハケ目、内面ハケ目の後板ケズリ	1mm程度の長石と黒色系の粒子丸く含有、焼成普通暗オリーブ	脚台部のみ残存
29	B-3 213	壺	器高 〔162〕 口径 (314)	折り返し口縁、口辺部ヘラ沈線9ヶ組1ヶ所確認したが4ヶ所あったと思われる、頸部ハケ目の後ヘラミガキ、内面ハケ目、板ナデあり、	0.5～1mm程度の石英多く含む、0.5～1.5mm程度のオレンジ系粒子含む、焼成普通明橙色	口縁～頸部にかけて1/4残存
30	B-3 217	壺	器高 〔 80〕 口径 245	複合口縁、頸部横ナデの後縄文を施す、内面横ナデ	2mmの黒色系粒子含む、1～2mmの長石・石英・茶系の粒子含有、焼成良にぶい黄褐色	口辺部～口縁部残存
31	B-3 220	台付甕	器高 〔 87〕 裾部径 112	外面ハケ目、内面ハケ目、ナデ	0.5～1mmの石英、白色系粒子多含焼成普通、黄褐色	脚台部のみ残存
32	B-4 182	高坏	器高 〔 66〕 口径 (205)	外面ハケ目の後ヘラミガキ、内面ハケ目の後ヘラミガキ	0.5～1mmの石英多含、0.5～1.5mm白色系粒子含む、焼成普通、明茶褐色	坏部1/5残存
33	B-4 190	甕	器高 〔 89〕 口径 (166)	外面口縁部ハケ目の後横ナデ、胴上半部ハケ目、内面ハケ目	0.5mm以下の白色黒色系の粒子含有焼成普通、暗褐色	胴上半～口縁1/4残
34	B-4 221	甕	器高 〔127〕 口径 (175)	外面ハケ目、口唇部横なでの後刻み目施す、	1mm程度の長石・石英丸く含有、焼成普通、褐灰色	底部欠損、1/4残
35	B-6 78	器台	器高 〔 60〕 底部厚さ 31	脚部孔（径10mm）3ヶ所あったと推定、器面剝落で判別不可	1mmの白色粒子含焼成普通、暗褐色	器受～脚部残
36	B-7 排水溝	壺	器高 〔 80〕 口径 149	内外面ハケ目の後口辺部横ナデ天竜川より西の地方の土器を模倣？	0.5～1mmの白色系粒子含む、0.5mm以下の石英多含	口縁～頸部のみ残存

No.	遺物番号	器種	法量	手法	胎土・焼成・色調	残存
37	C-4 61	壺	器高 〔91〕 口径 145 頸部径 78	内外面ハケ目の後ヘラミガキ	0.5mm程度の長石石英丸く含有、焼成普通、明褐色	頸部～口縁部残存
38	C-4 118	壺	器高 〔82〕 口径 152 頸部径 100	外面ミガキ、頸部棒状浮文1ヶ所残存2ヶ所あったと思われる内面横ナデ	1mm程度の長石・黒系粒子丸く含有焼成普通、黄灰色	頸部～口縁部残存
39	C-5 20	高坏	器高 〔80〕 口径 (214)	ハケメの後ミガキ	1～2mmの黒色系の粒、1mmの石英含焼成普通、橙色	坏部1/3残存
40	C-5 71	壺	器高 〔37〕 底部径 162	内外面共ハケ目	0.5～1.5mm程度の石英多く含む、焼成普通、暗灰黄色	底部のみ残存
41	C-6 57	壺	器高 〔120〕 口径 (258)	外面ハケ目の後ヘラミガキ、内面口辺部横ナデ、ヘラミガキ	0.5～1mm程度のオレンジ系粒子、白色系粒子含、焼成普通、灰オリーブ	口縁～胴上部1/5残存
42	排水溝	台付甕	器高 137 口径 85 底径 57.5	口辺部ハケ目の後横ナデ内面ハケ目	0.5～1mm程度の石英多含、焼成普通褐色	口辺部1/6欠損
43	B-4 186	坏	器高 〔34〕 口径 (106)	内外面赤彩を施す、	最大2mmの石英・黒色系の粒子含む焼成普通、赤褐色	口辺～口縁部1/6残
44	B-4 189	高坏	器高 〔78〕	外面ミガキ、孔1ヶ所あり、推定3ヶ所あったと思われる、	1mmの長石、黒色粒子丸く含、焼成普通、にぶい黄褐	脚部器受1/2残存
45	B-4 一括	坩	器高 〔57〕 口径 (86) 胴部径 (84) 底部径 35	外面底部ヘラケズリ、胴部ハケ目の後ミガキ、口縁部ハケ目の後横ハケ目で調整	1mm程度の黒色系粒子含む、焼成良好、硬質、黄灰色	胴下半～口縁部1/2欠損
46	C-4 121	坩	器高 〔67〕 口径 (83)	内外面共ハケ目	0.5～1mmの石英含焼成普通、暗灰黄	口縁～胴下部
47	B 2 216	甕	器高 〔115〕 口径 202 頸部径 156.5	外面口辺部ハケ目の後横ナデ、胴部ハケ目、内面口辺部ハケ目頸部横ナデ	0.5～1mmの白色粒子、0.5mmの石英1mm金色粒子少含焼成普通にぶい橙	口縁～胴上部のみ残存
48	B 2 274	器台	器高 〔53〕 裾部径 85	脚部に3ヶ所孔あり（等間隔に配置されていない、あともう1ヶ所あったものと思われる）	0.5～2mm程度の石英含む、焼成良好暗灰色	器台のみ残存
49	B-2 277	坏	器高 50 口径 141 底部径 48	内外面共ヘラミガキ、底部木葉痕あり、	0.5～1mmの石英、白色系粒子多含、焼成普通、灰褐色	ほぼ完形
50	B 4 224	坏	器高 40 口径 (132)	内外面共ナデ	1mm以下の白色系、粒子丸く含有、焼成普通、灰褐色	1/3程度残存
51	B-5 17	坏	器高 37 底部径 59	外面上半部横ナデ、下半部ヘラケズリ、内面横ナデ、内外面共ススで覆われている、	0.5mmの白色系粒子密に含む、焼成普通、オリーブ黒	完形
52	C-4 62	坏	器高 42	内外面共ミガキ、木葉痕あり、	1mmの長石・石英、黒色系粒子含、焼成普通、にぶい橙	1/3残存

No.	遺物番号	器種	法量	手法	胎土・焼成・色調	残存
53	C-4 63	坏	器高 〔44〕 口径 (134)	内外面共にミガキを施す、底部ヘラケズリ、	1～2㎜の長石含む焼成普通、黒系色	口縁部欠損
54	C 4 167	坏	器高 〔41〕 口径 (133)	外面磨滅、内面ヘラミガキ	0.5～2㎜の石英・1㎜白色粒子多含、焼成普通にぶい橙	口縁～体部1/7残
55	C-4 172	坏	器高 〔26〕 口径 (148)	内面ミガキ	1㎜の石英丸く含、焼成普通、暗褐色	1/9程度残存
56	C-5 76	坏	器高 〔53〕 口径 (146)	外面ナデ	1㎜程度の長石丸く含有、焼成普通オリーブ黄	2/3程度残存
57	18	甕	器高 〔125〕 口径 195 頸部径 176	外面ハケ目、口縁部ナデ、内面ハケ口、指頭痕・輪積み痕あり、鍛束型かめ	1～最大2㎜程度の長石、黒色系の粒子、赤系オレンジ系粒子丸く含有、焼成普通、赤褐色	口縁～胴上半部残存
58	排水溝	坏	器高 45 口径 132 最大径 157 底部径 68	内外面口辺部横ナデ、外面底部ヘラケズリ、	0.5～2.5㎜程度の石英多く含む、焼成良好、灰色	1/2残存
59	B-4 178	皿	器高 29 口径 99	内外面共横ナデ、底部糸切り痕(かわらけ)	白色・黒色系の砂粒、オレンジ系の粒子丸く含有、焼成普通、にぶい橙	完形
60	B-4	坏	器高 45 口径 (118) 底部径 62	外面ミガキ、底部ケズリ、内面ミガキの後上半部ナデ	0.5㎜以下の白色系の粒子多量含む、1㎜の赤系粒子少量含む、焼成良好硬質、にぶい黄褐	1/3残存
61	B-6 2	皿	器高 29 口径 98 底部径 56	外面なで、糸切り痕あり(かわらけ)	白黒砂粒・オレンジ系粒子丸く含有焼成普通、灰橙色	完形
62	B-6 通し 383	皿	器高 22 口径 98 底部径 37	外面横ナデ(かわらけ)	0.5～1㎜程度の石英含有、焼成普通茶褐色	完形
63	C 5 8	皿	器高 26 口径 95 底部径 52	外面横ナデ、底部糸切り痕あり(かわらけ)	白色・黒色系の砂粒丸く含有、赤系の粒子含有、焼成普通、明褐色	ほぼ完形
64	C 5 16	皿	器高 29 口径 (129)	内外面共にナデ、底部板ケズリ(かわらけ)	白色・黒色系砂粒子丸く含有、焼成普通、にぶい褐色	2/3程度残存

2．石器・石製品

弥生時代中期中葉～古墳時代にかけての出土遺物の中で石器及び石製品には打製石斧、磨製石斧、石皿、敲石、すり石、凹石、砥石などの工具、勾玉、石製模造品、管玉、臼玉等の玉類、漁労に使われたと思われる石錘等がある。石器・石製品を出土点数別にみると総出土点数64点の内39点が敲石と圧倒的に多く、次いで石斧の15点（打製石斧10点、磨製石斧５点）となっている。

また、数量的には決して多くはないが、石皿・凹石が各３点、砥石２点、すり石１点と多種多様である。出土層位をみてみると、石器の大部分は第Ⅲ層中から出土しているが、打製石斧・磨製石斧等は弥生中期中葉～後期後葉出土の土器と同様に第Ⅳ層にへばり付くような状態で検出された。従って、基本的には弥生時代に所属すると考えられる。敲石等その他の石器については、主に古墳時代の土器とほぼ同じ層から検出されたため、古墳時代ないしそれ以降のものと考えられる。

打製石斧（第22図１～10、図版19）

10点出土し、鶴喰前田遺跡出土の15.6％を占める。いずれも第Ⅲ層下面から第Ⅳ層上面にかけての出土である。完形（№３）ないし完形にちかい（１・６）ものは３点で、部分的に欠損したものや基部途中で折損したものが多い。２・５は刃部・基部の両端を欠損、７・８は基部のみで刃部欠損、９・10は刃部のみである。

瀬名遺跡での分類（大型品は長さ20cm、幅８cm以上のもの、中型品は長さ20～13cm、幅10cm前後以下、小型品は長さ13cm以下、幅７cm前後以下のもの）に従って分けてみると、１・３・４の３点は中型、残り７点は小型の打製石斧である。平面形態では、１は中型の撥形、６は撥形にちかい短冊形、９・10は小型の短冊形、３は中型の短冊形に入る。他はどちらとも言えない。

使用石材は、玄武岩が５点と多く、砂岩・安山岩が各２点ずつ、緑色片岩１点である。

磨製石斧（第22図11～15、図版19）

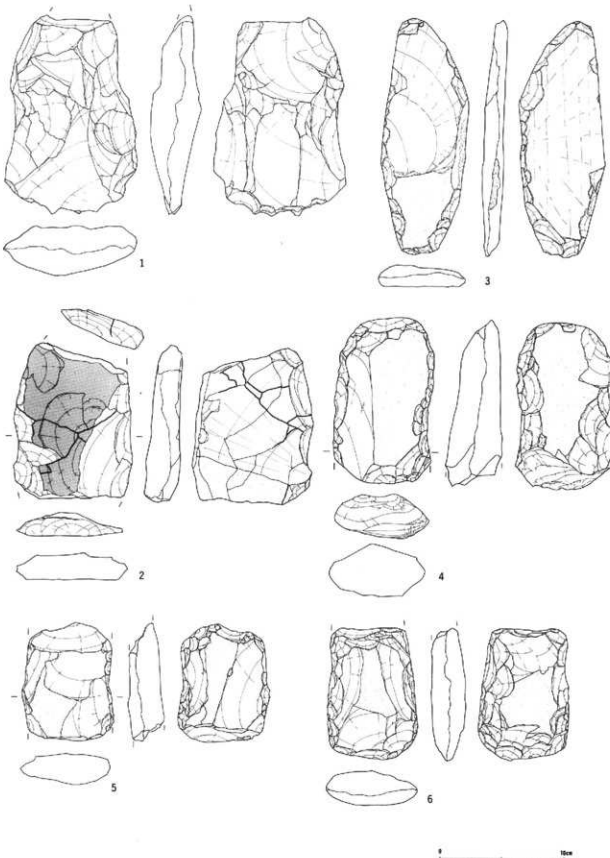
５点出土しており、いずれも太型蛤刃形のものであると思われるが、15は未製品のためはっきりしない。11は基部を欠損しているが最大長15.75cm、最大厚4.7cmで表面はよく磨かれ光沢を帯びる。先端には細かい剝離がみられる。13は基部を少し折損しているが、折断面の面取りをしているのでほぼ完形である。14は基部のみで刃部を折損ないし欠損しているが、よく磨かれ光沢を帯びている。又、基部の先端には顕著に敲打痕が観察される。破損した後、敲石として二次利用されたものと思われる。12は刃部・基部を折損し、中心部のみである。15は刃部再生、あるいは未製品と考えられる。又、敲石に転用されたと思われる。方柱状片刃石斧といえるかもしれない。

石皿（第22図16～18、図版20）

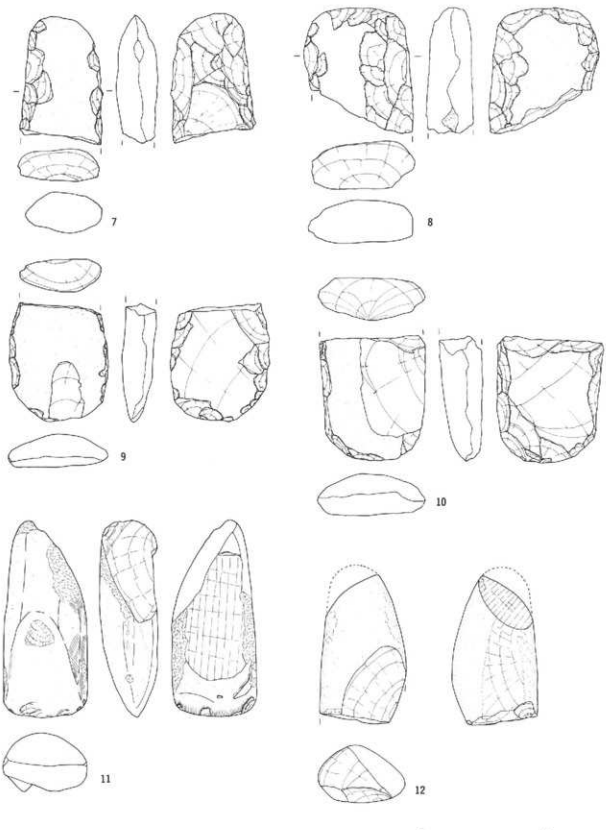
３点出土しており、いずれも中央部分はよく磨かれ浅い窪みもみられる。欠損している部分が多い。

敲石（第22図19～58、図版20～22）

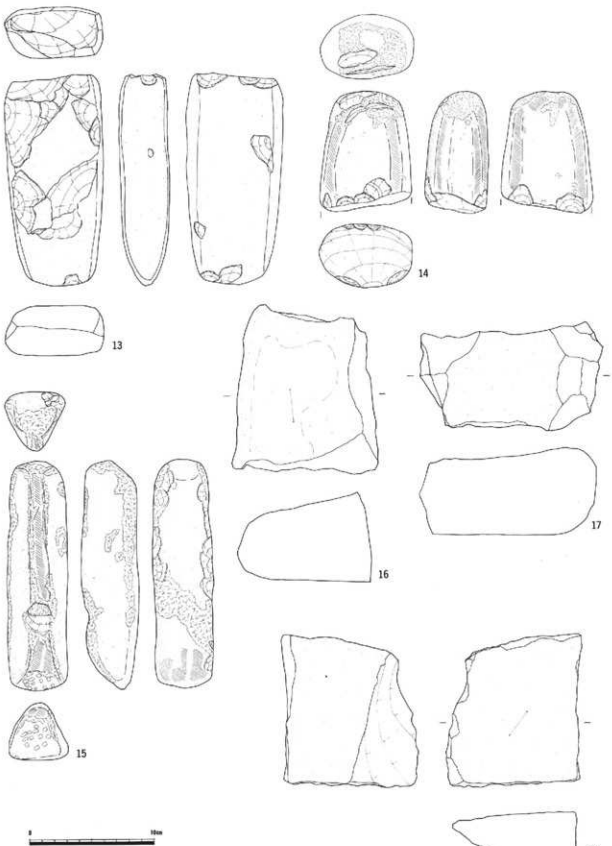
敲石は39点出土し、全体の61％を占める。先述したように第Ⅲ層中から出土しているが、Ⅲ層下部からはいくつかまとまって黒曜石と共に検出された。石材は砂岩（硬砂岩21点、珪質砂岩２点）が23点と圧倒的に多くみられるように、比較的手ごろに手に入る自然礫を使用している。使用目的は太型蛤刃石斧等の磨製石斧が出土していることから石製品を製作するための石製工具としてではないかと思われる。また、管玉・臼玉・勾玉もわずかではあるが出土していることから、玉作りにも使用された可能性も考えられる。完形又は完形にちかい敲石は、№19・20・23～25・27・28・30・31・33～35・47・51・



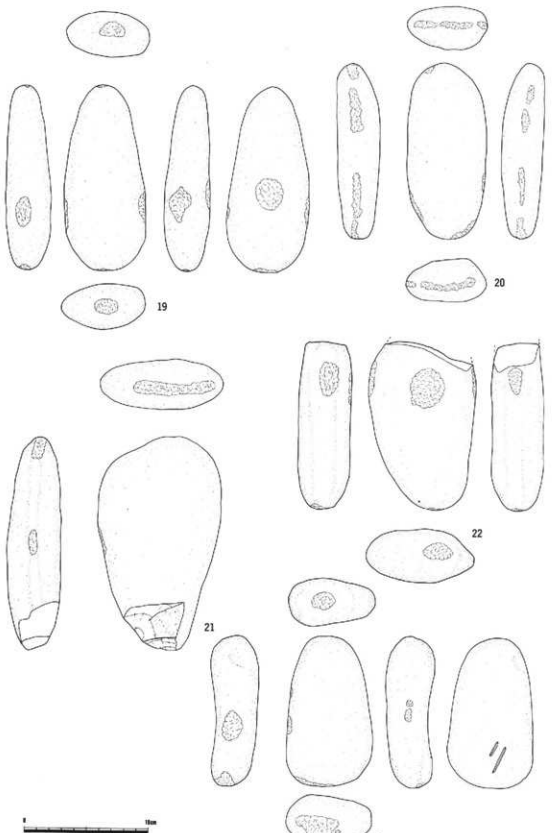
第22図　石器実測図1　打製石斧



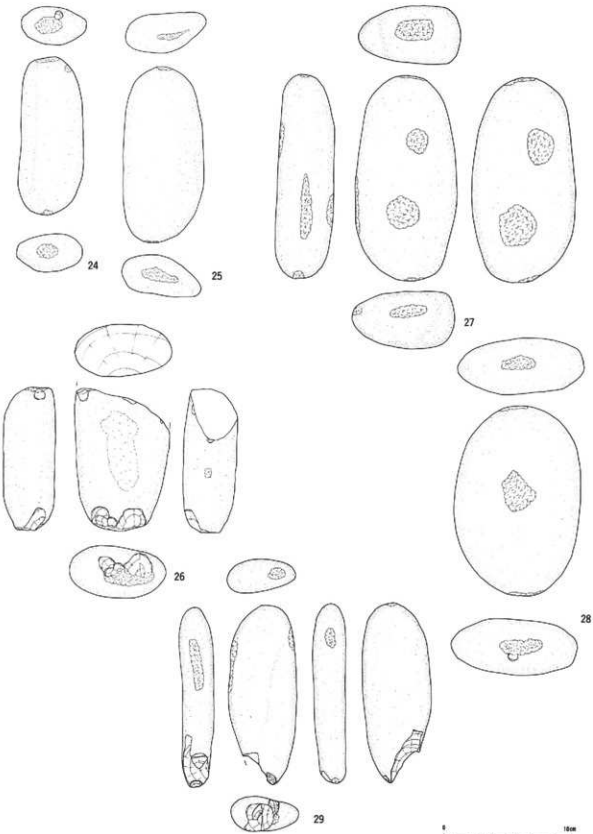
第22図　石器実測図2　打製石斧・磨製石斧



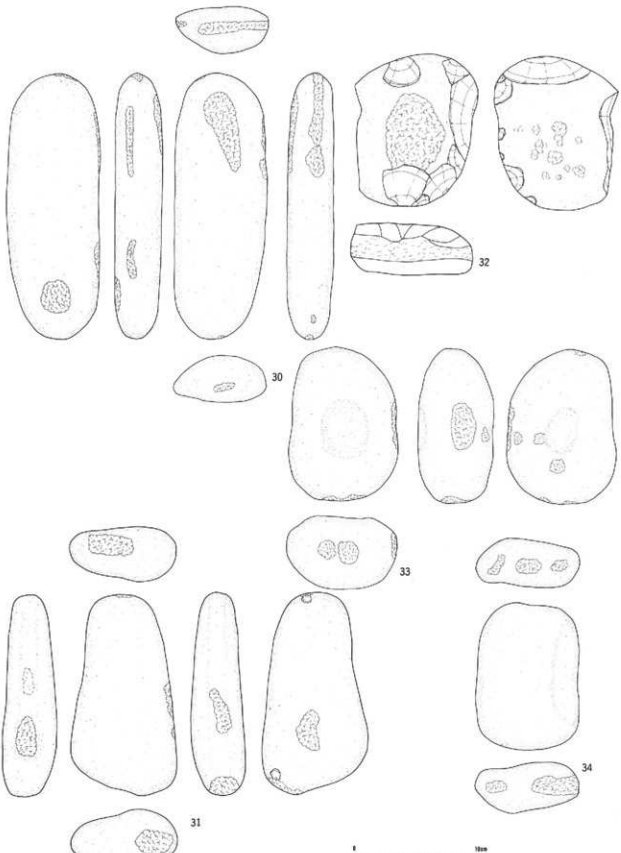
第22図　石器実測図3　磨製石斧・石皿



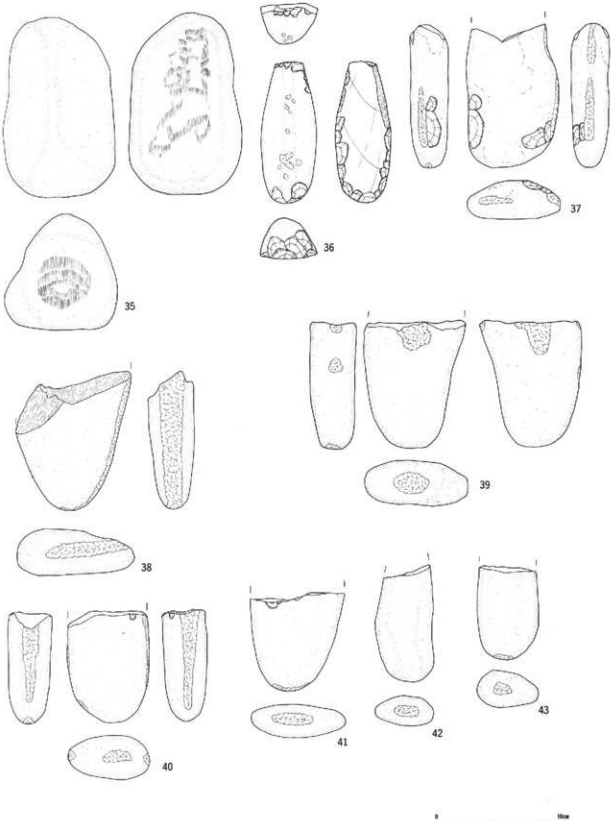
第22図　石器実測図 4　敲石



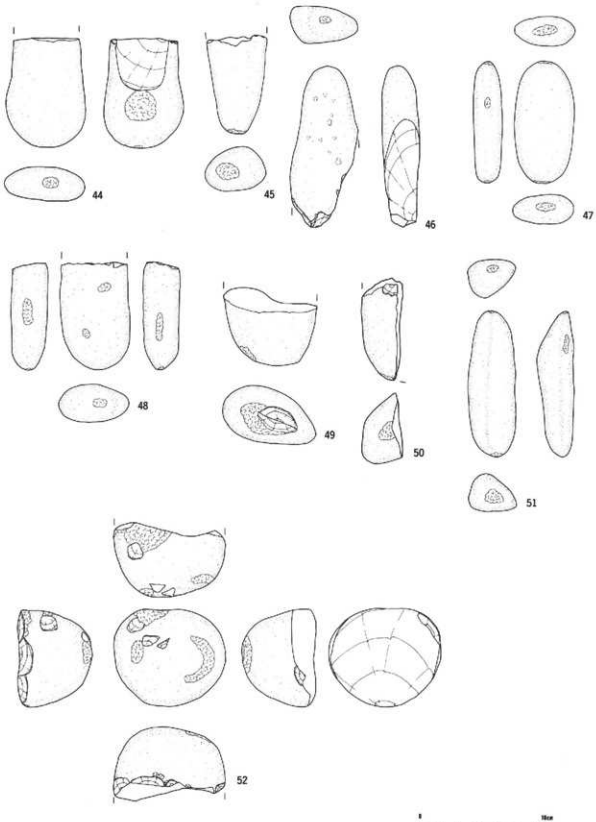
第22図　石器実測図5　敲石



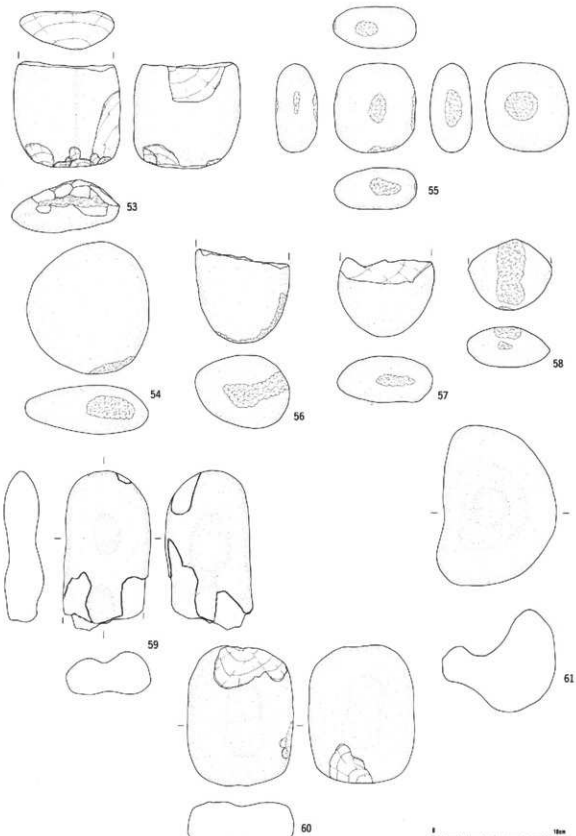
第22図　石器実測図６　敲石



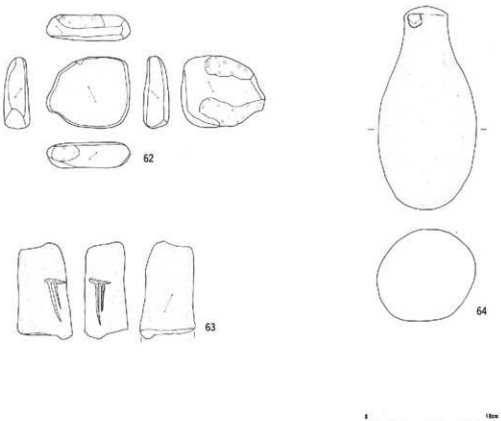
第22図　石器実測図7　敲石



第22図　石器実測図８　敲石



第22図　石器実測図 9　敲石・凹石



第22図　石器実測図10　砥石・石錘

54・55の16点で、上・下両先端部や側縁部・器面上に敲打痕が認められる。又、35はすり石としても使用されたと思われる。下端部一部欠損は21・29で、おそらく使用時に強い圧力がかかったため折損したものと思われる。側縁部が一部欠損した敲石は32・46で、32には器面上に敲打痕あるいは敲打による窪みが顕著にみられる。中心部から上端部の欠損している敲石は、22・26・37～45・48・49・53の13点である。52・56・57は球状又は楕円球状をしていたものと考えられ、ほぼ中心部より1/2を欠損している。また、52には光沢があり磨痕が認められる。スパット縦割れしている敲石は36・50の2点で、36の縦割れ面には使用痕がみられる。

凹石（第22図59～61、図版22）

3点出土しており、いずれも器面上に顕著な凹が認められる。59の石材はアレナイト砂岩で非常にもろく壊れやすい。

砥石（第22図62～63、図版22）

2点出土しており、62は雑石製、63は砂岩製でいずれも小型で直接手に持てたり、携帯可能の「持ち砥石」である。63の断面は四角形で細長い直方体を呈するものと考えられる。上端右側面には2本の溝、中央部には線条痕が認められる。

石錘（第22図64、図版22）

最大長16.4cm、最大幅7.9cm、最大厚7.5cm、重量1,128gの完形の石錘が1点出土している。石材は安山岩で、第III層下部より出土した。

玉類・石製模造品（第23図1～2、図版26）

管玉1点、臼玉1点があり、いずれも第III層下部より出土した。

1は碧玉製の管玉で長さ26mm、径6mmを計る。暗緑色を呈し、孔は両面穿孔。表面はよく磨かれ光沢を放っている。2は径5mm、高さ4mmの小さな暗灰色の滑石製の臼玉である。上下面はほぼ平坦で、円柱状をなす。穿孔は垂直に大きく穿たれ、片側より行われている。

3．土製品（第23図1～3、図版26）

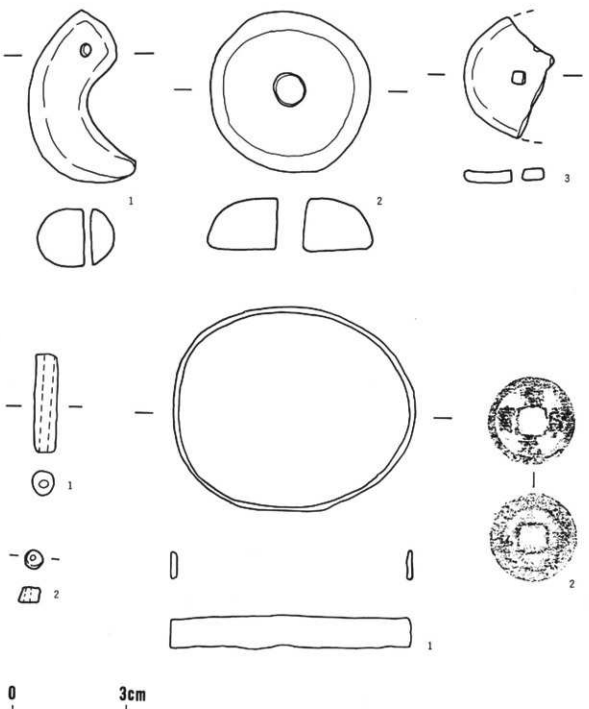
1は勾玉の土製模造品である。茶褐色を呈し全体に丁寧な作りをしている。孔は両面穿孔。2は最大長44mm、高さ13mm、中央部穿孔8mm、重さ26gを量る土製の紡錘車。厚い凸レンズ形に成形し、全面はやや粗い仕上がりである。3は名称、性格不明の土製品である。中央部付近に穿孔が1ケ所認められる。2/3を欠損しているが、鏡の土製品とも考えられる。

4．金属製品（第23図1～2・第24図3～5、図版26）

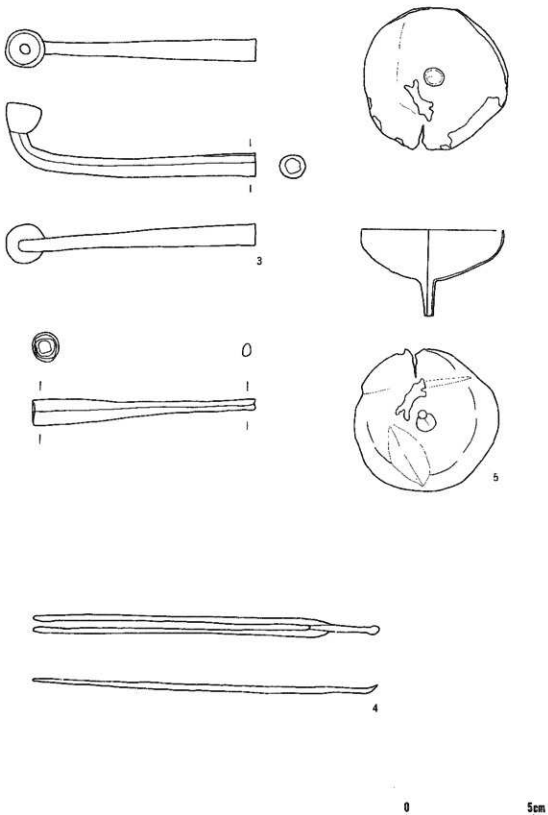
本遺跡からは銅銅、銭貨、キセル、カンザシ、仏具の銅製品5点が出土している。出土層位は、銅剣が第III層下部より検出され弥生時代後期～古墳時代前期のなかに位置付けられると思われる。他の4点は、第II層～第III層中にかけて出土しているので、中世以降のものと思われる。

1は銅剣で第III層下部から出土したものである。洪水の際に上流部の包含層から運ばれてきたものと考えられる。幅8.0mm、厚さ1.5mmの銅板を環状にまるめたもので、長径64.0mm、短径53.0mmを測る。なかなか丁寧な仕上がりである。2は銭貨で最初の二文字がやや判読しにくいが、中国渡来銭（宋銭）の「聖宋元宝」ではないかと思われる。鋳造年代は1068年にあたる。外縁外径23.1mmを測る。

3はキセルの雁首と吸口で東側排水溝よりセットで出土した。銅製で雁首は長さ98㎜、孔径9㎜、吸口は長さ87㎜、孔径（大）11㎜、孔径（小）4.5㎜を計る。いずれも孔中に炭化物の詰まっているのが認められる。4は銅製のカンザシで長さ134㎜、幅7㎜、厚さ3㎜を測る。第II層中より出土したため、比較的新しい時期のものと思われる。5は名称・性格不明の銅製品である。口径56㎜、器高34㎜、底口径4㎜を測る。形から仏具に関係したものではないかと思われる。



第23図　土製品・石製品・銅鋲・古銭実測図



第24図　金属器実測図

第2表　石器計測表

単位 mm　（ ）欠損しているものの数値

	遺物番号	種別	石　材	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備　考
1	B-4 55	打製石斧	玄武岩	(160)	106.5	41	668	ほぼ完形
2	B-6 30	打製石斧	玻璃質安山岩	(127.5)	97	28	430	身部のみ
3	C-3 40	打製石斧	緑色片岩	190	70.5	19	342	完形
4	B-5 12	打製石斧	玄武岩	(134.5)	80	46.5	552	小型
5	B 3 57	打製石斧	玄武岩	(95)	74.5	29.5	241	身部のみ
6	B-4 54	打製石斧	玄武岩	(106.5)	73.5	28	299	ほぼ完形
7	B-6 15	打製石斧	珪質砂岩	(103.5)	68	34.5	299	刃部欠損
8	B-6 16	打製石斧	角閃石安山岩	(101.5)	89	40	456	刃部欠損
9	B-6 14	打製石斧	珪質砂岩	(95)	80	27	270	刃部のみ
10	C-4 62	打製石斧	玄武岩	(100.5)	86	36	411	刃部のみ
11	B-3 44	磨製石斧	黒色珪質頁岩	(157.5)	74	47	729	太型蛤刃
12	B-3 45	磨製石器	角閃石ヒン岩	(129)	75	48	563	太型蛤刃
13	B-3 65	磨製石斧	石英ヒン岩	(170.5)	79.5	40.5	975	太型蛤刃
14	B 4 5	磨製石器	緻密玄武岩	(98)	75	41	613	太型蛤刃
15	B 4 4	磨製石器	蛇紋岩	(184.5)	49	47	660	方柱片刃
16	B-3 50	石皿	輝石安山岩	(138)	117.5	72	1,722	
17	B-3 58	石皿	石英安山岩	(87)	147.5	70	1,475	
18	B-6 26	石皿	玄武岩	(123)	109.5	39	854	
19	B-3 35	敲石	硬砂岩	(149.5)	67	36.5	521	全面敲き
20	B-3 37	敲石	硬砂岩	(141.5)	64.5	35	491	4面
21	B-3 42	敲石	硬砂岩	(171.5)	99	41	1,020	3面
22	B-4 60	敲石	珪質砂岩	(134.5)	87	43	767	全面
23	B-5 18	敲石	玄武岩	(121.5)	70	39.5	476	4面
24	B-5通98	敲石	硬砂岩	(128)	52	30.5	345	側面
25	B-6 27	敲石	輝石安山岩	(141.5)	65	33.5	505	側面
26	C-3 34	敲石	硬砂岩	(116)	78.5	42.5	546	全面
27	C-4 8	敲石	硬砂岩	(164.5)	83	46	990	全面
28	C-4 101	敲石	硬砂岩	(153)	102.5	45.5	1,034	3面

単位 mm　（ ）欠損しているものの数値

	遺物番号	種別	石　材	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備　考
29	C 5 10	敲石	蛇紋岩	(144.5)	55	27.5	354	4面敲き
30	C-7 2	敲石	玄武岩	(214.5)	75	38	990	全面
31	通78	敲石	硬砂岩	(162.5)	86	44.5	873	全面
32	通79	敲石	輝石安山岩	(123)	99.5	42	623	4面
33	通80	敲石	ハンレイ岩	(124)	89.5	60.5	914	4面
34	通84	敲石	硬砂岩	(118)	94	41	669	側面
35	通85	敲石	輝石安山岩	(145)	91	93.5	1,663	すり石
36	B-4 6	敲石	珪質砂岩	(114)	46	32.5	208	側面
37	B-5 19	敲石	硬砂岩	(115)	75	31	430	4面
38	C-4 64	敲石	硬砂岩	(111)	94	36	446	3面
39	C-4通88	敲石	硬砂岩	(102)	82.5	37	450	全面
40	B-3 47	敲石	硬砂岩	(90)	66	36	342	全面
41	B 6 1	敲石	玄武岩	(78)	76	27	219	側面
42	B 6通97	敲石	硬砂岩	(95)	47.5	24	154	側面
43	C-3 33	敲石	硬砂岩	(76)	50	29.5	181	側面
44	C-3 36	敲石	硬砂岩	(88)	65	28	262	3面
45	C-3 37	敲石	泥質ホルンフェルス	(79)	49	36	186	側面
46	C-4 14	敲石	玄武岩	(130)	55	30	266	側面
47	C-4 100	敲石	硬砂岩	(98)	49.5	23.5	181	3面
48	C 5通26	敲石	玄武岩	(86.5)	57	29.5	252	4面
49	C-6通86	敲石	硬砂岩	(53.5)	75	47	238	側面
50	76	敲石	緻密玄武岩	(82.5)	33.5	56.5	195	側面
51	91	敲石	硬砂岩	(118)	38.5	30.5	194	側面
52	B-3 48	敲石	玄武岩	(79)	90	60	588	全面
53	B-3 51	敲石	角閃石安山岩	(85.5)	86	43	406	側面
54	B-6 29	敲石	角閃石ヒン岩	(106)	99	39	645	側面
55	C-4 52	敲石	玄武岩	(72)	67	33.5	221	全面
56	C 4 53	敲石	多孔質玄武岩	(75.5)	76	59	430	側面

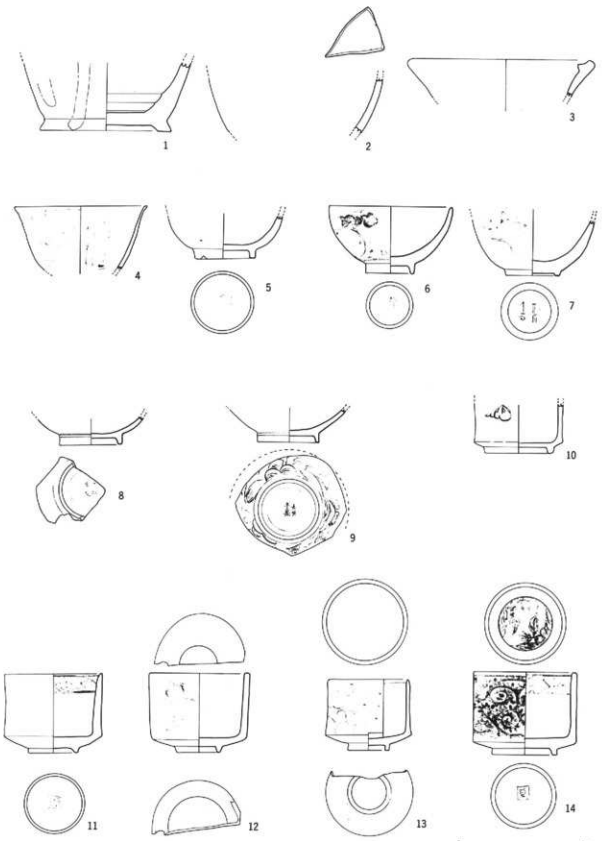
単位 mm　（ ）欠損しているものの数値

	遺物番号	種別	石　材	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備　考
57	通81	敲石	硬砂岩	(63.5)	78	37.5	241	側面
58	通83	敲石	硬砂岩	57	67	33	106	側面
59	B-5　20	凹石	アレナイト砂岩	(127.5)	70.5	35	387	
60	C 4　99	凹石	多孔質玄武岩	(113　)	86	38	535	
61	通 2	凹石	多孔質玄武岩	(129　)	97	82	493	
62	C-5通 5	砥石	流紋岩質軽石	(57.5)	67.5	20.5	36	
63	通82	砥石	石英質砂岩	(78　)	44.5	35	188	
64	B-3　46	石錘	角閃石安山岩	(164　)	79	75	1,128	完形

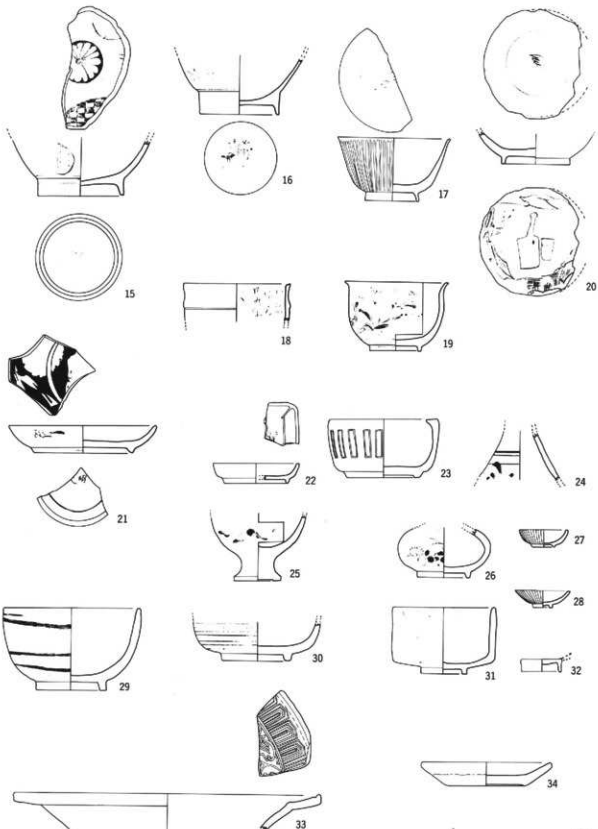
5．中・近世の陶磁器（第25図１～43、図版23～25）

本遺跡から出土の陶磁器は、主に第Ⅰ層から第Ⅱ層にかけて約350点程検出された。いずれも旧河川流路内から検出されたものが多く、おそらく上流で廃棄され流されてきたものと思われる。年代傾向としては、中世のものは少なく、近世のものがほとんどであった。また、近世の中では18世紀から19世紀中頃（幕末）にかけての江戸時代後半の製品が多く、碗・皿・蓋・徳利・仏飾器等の日用品が顕著にみられた。これは、三島宿が東海道五十三次の宿場町として機能していたことを物語っている一つかもしれない。遺物を産地別にみると、瀬戸・美濃、肥前、唐津系等がある。その内、ここでは43点を図示した。

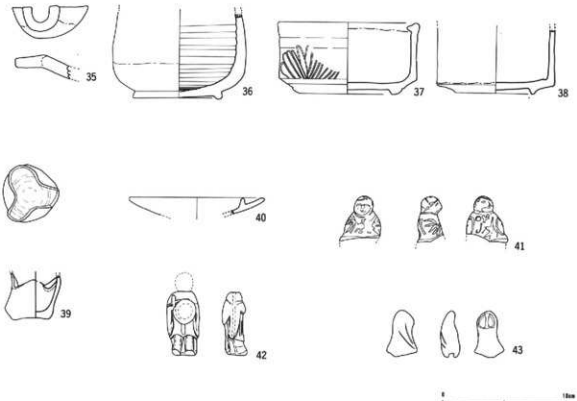
１は、10世紀頃の長頸瓶の底部片で高台はハの字状に大きく張り出し、断面台形をなす。２は、龍泉窯系の青磁碗である。内面にかっ花文を描き、釉は厚く施されている。12世紀後半の製品であろう。３は、15世紀中期頃の古瀬戸の皿で口辺部片である。口縁部内面に受けが付けられ、灰釉が厚く施されている。４は、中国（明末）の小鉢で1617年の沈没船ウィットロー号の出土品に類例がある。腰部～口縁部にかけての破片であるが、外面は花・蝶の文様、内面にも文様が描かれ、器肉は２～４㎜と非常に薄い。５は、肥前の青磁染付碗で18世紀中頃から後半のものである。見込み部には、二重圏線に変形五弁花（手描き）が認められる。外面は丁寧な仕上がりで緑灰色を呈し光沢がある。６は、いわゆるくらわんか系の碗である。口径が小さいことから湯飲み碗と思われる。７もくらわんか系の碗で、高台外は二重圏線、内は一重圏線を巡らしている。外面には草花文様がある。18世紀中頃の肥前系のものと思われる。８・９は、碗で、高台内面に『太明年製』の２行４字書きの銘款がある。これは中国の国・年号を模したもので、17世紀後半から18世紀の製品に多く施されている。８は19世紀天保前後、９は、幕末から明治にかけてのものと思われる。10は、小碗で17世紀末から18世紀前半頃のものと思われる。11は、青磁染付碗（猪口・筒茶碗）で、18世紀中～後期の代表的なものである。見込み部に五弁花のコンニャク印判による文様がある。肥前産と思われる。12・13・14も11と同様に肥前の筒茶碗で、12・13の見込み部にはコンニャク印判による五弁花文が認められる。12には草花文様、13の外面は菊の花に格子文様が描かれている。また、12の内面と半部には四方襷文が巡っている。14には、蛸唐草文様が描かれており18世紀末～19世紀初頭にかけてのものと思われる。15・16は、肥前の広東タイプの碗である。いずれも19世紀前半頃のものである。17は、瀬戸・美濃系の丸碗で19世紀中葉頃のものと思われる。口縁部が端反になっている。18は、肥前の鉄釉染付碗で18世紀末～19世紀初頭にかけてのものと思われる。19は、肥後産の湯飲み碗で口縁部は端反になっている。20は、瀬戸・美濃系の碗の蓋で19世紀代幕末頃のものである。21は、肥前の皿で内面は圏線２本を挟み文様が全面にあったと思われる。22は、手塩皿で見込み部にはコンニャク印判が認められる。23は、17世紀後半の肥前の香炉で内外面に青磁釉を施釉し光沢がある。高台部からやや直線的に立ち上がり、口縁部で内湾している。24は、徳利の頸部片である。肥前産で17世紀後半のであろう。25は、肥前系の仏飾器である。内外面に透明釉が施され、18世紀前後のものと思われる。26は、18世紀頃の肥前産の油壺（瓶）の底部片である。外面腰部に草花文が施されている。27・28は、肥前の紅皿で、18は完形品である。18世紀後半～19世紀にかけての白磁で、内面は光沢があり丁寧な作りである。29は、腰部が張り口縁部が直線的に立ち上がる丸碗である。17世紀後半～18世紀後半の長崎産のものと思われる。象嵌が施されている。30は、瀬戸・美濃系の丸碗で外面は鉄釉が内面は灰釉が施釉されている。18世紀前半～中頃のものである。31は、瀬戸・美濃系の筒茶碗である。32は、瀬戸・美濃系御深井釉小碗の高台である。18世紀前半頃のものと思われる。33は、唐津産の皿で白粘土の象嵌が施されている。大皿で18世紀前半であろう。34は、浅い体部の丸皿である。釉は志野釉で内外面に施され、わずかに光沢がある。35は、19世紀頃の瀬戸・美濃系の片口の注口部破片である。36は、18世紀前半の瀬戸・美濃の徳利である。外面は黒褐色の鉄釉が施釉され、また、内面は化粧がけ



第25図　陶磁器実測図 1



第25図　陶磁器実測図２



第25図　陶磁器実測図３

されている。37は、瀬戸・美濃系の香炉で17世紀後半～18世紀初頭のものと思われる。外面に菊の花文様がみられ、底部には三足が付く。38は、17世紀末から18世紀前半頃の瀬戸・美濃産の香炉である。外面に鉄釉を施釉してある。39は、体部を窪ませた小型の徳利で、産地は不明である。40は、瀬戸・美濃系の灯明皿の下皿で受けが付く。内外面共に鉄釉が施されるが、外面底部は拭き取られている。19世紀以降のものと思われる。41は、肥前系の水滴（上絵付）で17世紀～18世紀頃のものと思われる。42・43は、土人形かと思われるが定かでない。42は、首を欠損しているが地蔵の形を呈する。43の素材は陶器で無釉である。

第3表　陶磁器一覧表

	出土位置	器　種	残　存	備　考
1		長頸瓶	底部1/5残存	10世紀頃
2	C-5	青磁	体部破片のみ	12世紀後半、型押し蓮弁文
3	C-4	古瀬戸　皿	口径部1/5残存	陶器、15世紀頃
4	C-4	小鉢	体部～口縁1/5残存	磁器、器肉は2～4㎜と薄い
5	C-5	染付碗	底部～体部2/3残存	青磁
6	C-5	染付碗	底部～体部1/2残存	磁器
7	C-5	丸碗(染付)	底部～体部1/2残存	磁器
8	C-6	染付碗	底部～体部1/3残存	飯碗、『太明年製』の銘款
9	C-6	染付碗	底部～体部残存	飯碗、『太明年製』の銘款
10	C-6	筒茶碗	底部～体部1/3残存	磁器
11	C-7	青磁染付碗	底部～口縁部1/2残存	見込み部にコンニャク印判
12	C-4	筒茶碗	底部～体部2/3残存	見込み部にコンニャク印判
13	C-6	筒茶碗	底部～体部2/3残存	見込み部にコンニャク印判
14	B-6	筒茶碗	底部～体部2/3残存	蛸唐草文様
15	C-5	碗	底部～体部1/3残存	広東タイプ
16	C-5	碗	底部～体部残存	広東タイプ
17	C-5	碗	底部～口縁部1/2残存	口縁部が端反
18	B-6	碗	体部～口縁部1/2残存	鉄釉染付
19	C-6	小碗	底部～体部1/3残存	湯飲み碗
20	C-7	碗蓋	口縁部欠損	瀬戸・美濃系、19世紀幕末頃
21	C-5	皿	底部～体部1/4残存	内面は圏線2本を挟み文様
22	排水溝	手塩皿	底部～口縁部1/4残存	見込み部にコンニャク印判
23	C-4	香炉	底部～口縁部1/2残存	青磁
24	C-5	徳利	頸部1/2残存	染付け瓶
25	C-7	仏飯器	底部～体部残存	
26	C-7	油壺（瓶）	底部～体部1/2残存	外面腰部に草花文
27	C-4	紅皿	底部～体部1/2残存	白磁、肥前産
28	C-7	紅皿	完形	白磁、肥前産

	出土位置	器種	残存	備考
29	C-7	丸碗	底部～口縁部1/2残存	陶器、象嵌を施す
30	C-6	丸碗	底部～体部1/2残存	瀬戸・美濃系
31	C-6	筒茶碗	底部～体部1/2残存	
32	B-7	小碗	高台部残存	
33	B-7	唐津皿	口縁部1/17残存	皿破片、白粘土の象嵌
34	排水溝	志野皿	ほぼ完形	釉は内外面に施す
35	C-4	片口	口脇部口破片	瀬戸・美濃系
36	C-5	徳利	底部～体部1/2残存	陶器、瀬戸・美濃系、鉄釉
37	C-5	香炉	底部～口縁部1/2残存	貼付高台、丸彫り、陶器
38	排水溝東	香炉	底部～体部1/2残存	外面に鉄釉を施釉
39	C-5	徳利	口縁部僅かに欠損	珍品
40	排水溝	灯明皿	口縁部1/8残存	
41	トレンチ	水滴	胴上部残存	上絵付、17～18世紀頃
42	C-7	土人形	首部欠損　胴～足部完形	地蔵
43	C-5	土人形？	破片	陶器で無釉

5．木製品

御殿川流域遺跡群の調査で、出土遺物として土器と並んで欠かせないものの一つに多種多量の木製品がある。これらの木製品の大部分は主に第Ⅰ層～第Ⅱ層にかけて出土したが、なかには第Ⅲ層下層より出土したもの（⑪用途不明品、P150参照）もあり、ただ単にⅠ・Ⅱ層から出土したから新しい時代のものとは一概には言えない。比較的新しい時代の鍬筐だと思っていたものを樹種同定および年代測定した結果、弥生時代中期に製作された可能性もあるとの報告も受けている。

さて、本節では木製品を下記のように分類してまとめてみた。本来、漆器・下駄は食事具・生活具等として分類すべきかと思うが、出土点数が多いためあえて項目を独立させた。

① 漆 器	⑦ 工 具
② 櫛	⑧ 遊戯具
③ 下 駄	⑨ 祭祀具
④ 農 具	⑩ 雑 具
⑤ 容 器	⑪ 用途不明具
⑥ 食事具	⑫ 杭

① 漆 器（第28図１～181、図版27～31）

各グリッドで出土点数の多少はあるものの、ほぼ調査区全域より総数181点が出土した。種類別に分けると、碗は138点で最も多く全体の76%を占める。次いで碗蓋が36点（20%）、皿が４点（２%）、その他漏斗、鼓、漆液容器と思われるものそれぞれ各１点ずつである。

調査区内における漆器の分布状況をみてみると、下駄の分布状況と似ている点が何カ所かみられる。（第26図参照）

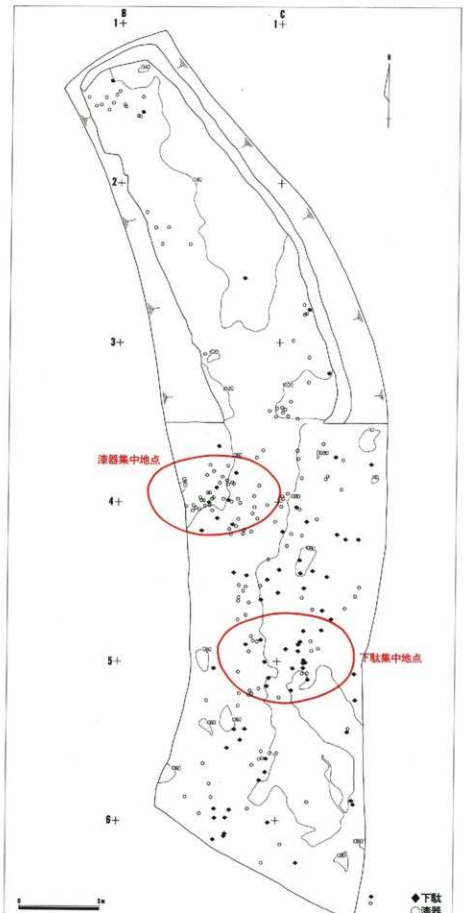
漆器の出土集中域としてはＢ－５～Ｂ－４グリッドにかけて顕著であった。加飾法を分類すると黒漆絵は32点（18%）、赤漆は22点（12%）、朱漆は５点（３%）、蒔絵は31点（17%）である。

特徴のあるものとしては、№５の碗があげられる。外面等間隔に３ヶ所、２ケ組の丸に花の家紋がある。左側は丸・花共に金で花心は朱漆、右側の丸は金花は朱漆で加飾され、花には引っ掻き技法がみられる。口縁部がわずかに欠損しているが口径110mm、器高43mmのほぼ完形品である。また、136は黒地の外面に朱漆で松にくじゃくの羽模様、松は引っ掻き技法を採り入れなんとも華やかである。さらに、所有者の印を表現しているとおもわれるものに、いくつかの文字や記号がみられた。№28・84は高台部裏に黒漆で『久』という文字を、59は同じ場所に朱漆で『弥右』の文字、109は同じく朱漆で『り』、47は高台部内側の横に朱漆で『右』という文字を、177は高台部外面に赤漆で『⊗』を、155は高台部裏に朱漆で『！』のマーク等である。

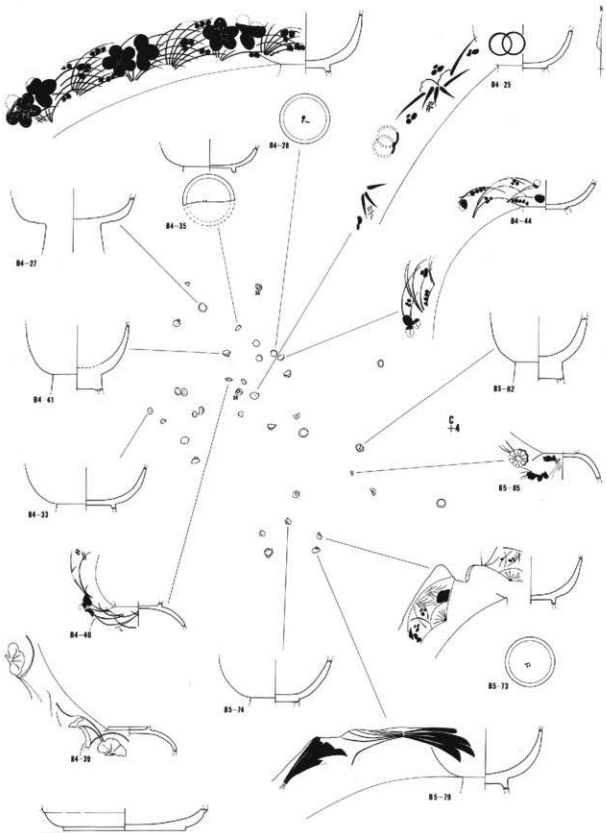
転用ないし別個体らしきものとしては、№86と32がある。86は内面に黒漆を溶いた痕跡がはっきりと残っており、おそらく漆液容器として碗から転用したものと考えられる。32は、腰部破片のみしか残存していないが形態から鼓の一部ではないかと思われる。

② 櫛（第29図１～６、図版26）

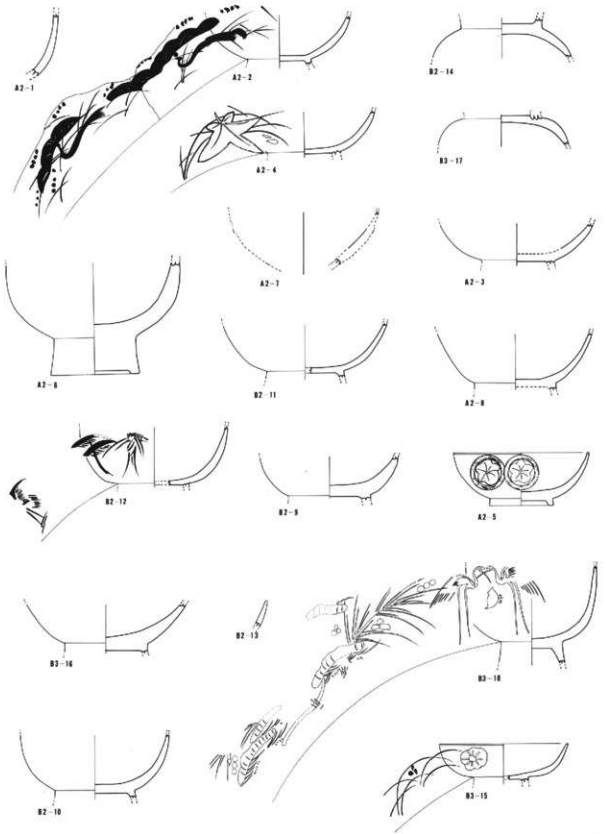
木製の横櫛６点が出土している。いずれも表面から工具を挿入して歯を挽き出した挽き櫛である。遺存状態は比較的№２・３は良好だが、他の４点は半分以上消耗し欠損している。№２・５は、一部漆を塗布した痕跡がみられる。歯の本数は３cm当たり、№６が15本、№１・２が17本、№４が20本、№３が21本とやや幅がある。６点共第Ⅱ層からの出土で中世以降のものと思われる。



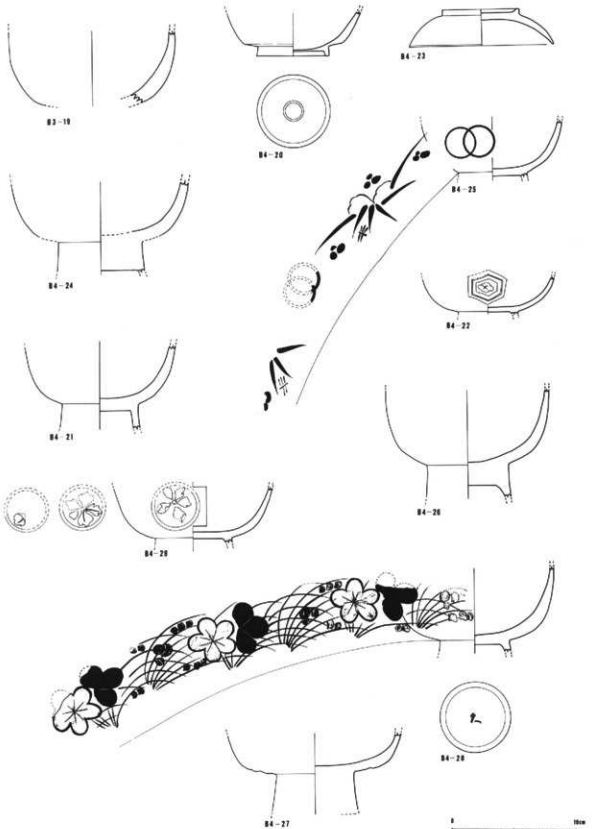
第26図　漆器・下駄分布図



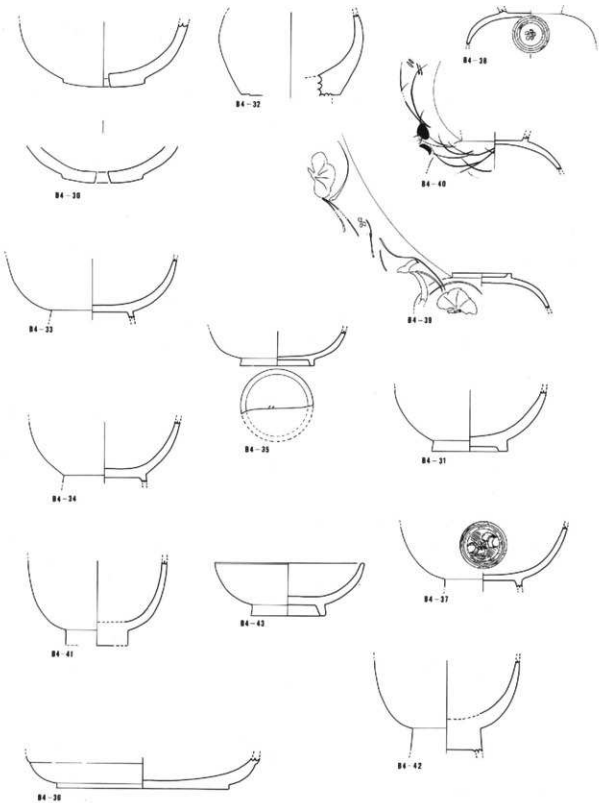
第27図　漆器集中分布図


A2-1
A2-2
B2-14
A2-4
B3-17
A2-7
A2-3
A2-6
B2-11
A2-8
B2-12
B2-9
A2-5
B3-16
B2-13
B3-18
B2-10
B3-15

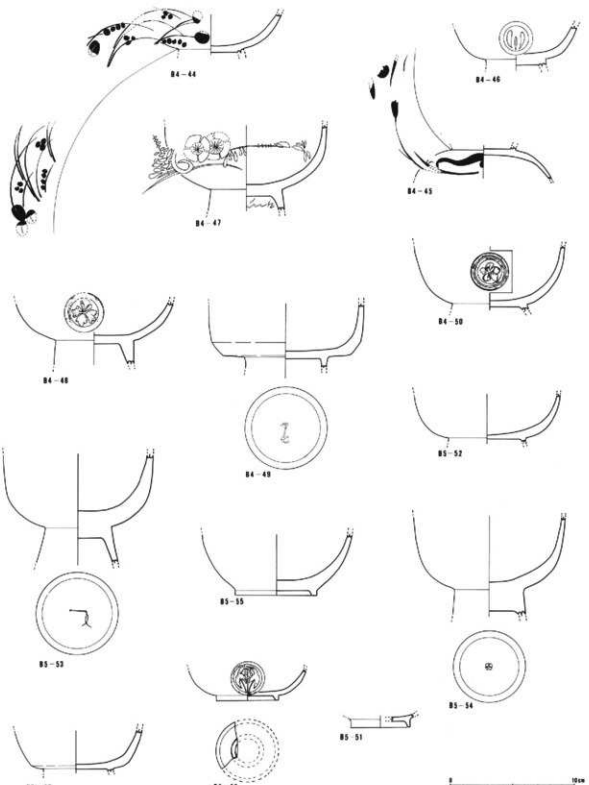
第28図　漆器実測図 1



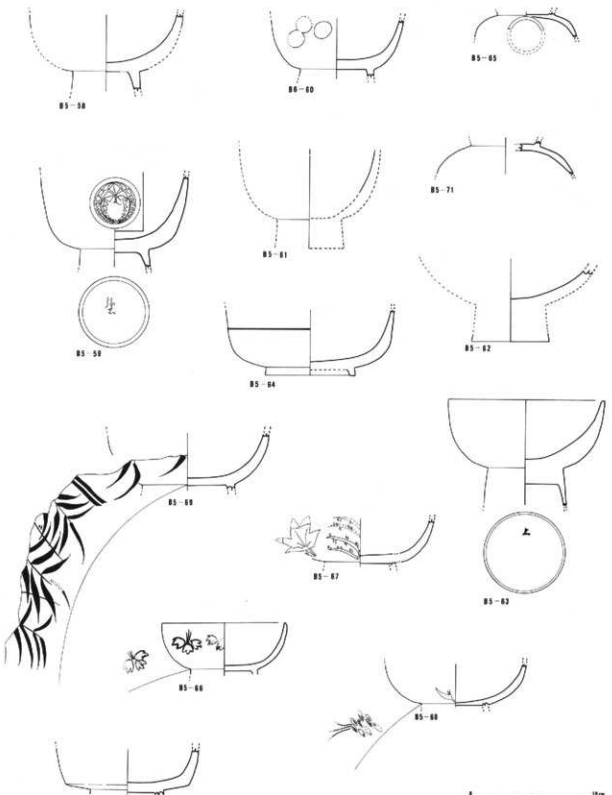
第28図　漆器実測図２


B4－32
B4－38
B4－40
B4－30
B4－33
B4－39
B4－35
B4－34
B4－31
B4－37
B4－41
B4－43
B4－42
B4－36
0
10cm

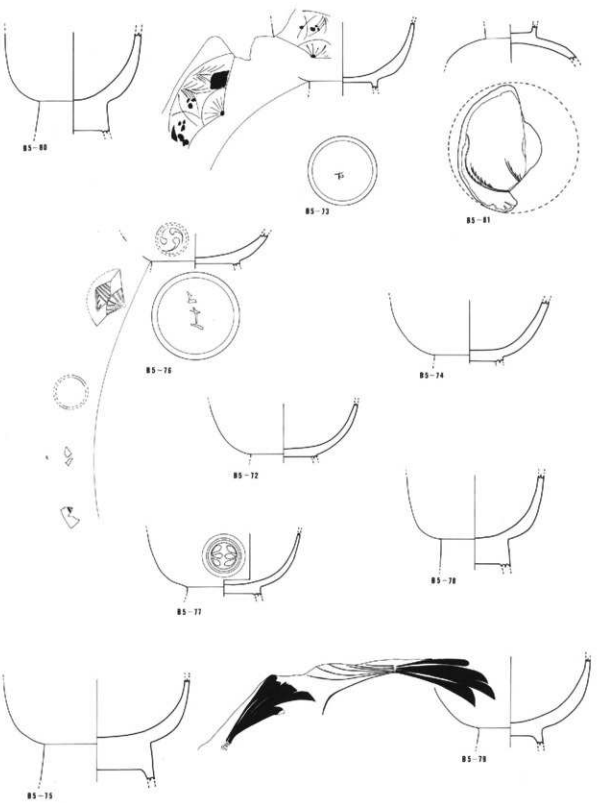
第28図　漆器実測図３


B4－44
B4－46
B4－45
B4－47
B4－50
B4－48
B4－49
B5－52
B5－53
B5－55
B5－54
B5－51
B5－57
B5－56
0
10cm

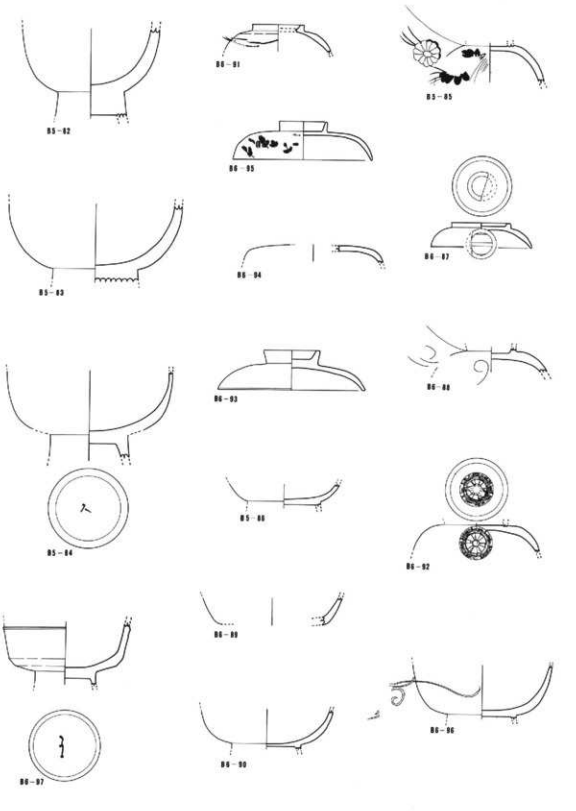
第28図　漆器実測図４


B5－58
B6－60
B5－65
B5－71
B5－61
B5－59
B5－64
B5－62
B5－69
B5－67
B5－63
B5－66
B5－68
B5－70
0
10cm

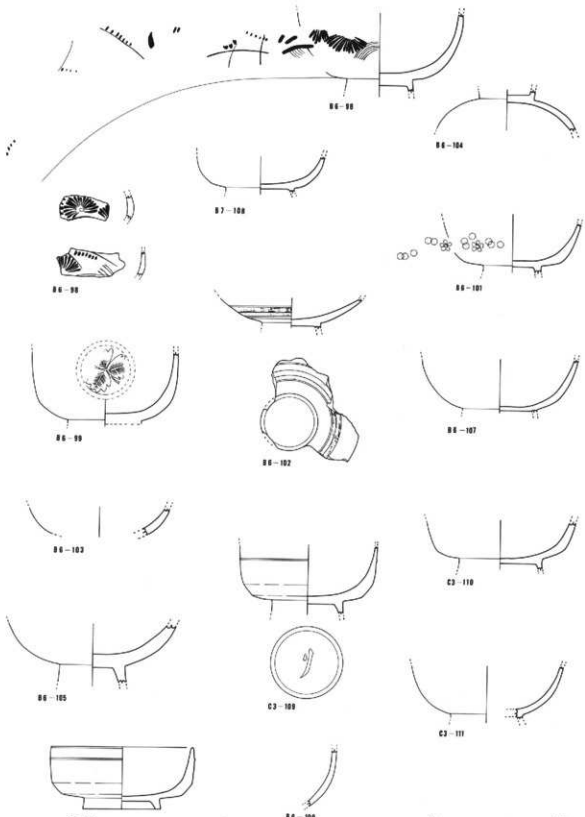
第28図　漆器実測図5



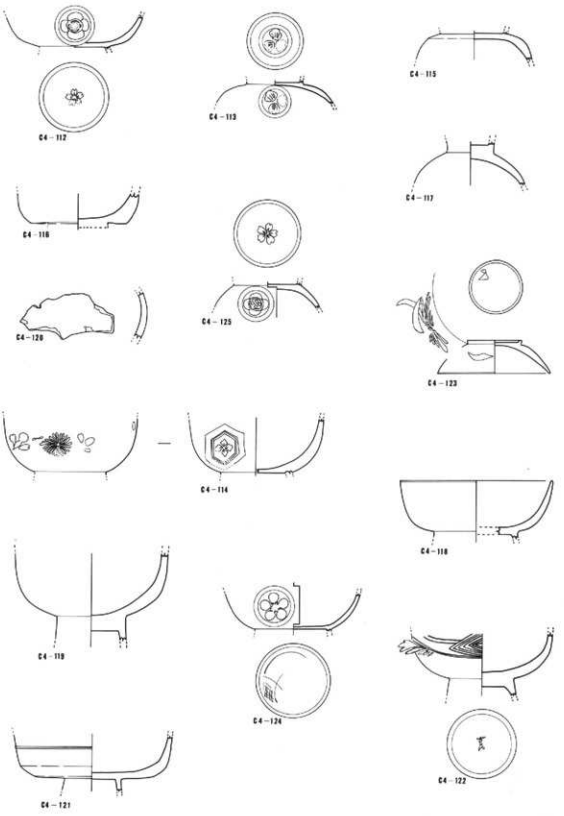
第28図　漆器実測図6



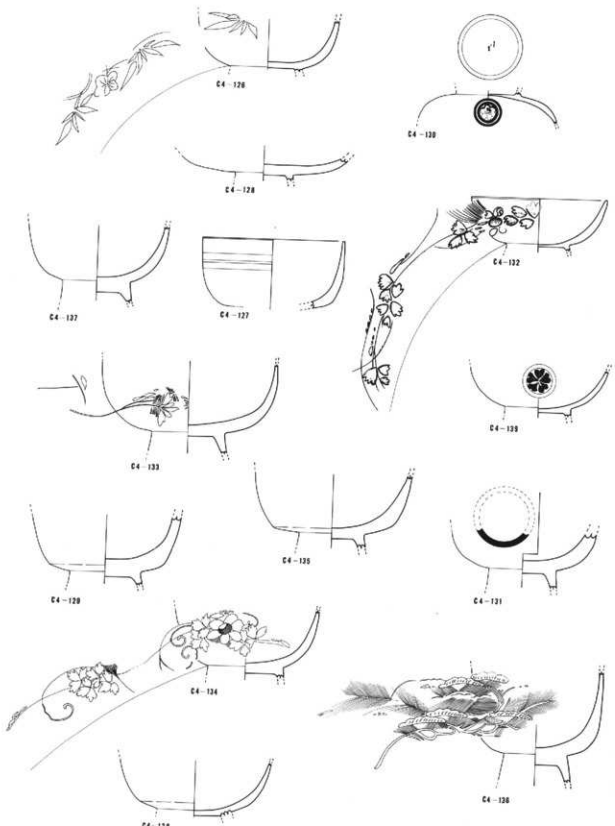
第28図　漆器実測図７


B6－96
B6－104
B7－108
B6－98
B6－101
B6－99
B6－102
B6－107
B6－103
C3－110
B6－105
C3－109
C3－111
B6－106
B6－100
0
10cm

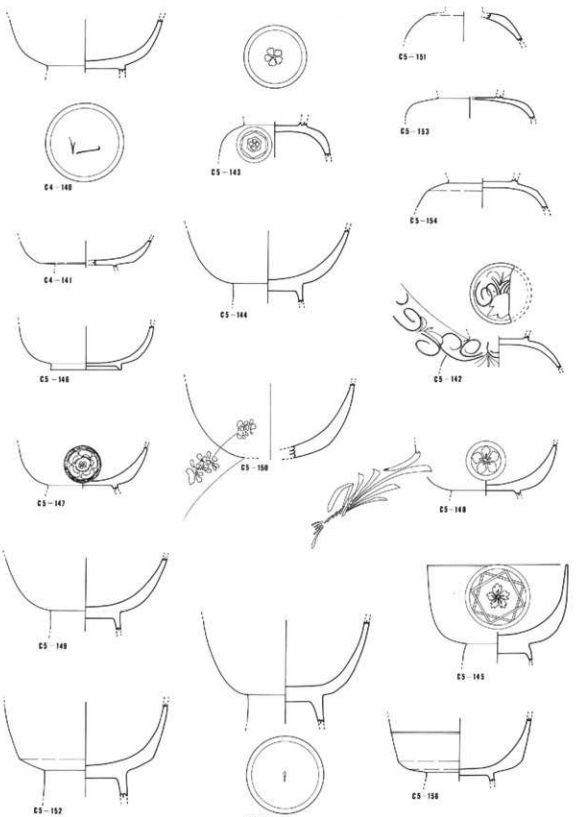
第28図　漆器実測図 8


C4－112
C4－113
C4－115
C4－117
C4－116
C4－125
C4－120
C4－123
C4－114
C4－118
C4－119
C4－124
C4－121
C4－122
0
10cm

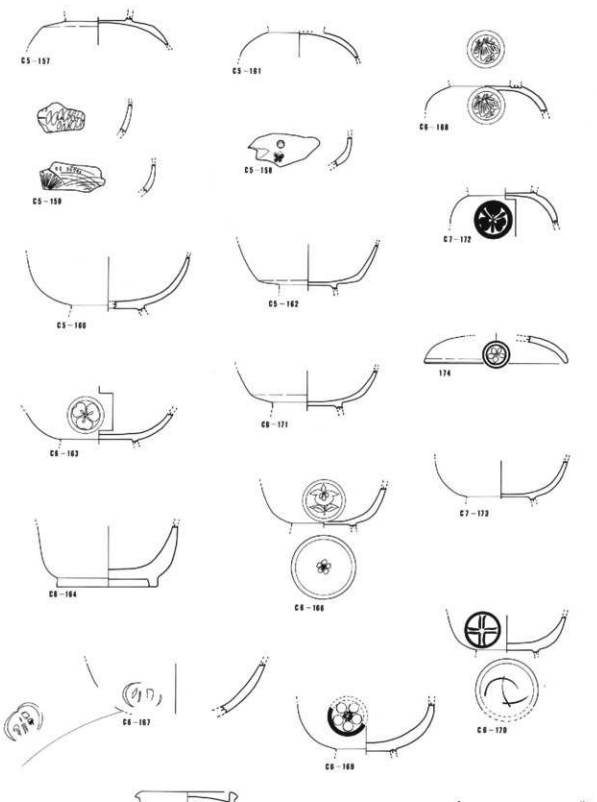
第28図　漆器実測図９



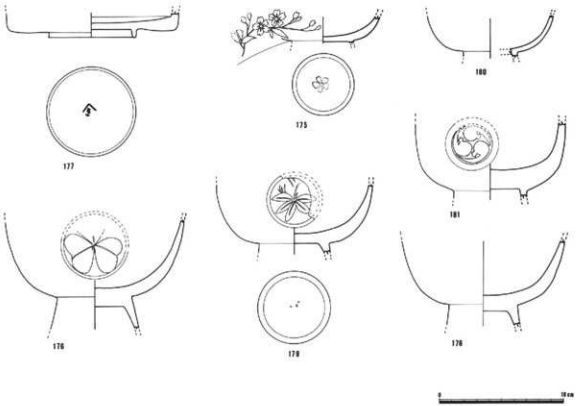
第28図　漆器実測図10



第28図　漆器実測図11



第28図　漆器実測図12



第28図　漆器実測図13

第4表　漆器一覧表

単位 mm　〔　〕残存値　（　）推測値

出土位置	番号	種別	残存率	口径	高台外径 高台内径	器高	厚さ	色（内外）加飾法、形態等
A-2	1	椀	腰部破片			〔56.5〕	腰部 4~6.5	内外面赤褐色、横木取り、素地普通
	2	椀	口縁高台欠 1/2残存	(115)	53　44	〔35〕	腰部 3~6 底部 4	内外赤褐色、黒漆絵、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、素地薄手、松と霊芝文様が描かれている。松の文様は引っかき技法
	3	椀	口縁部欠損	〔124〕	60　48	〔51〕	腰部 4~6.5 底部 6	内外面黒色、横木取り、上縁部やや開く、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	4	椀	口縁部欠損 上縁~底部 1/3残存	(115)	〔59　45〕	〔33〕	腰部 3~5 底部 4	内外赤褐色、高台裏黒、黒漆で線描画、全て葉脈は引っ掻き技法、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部欠損、素地普通
	5	椀	ほぼ完形	110	52　44	〔43〕	腰部 2~7 底部 7.5	内面赤褐色、外面黒、蒔絵、家紋が2ヶ組は珍しい、外面等間隔に3ヶ所2ヶ組の丸に花の家紋あり、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	6	椀	口縁部欠損 腰部1/2欠	(140)	72	〔89〕	腰部 5.8 底部 3.8	内外面黒、横木取り、上縁部内湾、腰部円弧形、高台部台形、素地普通
	7	椀	口縁底部欠 腰部1/2欠	(120)	欠損	〔42〕	腰部 3~7	内面赤褐色、外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部欠損、素地普通
	8	椀	口縁高台欠 1/2残存	(125)	〔66〕欠	〔45〕	腰部 3~7 底部(5.5)	内面赤褐色、外面黒、横木取り、上縁部開きぎみ腰部円弧形、高台部欠損、素地薄手
B-2	9	椀	腰~上縁部 欠損高台部	(112)	〔67〕47	〔32〕	腰部 5~12 底部 10	内面赤褐色、外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地厚手
	10	椀	口縁部欠損 腰部1/3欠	〔120〕	(66　58)	〔51.5〕	腰部 4~7 底部 7	内外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
B-2	11	椀	口縁部欠損 底部1/3残	〔132〕	〔64　55〕	〔43〕	腰部 3~4.5 底部 4.5	内外赤褐色、高台裏黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
	12	椀	口縁部欠損 口縁~底部 1/3残存	(119)	〔56　45〕	〔47〕	腰部 2~6 底部 3	内外赤褐色、高台裏黒、外面黒漆で線による絵が描かれている、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	13	椀	口縁~上縁 部1/6残存			〔21〕	腰部 4	内面赤褐色、外面黒、横木取り、上縁部普通、素地薄手、腰部から底部欠損
	14	椀蓋	口縁部欠損	〔112〕	〔66　57〕	〔31〕	腰部 4~7 底部 8.5	内面赤褐色、外面黒、横木取り、上縁部普通 腰部円弧形、高台部輪形、素地やや厚
B-3	15	椀	口縁~底部 1/3残存	(104)	〔44　34〕	〔31〕	腰部 2~5 底部 2.5	内外赤褐色、外面黒漆にて線描画(梅の花あり)、横木取り、上縁部普通、腰部やや張り気味、高台部輪形、素地普通
	16	椀	口縁~腰部 欠損		68　57	〔38〕	腰部 50~12 底部 11	木地を出しているため判別不可、横木取り上縁部普通、腰部平、高台部平、素地普通
	17	椀蓋	口縁高台欠 3/4残存	〔105〕	68　48	〔24〕	腰部 4~8 底部 5	内外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部やや張り気味、高台部欠、素地やや厚手
	18	椀	口縁高台欠 腰部1/4欠	(116)	〔54　46〕	〔78〕	腰部 3~7 底部 8	内面赤褐色、外面黒、外面朱漆で向い合った鶴二羽に松の模様、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	19	椀	腰部2/3残存	〔134〕		〔58〕	腰部 5~7	内外面赤褐色、横木取り、上縁部内湾気味、腰部円弧形、素地普通
B-4	20	椀	口縁部欠損 腰部1/3欠	(117)	59　52	〔35〕	腰部 2.5~6 底部 1	内外面黒、高台裏赤漆で直径1.6mmの円あり、稜線あり、横木取り、上縁部開き気味、腰部平、高台部輪形、素地普通、底部薄い
	21	椀	口縁高台欠 1/3残存	〔120〕	64　49	〔66〕	腰部 3~9 底部 10	内外桧皮色、高台外径黒、横木取り、上縁普通、腰部円弧形、高台部台形、素地普通
B-4	22	椀	口縁高台欠 腰部1/2欠	(106)	〔48　39〕	〔29〕	腰部 2.5~4 底部 4	内面赤褐色、外面黒、外面等間隔3ヶ所赤漆で亀甲二重の中空模様の家紋、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形薄手
	23	椀蓋	1/3残存	(117)	62　56	29	腰部 2~5 底部 5.5	内外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	24	椀	口縁高台欠 腰部1/2欠	(143)	〔70　60〕	〔71〕	腰部 7~10 底部 28.5	内外面黒、内外共漆が剥落して木地を出している部分あり、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部台形、素地厚手
	25	椀	口縁高台欠 1/3残存	(140)	56　44	〔44〕	腰部 3~5 底部 6	内外赤褐色、黒漆絵、腰部全面月・萩・とんぼ等描かれている、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	26	椀	口縁高台欠	〔131〕	〔68　59〕	〔86〕	腰部 3.5~9 底部 19	内面赤褐色、外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部やや張っている、高台部台形、素地やや厚手
	27	椀	口縁高台腰 欠1/3残存	(140)	69	61	腰部 5~10 底部 36	内外面黒、木地の部分が多い、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部無、厚手

単位 mm 〔 〕残存値 ( )推測値

出土位置	番号	種別	残存率	口径	高台外径 高台内径	器高	厚さ	色（内外）加飾法、形態等
B-4	28	椀	口縁高台欠	〔128〕	〔58 48〕	〔67 〕	腰部 4~11 底部 8	内外赤褐色、蒔絵、外面黒漆3枚の花びら、黒漆でふち取りされた梅の花びらを金で塗り中心の花びらは引っかき技法で施されている、高台部裏に黒漆で『久』という文字がある、横木取り、上縁部普通、腰部やや張っている、高台部輪形、素地やや厚手
	29	椀	口縁高台欠 2/3残存	(128)	62	〔55 〕	腰3~5 底部5	内面赤褐色、外面黒、丸に桜の家紋、花びら蒔絵、花の芯、丸に赤漆、丸に赤漆で葉が描かれている、葉は引っかき技法、横木取り
B-4	30	湯斗	口縁部欠損 腰部1/3欠	(135) 腰部	66	〔52 〕	腰部 6~9 底部 10	内面赤褐色、外面黒、底部に直径14mmの孔1ヶ所あり、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部平、素地厚手
	31	椀	口縁部欠損 2/3残存	(122) 腰部	61 47		腰部 4~8 底部 8	内外面黒、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	32	鼓か	腰部破片			〔65 〕		内外面黒、鼓か、縦木取り、腰部円弧形
	33	椀	口縁高台欠 1/2残存	(137)	68 60	〔48 〕	腰部 3~7 底部 6	内外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
	34	椀	口縁高台欠 腰部1/3残	(122)	68	〔50 〕	腰部 57 底部 7	内面栗皮色、外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	35	椀	口縁部欠損	(110)	60	〔28 〕	腰部 50 底部 2	内外赤褐色、黒漆、高台内裏に黒漆文様、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
	36	椀皿	口縁部欠損 1/8残存	(188) 上縁径	139	〔25 〕	腰部 6~10 底部 7	内面黒、腰部赤褐色、底部黒、口縁部分、黒漆でトリミング、横木取り、上縁部平縁腰部平、高台部平、素地厚手
	37	椀	口縁高台欠 底部1/3残	〔134〕	〔62 54〕	〔49 〕	腰部 3~5 底部 4.5	内面赤褐色、外面黒、蒔絵、外面金で二重丸の中に三日月の様な模様の家紋あり、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	38	椀蓋	口縁高台欠 腰部1/3欠	〔105〕	〔50 40〕	〔27 〕	腰部2.5~4.5 底部 3	内面赤褐色、外面黒、蒔絵、外面等間隔に3ヶ所二重輪に5枚の花びらを金で施した家紋あり、横木取り、上縁部普通、腰部やや張り出し気味、高台部輪形、素地薄手
	39	椀蓋	口縁部欠損 腰部1/3欠	〔108〕	48 41	〔28 〕	腰部2.5~4.5 底部 4	内面赤褐色、外面黒、外面全面花模様の赤漆絵、横木取り、上縁部普通、腰部やや張り出し気味、高台部輪形、素地薄手
B-4	40	椀蓋	口縁高台欠 天井1/2残	〔107〕	〔54 47〕	〔107〕	腰部 3~5 底部 3	内外赤褐色、蒔絵、金で栗模様、横木取り、上縁部開く、腰部円弧形、高台部輪形薄手
	41	椀	口縁部欠損 腰部1/2欠	〔112〕	50	〔69 〕	腰部 4~6 底部 19	内外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部平、素地普通
	42	椀	口縁高台欠 腰部1/5欠	〔117〕	〔58 47〕	〔74 〕	腰部4~11.5 底部20.5	内面赤褐色、外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部台形、素地厚手
	43	椀	口縁部腰部 1/10欠損	121	60 43	43	腰部 3~7 底部 8	内外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	44	椀	口縁高台欠 腰部1/3欠	欠損	〔53 44〕	〔30.5〕	腰部 4~6 底部 5.5	内外赤褐色、外面全面に黒漆で葉の模様、葉脈に引っかき技法、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部欠損、素地普通
	45	椀蓋	口縁部欠損 天井1/2残	〔109〕	〔52 44〕	〔25 〕	腰部 2.5~5 底部 5	内外赤褐色、外面黒漆模様、横木取り、上縁部普通、腰部開き気味、高台部輪形薄手
	46	椀	口縁高台欠 底部1/3残	(99)	〔48 36〕	〔31 〕	腰部 4~6 底部 9	内面赤褐色、外面黒、赤漆で家紋2ヶ所、等間隔に4ヶ所あったと思われる、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部台形、素地普通、高台部取
	47	椀	口縁高台欠	〔130〕	〔62 52〕	〔68 〕	腰部 4~7.5 底部 9	内外赤褐色、高台部裏黒、高台部内側の横に朱漆で「右」という文字あり、外面銀で花の模様あり、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	48	椀	口縁高台欠	欠損	64 54	49	腰部 7 底部 8	内面赤褐色、該日区黒、蒔絵、丸に花模様等間隔に3ヶ所、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
B-4	49	椀	口縁高台欠 1/3残存	欠損	65 57	51	腰部 4~8 底部 6	内外赤褐色、高台裏黒漆、高台裏赤漆、稜線あり、横木取り、上縁部欠損、腰部角ばる、高台部輪形、素地普通
	50	椀	口縁高台欠 腰部2/3欠	〔121〕	〔62 54〕	〔52 〕	腰部 3~6 底部 5	内面赤褐色、外面黒、蒔絵、外面二重丸金花赤漆の家紋3ヶ所残存、等間隔に5ヶ所あったと思われる、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
B-5	51	椀	高台部のみ		48 44	〔10 〕	底部 3.5	内面赤褐色外面黒、横木取り、高台部輪形
	52	椀	口縁部欠損 1/4残存	(118)	〔62 57〕	〔38 〕	腰部 3~7 底部 3	内面赤褐色、外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	53	椀	口縁高台欠 2/3残存	(120)	67 56	〔88 〕	腰部 5~14 底部 24	内外赤褐色、底部高台外径黒色系文様(判別不明)、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部台形、素地厚手

単位 mm 〔 〕残存値 （ ）推測値

出土位置	番号	種別	残存率	口径	高台外径 高台内径	器高	厚さ	色（内外）加飾法、形態等
B-5	54	椀	口縁〜腰部 1/2残	〔122〕	〔58 47〕	〔77〕	腰部 3.5〜11 底部 23.5	内外面黒、底部中心に赤褐色で4枚の花びらあり、横木取り、上縁部普通、腰部やや張った、高台部台形、素地やや厚手
	55	椀	ほぼ完形 口縁部欠損	〔120〕	66 52	〔49〕	腰部 4〜110 底部 8	内外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	56	椀	口縁部欠損 1/4残存	欠損	50 45	〔245〕	腰部 2〜4 底部 3	内面赤褐色、外面黒、外面金で「丸に抱きおもだか」家紋あり、2ヶ所等間隔に3ヶ所あったと思われる、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
	57	椀	口縁高台欠 1/3残存	〔102〕 腰部	56	〔32〕	腰部 4〜7 底部 4	内外赤褐色、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	58	椀	口縁高台欠 2/3残存	（124）	〔56 46〕	〔60〕	腰部 5〜1.2 底部 7.5	内面赤褐色、外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地厚手
	59	椀	口縁高台欠 腰部1/3残	〔120〕	〔58 51〕	〔73〕	腰部 4〜13.5 底部 10	内外面黒、外面等間隔に3ヶ所朱漆にて「丸に下がり藤」の家紋あり、外円分回し使高台部裏に朱漆で「弥右」の文字あり、横木取り、上縁部普通、素地厚手
	60	椀	口縁高台腰部2/3残存	（108）	60	〔46〕	腰部 4〜7 底部 8	内外面黒、赤線、腰部外面丸が三つ、横木取り、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	61	椀	口縁高台欠 1/3残存	（114）	欠損	〔81〕	腰部 5〜9.5 底部 25	内外面黒、内外面共剥落しており木地がでている、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部台形、素地厚手
	62	椀	高台部腰部 下半1/4残		62	〔60〕	腰部 8 底部 35	内面赤、外面判別不可、木地を出している部分補定困難、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部半、素地厚手
	63	椀	口縁〜腰部 3/4残存	127	〔66 57〕	〔85〕	腰部 6〜15 底部 21	内外赤褐色、底部に黒漆で文字のようなものが描かれている、横木取り、上縁部普通、腰部やや張った、高台部台形、素地厚手
	64	椀	口縁部欠損 1/2残存	〔136〕 上縁径	73 64	〔53.5〕	腰部 4〜9 底部 〔3.5〕	内外面黒、腰部に「かつらあり」、高台部裏が3mm程剥落、横木取り、上縁部普通、腰部やや張った、高台部輪形、素地厚手
	65	漆蓋	口縁高台欠 1/2残存	（82） 上縁径	〔46 38〕	〔19〕	腰部 3〜4.5 底部 1	内面赤褐色、外面黒、蒔絵、外面2ヶ所金で丸の家紋を確認したが等間隔に3ヶ所あったと思われる、横木取り、上縁部普通、腰部やや張った、高台欠損、素地やや薄手
	66	椀	口縁〜底部 1/3残存	（101）	〔54 46〕	〔42〕	腰部3.5〜4.5 底部 4.5	内面赤褐色、外面茶褐色、高台部裏黒、口唇部黒でトリミング、横木取り、上縁部内湾、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
B-5	67	椀	口縁高台欠 1/4残存	（119） 上縁径	欠損	〔35.5〕	腰部 4〜7 底部 6	内面赤褐色、外面黒、外面赤漆で紅葉模様全面に描写、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台欠損、素地普通
	68	椀	口縁底部欠 上縁2/3欠	（114）	〔54 44〕	〔33〕	腰部 3〜5.5 底部 2	内面赤褐色、外面黒、蒔絵、外面金で花のような模様あり、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部欠損、素地普通
	69	椀	腰〜上縁欠 1/3残存	（130）	75 70	〔44〕	腰部 5〜9 底部 6	内外赤褐色、外面黒、黒漆絵、全面に柳の葉が描かれている、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台輪形、素地普通
	70	椀	口縁高台欠 1/2残存	〔115〕 腰部	（60 47）	〔37〕	腰部 5〜10 底部 8	内面赤褐色、外面黒、稜線あり、横木取り、上縁部欠損、腰部角張る、高台部輪形、厚手
	71	漆蓋	口縁部欠損 天井1/3残	（110）	〔57 50〕	〔27〕	腰部 3〜5 天井部 5	内外赤褐色、横木取り、上縁部やや開いた、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	72	椀	口縁高台欠 1/3残存	（120） 上縁径	〔54 46〕	〔43〕	腰部 3〜6 底部 6.5	内外赤褐色、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	73	椀	口縁高台欠 1/2残存	（115）	55 49	〔54〕	腰部 3〜6 底部 4	内外赤褐色、黒漆、外面腰部全面に扇が蒔絵で描かれている、高台部外面「右」の文字黒漆、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
	74	椀	口縁高台欠 1/2残存	（128）	56	〔49〕	腰部 4〜6 底部 9	内外ベンガラ、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部平、素地普通
	75	椀	口縁高台欠 2/3残存	（150）	71	〔81〕	腰部 4〜11 底部 27	内外面黒、木地を出している部分が多い、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	76	椀	口縁高台欠 1/3残存	（117） 腰部	72 62	〔24〕	腰部 6〜9 底部 5	内面赤褐色、外面黒、赤漆で丸に三つ巴2ヶ所菊文様1ヶ所あり、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	77	椀	口縁高台欠	〔124〕	〔60 50〕	〔50〕	腰部 2〜5.5 底部 7	内面赤褐色、外面黒、外面等間隔に赤漆で二重輪形の中に3枚の花びらの形の紋様あり、外円分回し使用、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
	78	椀	口縁高台欠	（110）	54	〔74〕	腰部 4〜9 底部 21	内面栗皮色、外面黒、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部平、素地厚手

単位 mm 〔 〕残存値 （ ）推測値

出土位置	番号	種別	残存率	口径	高台外径 高台内径	器高	厚さ	色（内外）加飾法、形態等
B 5	79	椀	上縁高台欠	(128)	54 39	〔69〕	腰部 3~10 底部 11	内外赤褐色、黒漆絵、全面に判別不可の文様あり、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	80	椀	口縁高台欠 7/8残存	(110)	59 50	〔80〕	腰部 4~11 底部 25	内面赤褐色、外面黒、木地多い、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部平、厚手
	81	椀蓋	口縁高台欠	(105)	42 37	〔28〕	腰部 5 底部 9	内外赤褐色、赤漆、内面天井部線描、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
	82	椀	口縁高台欠 2/3残存	(110)	58 44	〔70〕	腰部 7~11 底部 25	内面ベンガラ、外面黒、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部平、素地厚手
	83	椀	口縁高台欠	〔140〕	68	〔61〕	腰部 7~10 底部 12	内面赤褐色、外面黒、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部平、素地普通
	84	椀	口縁高台欠	〔134〕	〔64 52〕	〔69〕	腰部 3~8 底部 10	内外赤褐色、高台部裏に黒漆で『久』の文字あり、横木取り、上縁部普通、腰部やや張った、高台部輪形、素地普通
	85	椀蓋	口縁高台欠 1/2残存	(88)	40 29	〔29〕	腰部 4 底部 3	内外赤褐色、黒漆、腰部全面に花に鳥画、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部欠、素地薄手
	86	漆液容器	口縁高台欠 1/4残存	欠損	〔59 51〕	〔17〕	腰部 3~4 底部 4.5	内外赤褐色、高台部裏黒、内側黒漆を拭いた跡残る、漆液容器か、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
B 6	87	椀蓋	口縁~底部 1/3残存	(82)	48 42 天井部	20	腰部 2~4.5 天井部 3	内面赤褐色、外面黒、赤漆で外面・天井部に「丸に二つ引き」の家紋あり、等間隔に3ヶ所あり、横木取り、上縁部普通、腰部やや張る、高台部輪形、素地薄手
	88	椀蓋	口縁高台欠 腰部1/2残		40 30	〔19〕	腰部 5 底部 4~8	内面赤褐色、外面黒、蒔絵、線描で全面にあったと思われる、腰部円弧形
	89	皿	口縁底部欠 1/3残存	〔112〕		〔21〕	腰部 3.5~6 底部 欠損	内外面黒、横木取り、上縁部普通、素地普通
	90	椀	口縁高台欠 2/3残存	(106) 上縁径	〔56 48〕	〔31〕	腰部 3~5 底部 2	内外赤褐色、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	91	椀蓋	口縁部欠損 1/5残存	(86) 上縁径	47 34	〔21〕	腰部 3~4.5 底部 2	内外赤褐色、高台部黒漆でトリミング、外面黒漆で葉模様、横木取り、上縁部普通、腰部角張る、稜線、高台部輪形、素地普通
	92	椀蓋	口縁高台欠	〔101〕	〔51 43〕	〔21〕	腰部 3~7 底部 3.5	内面赤褐色、外面黒、外面等間隔に3ヶ所金で「源氏」の家紋あり、高台部裏にも家紋あり、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	93	椀蓋	口縁~腰部 1/3欠損	119	46 39 天井部	32	腰部 3~4 底部 7	内外赤褐色、口縁部分は黒漆でトリミングされている、横木取り、上縁部開いた、腰部平、天井部輪形、素地やや薄手
	94	椀蓋	1/5残存	(112)		〔13〕		内外面黒、横木取り、上縁部・素地普通
	95	椀蓋	口縁~腰部 1/3欠損	113	39 36	31	腰部 1~3.5 天井部 3	内外赤褐色、蒔絵、金で松の葉の模様、蓋の裏に漆の塗った跡あり、横木取り、上縁部普通、腰部平、天井部輪形、素地薄手
B-6	96	椀	口縁高台欠 1/2残存	(112)上縁径	〔56 44〕	〔43〕	腰部 3~7 底部 5	内面赤褐色、外面黒、外面赤漆にて線模様あり、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	97	椀	口縁高台欠	102腰部	50	〔50〕	腰部 3~8 底部 9	内外赤褐色、高台裏黒漆、横木取り、上縁欠、腰部角張る、かつらあり、高台部台形
	98	椀	口縁高台欠 1/3残存	(127)腰部	55 48	63	腰部 4~9 底部 10	内外赤褐色、黒漆、菊の花文様が水文様と全面に描かれている、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	99	椀	口縁底部欠 腰部1/2欠	〔118〕	〔59〕	〔58〕	腰部 4~9 底部 欠損	内外赤褐色、蒔絵「丸に三つ柏」のような家紋2ヶ所確認したが、等間隔に3ヶ所あったと思われる、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部平、素地普通
	100	椀	口縁底部欠 腰部破片	欠損	欠損	〔45〕	腰部 3.5~9 底部 欠損	内面赤褐色、外面朱、横木取り、素地普通
	101	椀	口縁部欠損 1/2残存	(111)	48 36	〔40〕	腰部 3~9 底部 5	内外面黒、蒔絵、桜の花の回りに直径6mmの三つ輪全面に施す、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
	102	椀	口縁高台欠 1/3残存	(115)	47 40	〔23〕	腰部 3~5 底部 5	内面赤褐色、外面黒漆、外面腰部高台と同心円に蒔絵、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
	103	椀	腰部1/3残	(113)	欠損	〔21〕	腰部 5~6	内外赤褐色、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	104	椀蓋	口縁高台欠 1/10欠損	(112)	45 36	〔31〕	腰部 4~5 底部 6	内外栗皮色、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
	105	椀	口縁高台欠 1/4残存	(135)	55	〔47〕	腰部 35 底部 11	内外赤褐色、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部欠損、素地厚手

単位 mm 〔 〕残存値 ( )推測値

出土位置	番号	種別	残存率	口径	高台外径 高台内径	器高	厚さ	色（内外）加飾法、形態等
B-6	106	椀	口縁高台部 1/2残存	(115)	63 55	51	腰部 4~8.5 底部 4	内外赤褐色、腰部に稜線あり、かつらあり、横木取り、上縁部やや内湾した、腰部角張った、高台部輪形、素地普通
	107	椀	口縁高台欠 2/3残存	〔126〕上縁径	〔60 52〕	〔42 〕	腰部 4~6 底部 3.5	内外赤褐色、高台裏黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
B-7	108	椀	口縁高台欠	(103)	〔55 49〕	〔28 〕	腰部 3~6 底部 4	内面赤褐色、外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部張った、高台部輪形、素地普通
C-3	109	椀	口縁高台欠 1/5残 腰部	〔111〕	〔58 51〕	〔55 〕	腰部1.5~10 底部 6	内外面黒、高台部裏に朱漆で『り』文字有、稜線2本、かつらあり、横木取り、上縁部普通、腰部角張った、高台部輪形、素地普通
	110	椀	腰部上半~口縁部欠損	(120)	69	〔39 〕	腰部 57 底部 4	内外赤褐色、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
	111	椀	口縁高台欠 1/3残存	(122)上縁径	欠損	〔42 〕	腰部 3~5 底部 欠損	内外赤褐色、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部欠損、素地普通
C-4	112	椀	口縁高台欠 1/2残存	(110)上縁径	〔56 49〕	〔25 〕	腰部 3~5.5 底部 3.5	内面赤褐色、外面黒、外面2ヶ所赤漆で「丸に木瓜」の家紋あり、高台部裏に赤漆で桜の花あり、横木取り、上縁部普通、腰部やや張った、高台部欠損、素地普通
	113	椀蓋	口縁高台欠 1/3残存	(94)上縁径	〔45 40〕	〔18 〕	腰部 2~5 底部 2	内面赤褐色、外面黒、外面赤漆で「丸に三つ柏」の文様2ヶ所確認、等間隔に3ヶ所あったと思われる、横木取り、上縁部普通、腰部やや張った、高台部輪形、素地薄手
	114	椀	口縁高台欠 底部欠損		58 47	〔43 〕		内外面黒、蒔絵、亀甲に花家紋1ヶ所、菊の花文様も描かれている、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、素地普通
	115	椀蓋	口縁高台欠上縁底部残	〔94〕上縁径	〔54 46〕	〔21.5〕	腰部 4~7底部 4.5	内面赤褐色、外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部稜線1本あり、高台部欠損、素地普通
	116	椀	口縁部欠損	〔98〕上縁径	48	〔27 〕	腰部 8~12底部 7	内外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部張った、高台部平、素地厚手
	117	椀蓋	上縁高台欠 ほぼ完形	(89)	37 30	〔33 〕	腰部 4~7 底部 12	内外赤褐色、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	118	椀	口縁高台部 1/3残存	123	〔68 59〕	〔47 〕	腰部 3~6.5 底部 6	内外面黒、蒔絵、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	119	椀	口縁高台欠	(129)	56 47	〔69 〕	腰部 5~7 底部 120	内外面赤、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地厚手
	120	椀	腰部破片				腰部 4~5	内外赤褐色、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部欠損、素地薄手
	121	椀	口縁高台欠 1/2残存	(128)	48 38	〔45 〕	腰部 3~8 底部 6	内外赤褐色、横木取り、上縁部欠損、腰部角張った、高台部輪形、素地薄手
	122	椀	口縁高台欠 腰部2/3欠	〔114〕	〔56 48〕	〔51 〕	腰部 4~8 底部 11.5	内面赤褐色、外面黒、蒔絵、高台裏朱漆で「七ケ」文字、外面金で葉模様、横木取り、上縁欠、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
C-4	123	椀蓋	1/2残存	(91)	44 40	27	腰部 2~5 底部 2	内外面黒、蒔絵、腰部外面線描が全面に描かれていたと思われる、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
	124	椀	口縁高台欠 腰部1/2欠	(109)	60 35	〔30 〕	腰部 3~4 底部 2	内面赤、外面黒、丸に梅鉢文様、高台部裏線描文様、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手、分回し使用
	125	椀蓋	口縁高台欠 2/3残存	(85)	54 48	〔20 〕	腰部 4~6 底部 4	内面赤褐色、外面黒、赤漆、丸に木瓜腰部に等間隔に3ヶ所、高台表に山桜文様1ヶ所分回し使用、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
	126	椀	高台部欠損 腰部1/3欠	(119)	58 43	〔41 〕	腰部 4~7 底部 5	内面檜皮色、外面黒、蒔絵、金、笹に梅の花の文様全面に描かれている、梅の花については引っかき技法、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
	127	椀	高台底部欠 口縁1/3残	(115)	欠損	〔55 〕	腰部 3~8 底部 欠損	内面赤褐色、外面黒、蒔絵、腰部上下部幅6mm金直線全面に2本、横木取り、上縁部普通、腰部角張った、高台部欠損、素地普通
	128	皿	口縁高台欠 腰部1/3残		48 40	〔18 〕	腰部 7~8 底部 90	内面赤、外面黒、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	129	椀	口縁高台欠 腰部1/2残	(120)	70 46	〔55 〕	腰部 7~14 底部 15	内面赤褐色、外面黒、横木取り、上縁部円弧形、腰部角張る、高台部輪形、素地普通
	130	椀蓋	口縁部欠損 1/2残存	〔112〕上縁径	〔52 46〕	〔24 〕	腰部 3~4.5 底部 1	内外赤褐色、外面黒漆にて二重丸に花の家紋2ヶ所確認したが等間隔に3ヶ所あったと思われる、横木取り、上縁部やや開いた、腰部張った、高台部輪形、素地薄手

単位 mm 〔 〕残存値 ( )推測値

出土位置	番号	種別	残存率	口径	高台外径 高台内径	器高	厚さ	色（内外）加飾法、形態等
C-4	131	椀	口縁高台欠 腰部1/2欠	(117)腰部径	56 36	〔45〕	腰部 4~12 底部 10	内外赤褐色、黒漆、家紋かと思われる丸の一部1ヶ所、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部輪形、素地厚手
	132	椀	口縁～腰部 1/5欠損	110	〔52 47〕	42	腰部 2.5~6 底部 1.5	内外赤褐色、蒔絵、外面全面に線描画あり、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通、底部薄い
	133	椀	口縁部欠損 腰部1/2欠	〔141〕	〔63 55〕	〔73〕	腰部 3~10 底部 9	内外赤褐色、蒔絵、外面銀で葉模様あり、横木取り、上縁部普通、腰部やや張る、高台部輪形、素地やや厚手
	134	椀	口縁高台欠	(116)	〔62 52〕	〔54〕	腰部 3~7 底部 8	内外面黒、外面赤漆で花模様、格模様、横木取り、上縁普通、腰部円弧形、高台部輪形
	135	椀	口縁～腰部 欠損2/3残	(126)	55 36	59	腰部 4~13 底部 9	内外赤褐色、稜線あり、木地を出している部分多い、横木取り、上縁部普通、腰部角張った、高台部輪形、素地普通
	136	椀	口縁高台欠 上縁1/4欠	〔107〕	〔58 50〕	〔91〕	腰部 3~13 底部 14	内面赤褐色、外面黒、外面朱漆で松にくじゃく羽模様、松は引っかき技法、横木取り、上縁普通、腰部円弧形、高台部輪形、厚手
	137	椀	口縁高台欠 2/3残存	(113)上縁径	〔57 49〕	〔61〕	腰部 4~8 底部 12	内外赤褐色、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部台形、素地やや厚手
	138	椀	口縁高台欠 2/3残存	(122)上縁径	欠損	〔44〕	腰部 3~6 底部 3.5	内外赤褐色、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、稜線あり、高台部欠損、素地普通
	139	椀	口縁高台欠 1/2残存	〔112〕上縁径	〔54 46〕	〔37〕	腰部 3~4.5 底部 3	内外赤褐色、蒔絵、外面等間隔に3ヶ所金で丸に花びらの家紋あり、全面に6ヶ所あったと思われる、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地やや薄手
	140	椀	口縁高台欠 3/4残存	〔115〕	64 56	〔42〕	腰部 4~9 底部 6	内外赤褐色、黒漆絵、高台部裏線描あり、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	141	椀	口縁高台欠 1/3残存	欠損	〔50 46〕	〔21〕	腰部 3~6 底部 3.5	内面赤褐色、外面黒、蒔絵、横木取り、上縁部欠損、腰部角張った、稜線あり、高台部欠損、素地普通
C-5	142	椀蓋	上縁～天井 1/3残存	〔97〕	〔48 42〕天井部	〔25〕	腰部 3~5 底部 4.5	内面赤褐色、外面黒、赤漆、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、天井部輪形、素地薄手
	143	椀蓋	口縁高台欠	(90)	50 37	〔27〕	腰部 3~7 底部 5	内面赤、外面黒、蒔絵、丸に亀甲花文様、家紋3ヶ所、底部外面梅の花の文様あり、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	144	椀	口縁高台欠 腰部1/3欠	(133)上縁径	〔61 52〕	〔69〕	腰部 4~7 底部 6	内外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地やや厚手
	145	椀	高台部欠損 腰部1/3欠	(114)	〔56 52〕	〔78〕	腰部 2~13 底部 15	内面赤褐色、外面黒、蒔絵、外面等間隔3ヶ所丸に四角を2こ組合わせた中に桜の花紋、金で施す、高台部分丸みをおびる、横木取り、上縁部普通、腰部張る、高台部台形、素地やや厚手
	146	椀	口縁部欠損 1/2残存	(109)上縁径	58 54	〔35〕	腰部 3~5 底部 2	加飾文様等なし、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地やや薄手
C-5	147	椀	口縁高台欠 腰部1/3欠	〔104〕	〔57 50〕	〔34〕	腰部 4~8 底部 3	内面赤褐色、外面黒、外面等間隔に3ヶ所金で丸に花の家紋、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	148	椀	口縁高台欠 腰部1/4残	〔114〕	〔56 50〕	〔40〕	腰部3.5~10 底部 4	内外面黒、赤漆絵、外面1ヶ所丸桔梗赤漆で家紋あり、外面2ヶ所赤漆で模様あり、横木取り、上縁部普通、腰部やや張った、高台部輪形、素地普通
	149	椀	口縁高台欠 3/4残存	(131)上縁径	〔57 50〕	〔38〕	腰部3.5~8.5 底部 9	内外面赤褐色、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	150	椀	口縁高台欠 腰部1/4残	(135)	欠損		腰部 3~10 底部 欠損	内面赤褐色、外面黒、赤漆、外面腰部菊の花を横に表現したもの全面に描かれている、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部欠損、素地普通
	151	椀蓋	口縁高台欠 腰部1/3残	(95)	欠損		腰部 3~6 底部 欠損	内外赤褐色、横木取り、上縁部欠損、腰部角張り気味、高台部欠損、素地薄手
	152	椀	上縁高台欠 2/3残存	(132)	65 52	〔74〕	腰部 3~10 底部 10	内外赤褐色、横木取り、上縁部普通、腰部角張った、高台部輪形、素地普通
	153	椀蓋	上縁高台欠 1/3残存	欠損	〔52 44〕	〔17〕	腰部 4~5 底部 1	内外赤褐色、横木取り、上縁部欠損、腰部平、高台部欠損、素地やや薄手
	154	椀蓋	口縁高台欠 腰部2/3欠	(106)腰部径	〔56 48〕	〔23〕	腰部 4~5 底部 5	内外赤褐色、稜線あり、横木取り、上縁部欠、腰部角張る、高台部輪形、素地普通
	155	椀	口縁高台欠 腰部1/2欠	〔134〕	〔62 54〕	〔82〕	腰部 4~9 底部 12	内面赤褐色、外面黒、高台部裏に朱漆で!のマークあり、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	156	椀	口縁高台欠 2/3残存	(110)	56 50	〔50〕	腰部 3~12 底部 5	内外赤褐色、横木取り、上縁部欠、腰部角張る、かつらあり、高台部輪形、素地普通

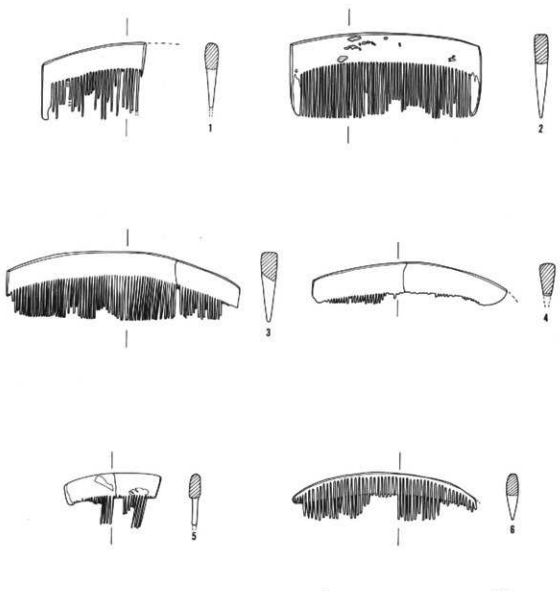
単位 mm 〔 〕残存値 （ ）推測値

出土位置	番号	種別	残存率	口径	高台外径 高台内径	器高	厚さ	色（内外）加飾法、形態等
C-5	157	椀蓋	口縁高台欠 1/2残存	(113)腰部径	〔54 46〕	〔22 〕	腰部 3～5 底部 1.5	内外赤褐色、横木取り、上縁部欠、腰部角張る、稜線あり、高台部輪形、素地薄手
	158	椀	腰部破片		欠損	〔24 〕	腰部 3～5	内面赤褐色、外面黒、蒔絵、横木取り、上縁部欠損、腰部稜線あり、高台部欠損
	159	椀	腰部破片				腰部 3～4	内外赤褐色、黒漆、菊の花模様と針描画
	160	椀	口縁高台欠 1/2残存	(131)上縁径	〔60 50〕	〔43 〕	腰部 3～5 底部 5	内外赤褐色、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	161	椀蓋	口縁高台欠 2/3残存	(95)上縁径	欠損	〔21 〕	腰部2.5～4.5 底部 1.5	内外赤褐色、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部欠損、素地薄手
	162	椀	口縁高台欠 腰部1/3欠	(112)上縁径	〔46 40〕	〔36 〕	腰部 2～5 底部 2	内面赤褐色、外面黒、稜線、横木取り、上縁普通、腰部角張る、高台輪形、素地薄手
C-6	163	椀	口縁高台欠 腰部破片	欠損	62 56	24	腰部 4～5 底部 4	内外面黒、赤漆、丸に花紋様赤漆絵で描かれている、等間隔に3ヶ所あったと思われる、分回し使用、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	164	椀	口縁腰部上半部欠損	〔113〕腰部径	81.5 66	49	腰部 13 底部 9	外面黒、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部輪形、素地普通
	165	皿	1/2残存	71	欠損	11	底部 7	内外赤褐色、文様等なし、喉木取り、上縁部・素地普通
	166	椀	口縁高台欠 上縁部欠損	〔100〕	〔52 45〕	〔33 〕	腰部3.5～5.5 底部 1.5	内面赤褐色、外面黒、外面等間隔に3ヶ所金で「丸に桐」の家紋あり、円分回し使用、高台部裏に金で桜の紋、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
	167	椀	腰部2/3残存、上縁欠	欠損	欠損	欠損	欠損	内面栗皮色、外面黒、腰部外面赤漆絵、家のマークが2ヶ所確認、推定2ヶ所あったと思われる、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部欠損、素地普通
	168	椀蓋	口縁高台欠 腰部1/2欠	〔97〕腰部径	欠損	〔20〕	腰部 4～5 底部 3	内面赤褐色、外面黒、外面等間隔に3ヶ所朱漆の上から銀で加飾されている「丸に蝶」の家紋、高台裏も有、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部欠損、素地普通
	169	椀	口縁高台欠 1/4残存	(110)	49	〔39〕	腰部 40 底部 7	内外赤褐色、黒漆絵、腰部外面丸に梅の花、分回し使用、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部欠損、素地普通
	170	椀	口縁高台欠 1/3残存	(95)腰部径	50 44	〔30〕	腰部 3～8 底部 6	内外赤褐色、黒漆、横木取り、上縁部欠損、腰部普通、高台部輪形、素地普通
	171	椀蓋	口縁高台欠 2/3残存	(112)上縁径	〔56 48〕	〔31〕	腰部 3～5 底部 2.5	内外赤褐色、稜線あり、横木取り、上縁開腰部角張る、高台部輪形、素地やや薄手
C-7	172	椀	口縁高台欠 2/3残存	(87)	56 41	〔25 〕	腰部 5 底部 2	内外栗皮色、黒漆絵、丸に花文様等間隔に3ヶ所、分回し使用、横木取り、上縁部普通、腰部角張る、高台部輪形、素地普通
	173	椀	口縁高台欠 1/2残存	(116)	56 47	〔31 〕	腰部 3～5 底部 3	内面赤、外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
不明	174	椀蓋	高台部欠損 口縁～腰部 1/7残存	(116)	欠損	〔22 〕	腰部 4～5 底部 欠損	内外赤褐色、蒔絵、外面二重丸黒漆、花びら金で施された家紋1ヶ所確認、横木取り、上縁部やや開いた、腰部平、高台部欠損、素地普通
	175	椀	口縁高台欠 1/3残存	欠損	〔50 44〕	〔21 〕	腰部 4～7 底部 4	内面赤褐色、外面黒、蒔絵、外面に桜の花模様、高台部裏にも、横木取り、上縁部欠損、腰部円弧形、高台部欠損、素地普通
	176	椀	口縁部欠損 上縁～高台部1/2残存	(144) 上縁径	〔72 65〕	〔87 〕	腰部 4～10 底部 15	内面赤褐色、外面黒、蒔絵、外面金で一重丸に花の家紋2ヶ所確認、等間隔に3ヶ所あったと思われる、花びらには赤漆と金で施されている、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部台形、素地厚手
排水溝	177	椀	口縁部欠損	(137)	74 67	〔20 〕	腰部 6～1 底部 6	内外黒、高台外面赤漆に「さ」、横木取り、上縁部欠損、高台部台形、素地普通
	178	椀	口縁高台欠 腰部1/4欠	〔131〕	〔59 49〕	〔68 〕	腰部 5～10 底部 12.5	内面赤褐色、外面黒、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地やや厚手
	179	椀	口縁高台欠 腰部2/3欠	〔125〕	〔58 48〕	〔56 〕	腰部 5～11.5 底部 8	内面赤褐色、外面黒、外面丸に紅葉の家紋(金)2ヶ所確認、等間隔に3ヶ所あったと思われる、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地厚手
トレンチ	180	椀	口縁高台欠 1/5残存	(102)上縁径	(48 36)	〔33 〕	腰部 3～4 底部 4	内面茶褐色、外面赤褐色、加飾なし、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地薄手
	181	椀蓋		22	58 51	〔61 〕	腰部 6～19 底部 15	内面赤褐色、外面黒漆、赤漆家紋、丸に三巴の変形家紋等間隔に3ヶ所、分回し使用、重厚な作り、横木取り、上縁部普通、腰部円弧形、高台部輪形、素地厚手

第5表　櫛一覧表

単位　mm

	出土位置	残存長	残存幅	厚さ	密度（本／3cm）	歯根本	備　考
1	B-6	〔61〕	〔46〕	7	17	平	
2	C-5	113	50	8	17	平	赤褐色の漆塗布
3	C-5	〔138〕	41	9	21	斜め	
4	C-5	〔116〕	〔23〕	9	20	平	
5	C-6	58	33	7	11（5mm×3）	斜め	赤漆で文様か？
6	南排水溝	〔109〕	29	6.5	15	平	



第29図　櫛実測図

③　下　駄（第31図1～87、図版32～46）

合計87点出土した。87点の下駄を大きく4つに形態別に分類すると差歯下駄（歯と台をそれぞれ別々に作り、歯を台に差し込む）が14点、連歯下駄（全て台と歯とを一木から作る）が44点、草履下駄が24点、異形下駄（上記の差歯、連歯、草履下駄の分類に属さない）が5点である。

さらに、差歯下駄の中を露卯（台に枘穴があり歯を台表まで出している）と陰卯（台裏に溝を切り歯をはめ込み、表に歯の出てこないもの）に分けると、それぞれ7点ずつである。

下駄の出土層位は、漆器同様主に第Ⅰ層～第Ⅱ層である。重機による表土除去を終え、全面精査に入って間もなく検出されたことからも考えられるように比較的年代的には新しいものと思われる。また、出土位置については、1区（調査区南側）からの出土が顕著であった。B－7の北側～B－6グリッド、C－6の北側～C－5グリッドにかけて集中域がみられた。（第30図参照）　完全に対になるものはなかったが2～3個ずつまとまって出土することが多かった。次に、出土した下駄を分類別にみてみると下記のようになる。

差歯下駄（No.1～14）の大部分の歯は、前・後歯共欠損ないし磨耗しているものが多く、構造上それは、止むを得ないように思う。また、上流から流されてきたことを考えると途中で抜け落ちることは十分推測される。そのような状態の中で、前歯を半分程欠損しているが、かろうじて歯の原形を留めているのが、No.8である。1は後歯のみ残存している。木取りは、4・10の2点が柾目取りで他の12点は板目取りであり、板目取りのものは木表を上面にしているものが多い。特徴的な下駄をあげると、5は後歯の折れた部分が残っている。また、表面には『やⅠ』の焼印がみられる。三島プラザホテルの前身は元旅館であったので、もしかしたらそこのものかもしれない。13には、一部漆痕が2ヶ所程残っている。

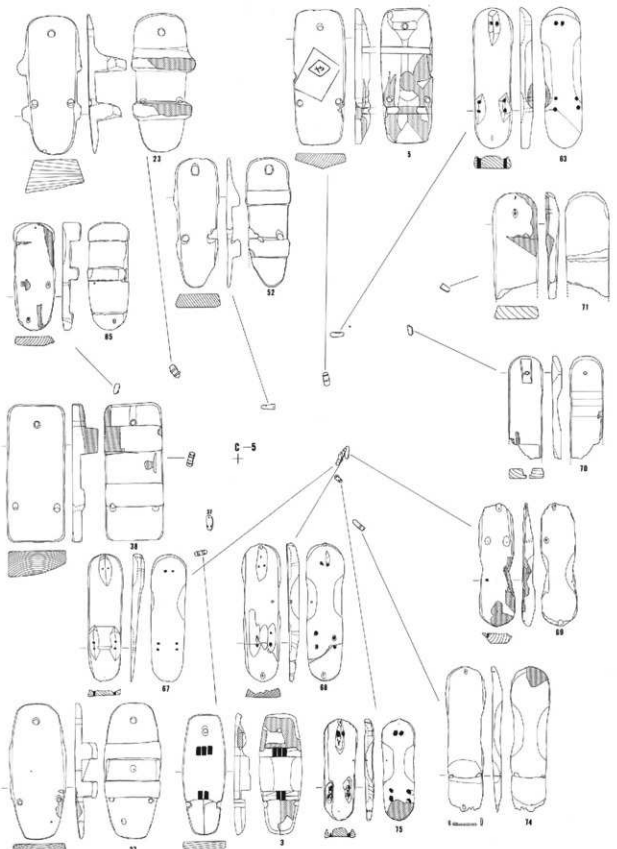
連歯下駄（No.15～58）は、全体の出土数の約51%を占める。No.17・38・42・51・57は歯が片方に擦り減っていたりする点はみられるものの、ほぼ完形に近い連歯下駄である。木取りは、22のみ柾目取りで他はすべて板目取りである。特徴のあるものとしては、31の表面に『平』の焼印がある。No.5と共に焼印のある下駄の出土は初例であるだけに注目される。刃物の加工痕の有る下駄は、18・21・29・42～45・49があげられる。また、25・30・49には鋲穴痕、26・27には鋲痕が認められる。24・26はサイズから判断して子供用の下駄と思われる。40は、幅が55mmと極端に狭く鼻緒部分と細い下駄である。

草履下駄（No.59～82）の特徴としては、木釘が一部残っている（No.64・66・69・73・75）点があげられる。66は、前後共残っている。木取りは、74が柾目取りで他はすべて板目取りである。75・82は、子供用と思われる。また、67～69の3点は、ほぼ同一場所から同時に出土した。

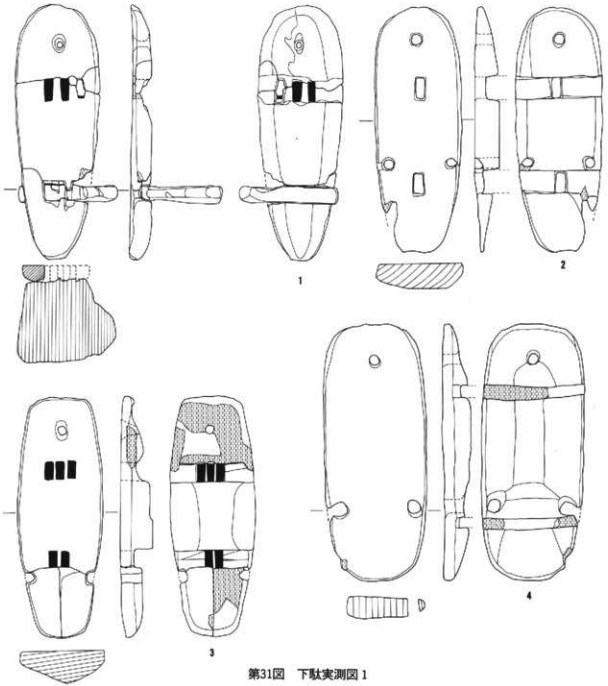
83～87は異形下駄に入るが、特筆すべき点として三本歯の下駄（85～87）の出土があげられる。御殿川流域遺跡群の調査では今回が初めてで、県外では東京の三栄町遺跡で出土しているが、出土例は非常に少ないようである。86は子供用、87はほぼ完形品である。83は、出土当時は舟形木製品と思われたが、水洗・整理段階で判明した。通称ボックリ下駄と名付ける。

第6表　下駄出土点数と割合

差歯下駄	14　点	16　%
連歯下駄	44　点	51　%
草履下駄	24　点	27　%
異形下駄	5　点	6　%



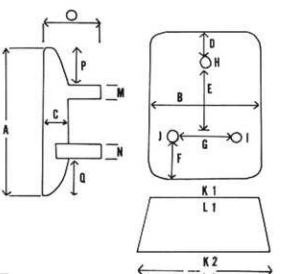
第30図　下駄集中分布図

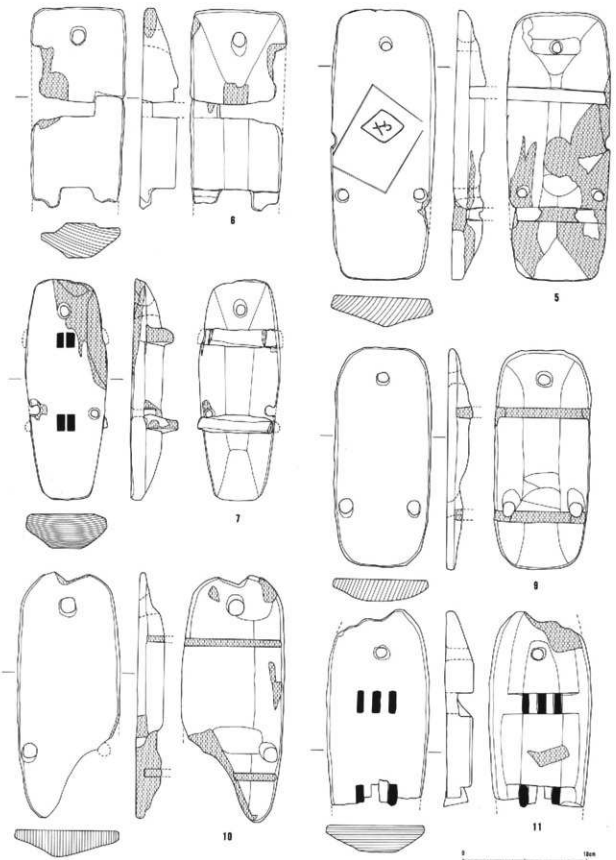


第31図　下駄実測図１

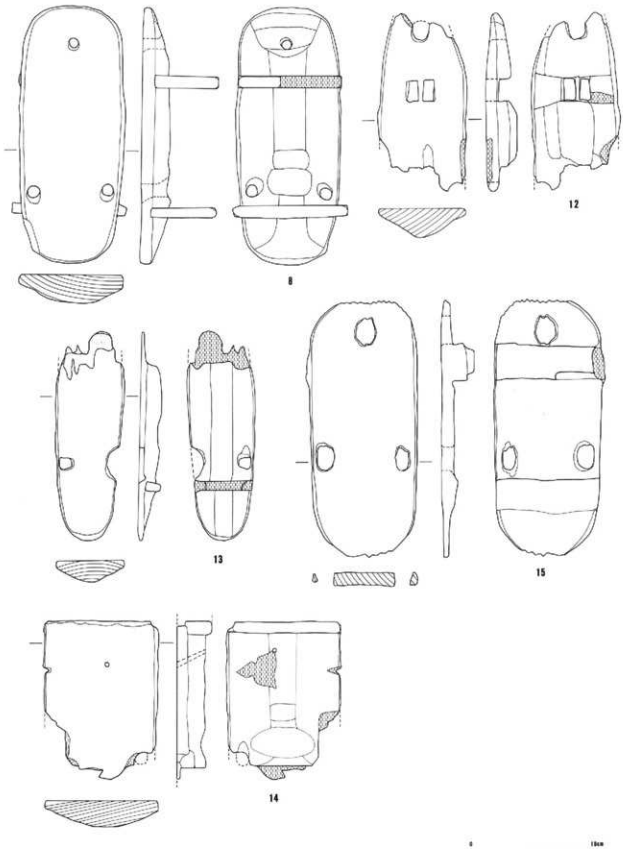
第32図　下駄計測部位名称

A：長さ（全長）	J：左緒穴縦長径
B：幅（最大幅）	K：前歯幅（K１－上、K２－下）
C：厚み	L：後歯幅（L１－上、L２－下）
D：前木口～前緒穴	M：前歯厚さ
E：前緒穴～後緒穴	N：後歯厚さ
F：後緒穴～後木口	O：全高
G：後緒穴間	P：前顎～前歯
H：前緒穴縦長径	Q：後顎～後歯
I：右緒穴縦長径	

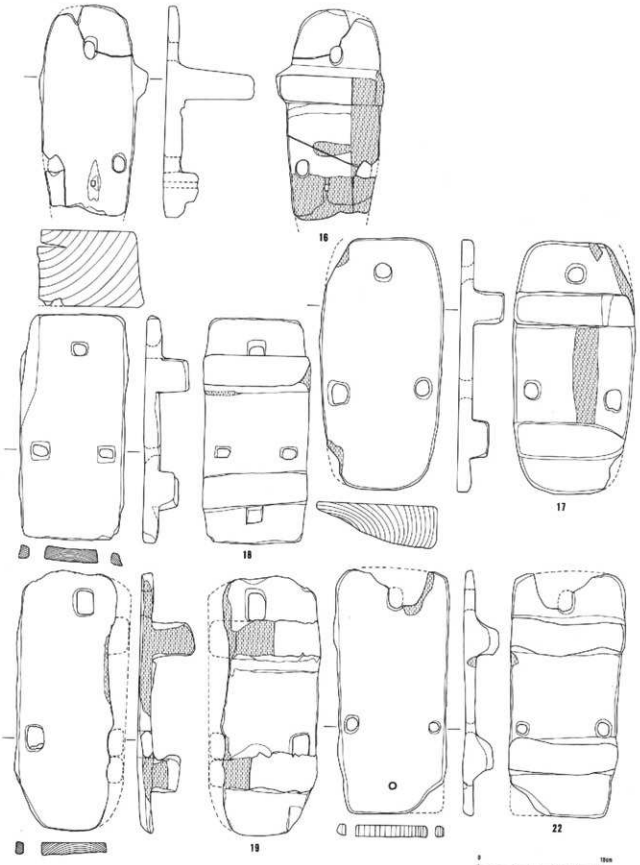




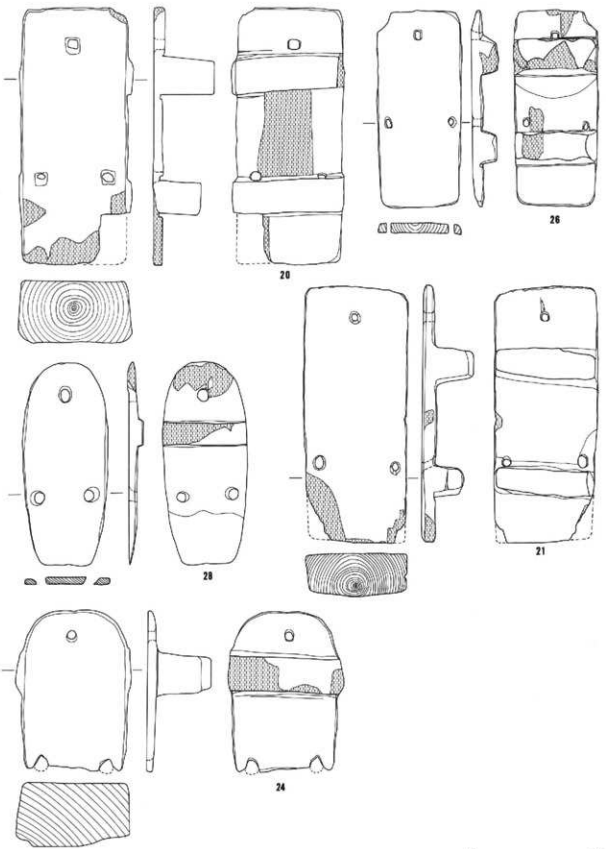
第31図　下駄実測図 2



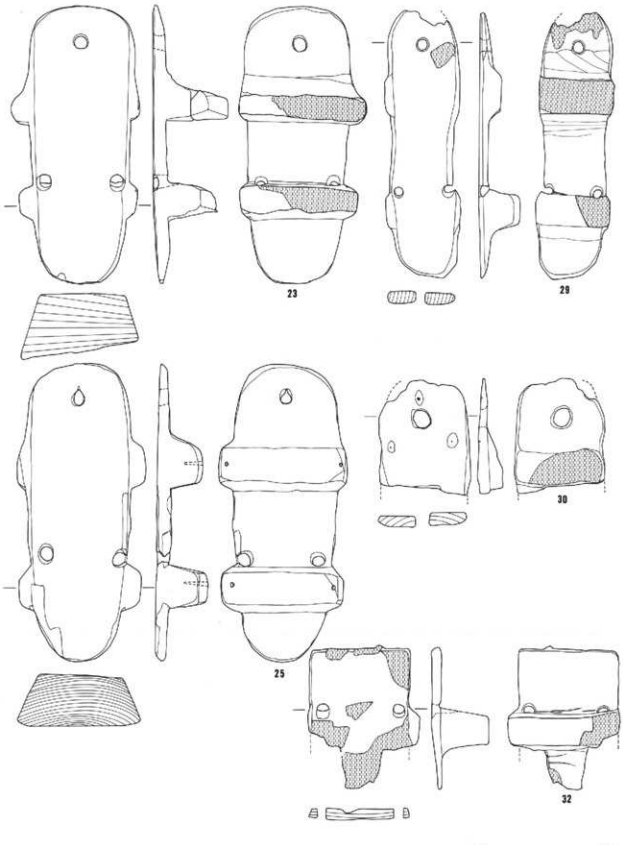
第31図　下駄実測図３



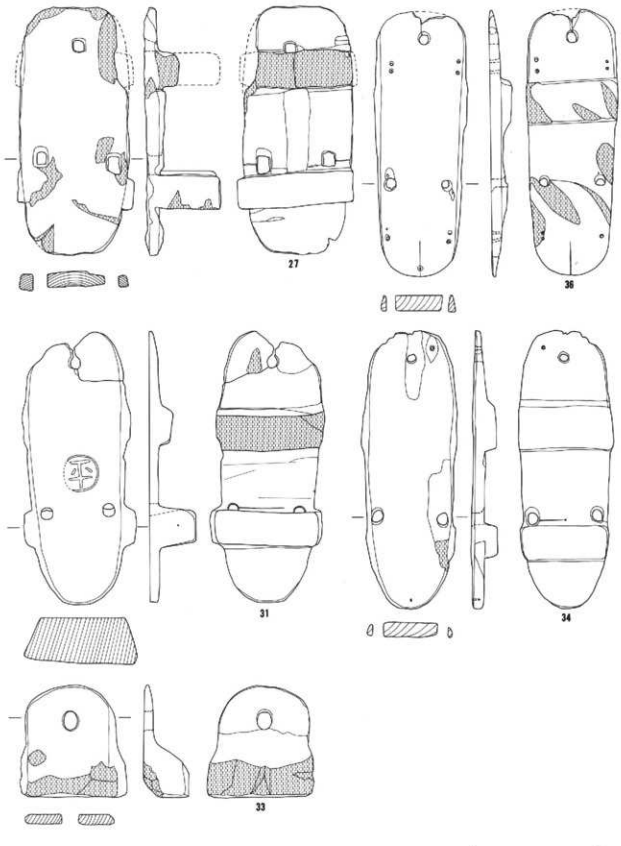
第31図　下駄実測図 4



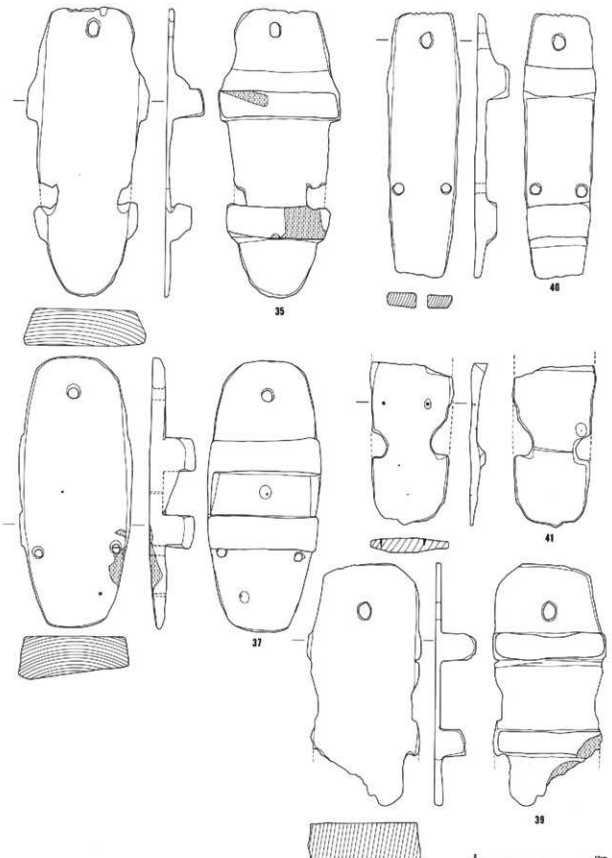
第31図　下駄実測図 5



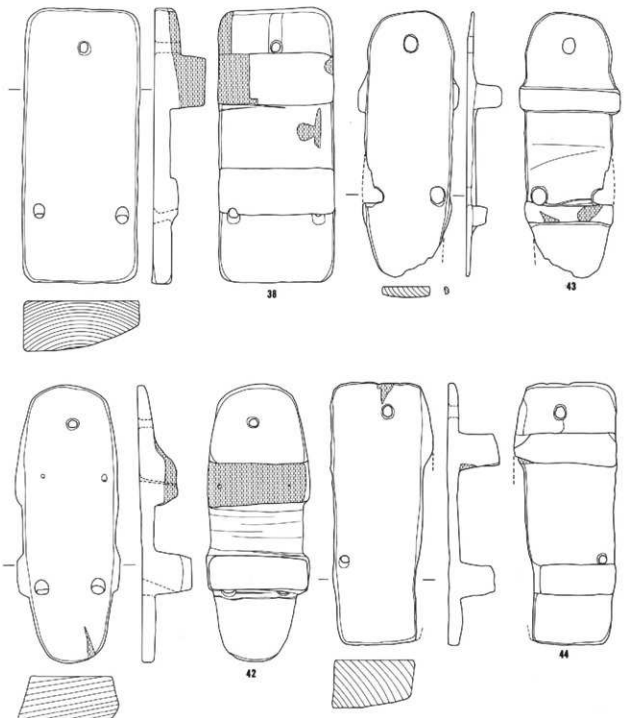
第31図　下駄実測図 6



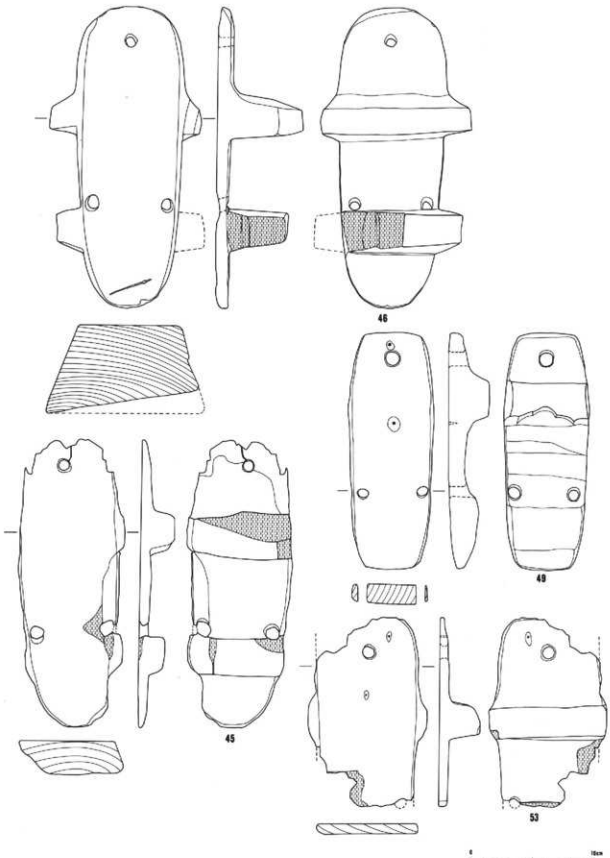
第31図　下駄実測図 7



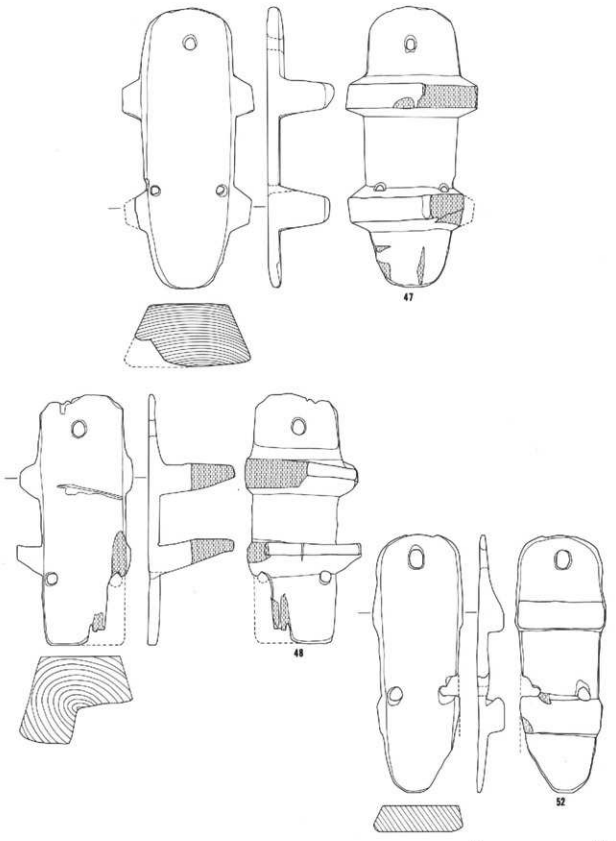
第31図　下駄実測図 8



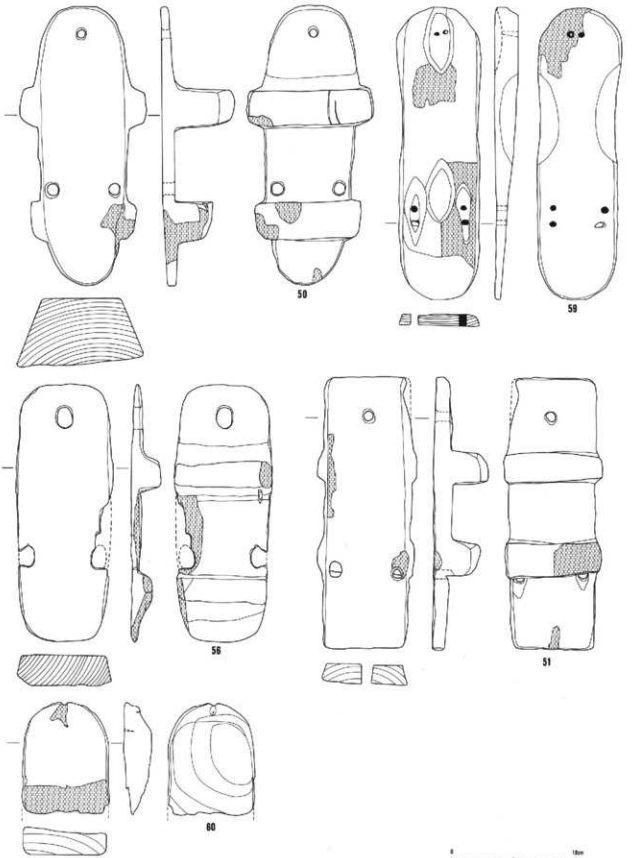
第31図　下駄実測図 9



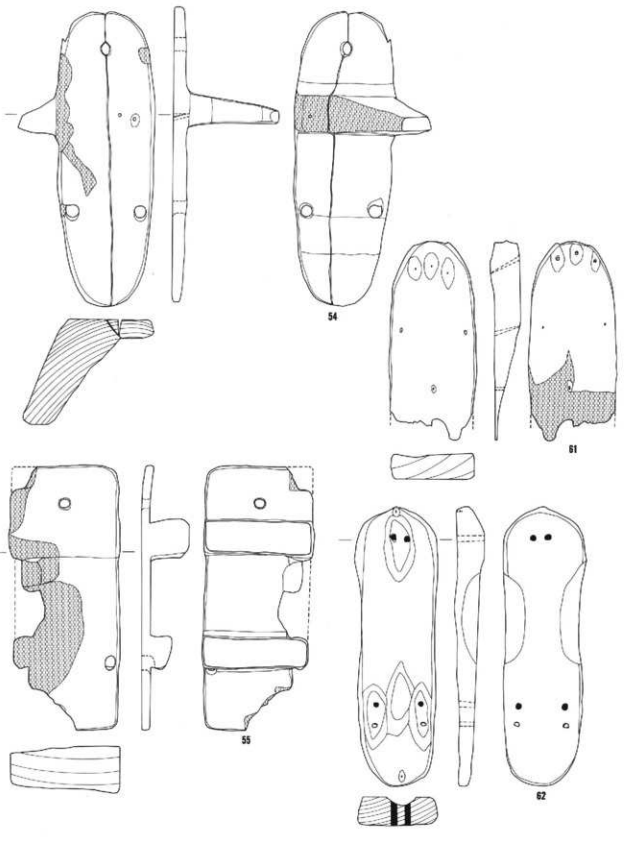
第31図　下駄実測図10



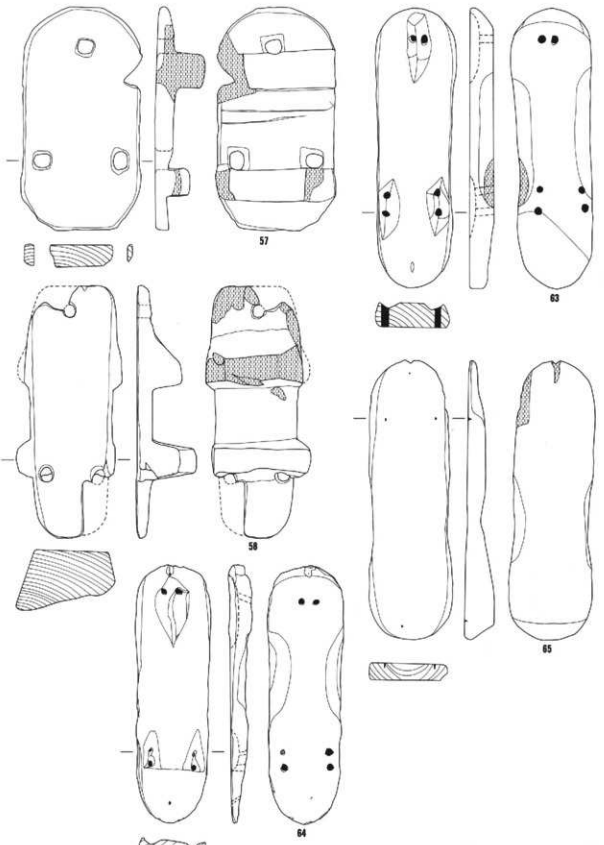
第31図　下駄実測図11



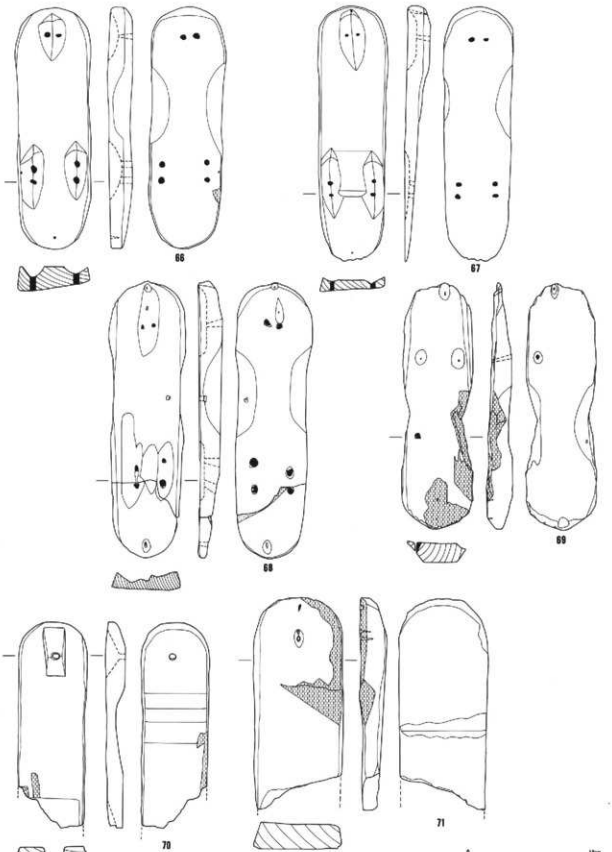
第31図　下駄実測図12



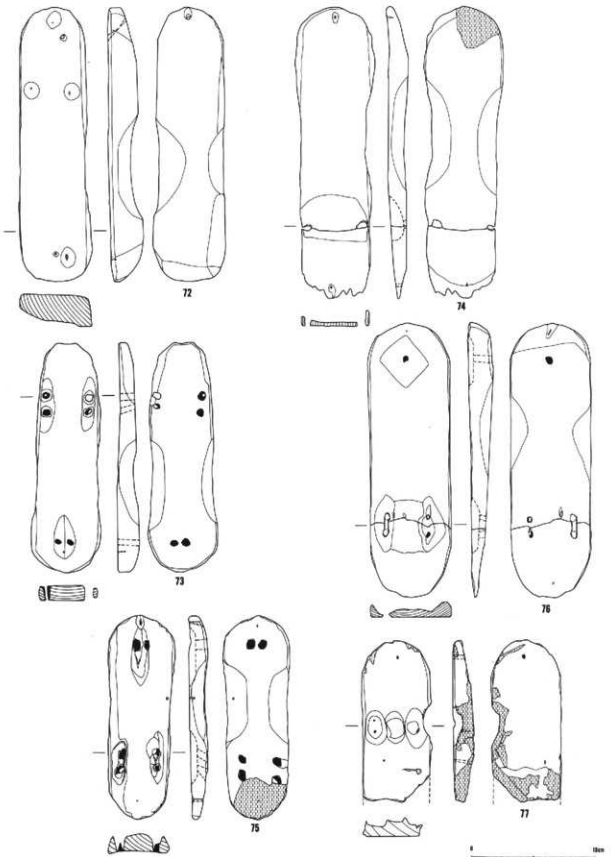
第31図　下駄実測図13



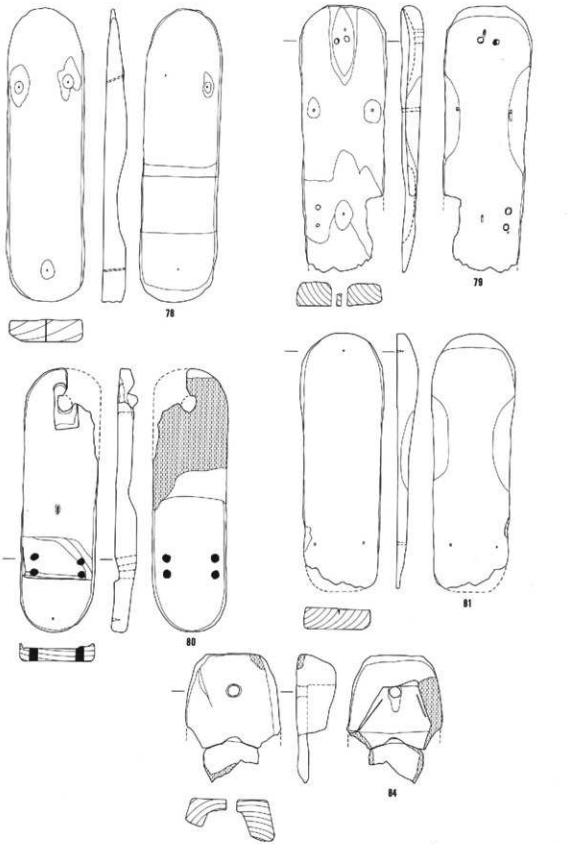
第31図　下駄実測図14



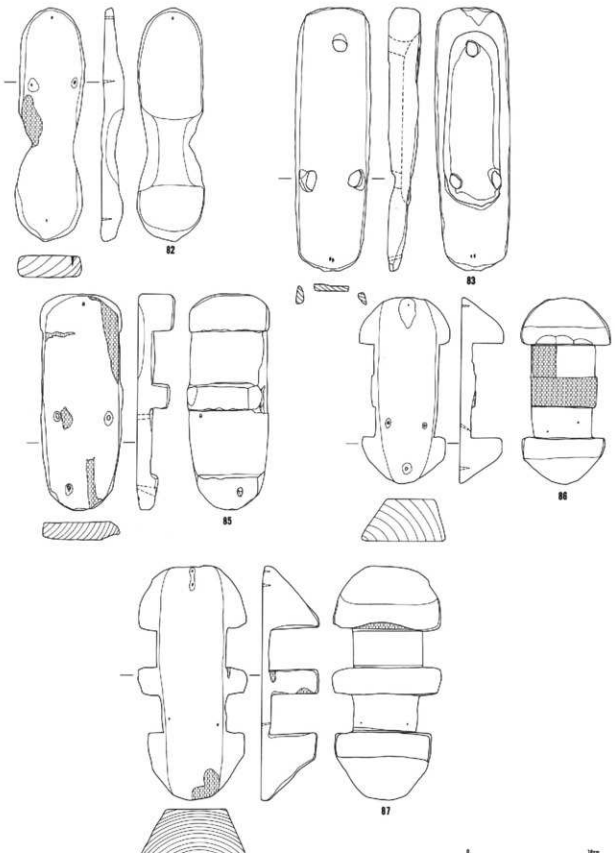
第31図　下駄実測図15



第31図　下駄実測図16



第31図　下駄実測図17



第31図　下駄実測図18

第7表　下駄一覧表

単位 mm　〔　〕残存値　（　）推測値

	資料 No.	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	備考
1	B-4 188	206	66	17	29.5				5				81.5			74		50	差歯・露卯、板目、後歯のみ残存、前緒穴のみ
2	B-5 113	〔198〕	70	20	22.5	91	67	42.5	8	7	8						57.5	47	差歯・露卯、板目、歯の部分は残っていない
3	C-6 169	195	69	26	19	111	43.5	41.5	7								65	56	差歯・露卯、板目、前後歯とも欠損
4	C-6 29	208	83	24	25	103	53.5	48.5	9	10.5	11.5	82	76	11	9		51	41	差歯・陰卯、柾目取り
5	C-5 55	218	84	25	21	111	56	52	11	11	11	(82)	(77)			24.5	66	46	差歯・陰卯、板目、後歯の折れた部分残存、表面に「や」の焼印
6	C-5 96	〔162〕	77	28	17.5					11.5							76		差歯・露卯、板目、1/3欠損
7	C-5 158	179	66.5	25	18	69	50	40	14	7.5	8	53(66)	58(68)	11.5	7	38.5	40	60	差歯・露卯、板目、緒穴が角張る、使用による欠損、歯は摩耗
8	C-6 94	207	84	23	26	109	50	50	9.5	14	14	82	78 93	9	9.5	61	55	37.5	差歯・陰卯、板目、前歯半分欠損
9	C-6 114	178	77	17	20.5	96	43	43	6	12	12	〔63〕	〔49〕	7.5	9	20	47	38	差歯・陰卯、板目、裏に刃物痕、前後歯は欠損
10	C-7 233	〔196〕	82.5	21	20.5	105	48.5		12.5		11.5						52	33	差歯・露卯、板目、後緒穴片方欠、歯は前後欠
11	41	158	82	23	31				8								65.5		差歯・露卯、板目、1/3欠損、歯の差込部分残
12	[illegible]	〔144〕	70	25															差歯・露卯、板目、約1/2欠損
13	182	160	52	17			57.5	27			9							40.5	差歯・陰卯、板目、一部歯が残っている
14	234	〔127〕	91.5	22												28			差歯・陰卯、板目、約1/2残存、前歯のみ残る
15	A-2 196	207.5	90	10	15	89.5	71	49	23	20	19	89 85	83	28	25	27	33.5	41	連歯、板目、後歯はかなり磨耗している
16	A-2 210	〔171〕	75.5	14.5	29	78		40.5	14	13		77 81		21			71	47	連歯、板目、後歯は大部分欠損、後歯に約5mmの穴有り、[illegible]
17	B-3 203	204	98	11	21	81.5	76.5	53	12	13	15	97	〔88〕	27	29	35	41	30	連歯、板目、ほぼ完形、内側片方に摩滅する
18	B-4 151	183	82	13	23	71	63	38.5	11	13	15	85.5 84	84 81	24.5	28	38	35	27	連歯、板目、緒穴は四角、後歯かかと近くに刃物の加工痕有り
19	B-4 155	210	80	10	11	89.5	51	51	22.5		22	70 89.5	69 87	27	30	44	42.5	33.5	連歯、板目、緒穴は四角、残存70%
20	B-4 156	207	86	9	24.5	93	65	43	13.5	11.5	10	85 91	86 90	30	26.5	49	37	42.5	連歯、板目、前後の歯の周辺2～3mm残ってある
21	B-4 157	207.5	86	12	19.5	108	37	53	9.5	10.6	11.5	82.5 80	80 73	24	20	41	49.5	37	連歯、板目、緒穴が少し角張って刃の痕が有る
22	B-5 34	194	87	9		90.5	67	55		11	8	91.5	87.5	27.5	26.5	28	37	37	連歯、柾目、後歯が擦り減っている
23	B-5 61	224	103	11	22	101	59	47	12	13.5	13	81 102	74 94	17.5	17.5	61	58	50	連歯、板目、歯は高い、斜めに摩耗している
24	B-5 68	〔129〕	84	7	16.5	93			7			83 92		33		52	30		連歯、板目、子供用か、前の緒穴と後歯が部分的につく、前歯大
25	B-5 83	240	104	11.5	18	112	59	48	16	12	16	83 103	62 93	29	26	42.5	54	43	連歯、板目、歯の両端に釘穴有り
26	B-5 146	159	69	9.5	16	62	64	45	8	8.5	9	66 66	65 56	24	21	21.5	24	33	連歯、板目、残存率90%、摩耗有り、小下駄
27	B-5 162	200	94	14.5	25	77	51	46.5	11.5	17	17	83 86	94 93	30	27	62	32	37	連歯、板目、緒穴四角く加工、歯の根本に鋸痕有り、木の節痕有り
28	B-5 175	163.5	68	7	19	69	44	31	13	12	12	66.5		18		13.5	46		連歯、板目、かかとが少し擦り減る、台が薄い
29	B-6 1	214	60.5	7	24	108	68	32.5	8.5	6	7	57 61	51 60	28	25	33	54	42.5	連歯、板目、裏面刃物痕多数有り
30	B-6 7	92	73.5	20	24				14			71		25			37		連歯、板目、前歯後より欠損、焼痕3ヶ所有
31	B-6 9	217.5	87	8	19	108	70	40		10.5	10	77 85.5	72 90	27.5	27	38	69	36.5	連歯、板目、表面に「平」の焼印有、前歯欠損
32	B-6 10	115.5	89.5	7			46.5	51.5		12	11		80.5 90		22	47		58	連歯、板目、1/2欠損
33	B-6 109	〔91〕	86	8	20.5				16			72 85.5				37	46		連歯、板目、残存率30%、前歯と台の厚み薄い
34	B-6 120	224.5	78	10	19	120	70	44	5	9	9.5	72 77	69 71	33	27	21	81	40	連歯、板目
35	B-6 123	232	80	5	11.5	121	67	49	12			84 98	63 83	22	25	30	66.5	47.5	連歯、板目、台が薄い
36	B-6 124	214.5	74	10	16	180	62	36	10	9	10	74	64	34		22	57		連歯、板目
37	B-6 134	219	92	12	22	117	37	54	12	10	9.5	80 90	82 87	24	26	37	63	63	連歯、前後歯の間に貫通穴有、前歯欠損
38	B-6 135	222.5	93	14	25	135	48	58	11	13.5	12	92	93	11.5	37.5	41	36	34.5	連歯、板目、完形、歯が片方に擦り減る
39	B-6 173	195	88	4	32	108			13			92	〔88〕	21	22	33	35		連歯、板目、後緒穴部より欠損、台の厚み薄い
40	B-6 479	213	55	8	16	109	68	29.5	12	9	8	54 51	59 52	23	26	25.5	46		連歯、板目、随分薄い下駄
41	B-7 5	〔131〕	66.5	5			54.5	36		19	20					13			連歯、板目、一部炭化している
42	B-7 170	223.5	75	10	28.5	121	55.5	34	6	12.5	12	82	76 82	32	27.5	40	64	52.5	連歯、板目、前歯欠損、長方形穴有り、前歯に2ヶ所貫通痕有り
43	B-7 478	213	81.5	7	20	108	59	38	13	13.5	12.5	77 81.5	70 72	17.5	13	28	60	43	連歯、板目、裏刃痕有り、後歯に擦り減る
44	C-3 191	212	80	11	20	111	62.5		9		9.5	81 82.5	66 61	23.5	25	42	41	40	連歯、板目、裏に刃痕多数有り
45	C-4 104	231	79.5	8.5	16.5	125	71	45	8.5	12	10	80.5 84	67 78	27	29	27	63	42	連歯、板目、前後歯は刃物による欠損
46	C-4 187	243	123	11	22	120	59	50	10.5	11	13	83 71	121 113	22	26	69	70	46	連歯、板目、歯は高く薄い、前歯は傾斜する
47	C-4 435	226.5	106	10	21	109	62	44.5	12	9.5	8.5	75 65	105 100	20	18.5	54	57	45.5	連歯、板目、後緒穴が歯の方まで開いている
48	C-4 436	202	68	10	21.5	110	49		13.5		8	73 68	90.5 91	10	10	70	53.5	35	連歯、板目、歯は傾斜している
49	C-5 27	191	79	14	16	96	60	39.5	11	9	8	67 59	63.5 62	27	27	34	40	50.5	連歯、板目、表面に金属の鋲2つあり、裏面に刃物の加工跡あり
50	C-5 69	224.2	53	10	19	116	73	41	6.5	9.5	9.5	79 103	71 85	29.5	30	55	69	36	連歯、板目、後歯の磨耗が激しい
51	C-5 70	218.5	68	15	28	118	55.5	40	7	9	13	73 80	71 78	24	26	44	60	53	連歯、板目、ほぼ完形
52	C-5 84	207.5	63	9	8	96	74.5	31	14.5		11	68 72		22	27	21	53	48	連歯、板目、前歯の磨耗が激しい、後緒穴1欠

単位 mm 〔 〕残存値 （ ）推測値

	位置 No.	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	備考
53	C-5 85	〔153〕	96	8	23	113			10			84 95		24		33	72		差歯、板目、後緒穴より欠損
54	C-5 476	237	77	11	24.5	121	72	44.5	10	9.5	9.5	81		11		85	68		連歯、板目、前歯の一部のみ残存、後歯のあった跡のみ残存
55	C-6 163	213.5	86	7.5	27	119	49.5		6.5	10.5		89	(85)	27	26	38	44	44	連歯、板目、後緒穴1つ欠損
56	トレンチ 40	208	78.5	8.5	17	93	50	45	19	18	17	73 69	(77) 67	20	18.5	24	49.5	16	差歯、板目、前緒の緒穴に削った様な跡有り
57	トレンチ 158	180	93	15	26	79	48.5	50.5	11.5	14.5	11		94	30	26	40	36	23	差歯、板目、ほぼ完形
58	293	203.5	85	12.5	12	118	40	29.5	18	16	13.5	68 78	66 79	19	17	49	42	47	連歯、板目、残存率70%、後緒穴周の方が磨耗る
59	B-6 110	235	68	19															草履、板目
60	B-7 3-1	〔91〕	69	22															草履、板目、残存率50%
61	B-7 3-2	〔161〕	71.5	24															草履、板目、残存率70%
62	C-4 80	224.5	67	24															草履、板目
63	C-5 24	225.5	66	19															草履、板目、かかと部分が磨耗している
64	C-5 30	225	62	20															草履、板目、木釘が残っている
65	C-5 31	223.5	67	24															草履、板目
66	C-5 32	194	51	20															草履、板目、前後木釘が残っている
67	C-5 47	206.5	58.5	18															草履、板目
68	C-5 48	223	62	20.5															草履、板目
69	C-5 50	199	58	21															草履、板目、木釘が残っている、木目が目立つ
70	C-5 56	〔167〕	56	17															草履、板目
71	C-5 57	171	73	23.5															草履、板目、2/3残存
72	C-5 64	223	59	27															草履、板目
73	C-6 41	185	56	18															草履、板目、木釘が一部残っている
74	C-6 45	235	63.5	18															草履、板目
75	C-6 46	164	54	16															草履、板目、木釘が残っている、子供用
76	C-6 213	228	65.5	22															草履、板目
77	C-6 476	131	56.5	19															草履、板目、2/3残存
78	C-7 17	236	62.5	18															草履、板目
79	C-7 19	215.5	71	19.5															草履、板目
80	C-7 243	212.5	65.5	22															草履、板目
81	排水溝58	206.5	68	18															草履、板目
82	244	188.5	54.5	18															草履、板目、子供用
83	B-7 5	213	61	26															ぽっくり、板目、後部に貫通した緒穴有り
84	C-5 102	103.5	73	32	25.5				8.5										露卯、板目、2/3欠損、鼻緒「コ」の字形、前歯の内側深さ1mm程の刃物の加工跡有り
85	B-5 59	175	67	13.5															異形、板目、3本歯、緒穴有り
86	B-6 399	149	72	34															異形、板目、子供用、3本歯
87	C-5 98	189	56	7													55		異形、板目、完形、3本歯

④ 農　具（第33図1～6、図版47）

鍬鍎4点、すりこぎ1点、横槌1点の計6点が出土した。1～4の鍬鍎の内、1～3はほぼ完形に近いものであるが、1は柄の挿入部を中心に3分割、3は刃先の部分が2分割されている。2はほぼ完形品である。4は柄の挿入部から刃先に向かって縦割れし全体の1/2が残存している。2のみ鉄分の付着で部分的にややオレンジ色を呈しているが、全体的に遺存状態は良好である。

出土層位はII層～III層上面にかけてで、出土位置からみて中世以降のものと思われる。しかし、木製品のところで先述したように、弥生時代中期に製作された可能性も十分考えられる。御殿川流域遺跡群の調査は今後も続くのでこれからの検討課題にしたい。

5のすりこぎは全長39cmでほぼ完形品、6の横槌は柄の部分1/3を欠損している。

⑤ 容　器（第34図1～13、図版48～51）

挽物、刳物、柄杓、円板、長方形曲物（桶を含む）、蓋板・底板、桝等がある。

挽物は11点出土した。No.4は、ほぼ完形に近いが他は1/2～1/3欠損が多くみられる。しかし、全体的には丁寧な仕上がりでロクロ整形痕も鮮明に残っている。特筆すべきものの一つに3の木製坏がある。坏部の口縁約1/2を破損ないし欠損しているが、頸部から底部にかけての脚部はほぼ完形である。法量は口径7.2cm、脚部径5.5cm、底部径6.7cmを測り出土位置より中世以前のものと思われる。

刳物は1点である。残存率が悪く、原形は推定不可能であるが長径45.5cm、短径27.6cm、高さ13.9cm、厚さ3.7～1.2cmを測り、かなり大型の容器である。一部に焼痕が認められる。

柄杓は13点出土したがその内No.9～13までの6点は曲物側板である。No.1は柄杓の側板で1ヶ所を桜皮で綴じる。底板・柄は欠損。2～8においても底板・柄の欠損しているものがほとんどである。9の外周には、黒漆の塗られているのが認められる。

円板は87点（内、有孔円板6点）出土したが、その大部分は柄杓に使用した蓋か底板と思われる。その他、樽等に使用したと考えられるものもある。大きさは、大・中・小型様々であるが、大型のものでは長径14cm、小型のものでは2.8cmと幅が広い。また、厚さでは厚いもので1cm、薄いもので1mmのものまである。完形または完形に近いものが42点、9/10残存しているものが16点、3/4残存が7点、1/2残存が18点、1/4残存が4点と遺存状態は良好である。特徴としては、ケビキ線の認められるもの4点、桜のかば皮のあるもの9点、分回しのすみの跡の認められるもの3点、木釘が3ヶ所残存しているもの1点、木釘の跡の有るもの2点等である。また、No.40は木製紡錘車と思われる。円盤状を呈し、法量は長径4.6cm、短径4.1cm、孔径7mm、厚さ5～7mmを測る。遺存状態は比較的良好である。

長方形曲物は7点出土した。内3点は形態から桶材と思われる。No.2は箱の側板で周囲に7ヶ所の木釘が残存している。また、内側には柿渋のようなものが塗られている。

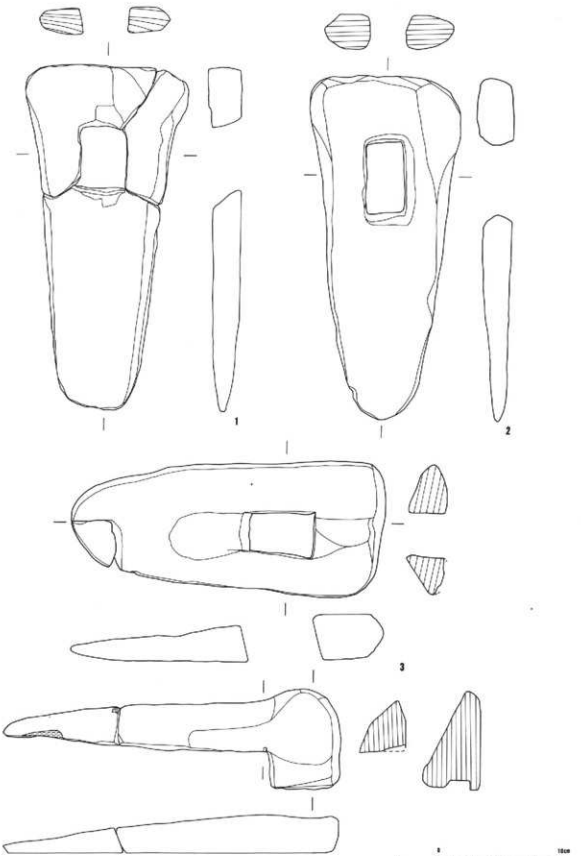
蓋板・底板は総数20点出土した。側板の中にすっぽりはめ込まれ、外側から木釘を打ち込んで固定する「クレゾコ」の作りのものを底板、内周に段や刻線を有し、桜皮で側板と結合され、側板の外側にはみ出す「カキイレゾコ」の作りのものを蓋板として区別した。（注1）

20点中18点が蓋板、2点が底板と思われる。完形品は少なく、大部分が丁度中心から二つに割れ1/2残存のものが多い。No.15はかなり大きな蓋板で長径34.3cm、短径8.1cm、厚さ2.1cmを測る。また、側面には2孔が認められる。19は曲物の底板、20には黒漆の痕跡が認められる。

桧は12点出土したが3点は判別不可能のため9点を図示した。No.1は円錐形をした完形品で丁寧な仕上がりである。

注

(1)　『大谷川IV』（遺物・考察編）　1989（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

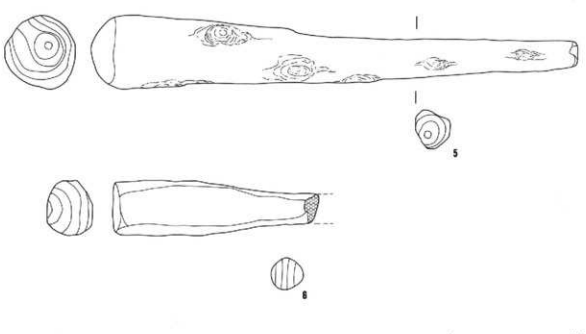


第33図　農具実測図1

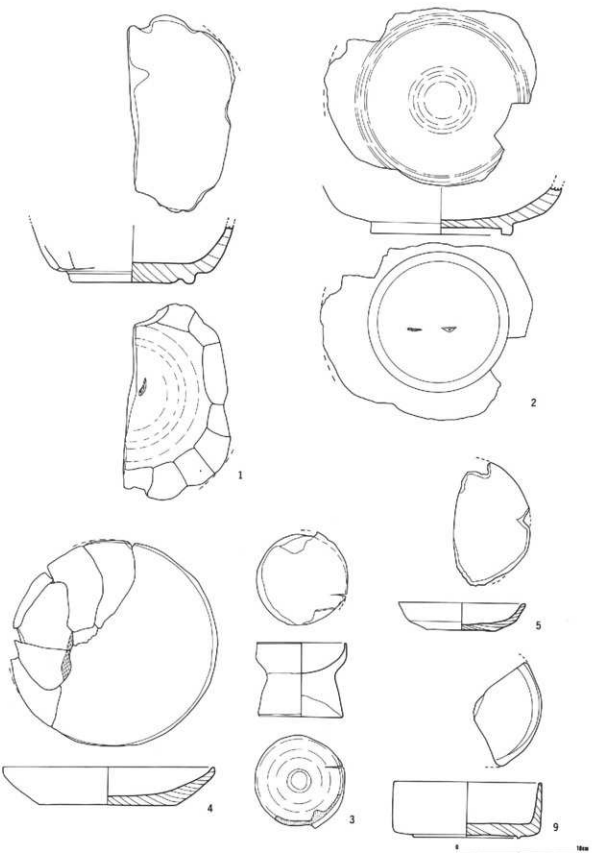
第8表　農具一覧表

単位 mm

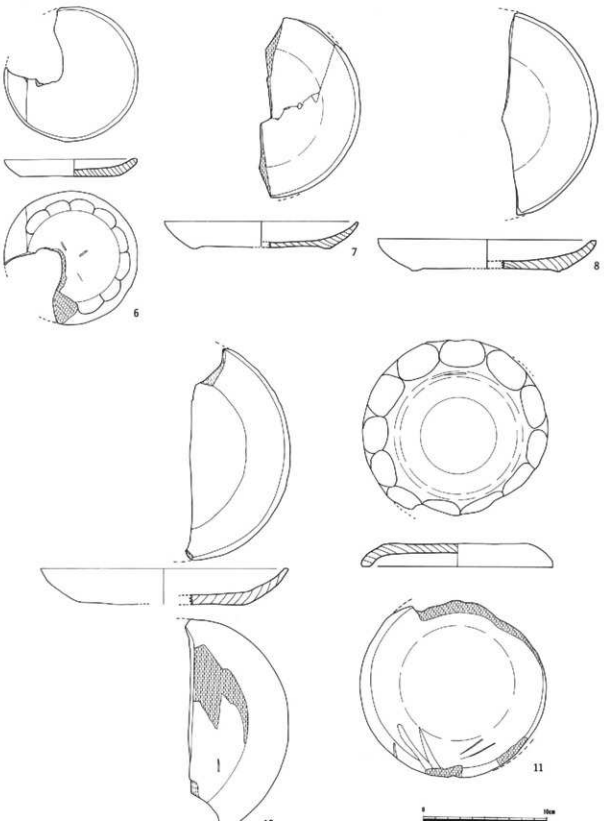
	出土位置	用　途	長　さ	幅	厚さ	木取	備　　考
1	B-2 №457	鍬筐	278	132	28.5	板目	ほぼ完形、3つに分割
2	B-5　117	鍬筐	277	122	30	板目	表面に焼痕有り、ほぼ完形
3	C-4　189	鍬筐	253	110	40	板目	＊樹種・年代測定　番号2
4	排水溝 192	鍬筐	272	(81)	41	板目	2/5残存
5	B-6　6	擂り粉木	390	60	56	心木取	ほぼ完形
6	C-6 通214	横槌	(165)	45	37	板目	柄の部分1/3欠損



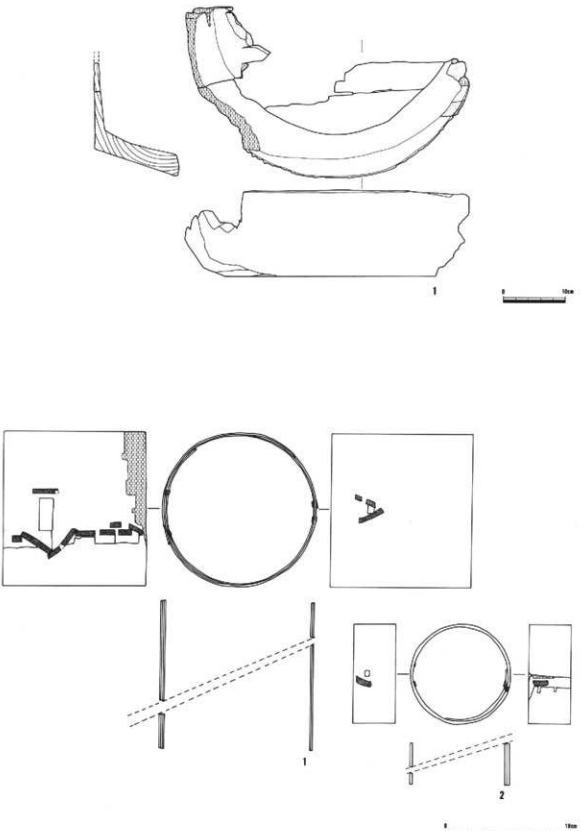
第33図　農具実測図2



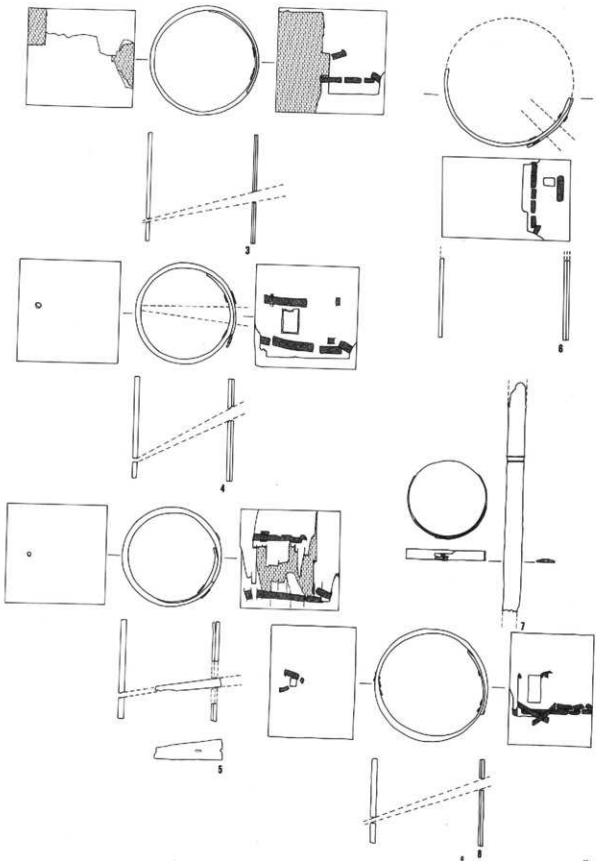
第34図　容器実測図１　挽物



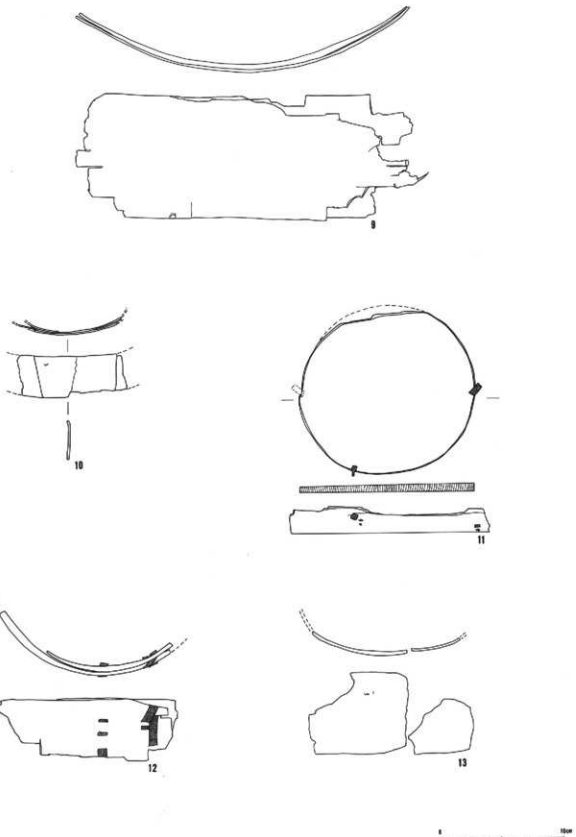
第34図　容器実測図2　挽物



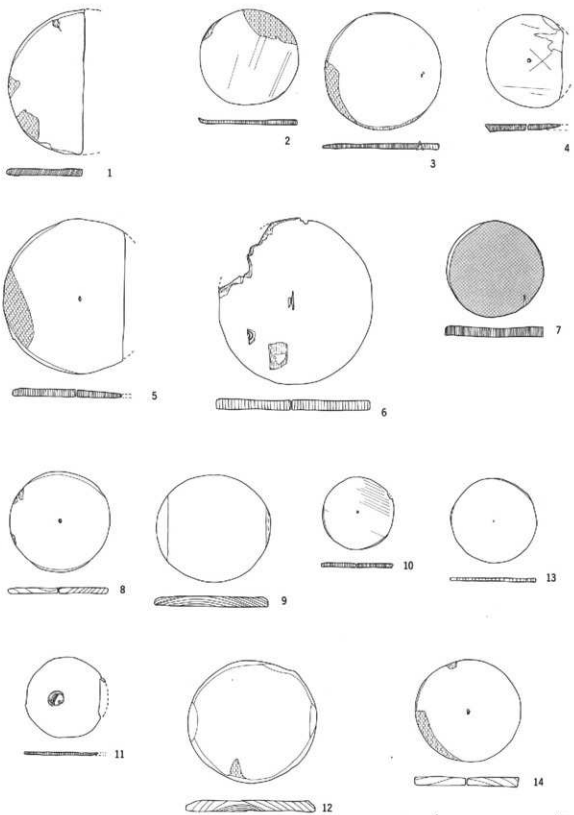
第34図　容器実測図３　刳物・柄杓



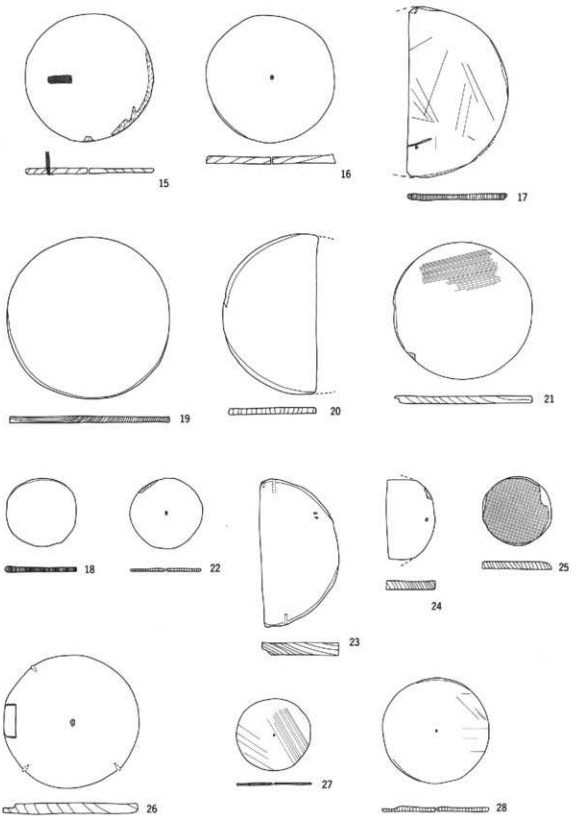
第34図　容器実測図4　柄杓



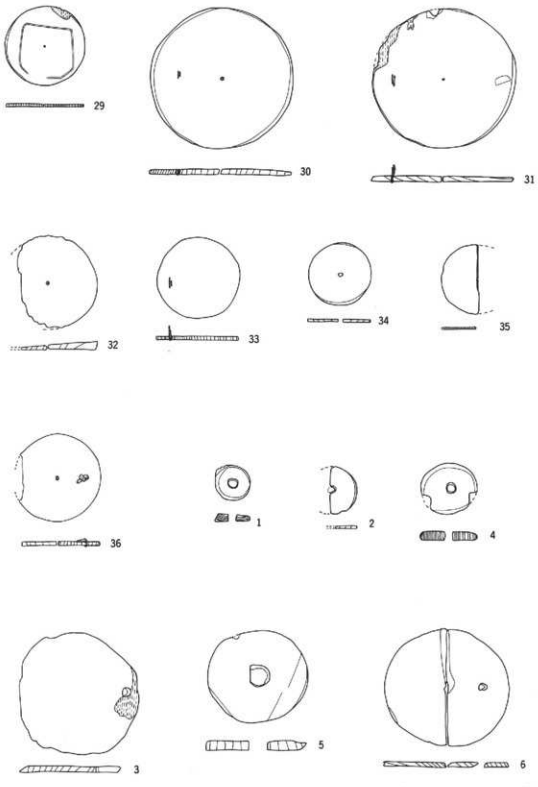
第34図　容器実測図5　曲物



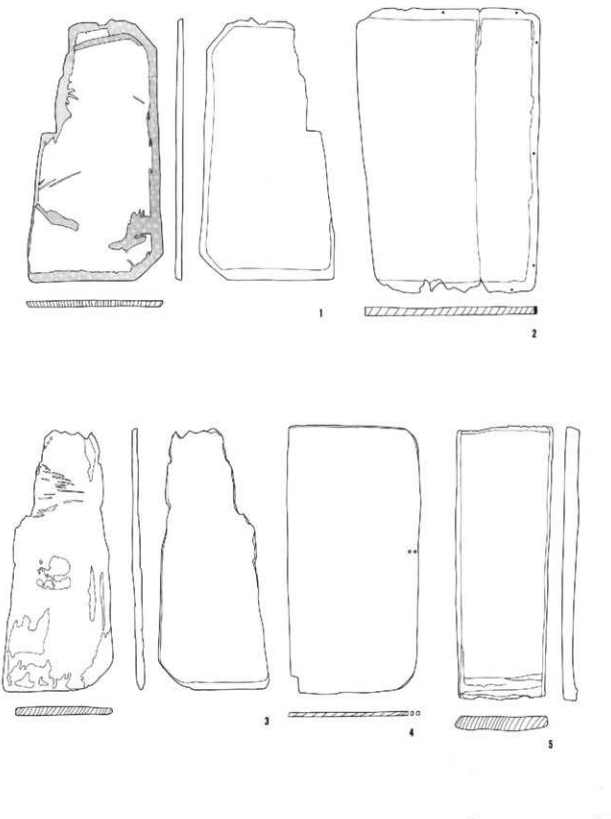
第34図　容器実測図6　円板



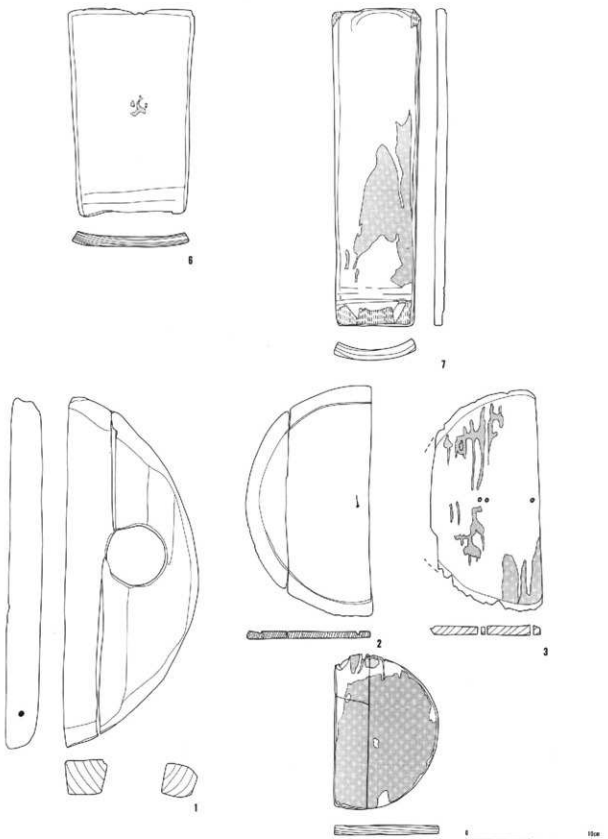
第34図　容器実測図7　円板



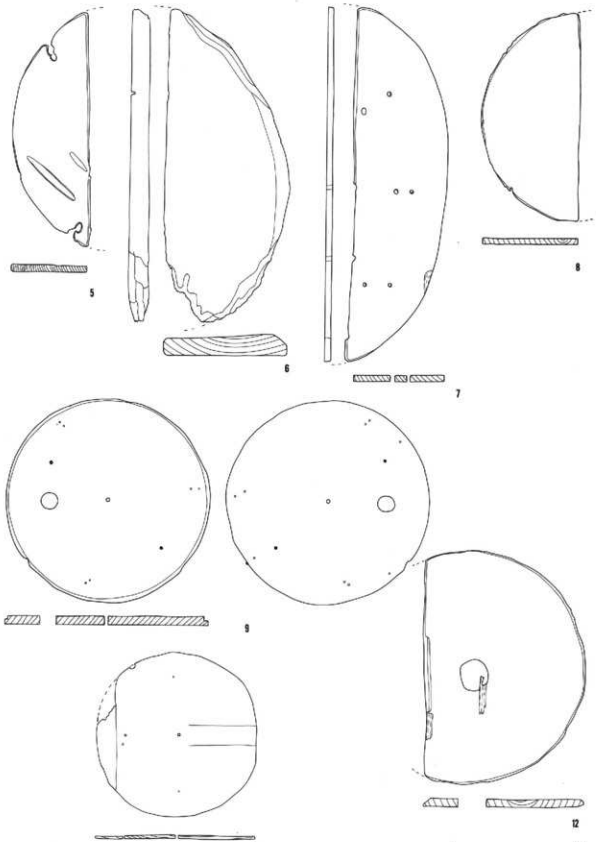
第34図　容器実測図8　円板



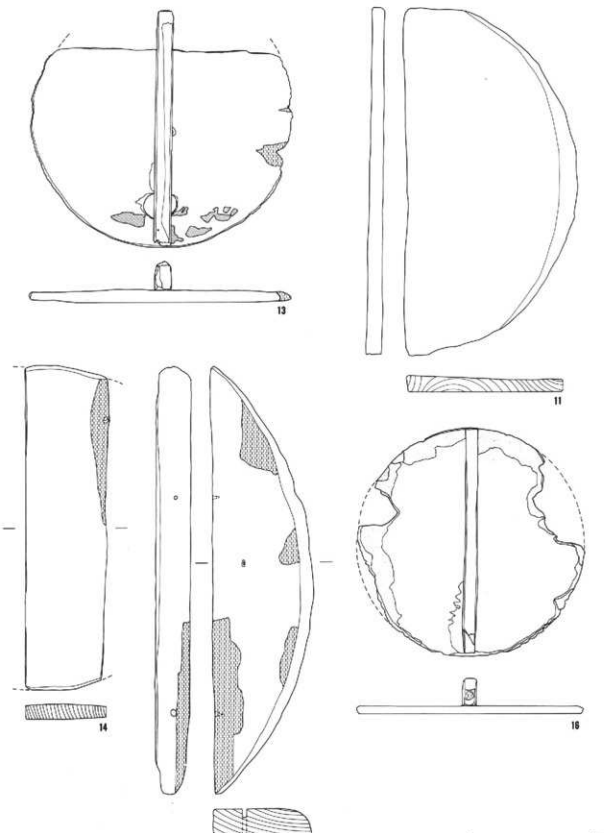
第34図　容器実測図９　長方形曲物



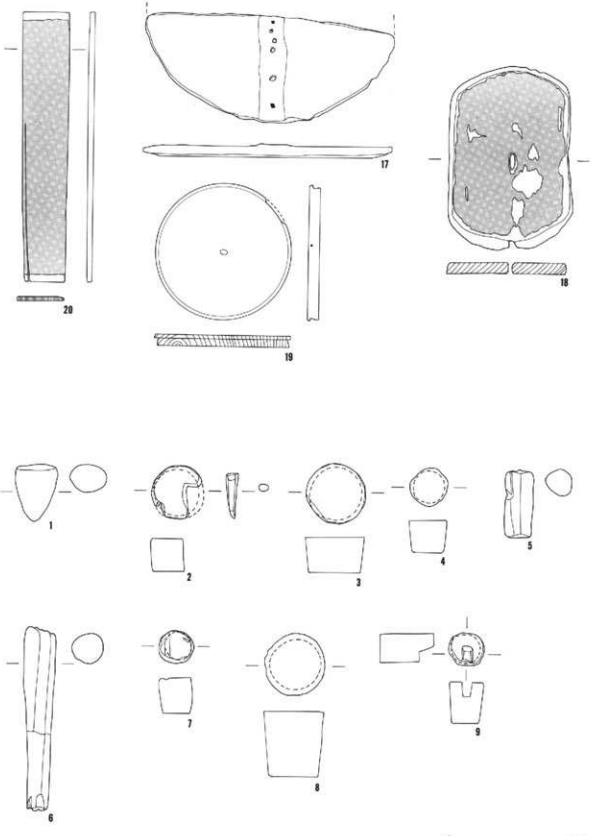
第34図　容器実測図10　蓋・底板



第34図　容器実測図11　蓋・底板



第34図　容器実測図12　蓋・底板



第34図　容器実測図13　蓋・底板・栓

第9表　容器一覧表

単位 mm　（ ）推定値

	出土位置	用途	法　量　等	備　考
1	A-2 №208	挽物	口径(190) 底部径102、幅(46)、厚さ腰6～13 底部16	
2	B-2　198	挽物	口径(190) 底部径114、幅49、厚さ腰10～13 底部7	腰～口縁残存
3	B-4　181	挽物	口径72 底部径67、脚部幅55	木製坏
4	B-5　62	挽物	口径170 底部11、幅31、厚さ腰3～12 底部7	
5	B 5　74	挽物	口径(103) 底部径55、幅23、厚さ腰4～6 底部5～6	底部中央低い
6	B-5　92	挽物	口径108 底部径74、幅14、厚さ腰8 底部6	加工跡有り
7	B-6　119	挽物	口径(157) 底部径(51)、幅22、厚さ腰3～9 底部4	
8	B-6　133	挽物	口径(173) 底部68、幅26、厚さ腰6～12 底部6	
9	C-4　88	挽物	口径(120) 底部85、幅45、厚さ腰3～9 底部10	
10	C-4　106	挽物	口径(192) 底部(68)、幅29、厚さ腰10 底部8	
11	C-5　132	挽物	口径(154.5) 底部103、幅19、厚さ腰10 底部8	加工跡有り
1	B 5　150	刳物	長径(455) 短径(276)高さ139、厚さ側37～12 底7～10	焼痕有り
1	B-2　197	柄杓	器径125、高さ120、側板厚さ4	全体に薄手
2	B-4　44	柄杓	器径 80、高さ 35、側板厚さ5	柿渋塗布
3	B-5　176	柄杓	器径188、高さ188、側板厚さ3	桜皮で1列4段
4	C 4　79	柄杓	器径 80、高さ 82、側板厚さ4、孔径4.5	湾曲している
5	C 4 通292	柄杓	器径 80、高さ 80、側板厚さ3～5	桜皮1列2段
6	C-4　190	柄杓	器径106、高さ 65、側板厚さ4	桜皮1列6段
7	C-5　51	柄杓	器径 63、高さ 7.5、側板厚さ2	
8	C-5　137	柄杓	器径 90、高さ 70、側板厚さ4	桜皮2段9列
9	B-4　177	曲物	長さ101、幅101、側板厚さ8	側板外周黒漆
10	B-5　118	曲物	長さ 33、幅87、側板厚さ1.5	滑手
11	B-6　171	曲物	底部器径140、底部厚さ7	分回し使用
12	C-5　326	曲物	器径(185)、幅50、側板厚さ90	桜皮2列3段
13	C 6 通348	曲物	器径 79、幅67、側板厚さ3	ニつに分割
1	A-2　195	円板	長径(121)、厚さ3、1/2残存、柾目取り	焼痕有り
2	B-4 通400	円板	長径 79、厚さ4、ほぼ完形、柾目取り	黒色を塗布
3	B 5 通226	円板	長径 94、厚さ5、完形、柾目取り	桜のかば皮有

単位 mm （ ）推定値

	出土位置	用途	法量等	備考
4	B-5 144	円板	長径75、厚さ6、4/5残存、柾目取り	ケビキ跡有り
5	B-7 通552	円板	長径(122)、厚さ3～6、5/6残存、柾目取り	中心孔有り
6	C 3 185	円板	長径124、厚さ8、柾目取り	貫通孔有り
7	C 3 通461	円板	長径78、厚さ7～8、完形、柾目取り	
8	C -4 通427	円板	長径80、厚さ5、完形、板目取り	中心孔有り
9	C -4 通434	円板	長径59、厚さ9、	
10	C 4 通555	円板	長径58、厚さ3、ほぼ完形、柾目取り	中心孔有り
11	C-5 通 94	円板	長径(66)、短径65、厚さ2、9/10残存、柾目取り	焼印の跡有り
12	C -5 通120	円板	長径103、厚さ9、ほぼ完形、板目取り	
13	C-5 91	円板	長径69、厚さ3、ほぼ完形、柾目取り	中心孔有り
14	C-5 通220	円板	長径84、厚さ6～6.5、完形、板目取り	中心孔有り
15	C-5 通221	円板	長径104、厚さ4、完形、板目取り	桜かば皮有り
16	C-5 通223	円板	長径104、厚さ5、完形、板目取り	中心孔有り
17	C 5 143	円板	長径(140)、厚さ5、4/7残存、柾目取り	圧痕有り
18	C 5 通390	円板	長径57、厚さ4、ほぼ完形、柾目取り	楕円形に近い
19	C-5 通421	円板	長径129、厚さ5～6、ほぼ完形、板目取り	
20	C-5 通557	円板	長径(131)、厚さ5、1/2残存、柾目取り	
21	C-5 通558	円板	長径111、厚さ6、ほぼ完形、板目取り	ケビキ跡有り
22	C-6 通 74	円板	長径57、厚さ2、完形、柾目取り	ケビキ跡有り
23	C-6 通 75	円板	長径(124)、短径(119)、厚さ10、1/2残存、板目取	
24	C 6 通 76	円板	厚さ7、柾目取り	
25	C 6 通 81	円板	長径56、厚さ6、ほぼ完形、柾目取り	焼痕有り
26	C-6 95	円板	長径110、短径107、厚さ8、ほぼ完形、柾目取り	木釘3ヶ所有
27	C-6 通251	円板	長径60～61、厚さ1、柾目取り	分回しの跡有
28	C-6 通252	円板	長径86、厚さ4、ほぼ完形、板目取り	
29	C-6 通277	円板	長径64、厚さ3、ほぼ完形、柾目取り	
30	C-6 通283	円板	長径115、厚さ4～5、ほぼ完形、板目取り	桜の皮付着
31	C-7 通242	円板	長径115、厚さ4、やや欠損、板目取り	桜の皮付着

単位 mm （ ）推定値

	出土位置	用途	法量等	備考
32	通 55	円板	長径(80)、厚さ7、3/4残存、追柾	木の皮付着痕
33	通189	円板	長径66、短径65、厚さ3、ほぼ完形、柾目取り	桜の皮有り
34	通192	円板	長径50.5、短径46、厚さ2、完形、板目取り	貫通孔有り
35	通195	円板	長径(57)、厚さ2、1/2残存、柾目取り	ケビキ跡有り
36	通162	円板	長径(73.5)、厚さ3、9/10残存、柾目取り	
37	通156	円板	長径28、厚さ7、ほぼ完形、板目取り	有孔円板
38	通194	円板	長径39、厚さ2、1/2残存、柾目取り	有孔円板
39	C-6 通284	円板	長径94～95、厚さ5、板目取り	有孔円板
40	通354	円板	長径46、短径41、厚さ5～7、9/10残存、柾目取り	紡錘車、孔有
41	C-4 通426	円板	長径80、短径75、厚さ7、完形、柾目取り	有孔円板
42	C-5 通559	円板	長径100、厚さ4～5、板目取り	有孔円板孔2
1	B-5 73	曲物	長径260、幅150、厚さ5、板目取り	漆で笹文様
2	B-7 通585	曲物	長径229、幅148、厚さ7、板目取り	木杭が残存
3	C-4 87	曲物	長径216、幅189、厚さ7、板目取り	黒漆塗布
4	C 5 183	曲物	長径217、幅105.5、厚さ3、板目取り	孔有り
5	C-6 通 77	曲物	長径222、幅78、厚さ8～11、板目取り	桶材
6	C-6 通356	曲物	長径168、幅95、厚さ8～9、板目取り	側板
7	C-6 通357	曲物	長径256、幅66、厚さ8～10、板目取り	側板、圧痕有
1	B-4 37	蓋	長径282、厚さ30、板目取り、長径50の穿孔有り	木釘1ヶ所有
2	B-4 178	蓋	長径180、厚さ6、板目取り	
3	B-5 82	蓋	長径178、厚さ8、板目取り、中央に孔有り	柿渋塗布
4	B-5 149	蓋	長径125.5、厚さ7、板目取り	漆塗布
5	B-5 148	蓋	長径189、厚さ6、板目取り	貫通孔有り
6	B-6 通294	蓋	長径270、厚さ13、板目取り	側面孔有り
7	B-7 23	蓋	長径285.5、厚さ6、板目取り、側面に2つ孔有り	貫通孔有り
8	通 52	蓋	長径167、厚さ5、板目取り	釘穴有り
9	C-3 186	蓋	長径163、厚さ7、板目取り、側面に金属釘1つ有り	取っ手跡有り
10	C-5 通 95	蓋	長径129、厚さ3、板目取り	取っ手跡有り

単位 mm （ ）推定値

	出土位置	用途	法量等	備考
11	C-5 107	蓋	長さ280、厚さ14、板目取り	
12	C-5通 328	蓋	長さ188、厚さ6、板目取り	25mmの孔有り
13	C-5 174	蓋	長さ190、厚さ33（取っ手含む）、板目取り	取っ手有り
14	C-5 598	蓋	長さ261、幅54.5、厚さ13、板目取り	
15	C-5 617	蓋	長さ343、厚さ28、板目取り	側面に孔2つ
16	C-6 39	蓋	長さ183、厚さ29（取っ手厚さ22含む）、板目取り	木釘5ヶ所有
17	C-6 125	蓋	長さ200、厚さ10、板目取り、取っ手の跡有り	木釘7ヶ所有
18	C-6 128	蓋	長径147.5、短径100.5、厚さ9、板目取り	柿渋塗布
19	B 5 60	底板	長径109、厚さ9、板目取り、中央に孔有り	木釘1ヶ所有
20	B-5通 545	底板	長さ217、幅38、厚さ4、柾目取り、	黒漆
1	B-4通 392	栓	長さ46、上部径32、下部径2.5	完形、円錐
2	B-4通 306	栓	長さ27、上部径43、下部径37、36mmの楔有り	1/3欠損
3	B-6通 540	栓	長さ29、上部径48、下部径43	台形
4	C-4通 430	栓	長さ26、上部径30、下部径28	完形
5	C-5通 99	栓	長さ55、上部径22、下部径21	
6	C-5通 596	栓	長さ148、上部径35、下部径16	
7	C-6通 273	栓	長さ29、上部径28、下部径23	上部黒い線有
8	C-6通 541	栓	長さ53、上部径49、下部径41	完形
9	東排水溝57	栓	長さ34、上部径29、下部径24	上部窪み有り

⑥ 食事具（第35図1～24、図版52）

杓子形木器3点と箸168点が出土した。№1は柄の部分はないが筥の部分が残り、全体に黒い塗りがみられる。筥と柄をつなぐように貫通孔が認められる。2は筥部を少し欠損しているがほぼ完形である。非常に丁寧な仕上がりで遺存状態も良く削った跡が鮮明に残っている。法量は全長17.6cm、幅8.5cm、厚さ0.7～1.8cmを測る。3は柄～筥までが全体的に平たい構造になっている。

箸は形状から次の4つに分類した。

	特　　徴	本　数	%
A	両端加工で、削り方にやや丸みがある	1	0.5
C	片側加工で、先端を尖らせてある	8	5
E	両端加工だが、尖りがない	158	94
F	その他、加工痕はあるがはっきりしない	1	0.5

今回の調査では箸の出土は少なかったが、今迄の調査では大量の箸が検出されており祭祀との関係も十分考えられている。今後の調査に期待したい。

⑦ 工　具（第35図1～5、図版52）

何に使用したかははっきりしないが、形態からヘラと思われるものが5点出土した。№1は全長25.5cm最大幅4.3cm、厚さ0.5cmを測る。柄の先が尖っておりほぼ完形品である。2・4・5は、いずれも柄部を一部欠損しているが筥部は遺存状態も良好である。3は1の柄の尖ったものとは対照的な構造になっており完形品である。

⑧ 遊戯具（第36図1～4、図版53）

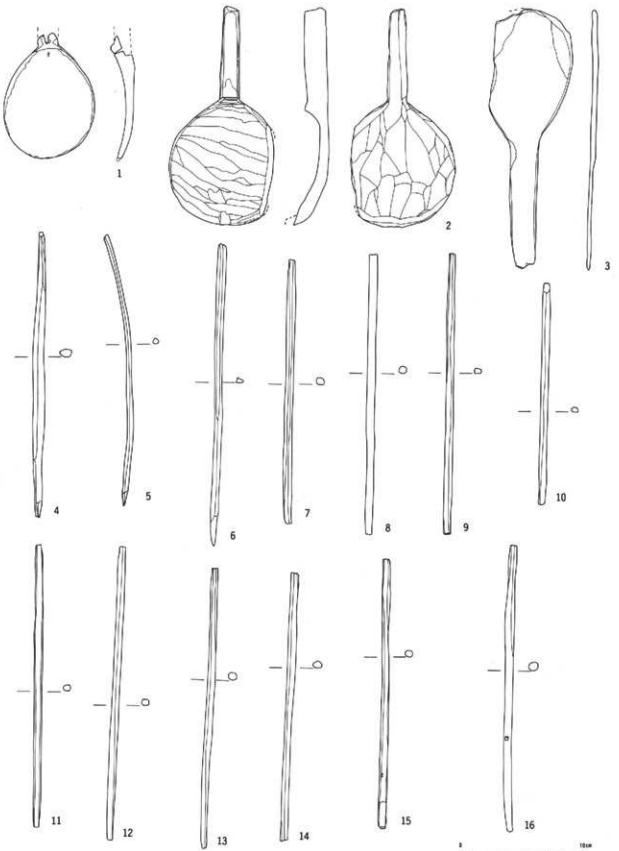
独楽が4点出土した。心棒はいずれも欠損しているが貫通孔ははっきりと認められる。№2は全体の2/3を欠損しているが4点の中では一番大型の独楽である。3の法量は、器径4.2cm、高さ3.2cmを測る。完形品で漆が一部付着している。

⑨ 祭祀具（第36図1、図版53）

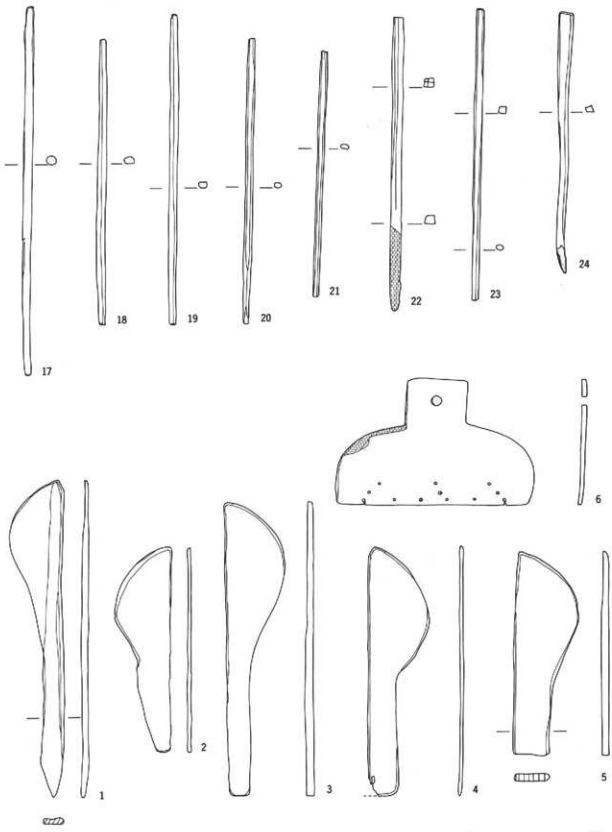
祭祀具として果たしてここに入れて良かったか非常に疑問であったが、本調査で初めて神楽面が出土した。層位はII層（砂層）で、円板や曲物、漆器類が付近で出土しているので比較的新しく中世以降のものと考えられる。法量は残存器高6.1cm、最大幅8.2cm、厚さ4.4cmを測る。また、頭部に0.4cm程の木釘5ヶ所が認められる。出土直後は二つの目玉が真っ黒に塗られていたが、取り上げ後、しばらくして消えてしまった。鼻と口を全面に大きく出してデホルメし、見ているだけでいかつい感じが漂ってくる。

⑩ 雑　具（第37図1～9、図版53）

唐傘6点と花台と思われるもの3点が出土した。№1・2・6の柄頭にはロクロ目が残存し、48本の骨を結合するための溝が切られている。2の法量は、器径6.5cm、残存器高3.7cm、径2.6cmを測る。5は磨滅が激しく骨を結合する溝は判別できない。柄は竹材で、柄頭と柄とは木釘によって結合している。柄を結合するための木釘が残存している。唐傘6点はII層からの出土で、時期は中世以降に属すると思われる。



第35図　食事具実測図1

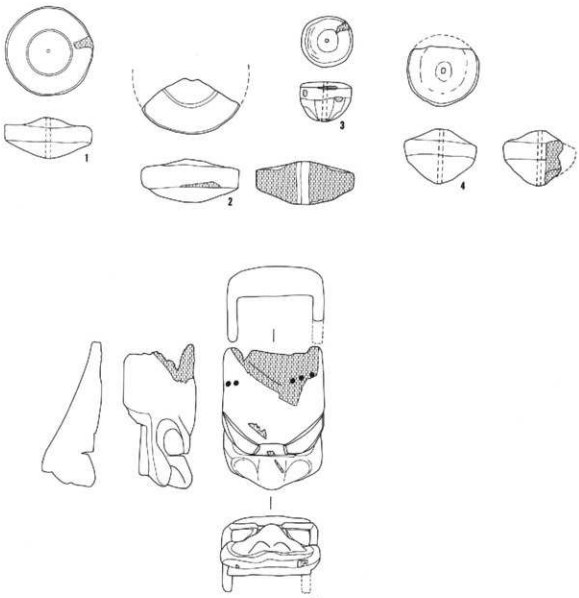


第35図　食事具・工具実測図2

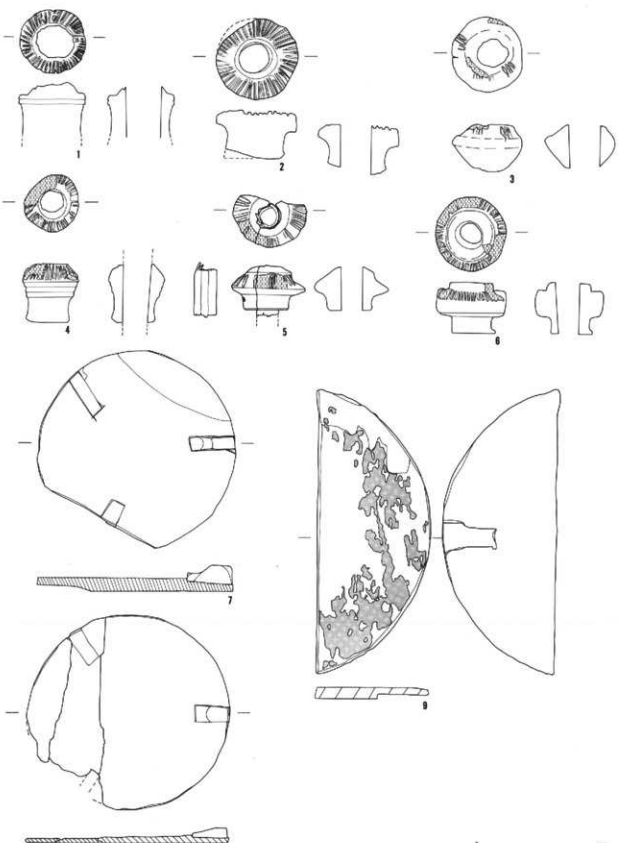
第10表　食事具一覧表

単位 mm　（　）推定値

	出土位置	用途	法　量　等	備　考
1	B-3　216	杓子	長さ(101)、幅73、厚さ5～17、板目取り、筐部残存	黒漆塗布
2	C-5　90	杓子	長さ176、幅(85)、厚さ7～18、筐部を少し欠損	加工痕が明瞭
3	C-7　16	杓子	長さ210、幅66.5、厚さ4、柄～筐迄平たい	
4	C-5 通234	箸	長さ230、幅9、厚さ6	Aタイプ 平
5	C-6 通 88	箸	長さ218、幅4、厚さ4.5、弓状に湾曲、先端加工有	Cタイプ 丸
6	C-6 通366	箸	長さ244、幅6、厚さ4、先端に焼痕有り	Cタイプ 平
7	トレンチ44	箸	長さ212.5、幅6、厚さ5.5	Eタイプ 丸
8	東排水溝60	箸	長さ226、幅6.5、厚さ6	Eタイプ 角
9	C-6 通 84	箸	長さ227、幅5.6、厚さ4.5	Eタイプ 丸
10	C-6 通 87	箸	長さ179.3、幅5.5、厚さ4.2	Eタイプ 丸
11	C-5 通 92	箸	長さ227.5、幅6、厚さ4.5	Eタイプ 丸
12	C-6 通185	箸	長さ236.5、幅6、厚さ5	Eタイプ 丸
13	C-6 通211	箸	長さ205.5、幅7、厚さ6	Eタイプ 丸
14	C-5 通217	箸	長さ216.5、幅7、厚さ5.5	Eタイプ 丸
15	C-6 通231	箸	長さ(218)、幅6、厚さ5、焼痕有り	Eタイプ 丸
16	C-6 通245	箸	長さ231、幅7、厚さ7	Eタイプ 丸
17	C-6 通367	箸	長さ297、幅7.5、厚さ7	Eタイプ 丸
18	トレンチ47	箸	長さ230、幅7、厚さ6	Eタイプ 平
19	C 5 通118	箸	長さ250、幅6.5、厚さ5	Eタイプ 平
20	C-5 通121	箸	長さ230、幅6、厚さ4	Eタイプ 平
21	C-5 通218	箸	長さ198、幅6、厚さ4	Eタイプ 平
22	トレンチ54	箸	長さ236、幅8、厚さ7、上から下へ4つに裂ける	Eタイプ 角
23	C-5 通279	箸	長さ234、幅6、厚さ6、先端加工有り	Eタイプ 角
24	B-6 通340	箸	長さ210、幅6、厚さ5.5、末端に焼痕有り	Fタイプ 角



第36図　遊戯具・祭祀具実測図



第37図　雑具実測図

第11表　工具一覧表

単位 mm

	出土位置	用途	法　量　等	備　考
1	B-7　22	ヘラ	長さ255、ヘラ幅42.5・柄幅18、厚さ5、板目取り	柄の先端尖る
2	C-5 通 98	ヘラ	長さ164.5、ヘラ幅46・柄幅25、厚さ3	
3	C 5 通119	ヘラ	長さ237、ヘラ幅48・柄幅19、厚さ7	ほぼ完形
4	C-6 通212	ヘラ	長さ201、ヘラ幅49.5・柄幅24、厚さ3	柄の部分孔有
5	排水溝 199	ヘラ	長さ164、ヘラ幅52・柄幅31、厚さ6、柾目取り	

第12表　遊戯具一覧表

単位 mm 〔 〕残存値 ( )推定値

	出土位置	用途	法　量　等	備　考
1	C-5 通219	独楽	器径71、高さ33	
2	C-6 通274	独楽	器径(44.5)〔94〕、高さ34	1/3残存
3	C-7 通280	独楽	器径42、高さ32、漆が一部付着している	完形
4	排水溝 225	独楽	器径58、高さ44.5、欠損部に焼旅有り	1/4残存

第13表　祭祀具一覧表

単位 mm

	出土位置	用途	法　景　等	備　考
1	C-5　131	面	神楽面、残存器高61、最大幅82、厚さ44、	木釘5ヶ所有

第14表　雑具一覧表

単位 mm ( )推定値

	出土位置	用途	法　景　等	備　考
1	C-4 通424	唐傘	器径54、器高44、孔30、推定50本の骨結合の溝有り	黒漆を施す
2	C-4 通595	唐傘	器径65、器高37、孔26、推定50本の骨結合の溝有り	
3	C-5　159	唐傘	器径61、器高38、磨滅の為骨を結合する溝判別不可	
4	C-6 通272	唐傘	器径46、器高48、磨滅の為骨を結合する溝判別不可	4本の沈線有
5	C-6 通325	唐傘	器径61、器高36、磨滅の為骨を結合する溝判別不可	竹材 木釘有
6	排水溝 201	唐傘	器径57、器高42、推定50本の骨結合の溝有り	
7	A-2　209	鍋敷	長径160、短径(140)、厚さ11、板目取り、焼痕有り	脚溝有り
8	B-5　76	鍋敷	長径164、厚さ11・脚の厚さ8、板目取り、花台かも	脚部2ヶ所残
9	C-5　138	曲物	底板、長径228、短径193、厚さ9、板目取り	黒色の塗り残

三島市の広小路には専門の傘職人が昭和40年台後半迄おり、市内の児童達も社会科学習の一環として度々見学に訪れている。おそらく、昔から受け継がれてきた伝統工芸を守ってきたものと考えられる。今回の唐傘の出土でその伝統工芸の一端をかいま見た思いがする。県内での出土例は非常に少なく、大変貴重なものである。

№7～9は花台と思われるが、7・8は鍋敷、9は曲物の底板とも考えられる。7の法量は長径16cm、短径14cm、厚さ1.1cmを測り丁寧な仕上がりである。木取りは板目取りで、1ヶ所（推定3ヶ所）脚台と思われるものが残存している。

⑪ 用途不明具（第38図1～38、図版54）

多量の用途不明の木製品の中で、器形・文様の明確なもの38点を掲示した。その中で特徴的・特異なものを2～3あげて紹介したい。用途や類例について御教示願えれば幸いである。

№31は今回出土したすべての木製品の中で一番最下層（第Ⅲ層下部）から検出された。周囲から出土した土器より判断して弥生時代中期～古墳時代前期頃のものと思われる。法量は現存長44.6cm、幅11.3cm、厚さ2.2cmを測る。当初は、櫂ではないかと考えていたが、柄の部分があまりにも短いこと、柄の先端より少し手前に加工痕が認められるため断定は難しい。杓子形木器の可能性も考えられる。1は、長さ13cm、上部幅2.4cm、下部幅1.4cmを測る木製品で、先端は人の顔を形取ってあるように思えるが人形とも断定出来ない。一部分黒漆が残存している。33は、横槌の一種ではないかと考えられるが遺存状態が悪く判別しにくい。法量は現存長約27cm、幅10.1cm、厚さ8.5cm、重量約1.45kgを測る。磨耗が激しく中心から2分割されている。9～11は、明らかに鍔状木製品であり遊戯具の中に入れるべきか迷ったが、用途がはっきりしないためあえてここに入れた。子供の玩具かもしれない。10・11は同一場所より、9は少し離れた地点より出土した。

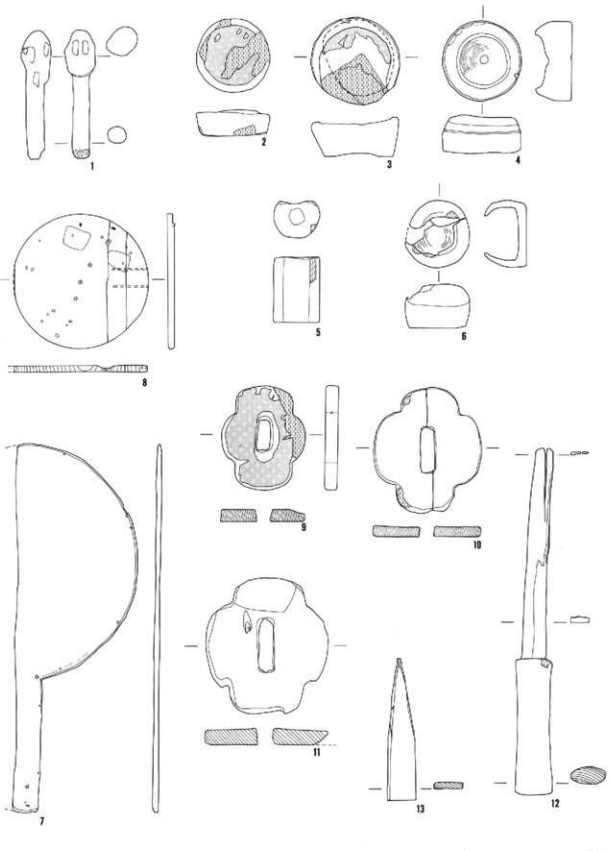
その他、№7は鏡箱？、15は柄杓の柄？、18は提灯の釣具？、38は全面焼けこげで何かの部材？等である。

⑫ 杭（第39図1～25、図版55～59）

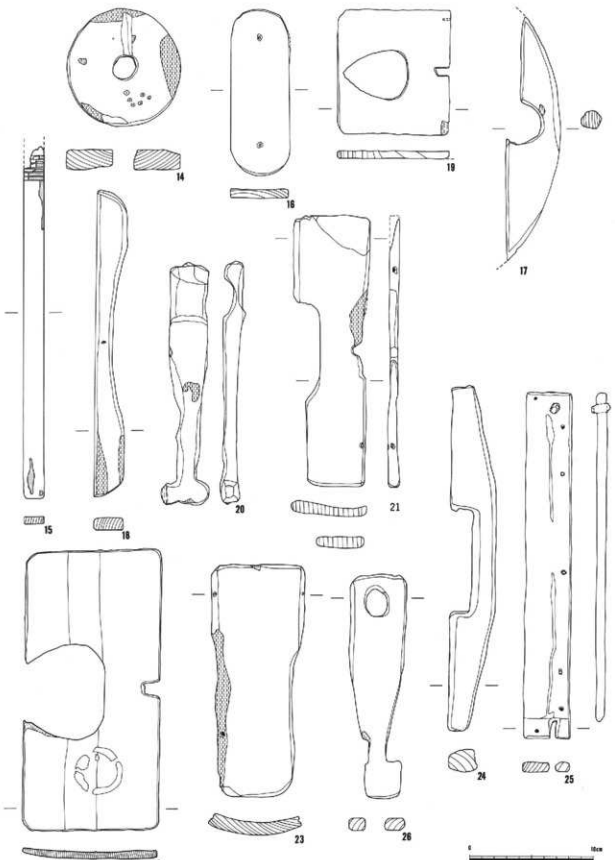
第Ⅳ章の第1節遺構で、護岸杭列については述べてあるので、ここでは杭材について簡単にふれておきたい。また、出土した杭3本を専門機関（パリノ・サーベイ株式会社）に依頼し樹種同定および年代測定も結果報告されているので参照されたい。

今回出土した杭の総数は432本である。これらの杭の大半は杭列として使用されていたが、中には列外のものや長い年月の間に移動したり倒れてしまったりした杭も相当数あった。また、調査時に発見してから実際の遺物取り上げまでかなりの調査日数を要したため、破損ないし欠損、最悪の場合消失してしまったものもいくつかみられた。特に、竹杭は約40本近く出土したがほとんどボロボロになってしまい実測・写真図版に記載できたものは1点のみである。総数432点中、310本の計測を実施し、その中から25点を図示した。

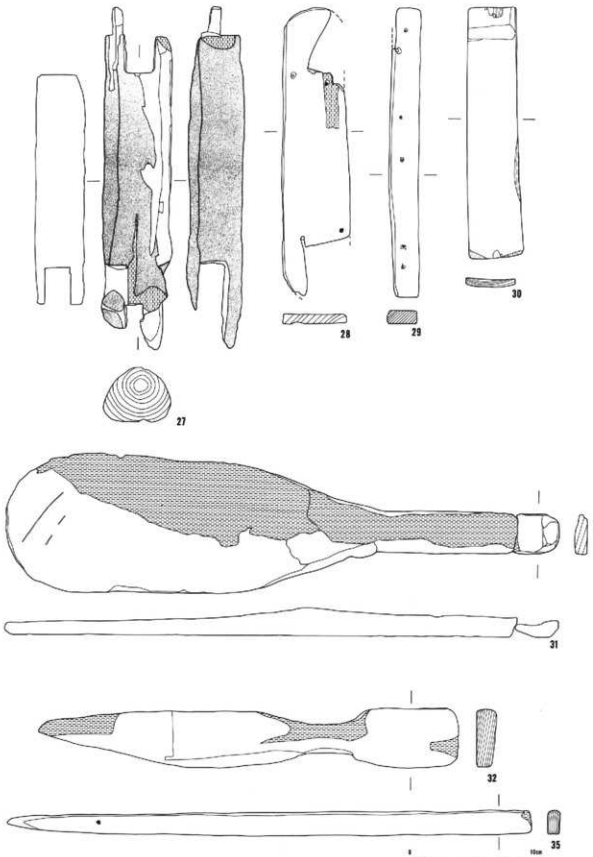
それらの樹種を分類すると№24・25は針葉樹、№5は竹でその他22点はすべて広葉樹である。さらに広葉樹の中で、判別できた樹種としては№7・20がサクラ、№15がコナラと思われる。№24は樹種同定及び年代測定した番号4に当たり、樹種はスギ、年代は630±80（A.D.1320）との結果がでている。他の2点の杭材についても番号1はKW－376、番号3はKW－263に該当し2点共広葉樹である。番号1の年代は810±120（A.D.1140）、番号3は730±80（A.D.1220）で№24の年代とあまり変わらない。得られた測定値より、平安時代末から鎌倉時代初頭にあたる。№4杭は、25点の中では一番大きく最大長121.7cm、最大幅11.7cmを測る。先端は4面削りで加工されている。



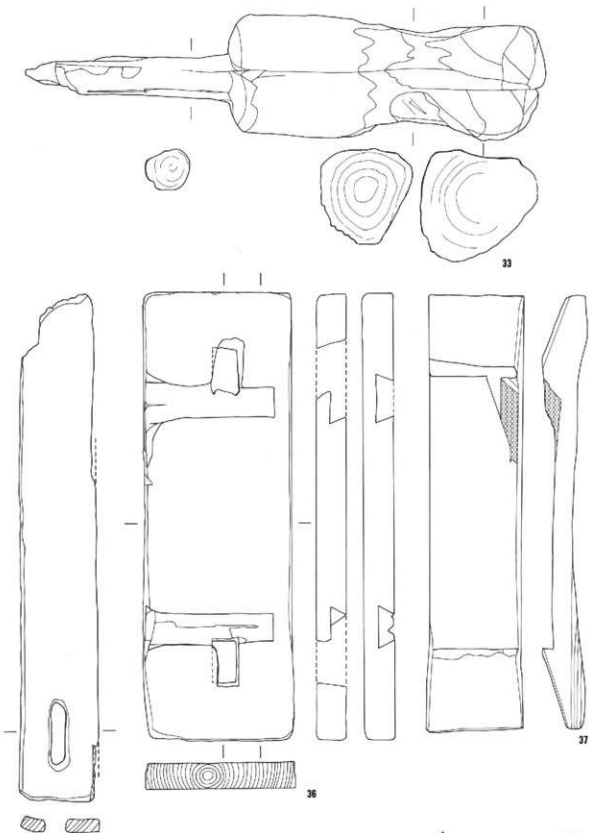
第38図　木製品用途不明品実測図1



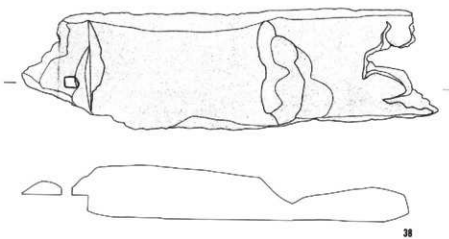
第38図　木製品用途不明品実測図２



第38図　木製品用途不明品実測図３



第38図　木製品用途不明品実測図 4



第38図　木製品用途不明品実測図5

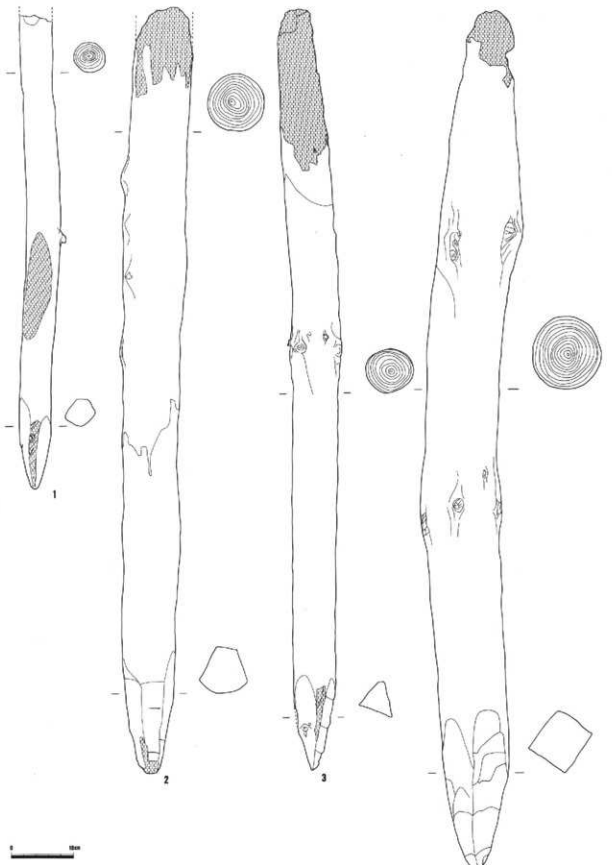
第15表　用途不明具一覧表

単位 mm　（　）推定値

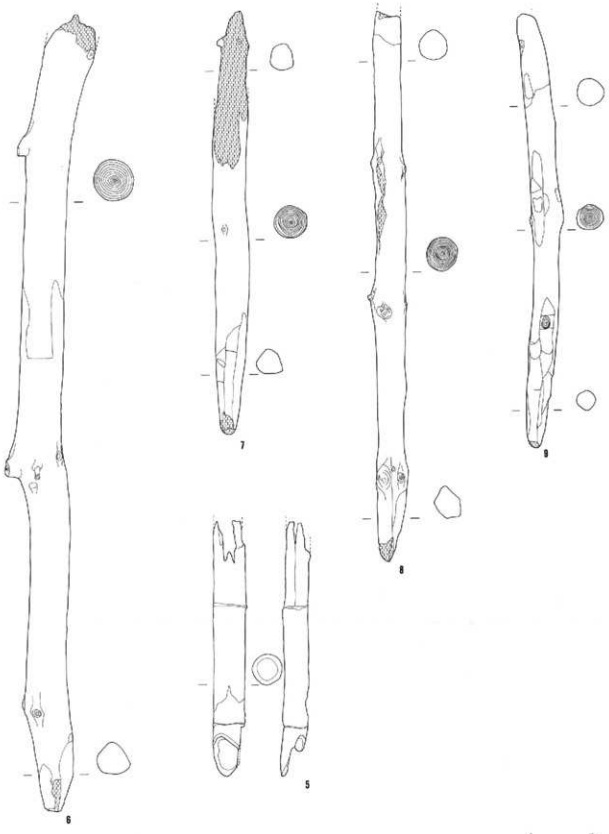
	出土位置	用途	法　量　等	備　考
1	B-3　193	不明	長さ130、最大幅24・最小幅14、人の顔かも？	一部黒漆残存
2	B-4　180	不明	長径59.5、高21、全面に漆塗布	
3	B-4 通538	不明	上部径72・下部径61、高さ32、上部と周囲塗り有り	
4	C-5 通170	不明	長径64、高さ30	
5	C-5 通324	不明	長径37、高さ53	
6	排水溝 413	不明	長径54、高さ35、厚さ3～10	北側排水溝
7	C-4 通271	不明	長さ297、径(97)、厚さ5、漆のような跡が少し残存	鋲穴7つ有り
8	C-5　86	不明	長径108、厚さ6、柾目取り、孔が多数有り	ほぼ完形
9	B-6　165	鍔	鍔状木製品、長さ84、幅68、厚さ10、板目取り	金釘の跡有り
10	C-4 通432	鍔	鍔状木製品、長さ102、幅88、厚さ9、板目取り	2片に分離

単位 mm

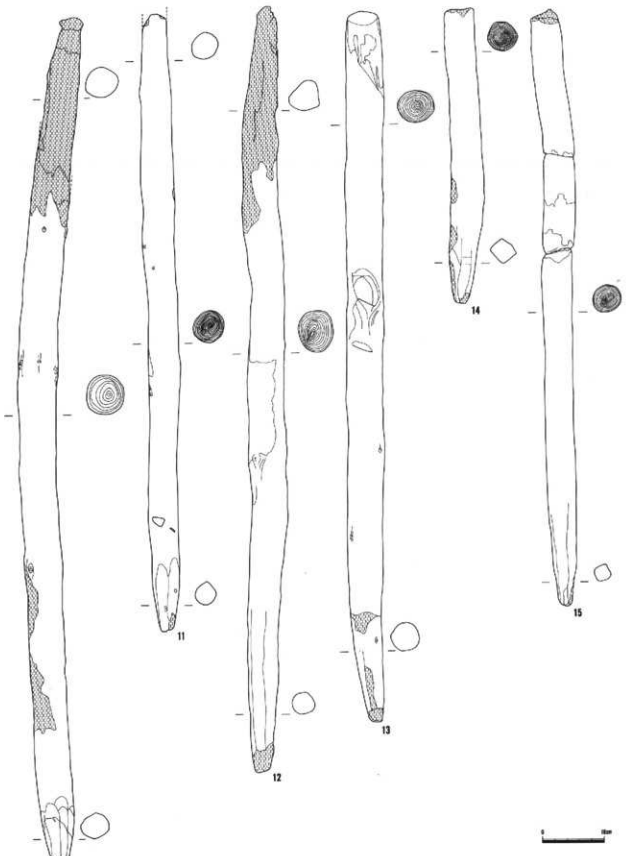
	出土位置	用途	法量等	備考
11	C-4 通459	鍔	鍔状木製品、長さ109、幅99、厚さ13、板目取り	厚いがもろい
12	B 5 通 73	不明	長さ280、幅30、厚さ14、板目取り、小刃か？	
13	C-5 通599	不明	長さ114、幅23、厚さ5、板目取り	新しい？
14	B-5 145	不明	長さ90、幅93、厚さ16、板目取り、孔6ヶ所有り	有孔
15	B-5 通582	不明	長さ284、幅16、厚さ6、板目取り、黒い色を塗布	柄杓の柄か？
16	B-6 2	不明	長さ184、幅48、厚さ7、板目取り	
17	B-6 166	不明	長さ197、幅43、厚さ15、柾目取り	円板か？
18	B-7 通586	不明	長さ248、径25、厚さ10、板目取り、提灯の釣り具	全面に漆塗布
19	C-4 通116	不明	長さ101、幅90、厚さ6、板目取り	
20	C-4 通424	不明	長さ197、最大幅39、厚さ15、板目取り	
21	C-4 通431	不明	長さ219、長径61、厚さ9、柾目取り	貫通孔有り
22	C-5 160	不明	長さ227、幅109、厚さ7、板目取り	
23	C-5 通603	不明	長さ188、幅76、厚さ10、板目取り、木釘残存孔有	
24	C-5 通588	不明	長さ278、幅37、厚さ17、板目取り	
25	C-5 通597	不明	長さ279、幅38、厚さ8、板目取り、木釘残存孔有	容器の一部？
26	C 5 通602	不明	長さ181、幅45、厚さ10、板目取り	何かの部材？
27	C-6 通281	不明	長さ275、幅55、厚さ45、板目取り、焼痕有り	
28	C-7 通250	不明	長さ232、幅55、厚さ8、板目取り、木釘の跡有り	非常に脆い
29	C 5 通157	不明	長さ234、幅24、厚さ11、板目取り、釘穴6ヶ所有り	
30	C-5 通254	不明	長さ203、幅45、厚さ7、板目取り、新しい？	
31	B-4 214	不明	櫃か杓子形木器？ 長さ446、幅113、厚さ22、板目	最下層出土
32	B-5 36	不明	長さ338、幅27、厚さ16、板目取り、焼痕有り	
33	B-5 161	不明	長さ270、幅101、厚さ85、重さ1.45kg	横槌か？
34	B-6 通614	不明	長さ388、幅64、厚さ10、板目取り、貫通孔有り	転用材か？
35	C-5 通600	不明	長さ422、幅19、厚さ10、板目取り、木釘1本残存	先端加工有り
36	C-6 通 67	不明	長さ361、幅172、厚さ21、芯の部分を使用	
37	B-6 通610	不明	長さ350、幅88、厚み37、板目取り	何かの部材？
38	C-5 26	不明	長さ673、幅200、厚さ85、板目取り、15mmの貫通孔	全面焼け焦げ



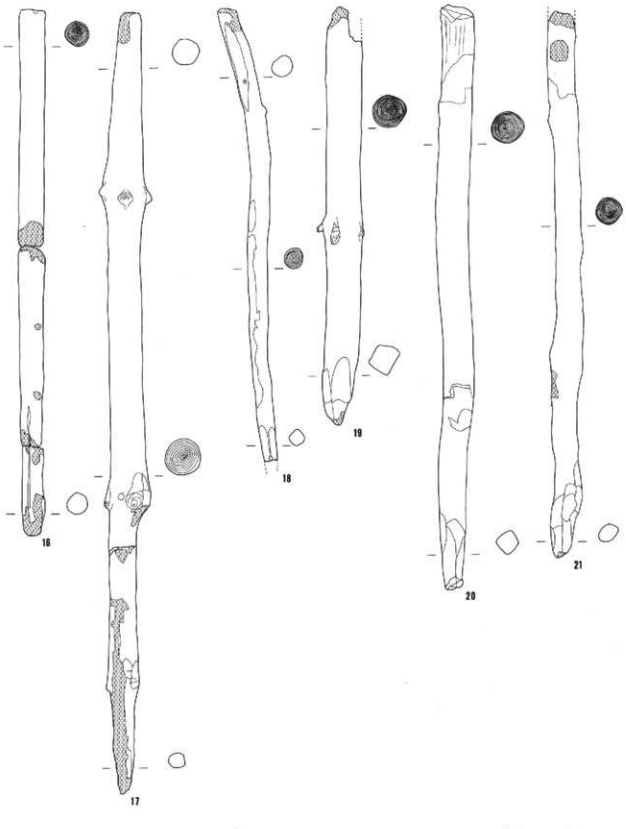
第39図　杭実測図 1



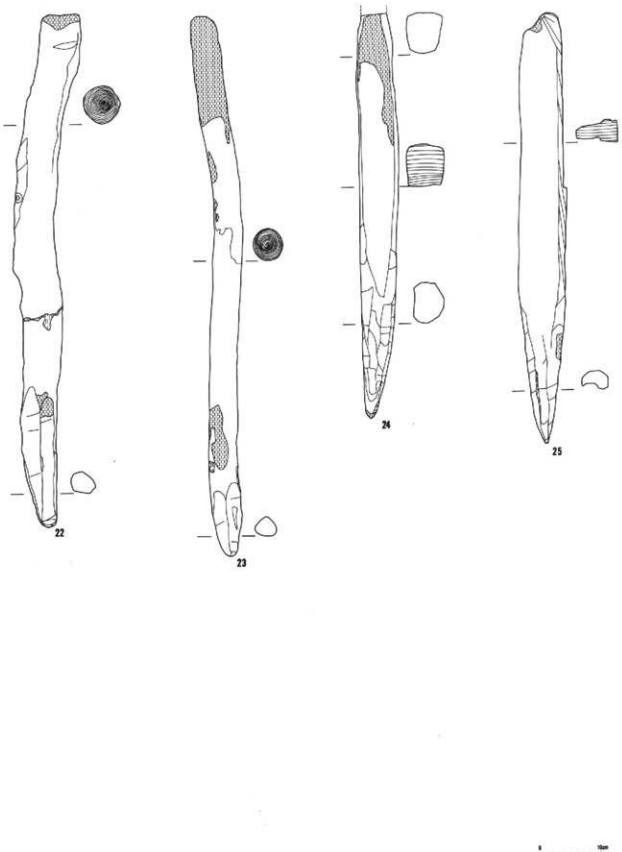
第39図　枕実測図２



第39図　杭実測図3



第39図　杭実測図 4



第39図　杭実測図 5

第16表　杭一覧表

単位 cm

	位置 No.	杭列	最大長	最大幅	樹　種	木取り	備　　考
1	B-6　6	第 1	67	4.7	広葉樹	芯持材	先端5面削り
2	B-5　19	第 2	108.3	8.4	広葉樹	芯持材	先端4面削り、元欠損
3	B-5　24	第 3	107.8	6.7	広葉樹	芯持材	先端3面削り、元欠損
4	C 5　27	第 4	121.7	11.7	広葉樹	芯持材	先端4面削り、元欠損
5	B-5　36	第 5	36.2	4.5	竹		先端片面加工有り、元欠損
6	C-4 162	第 6	112.5	6.5	広葉樹	芯持材	先端2面か3面削り、元欠損
7	B-6　88	第 7	56.7	4.9	広葉樹	芯持材	先端3面削り、元欠損、サクラ
8	C-5 113	第 8	78.2	4.8	広葉樹	芯持材	先端4面削り、元欠損、節は切断される
9	B-6 185	第 9	61.3	4.4	広葉樹	芯持材	先端加工面多し、元欠損
10	C-6 189	第10	119.7	5.6	広葉樹	芯持材	先端8面削り、打ちつぶれ
11	B-6 216	第12	87.3	4.7	広葉樹	芯持材	先端2面削り、元欠損、12 ①杭列
12	B-5 197	第13	108.3	5.4	広葉樹	芯持材	先端加工有り、磨耗有り、表皮残存
13	B-6 208	第15	105	5.5	広葉樹	芯持材	先端加工有り、刃端痕有り、枝打ち部有
14	C-6 225	第16	41.7	4.7	広葉樹	芯持材	先端多面削り
15	B-5 236	第19	84	4.5	広葉樹	芯持材	先端4面削り、元欠損 、3片分離、コナラ
16	B-4 264	第20	74.3	3.7	広葉樹	芯持材	3片に分離、両端欠損、磨耗し脆い
17	C-4 154	第21	105.6	5.8	広葉樹	芯持材	先端加工有り、2片に分離、磨耗している
18	C-4 314	第24	64	3	広葉樹	芯持材	先端2面削り、元欠損
19	C-4 315	第25	59.2	5	広葉樹	芯持材	先端4面削り、元欠損
20	B-3 332	第27	83.7	4.7	広葉樹	芯持材	先端5面削り、3片分離、表皮残存 サクラ
21	B-3 352	第28	77.2	4.2	広葉樹	芯持材	先端3面削り、元欠損、打ちつぶれ
22	B-7 370	第29	72.8	6.2	広葉樹	芯持材	先端多面削り、 3片分離 、刃端痕有り
23	B-4 344	第32	76.3	4.2	広葉樹	芯持材	先端4面削り、元欠損、 磨滅が激しい
24	A 2 412	第35	57	5.7	針葉樹	ミカン	先端加工面多数有り、スギ
25	A-2 415	第36	61	6.9	針葉樹	ミカン	先端多面削り、元欠損、表面剥離部分多し

第V章　あとがき

御殿川と大場川の合流点にあたる大場中島遺跡の調査が実施されたのが1975年、丁度、今から20年前に遡る。これが御殿川流域における発掘調査の始まりで、それ以来中島下舞台・鶴喰・中島上舞台・中島西原旧八反畑前田・梅名大曲田・金沢遺跡と下流から上流へと改修工事の進捗に合わせた発掘調査が実施され、現在に至っている。

鶴喰前田遺跡におけるこの度の発掘調査によって御殿川流域での古代中世期における人々の生活空間が旧河川の流路（蛇行帯の中）近くに迄及んでいることが明らかになった。住居跡等の発見はできなかったが、弥生土器をはじめとする多量の完形の壺の検出は、明らかに二次的な堆積物ではない。さらに、比較的今までの調査では弥生時代中期の遺物といえば土器片が多かった中で、今回の細頸壺の検出は完形ではなかったが大きな成果の一つであると考える。第II章・第I節遺跡の立地で前述したが、現在の調査区一帯は約8000年前の縄文海進、さらにその後の縄文海進や富士火山の降下堆積物、狩野川・黄瀬川等の河成堆積物によって降化された。そして、約2800年前（縄文晩期）に泥流堆積物によって三島溶岩流や古狩野湾沖積層を厚く覆い、三島扇状地を形成した。そのため、黄瀬川（狭義の三島扇状地）扇状地堆積物の中には縄文時代の遺物は存在しない。弥生時代前期の遺物の検出には至らなかったが古代の人々の生活が弥生時代中期には、この調査区近辺で始まっていたものと思われる。

次に東西文化の交流があげられる。同じ県内でも、縄文時代の伝統を強く残す東（御殿川流域）の土器と弥生時代になってから作られた西の土器では、文様や形からかなりの違いがみられる。大体、天竜川を境に東の土器は縄文、西の土器は櫛描文がみられる。また、東の土器は頸部がゆるやかで長めに対して、西は折れ曲がり短めというように形態もかなり異なっている。出土した遺物の中にも何点か西の土器が含まれていたが、その中の特筆すべきものとしてパレススタイルの赤色塗彩の壺がある。伊勢湾沿岸地方を生産地としているこの土器の出土は、模倣されたものとはいえ東西文化の交流を考えるうえで大変貴重なものである。今後、胎土分析等実施して科学的な面から取り組んでいきたい。。

第３点として護岸杭列に伴う「杭出し」があげられる。今回の調査で432本の多量の杭が検出された。当初は単なる護岸に伴う杭だと思われていたが、列状に且つ方向性を伴って打たれていた。杭列の方向が旧流路の水の流れに対して直角に近いような形で打ち込まれていたため、「杭出し」の一部と考えられる。河川の水流を制御するための「杭出し」は、その後の「牛」・「枠」類等の護岸工法の基礎ともいえる工法である。今回の調査では調査範囲があまりにも狭いためほんの「杭出し」の一部という成果しか得られなかったが、今後の調査によって、さらに旧河川の流路と杭列の関係をさらに解明していきたいと願っている。以上、３点をあげたがその他にも動物遺体・多種多様の木製品等についても時期や用途について特定していきたい。御殿川流域遺跡群の調査は、河川改修工事の進捗に併せて今後も引き続き行われる予定である。調査区下流の本調査（鶴喰丸田遺跡）も10月１日より開始された。今までの調査結果を踏まえて、さらにより新しい成果が得られるよう努力していきたい。

最後に当研究所の足立順司・中嶋郁夫両主任調査員には陶磁器、土器に関して多大の御指導・御助言を賜った。厚くお礼申し上げる次第である。

第Ⅵ章　自然科学による分析

第１節　三島市御殿川流域遺跡群出土の動物遺体

金子浩昌

はじめに

今回報告する資料は、先に報告された御殿川流域遺跡群の一つであって、調査は平成２・３年度の中島西原田・八反畑前田・梅名大曲田各遺跡の調査に引き続いて行われたものである。出土した資料は多いものではなかったが、この遺跡の調査は今後も継続されることが予定されており、今回の資料についての総括的な考察もまた改めて果たしたいと考えている。

１．御殿川出土の動物遺体種名表

１．軟体動物門　Phylum Mollusca
　腹足綱　Class Gastropoda
　　中腹足目　Order Mesogastropoda
　　カワニナ科　Family Pleuroceridae
　　カワニナ　Semisulucospira bensoni
２．脊椎動物門　Phylum VERTEBRATA
　哺乳綱　Class Mammalia
　　霊長目　Order Primates
　　ヒト科　Family Hominidae
　　ヒト　Homo sapiens
　　食肉目　Order Carnivora
　　イヌ科　Family Canidae
　　イヌ　Canis familiaris
　　クジラ目　Order Cetacea
　　イルカ科　Family Delphinidae
　　属種不明　Gen. et sp. indet.
　　奇蹄目　Order Perissodactyla
　　ウマ科　Family Equidae
　　ウマ　Equus caballus
　　偶蹄目　Order Artiodactyla
　　シカ科　Family Cervidae
　　ニホンジカ　Cervus nippon
　　ウシ　Bos taurus

動物遺体の記載

軟体動物門

カワニナ　Semisulucospira bensoni

貝類としてはこの種類を一点採取したのみである。殻高24.0㎜の大きさで、殻頂は欠損している。

脊椎動物門

ヒト　Homo sapiens（図版63－1a・1b）

右側の頭頂骨一点を採取している。成人個体のものである。

C－4グリッドの砂礫層から検出され、矢状縫合・人字形縫合がみられる。

イヌ Canis familiaris（図版63－4）

M_1のみを残す右下顎骨（体高19.57㎜、厚さ9.77㎜）一点を採取している。C－5グリッドより検出。

イルカ科属種不明 Delphinidae gen. et sp. indet.

椎骨二点がある。ほぼ完存する標本である。中程度の大きさのイルカの椎骨である。

第17表　イルカ計測表

出土位置No.	層位	骨格部位	近位、骨体、遠位、完存	計　測　値
B－4　5	砂礫	腰椎骨	完存	椎体長16.98、椎体横径35.44
不　明　16	不明	尾椎骨		現横径34.07、現長22.42

ウマ Equus caballus

最も多くの遺骸を出土した。下顎骨、肩甲骨、脛骨、中足骨、基節骨各1点が主要な骨格で、他に遊離歯が14点あった。下顎骨はかなり破損しているが、臼歯4点があったことが確認されている。下顎骨に残されていた臼歯は歯冠の磨滅強く、15才前後になる個体であったことが推測される。

十数個出土している遊離歯の個体関係を明らかにする作業はなお果たされていないのが現状であるが、歯の咬耗の状態から数個体分があったと推定され、年齢的には7才以上15才前後位の個体であったと推定される。

肩甲骨は関節部から骨体部を残すものである。脛骨は近・遠位の両端を欠き、表面がかなり腐食した保存のよいものではない。中足骨はほぼ完存する。骨質が硬質であるためによく保存されたのであろう。この骨の全長は日本の在来馬のなかで中型でやや小さい御崎馬の大きさに匹敵する。前回出土していた遺骸もこの大きさに一致する標本が多かった。基節骨もほぼ完存する。遠位骨端の一部に切痕らしい痕跡が認められた。この切痕は中足骨以下を切断する際の加工痕であるかも知れない。「蹄＝ひづめ」を製品の素材として利用するために切り離すのである。近世のウマの遺骸では明瞭な例があるが、それ以前では加工痕のある例は少ない。今後注意していかなくてはならない遺物である。

第18表　ウマ計測表　GL：最大長　SD：骨体最小幅　Bp：近位端幅　Bd：遠位端幅　単位㎜

出土位置No.	層位	骨格部位	左右	計測値　近位・骨体・遠位・完存	備考
トレンチ4　1	不明	基節骨	左	Bp50.27± SD30.65 Bd43.4 32.04 h	完存 切痕有
B－7　2	砂礫	肩甲骨	右	骨体	近遠位端欠損
B－4　6	砂礫	脛　骨	右	SD35.10	前縁欠損
B－2　7	砂層	中足骨	右	Bp43.88 SD25.43 GL253.0 Bd40.72	完存
B－3　11	不明	下顎骨	右	骨体　第二・三前臼歯、第一・二後臼歯有り	
B－2　13	不明	肋骨	左	近位骨体	5番目の骨

ニホンジカ Cervus nippon

ウマよりもやや少なかったものの、それに近い出土量があった。主要な狩猟獣であったことがわかる。頭蓋は左右の前頭骨から頭頂骨、後頭骨の一部までが残るものである。角座骨があるが、角座以上の角幹の部分はなく自然落角した跡を残している。頭蓋の破損部の周辺には特に人為的な破壊の跡などを既に認め難い状態である。頭蓋の損傷は解体の後に長い間水没していた間に破損したものであろう。

鹿角

角座部と角の下の方を残したものである。角座骨の一部も残り、その部分から切断されたのではないかと思われる。鹿角を使うために頭蓋から切断したものであるが、どのように使われたものか明らかでない。この角の表面は粗雑で充分に角化していなかったかも知れない。

橈骨の近位骨端はほぼ形が残り、遠位骨端は欠ける。太く大型の標本でおそらく雄獣のものであろう。

中手骨は全体の約二分の一を残すもので、その切断部分は研磨されたように磨滅しているのが特徴的である。また近位骨端にも磨滅した痕跡がみられる。これも大きく雄獣のものであったと思われる。

大腿骨は遠位部を残すものであるが、骨表面の破損、腐食が相当に進み、膝の関節面は磨滅して海綿体が露呈するような状態である。骨体部の破損はもとはここを打ち割って骨髄を取り出したものなのだろう。

第19表　ニホンジカ計測表　　Bp：近位端幅　SD：骨体最小幅　　単位mm

出土位置No.	層位	骨格部位	左右	計測値　近位・骨体・遠位・完存	備考
C－6　4	砂礫	中手骨	右	Bp28.24－　近位部	鏃状加工品
C－4　10	不明	橈　骨	右	Bp40.96　SD26.79 近位～骨体	オス遠位欠損
B－2　12	不明	大腿骨	左	遠位部	
B－4　14	砂礫	角	左	48.43×46.72（角座径）	切断角
B－3　15	砂礫	頭蓋骨		前頭幅102.81 角座骨のみを残す	角は落ちる

ウシ Bos taurus（図版60－7）

右の中足骨一点があるのみである。遠位端を欠く細く小さな若い個体の標本である。砂礫層B－3グリッドから検出され、骨体最小幅は18.76mmを計る。成獣だが細くきゃしゃな骨体である。

収束と今後の課題

これまでに報告されてきた御殿川遺跡群の一つであり、今回の検出した動物遺体の内容にも前回の報告と共通する内容をみることができ、さらに新資料が得られたことは大きな収穫であった。

1．貝類には淡水産種を僅かに検出したのみである。前回の調査においても同様であった。しかし鹹水産の貝種の出土も予想されるところであって、今後の調査では注意したい点である。

2．脊椎動物では今回は獣類遺骸を検出したのみである。ヒトは前回にも検出されており、すべて散乱する状態の出土であった。河川の自然堆積層中にヒトの遺骸のこうした状態での出土は稀ではないが、その埋没に至る経緯は明らかにされていない。他の動物遺体との関係を知る手がかりを探りたい。イヌもまたヒトとの関連の深い動物である。当時のヒトとの関わりを知るためにも、特別の関心をもつのである。

3．ウマ、ウシの遺骸の出土の状況は前回の調査とよく似ていた。当時のこの地域でのこうした家畜の

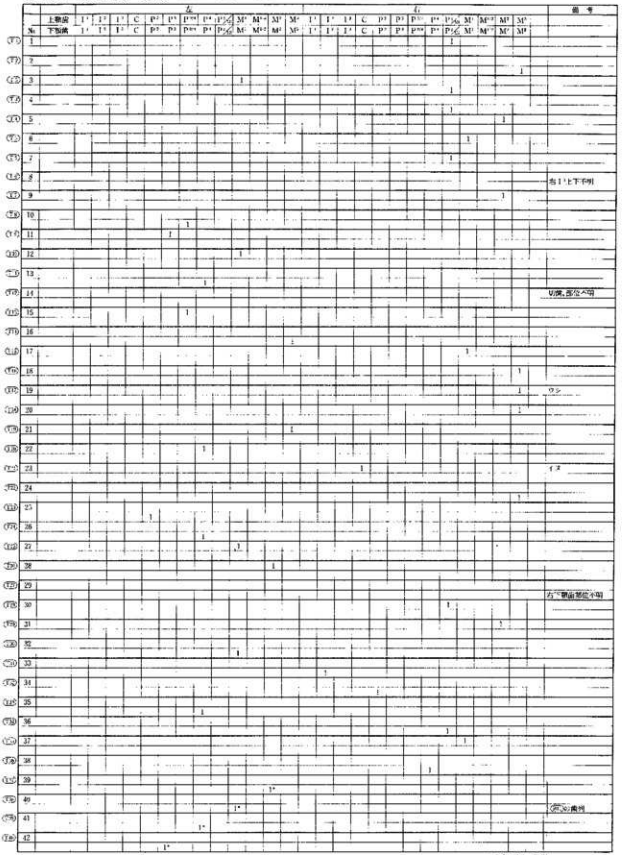
飼育の実際を知る貴重な資料である。今回もウマの完全な中足骨の出土は体の大きさを推定するために良い標本となった。なおウマ、ウシの年代の確認も重要な課題である。弥生期以降どのような変遷をたどるのか、この地域での様相を知る手がかりが得られないかと思うのである。

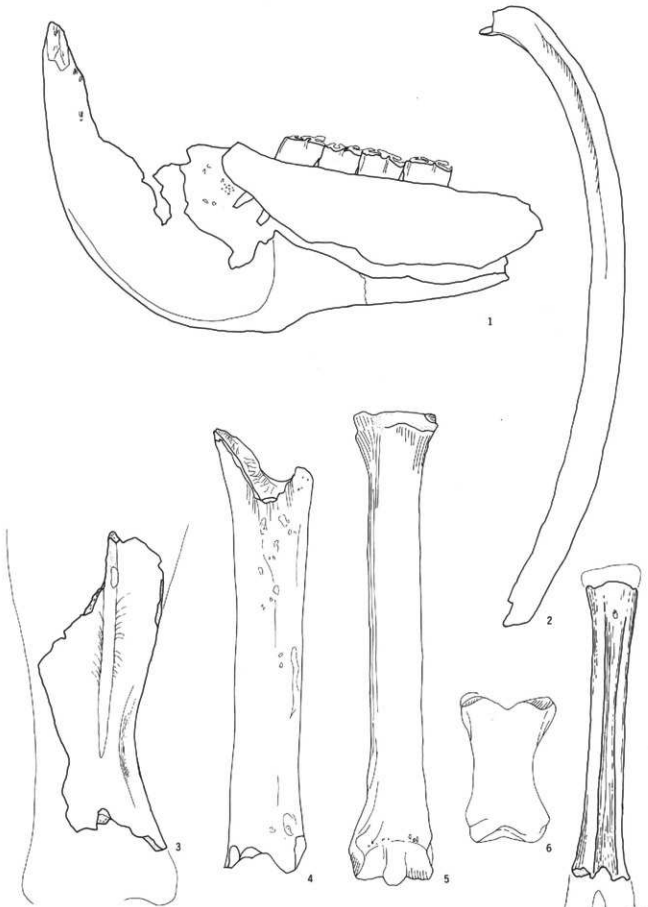
4．ニホンジカの遊離が多く検出されたことは、前回の調査とも共通する点で、狩猟獣としての重要さを理解させる資料であった。特に頭蓋の出土は、解体の様子、鹿角利用の手順、猟の季節を示唆するのである。

後　記

今回の調査に当たっては静岡県埋蔵文化財調査研究所の杉浦幸男氏に種々御教示いただいたが、調査地点が前回の調査地域とも関連があるところから同研究所の橋本敬之氏にもお世話になった。また資料の整理には前同同様村川裕子、山下洋子、田村みどりの皆様に協力いただいた。上記の方々に厚く御礼を申し上げる次第である。

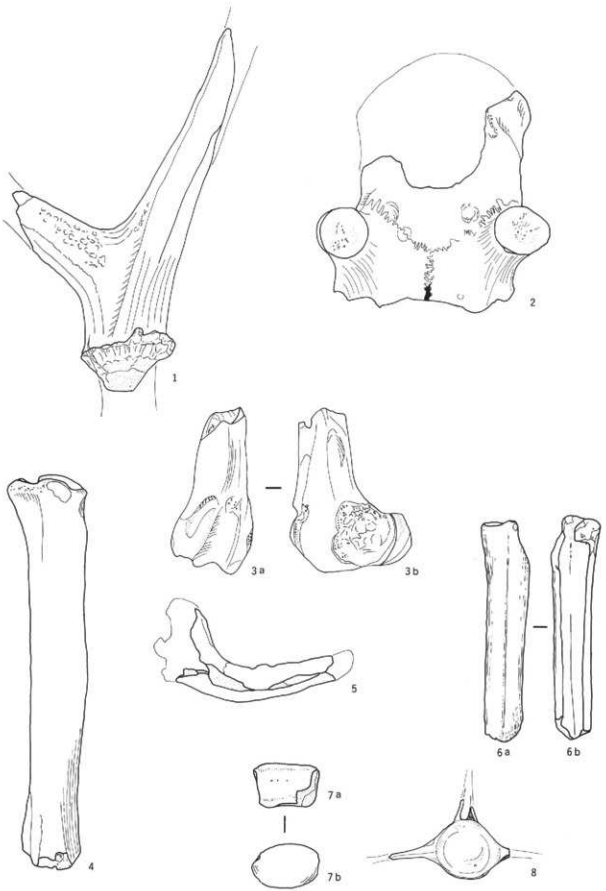
第20表　歯出土数一覧表　ウマ・ウシ・イヌ





1 (No.11)ウマ右下顎骨　2 (No.13)ウマ肋骨　3 (No.2)ウマ右肩甲骨　4 (No.6)ウマ右脛骨
5 (No.7)ウマ中足骨　6 (No.1)ウマ左基節骨　7 (No.9)ウシ中足骨

第40図　動物遺体実測図1



1 (№14) ニホンジカ左角　2 (№15) ニホンジカ頭蓋骨　3 (№12) a b ニホンジカ大腿骨
4 (№10) ニホンジカ右橈骨　5 (№3) イヌ右下顎骨　6 (№4) a b ニホンジカ中手骨
7 (№16) イルカ類尾椎骨　8 (№5) イルカ腰椎

第40図　動物遺体実測図2

第２節　木製品年代測定・材同定

出土した木製品の樹種と年代

パリノ・サーヴェイ株式会社

出土した木製品の樹種と年代

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

御殿川流域遺跡群では、これまでに中島西原田遺跡および西原田遺跡において花粉分析・珪藻分析・種子同定が実施され、古環境に関する検討が行われている(パリノ・サーヴェイ株式会社，1994ａ，1994ｂ)。また、出土した漆器の塗膜分析および樹種同定、動物遺体の同定も実施されている(四柳，1994；金子，1994)。これらの調査から、本遺跡群における古環境や生業の一端が明らかとなりつつある。

本報告では、本遺跡群の縄文前期田遺跡から出土した杭および鍬の樹種を明らかにするとともに、年代確認のためにこれらの木材を使用して放射性炭素年代測定を実施する。

1．試料

試料は、出土した木製品４点（試料番号１～４）である。各木製品の詳細は、測定結果・同定結果とともに表１に記した。

2．方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

(2) 樹種同定

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとした。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3．結果

年代測定結果および樹種同定結果を表１に示す。４点の木製品の樹種は、試料番号１が樹種の同定にいたらず広葉樹（散孔材）とした。他の３点は針葉樹１種類（スギ）、広葉樹２種類（コナラ属アカガシ亜属・アワブキ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・スギ（*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don）　スギ科スギ属

早材部から晩材部への移行はやや急であるが、晩材部の幅は比較的広い。樹種細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で２～４個。放射組織は単列、1～15細胞高。

第21表　樹種同定結果および年代測定結果

番号	出土位置	用途	樹種	年代	Code No.
1	砂礫層	杭	広葉樹（散孔材）	810±120 A. D. 1140	Gak−18723
2	黒色砂層	鍬	コナラ属アカガシ亜属	6200±210 4250 B. C.	Gak−18724
3	黒色砂層〜砂礫層	杭	アワブキ属	730± 80 A. D. 1220	Gak−18725
4	砂礫層	杭	スギ	630± 80 A. D. 1320	Gak−18726

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.）　　**ブナ科**

放射孔材で、管壁厚は中庸〜厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1〜15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・アワブキ属（*Meliosma* sp.）　　**アワブキ科**

散孔材で、管孔は単独または2〜6個が複合する。道管は単または階段穿孔を有し、壁孔は小型で交互状に配列する。放射組織は大型で異性II型、1〜3細胞幅、1〜50細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。

4．考察

(1)　年代値について

4点の木製品の内、杭3点の測定値はいずれも誤差範囲で一致する。得られた測定値は、平安時代末から鎌倉時代初頃にあたる。これは、出土した他の遺物とも調和的であり、杭材の伐採が平安時代末〜鎌倉時代初頃に行われたことが推定される。これらの杭材については、今後木取りの情報も加味した上で検討する必要がある。

鍬は、杭材3点とは測定値が異なっている。東海地方や関東地方でこれまでに行われてきた放射性炭素年代測定結果（キーリ・武藤，1984）と比較すると、今回の測定値は縄文時代前期の年代に近い。農具であること、弥生時代中期の細頸壺等が検出されていることを考慮すれば、鍬は弥生時代中期に製作された可能性がある。このような年代値が得られた背景には、使用した樹木の樹齢や測定の技術上の問題などが考えられる。

(2)　木材利用について

杭材3点は、1点が広葉樹（散孔材）で、他の2点がアワブキ属とスギに同定された。杭材は、これまで各地で行われた調査で、種類数が多く特定の種類がないことから、周辺で入手可能な木材が使用されたと考えられる。また、ときには木製品を製作するために伐採した樹木の余材や廃材の転用などもあったであろう。したがって、杭材は遺跡周辺の古植生や生業活動の一端を示しているといえる。今回の杭材は、出土遺物や年代測定の結果から平安時代末〜鎌倉時代初頃の植生等を反映していると考えられる。アワブキ属とスギは現在でも周辺の森林内で見ることができ、花粉分析の結果（パリノ・サーヴェイ株式会社，1994b）から当時も周辺部で入手可能であったと考えられる。

今回確認されたうちスギは、韮山町山木遺跡や沼津市雌鹿塚遺跡において弥生時代の木製品に大量に

使用されていたことが明らかとなっている（豆理・山内，1962；能城ほか，1991）。このことから、スギが本地域において重要な木材の一つであったことがうかがえる。そのためスギについては、木製品を製作するために伐採した樹木の枝や廃材が転用された可能性もある。杭材は、今回調査した他にも大量に出土しており、今後これらの杭についても種類を明らかにした上で周辺植生などについて検討することが必要である。

鍬にアカガシ亜属が使用される例は西日本を中心に数多く知られ、アカガシ亜属以外の樹種が確認される例の方が少ない（島地・伊東，1988；伊東，1990）。本地域においても、雌鹿塚遺跡で鍬にアカガシ亜属が使用されていたことが明らかとなっている（能城ほか，1991）。これらの結果から、鍬にアカガシ亜属を使用する用材選択が西日本を中心に広い地域で行われていたことは明らかであり、今回の結果もその一例といえる。

〈引用文献〉

伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II．木材研究・資料，26，p. 91—189．

金子浩昌（1994）静岡県三島市御殿川流域遺跡群出土の動物遺体．静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第50集「御殿川流域遺跡群II　平成2・3年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　中島西原田遺跡・八反畑前田遺跡・梅名大曲田遺跡」，p. 249-285，財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所．

キーリ　C. T.・武藤康弘（1984）縄文時代の年代．加藤晋平・小林達雄・藤本　強編「縄文文化の研究1　縄文人とその環境」，p. 246-275，雄山閣．

能城修一・車崎正彦・鈴木三男・石川治夫（1991）静岡県沼津市雌鹿塚遺跡出土木製品の用材．金沢大学教養部論集・人文科学編，28(2)，p. 43-63．

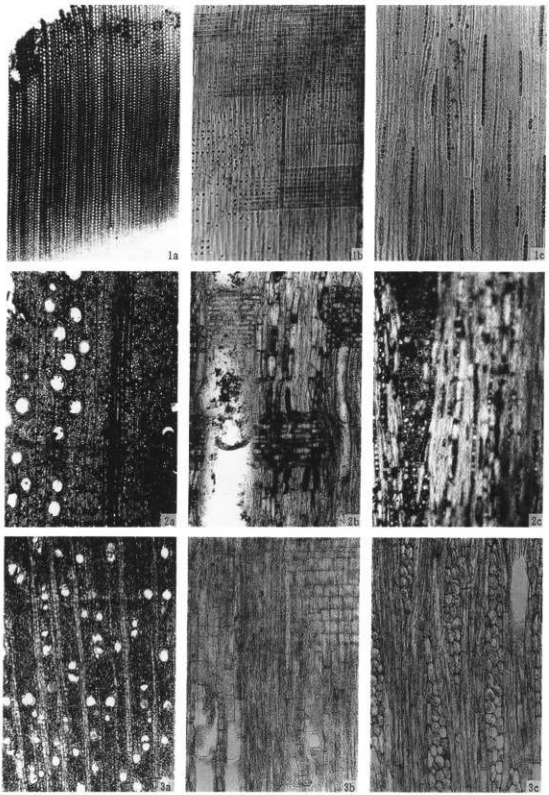
パリノ・サーヴェイ株式会社（1994a）御殿川流域遺跡群中島西原田遺跡　自然科学分析調査．静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第50集「御殿川流域遺跡群II　平成2・3年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　中島西原田遺跡・八反畑前田遺跡・梅名大曲田遺跡」，p. 191-202，財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1994b）西原田遺跡　自然科学分析報告．静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第50集「御殿川流域遺跡群II　平成2・3年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　中島西原田遺跡・八反畑前田遺跡・梅名大曲田遺跡」，p. 203-213，財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所．

島地　謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，296p.，雄山閣．

四柳嘉章（1994）三島市御殿川流域遺跡群出土漆器の塗膜分析．静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第50集「御殿川流域遺跡群II　平成2・3年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　中島西原田遺跡・八反畑前田遺跡・梅名大曲田遺跡」，p. 215-248，財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所．

豆理俊次・山内　文（1962）木材・後藤守一編「伊豆／山木遺跡　弥生時代木製品の研究」，p. 95-101，築地書館．



1．スギ(試料番号4)
2．コナラ属アカガシ亜属(試料番号2)
3．アワブキ属(試料番号3)
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b，c

図版5　木材

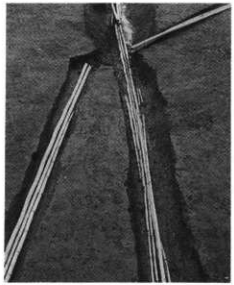
写真図版

調査区全景（北側より）

暗　渠

暗　渠

調査前風景（北側より）



暗　渠

杭　列（竹）

杭　列

杭　出　し

杭　出　し

下駄・漆器・蓋出土状況

漆器出土状況

シガラ出土状況

No. 5　土層断面

鍬筥出土状況

杓子形木器？出土状況

石器出土状況

銅釧出土状況

鹿角出土状況

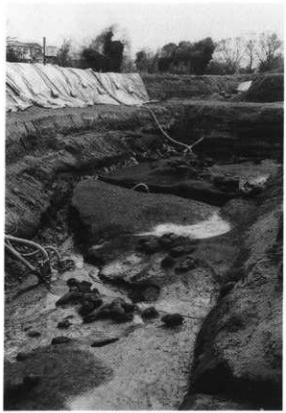
土器出土状況

細頸壺出土状況

第Ⅳ層（基盤層）出土状況（1区）

硬質砂層（マサ土）出土状況（1区）

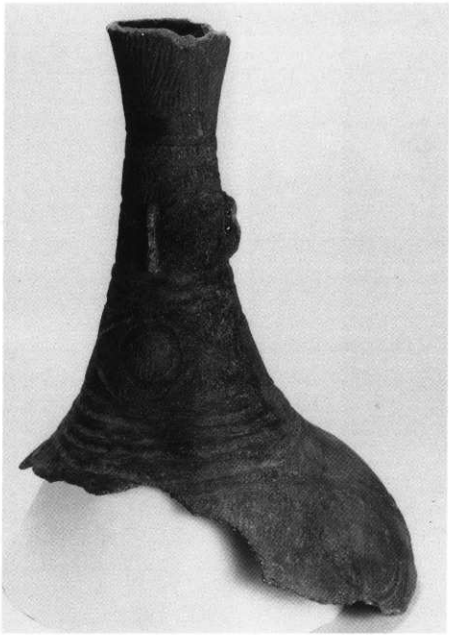
第Ⅳ層（基盤層）出土状況（２区）



第Ⅳ層（基盤層）出土状況（２区）

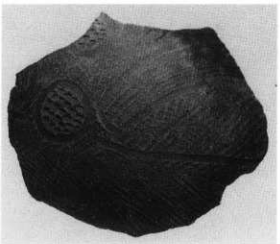
頭蓋骨（ニホンジカ）出土状況

調査終了（南側より）



1

1－2



1－3

土器　1

2

3

6

4

5

7

8

9

土器　2

10

11

12

13

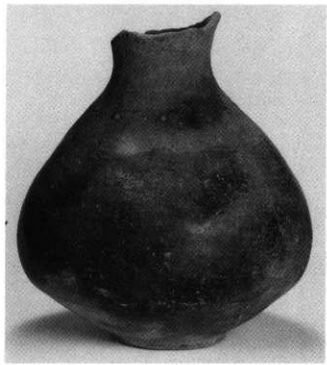
14

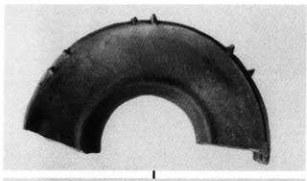
15

16

17

21


19



20

22

23

25

24

33

29

26

28

32

36

31

34

30

27

35

37

38

39

41

42

45

47

48

44

57

40

49

50

51

52

53

56

58

59

60

61

62

63

64

1

2

3

4

5

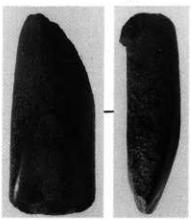
6

7

8

9

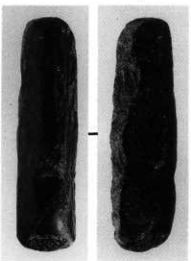
10


11

12

13

14


15

石器　打製石斧・磨製石斧

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

石器　石皿・敲石　1

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

石器　敲石　2

48

49

50

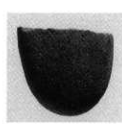
51

52

53

54

55


56

57

58

59

60

61

62

63

64

石器　敲石３・凹石・磨石・石錘

1

2

3

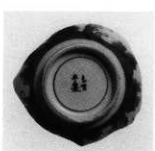
4

5

6

7

8


9

10

11

12

13

14

15

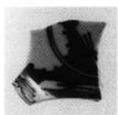
16

17

18

19

20

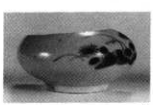

21

22

23

24

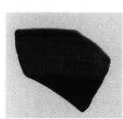
25


26

27

28

32


33

29

30

31

34

35

39

40

36

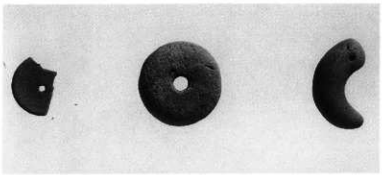
37

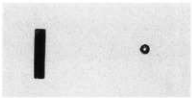
38

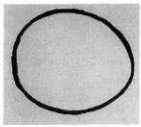
41

42

43


3
2
1


1
2

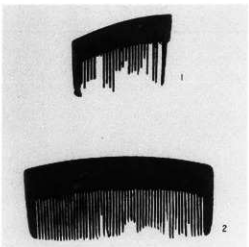

1

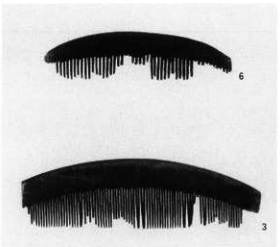
5

4

3－1

3－2


1
2


6
3

5

18

59

25

73

95

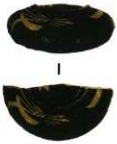
125

28

79

134

50


123

136

2

4

10

12

14

15

20

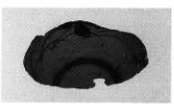
26

30

37

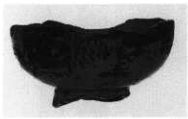
38

39



40

42


47

49

53

55

54

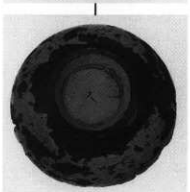
63

69

80

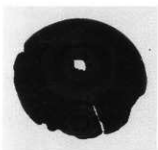
76

81


84

85

87


92

93

97

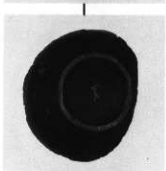
101

109

114

121

124


122

130

132

139

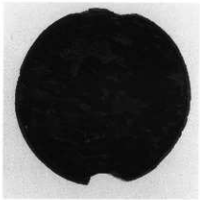
140

142

175

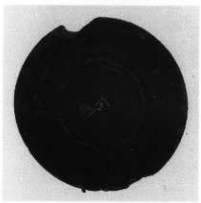
145

155



148

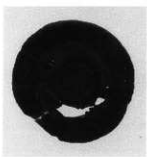
164


177

149

167

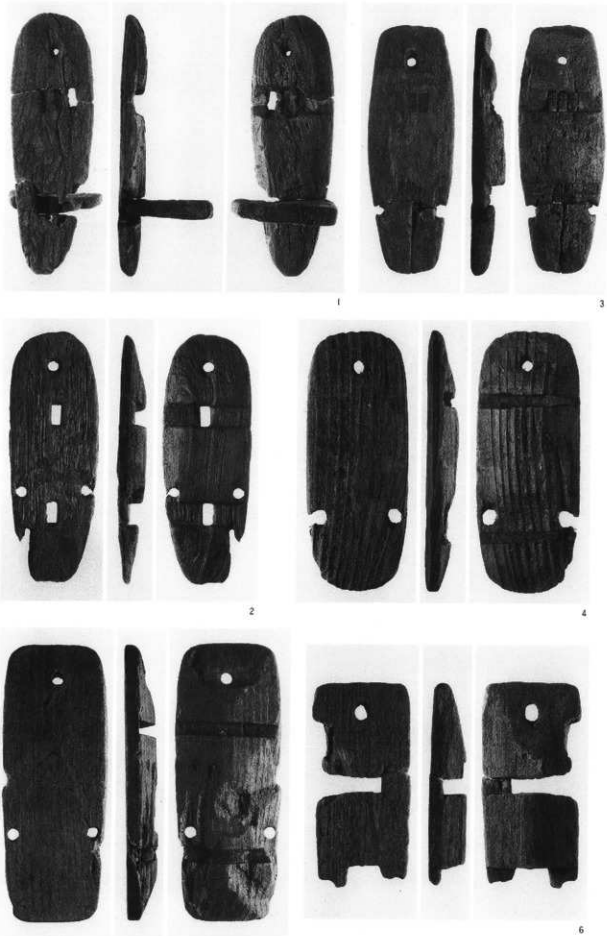
152


168

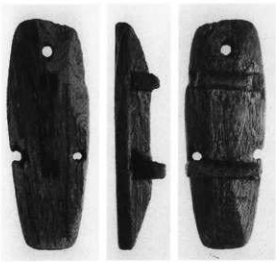
156

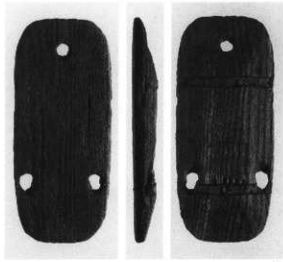
170

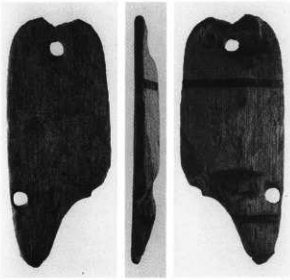
181

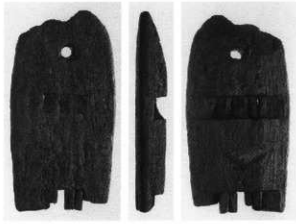


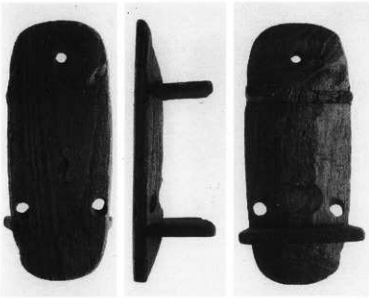
下駄 1


7


9

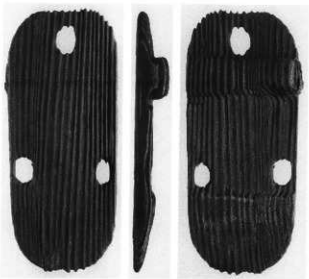

10


11

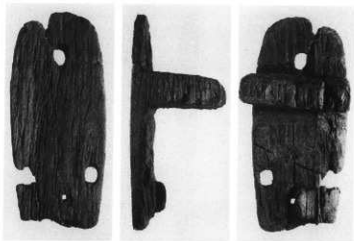

8

8

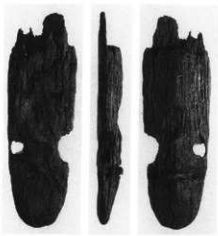
下駄　2



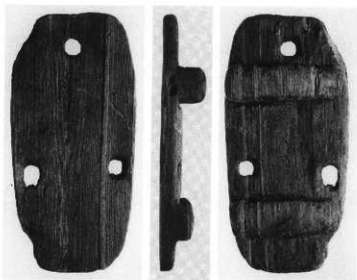
15



16



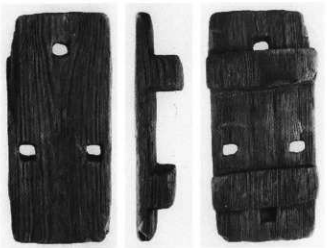
13



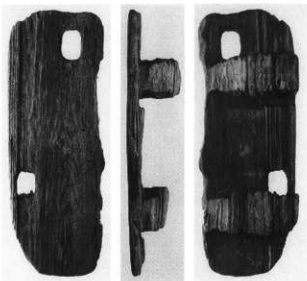
17

15

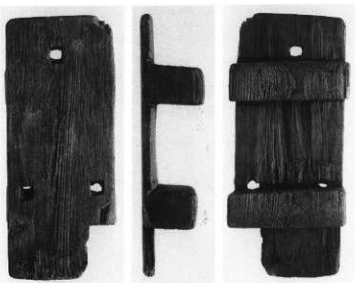
17



18

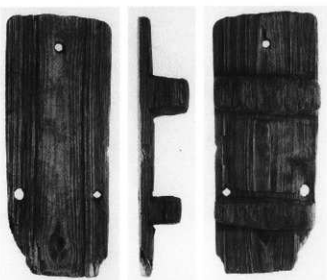


19



20

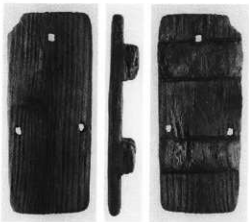
18

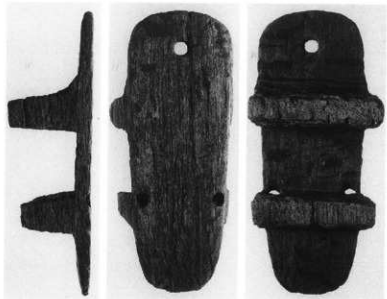


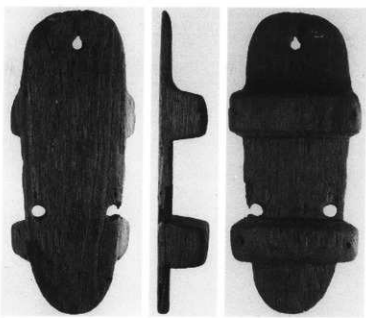
21

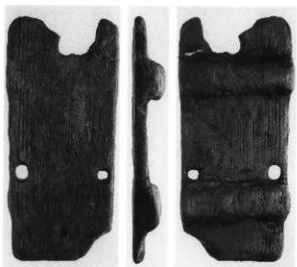
20

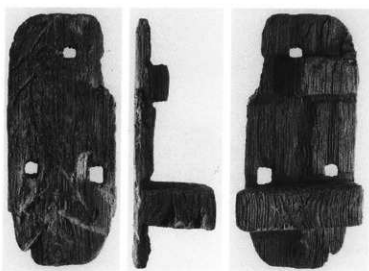
下駄　4


26


23

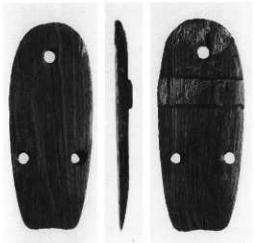

25

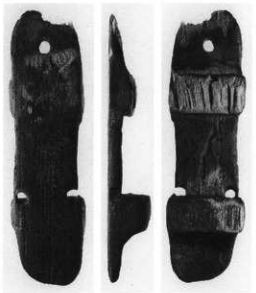

22

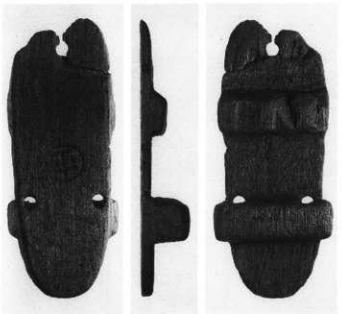

27

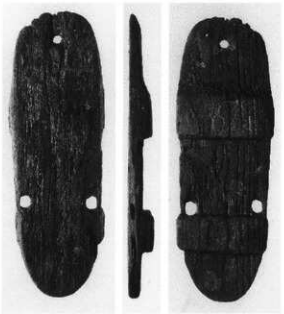
25

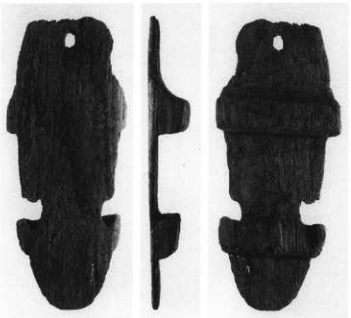
下駄　5


28


29

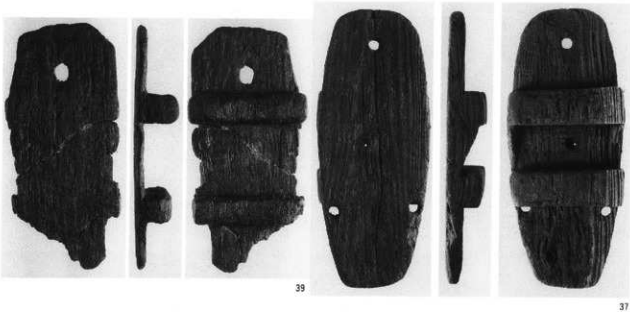

31


34


35

31

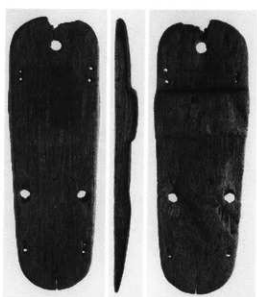
下駄　6



39

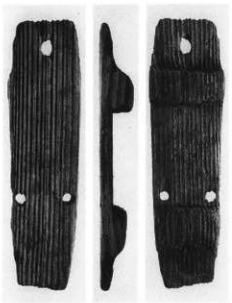
37

38

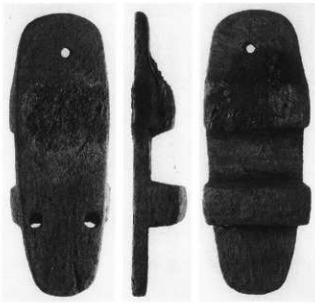


36

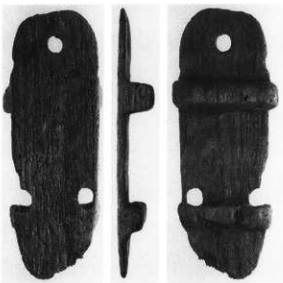
37



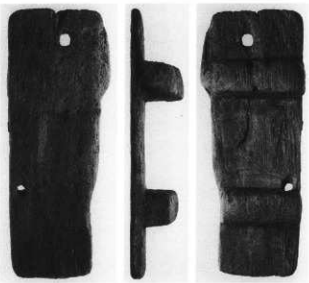
40



42

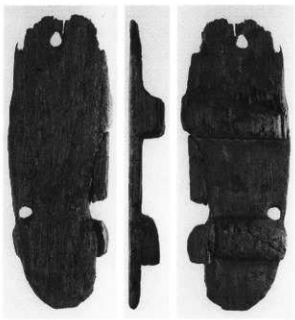


43



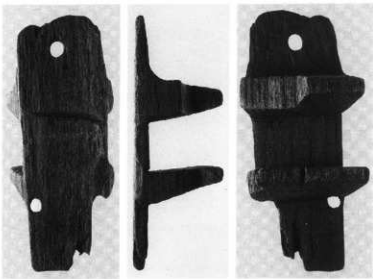
44

43

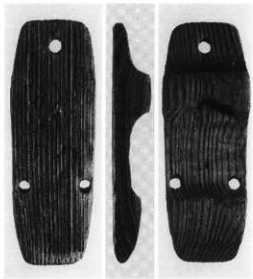


45

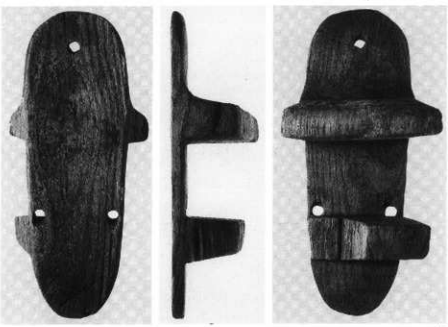
下駄　8



48

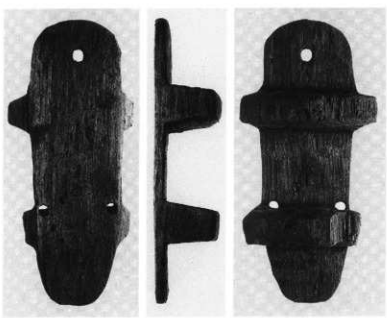


49



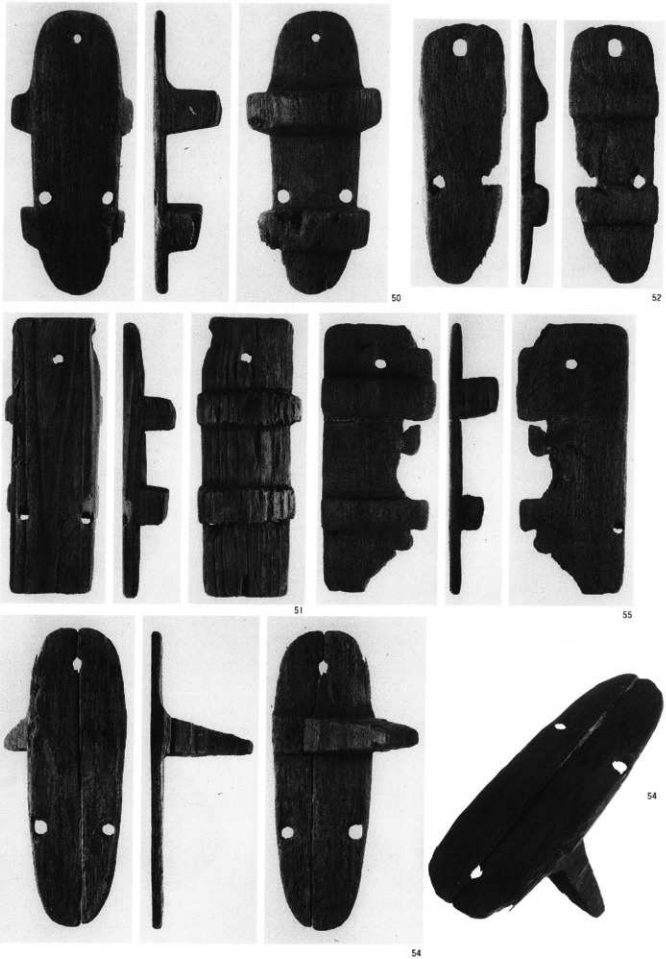
46

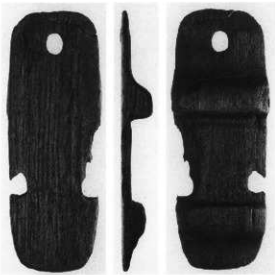
49



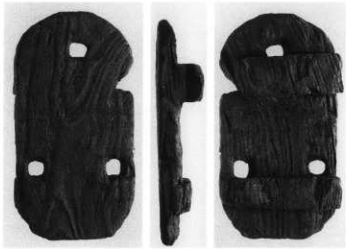
47

46

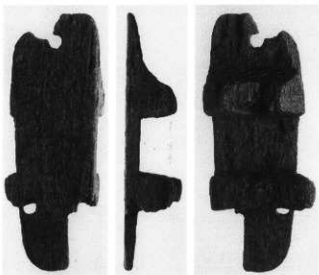

50
52
51
55
54
54



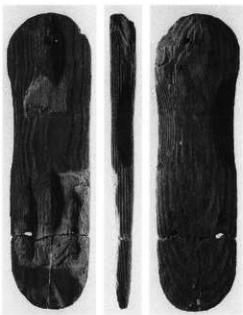
56



57

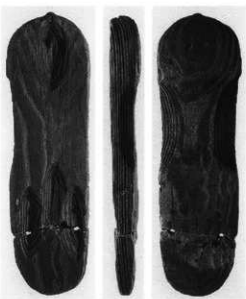


58



59

61

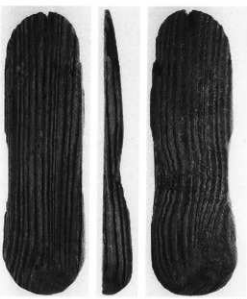


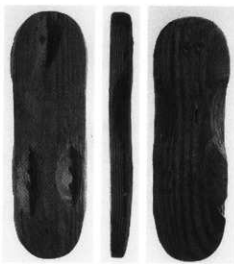
62

下駄　11

63

64


65

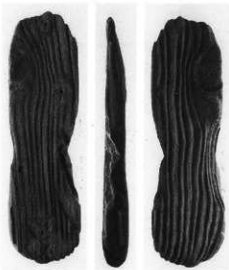

66

67

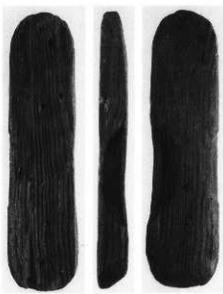
63

下駄　12

68


69

70


72

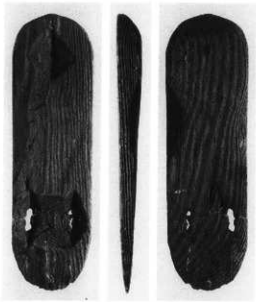
74

73

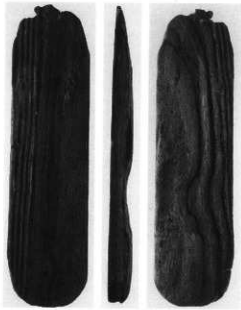
75

75

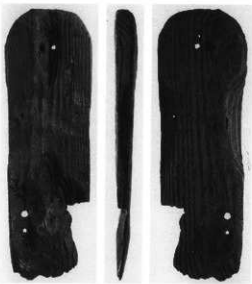
下駄 13



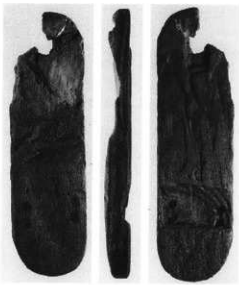
76



78

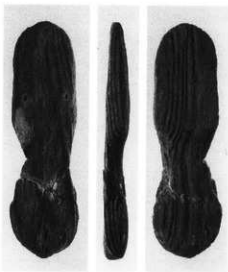


79



80

81

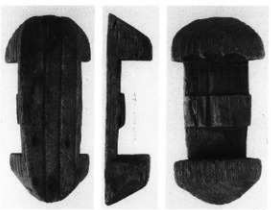


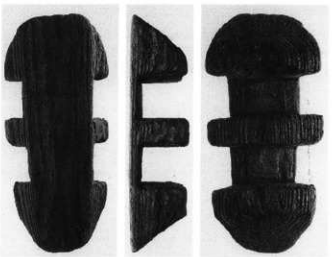
82

下駄　14

83

85

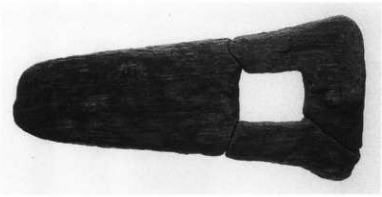

86

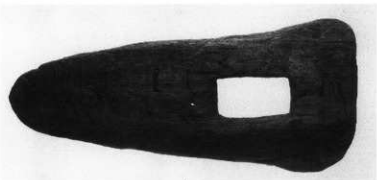

87

85

86

87


1

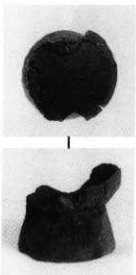

2

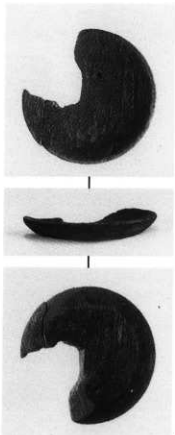
3

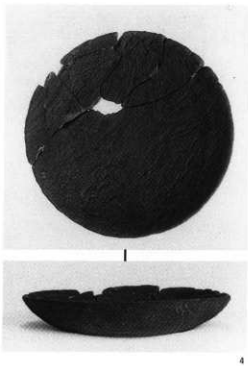
4

6

5

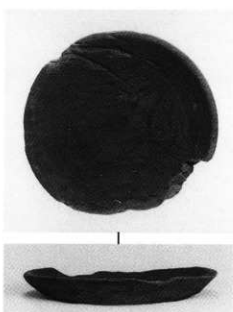

3


6


4

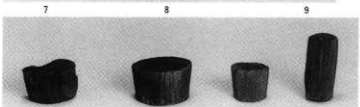
10

8



11

7 8 9


2 3 4 5

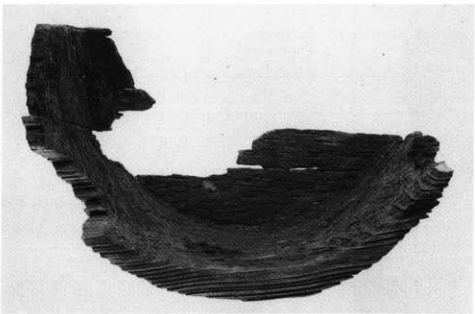
容器　挽物・栓

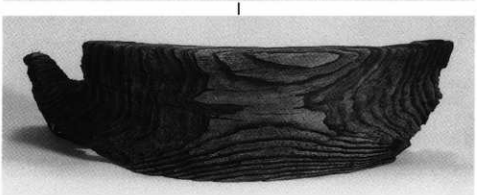
4

5

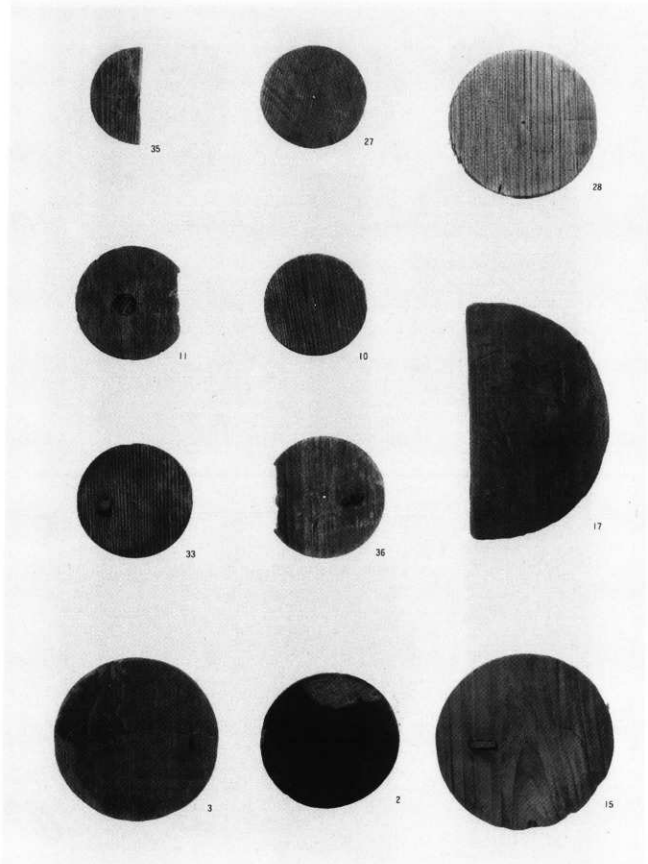
1

6

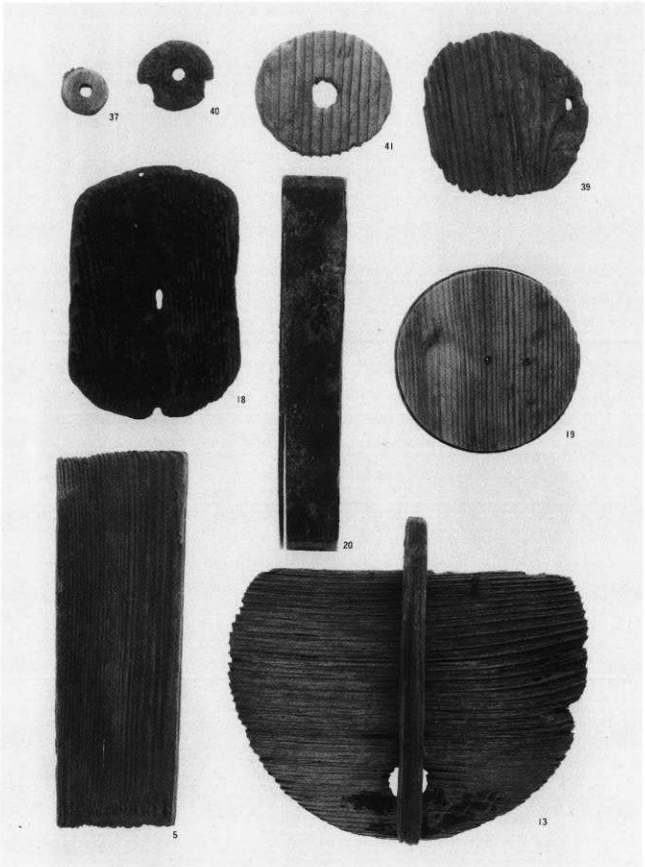

1


1

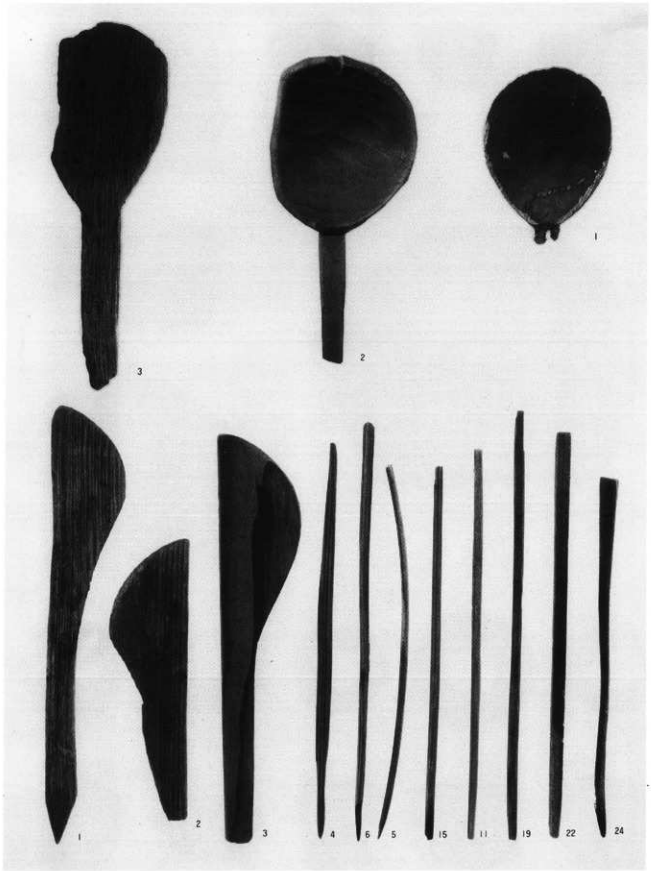
容器　曲物・剝物



容器　円板 1



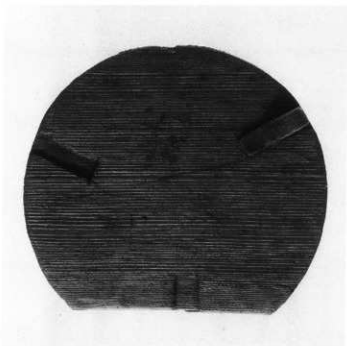
容器　円板２・蓋・底板


1
2
3
1
2
3
4
5
5
15
11
19
22
24

1

3

4


7

8

1

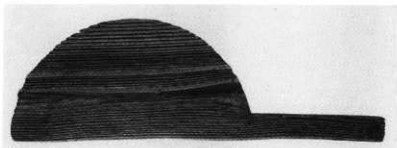
2

4

5

6

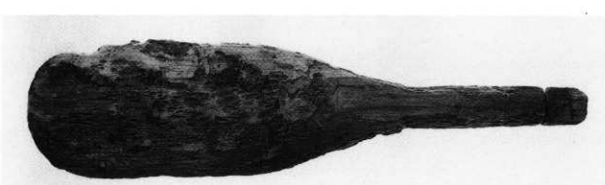
36



7

12

11



31

用途不明具

1

2

3

4

杭　1

5

6

7

8

9

杭 2

10

12

14

15

16

19

杭 3

20

21

24

25

27

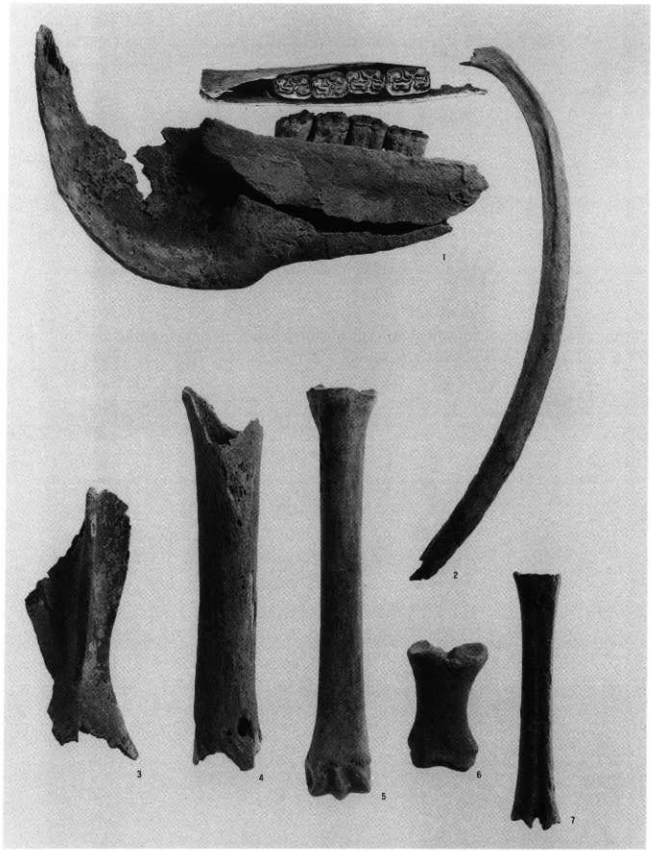
28

29

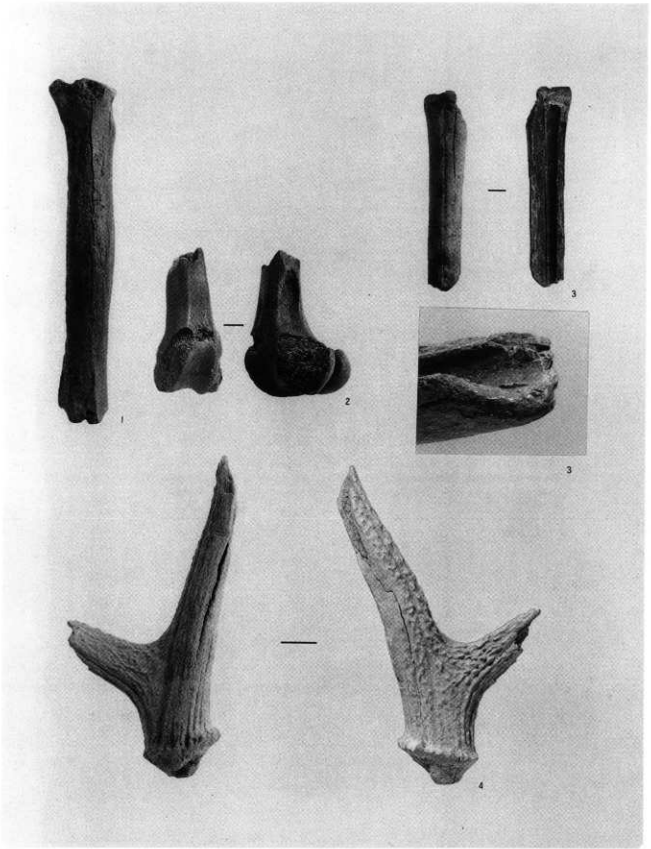
32

35

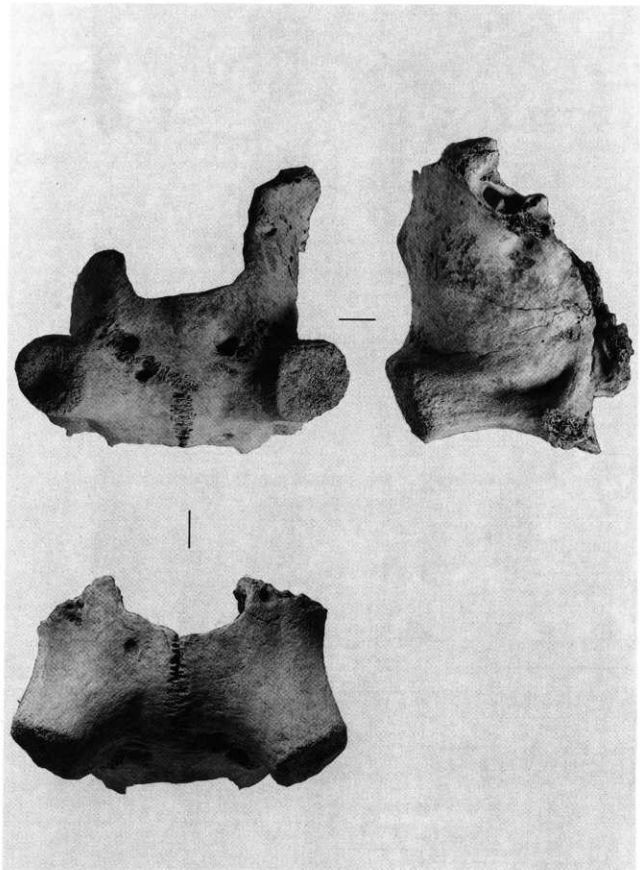
36



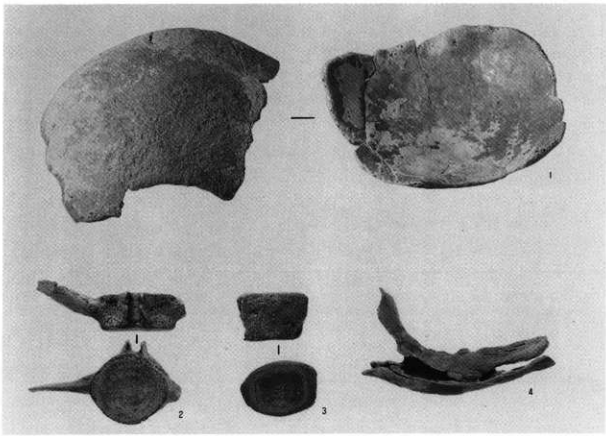
動物遺体　1（1～6ウマ・7ウシ）

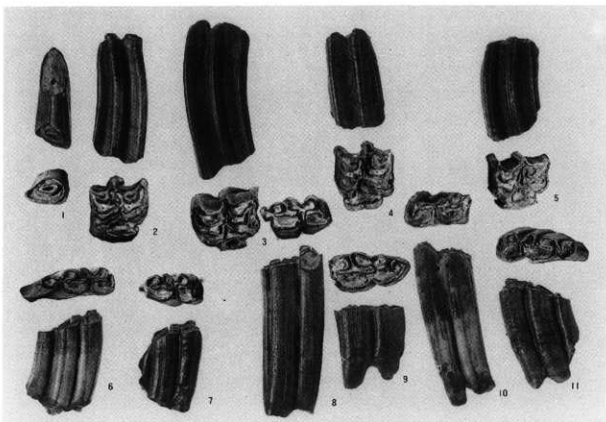


動物遺体　2（ニホンジカ）

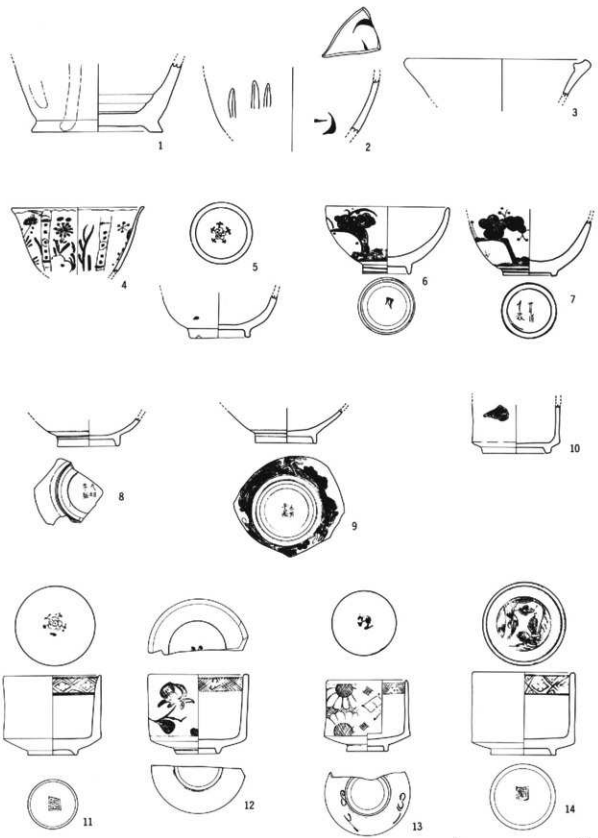


動物遺体　3（ニホンジカ）



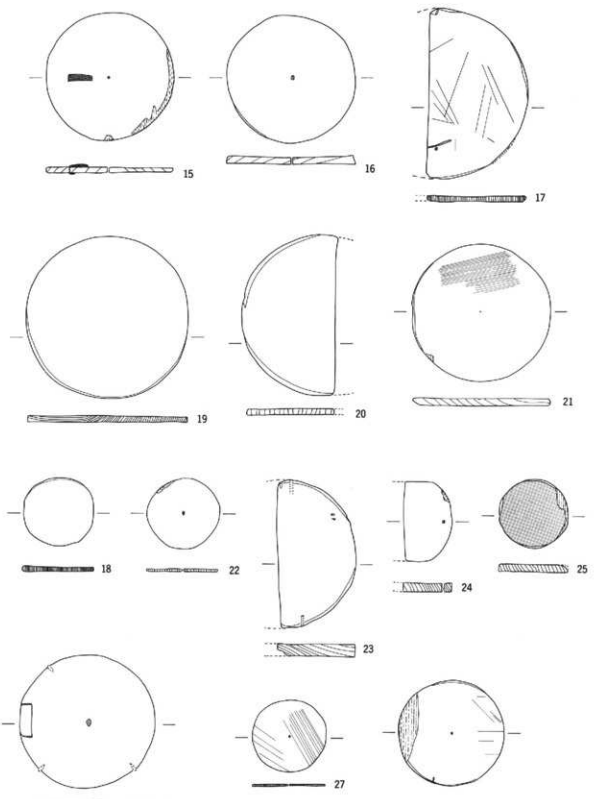


動物遺体　4（ヒト・イルカ・イヌ・ウマの歯）



第25図　陶磁器実測図１

第25図　陶磁器実測図２



第34図　容器実測図7　円板

鶴喰前田遺跡

発掘調査・資料整理等関係者名簿

（平成6年度～平成7年度　敬称略）

発掘調査

普通作業員

福島　孝　　山本　邦夫　　前山　義和　　鈴木　秋夫　　加藤　一郎　　遠藤　諄治
村上　政治　　佐藤　信弘

軽作業員

佐野美佐子　　米山　芳枝　　渡辺　智子　　小川　たき　　埜瀬うた子　　鈴木富士枝
山田あい子　　田口あや子　　遠藤　清子　　鬼沢　幸江　　松下千鶴子　　佐野ヤヲエ
落合まつ子　　落合　ミツ　　姥妙　洋子　　福地　幸子

整理作業

高橋　裕子　　鈴木　洋子　　村川　裕子　　山下　洋子　　高橋　元子　　大川佳代子
鈴木　里江　　田村みどり　　森島富士夫

御指導、御教示をいただいた方々

斎藤　宏　　鈴木　敏中　　芦川　忠利　　辻　真人　　渡辺　浩之

報　告　書　抄　録

ふりがな	ごてんがわりゅういきいせきぐん
書名	御殿川流域遺跡群　III
副書名	平成6年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第67集
編著者名	杉浦　幸男　（第VI章：金子浩昌・パリノ・サーヴェイ）
編集機関	財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒424　静岡県清水市江尻台町18－5　　TEL 0543－67－1171
発行年月日	1995年12月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
鶴喰前田	静岡県 三島市鶴喰	22206	—	35度 6分 2秒	138度 55分 52秒	1994 ～ 95	1,035	河川改修 (御殿川) に伴う事 前調査

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鶴喰前田	旧河道 遺物包含地	弥生 近世	暗渠 護岸杭列 杭出し	弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器 打製石斧、磨製石斧、敲石、磨石 石皿、砥石、石錘、管玉、勾玉、白玉、土錘、銅釧、銭貨、煙管 漆器、下駄、神楽面、唐傘の柄、曲物、櫛、杓子、鍬筐、横槌、挽物 動物遺存体（ニホンジカ・ウマ）等	細類遺 朱彩壺 唐傘の柄 （6点） 神楽面

御殿川流域遺跡群Ⅲ

平成6年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成7年12月20日

編集発行　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所　黒船印刷株式会社
静岡市登呂二丁目4番25号
TEL (054)286－0236㈹